
のび太のバイオハザード飛ばされた「完全者」

超人類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のび太のバイオハザード飛ばされた「完全者」

【Nコード】

N2831Q

【作者名】

超人類

【あらすじ】

気がついたららのびハザの世界へ！！！！主人公は頑張って生き残れるのか！？

このお話は、主人公が元々強い上に更にチートっぽくなっていく…って感じなので、苦手…ってか無理！！！！という方は回れ右でお願いします。

更に言えば文才は、もはや壊滅的なので暇で暇で仕方無い時にでも読んで頂けたら幸いです。

ブログ（前書き）

初投稿でございます

投稿って結構大変なんだと気付きました

プロローグ

家やビル、色々な所に火があがっている……道路を見れば、人が人を食い殺す地獄絵図。

そんな馬鹿げた光景の中一人の男が全力で走っていた。

零視点

「ハアハアハアクソ!!!!!!なんでこんなことに!!!!」

オッス!!!!!!オラ……じゃなくて俺の名前は

キリユウ
ゼロ
霧生 零

只今全力で走っています何故かという……

「「「あああああゝ」」」

そうです明らかに生きてる人間ではない奴らに追われているからです。

バイト終わってバイク飛ばして帰っている途中で変な光に包まれたと思ったら、気づいたら小さな倉庫に倒れてました。

んん?????と思いつつも外に出たら…

「「あああ!!!!!!」」

「きゃー！！！！！！」

外は阿鼻叫喚、地獄絵図をそのままにした光景が・

「オイオイオイオイ！！！！！！なんだよこりゃ・・・・・・・・
人が人を食ってるじゃねーかよ！！！！！！うっぷ」

まあその場で吐きましたね胃液が無くなるくらい吐きまくりましたね。

・「ハアハア これじゃまるでバイオオハザードみたいじゃねーか・・・
・とりあえず逃げなきゃ ヤバイ」

まあそんな感じで今に至る訳です、ここまできて分かったことが・・・

・？ここはラクーンシティではなく日本

・？この街の名前はススケ原というらしい

・？何故か俺の脳が学校に行けということ

この3つだ だけど何故学校？？普通ここは警察じゃね？？と思っ
たけど考えたって仕方ないので学校に行くことにした・・・・・・・・

・暫く適当に走ってたら何とか学校についた

「なっ 長かったーやつと着いたぜーふうーとりあえず中に……つてウオッ!!」

そう中に入ろうとしたら感染した犬が俺に襲い掛かってきた 俺はそれを避けて全速力で学校に入った。

「ゼエゼエゼエ…な、なんとか入る事が出来た……とりあえずすぐその部屋に入って体力を回復しないと。」

そして俺は、保健室と書いてある扉に入り驚く事になる。あの子達と邂逅するのだから。

プロローグ（後書き）

のびハザの のび太って何故あんなにカッコイイのだろうか．．．

N O 2 保健室（前書き）

軽く修正しました。

No2 保健室

前回・・・とりあえず保健室に入ろうとした

零「・・・開けた瞬間ゾンビ・・・ってことになんねーよななんか心配だな まあ考えたって仕方ないGO!!!!」

ガラッ!!!!!!

俺は比較的に強めに開けた、そこには、小学生くらいの子供が5人と赤いコートを着た若い女の人が1人と、5・60代のオッサンがいた・・・

俺が強めにドアを開けたせいなのか、皆一斉に俺を見てきた。

??? 「誰だ!!!!!!」

と、がき大将見たいな奴が俺に向かって言ってきたので

零「待て!!!俺は人間だ!」

とりあえず俺が人間だと分かったのか 皆安心した様子だ。

「ハァ〜ビックリした〜 全くドアは静に開けろよな〜」

と生意気そうな狐顔が

ってかなんか何処かで見たような気が…… まあそんなことより

零「ああ悪い、外にいた化け物から逃げててなまさか人が居るとは思わなかった、とりあえず自己紹介だ、俺は霧生 零だヨロシク」

「…… そうでしたか…… ああ自己紹介でしたね、僕は出来杉英俊です」

「俺様は剛田 武!」

「僕は骨川 スネ夫」

「私は源 しずかです」

「僕は山田 太郎!」

「…… 白峰です」

「私は桜井 咲夜よ」

「金田 正宗この町の町内会長をやっている」

成る程ね………って!! ちょっと待て!! えっ!? 4人は知らんが後の4人はドラえもんに出てくるキャラじゃねーか!? はっ? なんているんだよ!? と俺が脳内でトリップしてボー然としてたら出来杉が。

溺杉「あの霧生さん？」

はっ!!! ヤベー!!! ボーっとしてた

零「あ ああワリイ考え事してた、とりあえずヨロシクな」

溺杉「はあ…」

スネオ「変な奴…」

ジヤイ「とりあえずこれからどうするのか皆で相談しているんだが
いい案が浮かばないんだ」

と言ってたが俺はそれどころじゃない

零（なぜ? ってか何で? あの変な光のせいかな? だとしてもなんでバ

イオっぽい世界にドラえもんキャラ？違うだろ……。ん？そういや前にy o o t u o eでドラえもんのび太のバイオハザードってゲームをプレイしている動画があったな…あっ！まさか！！ここはその世界か？ それなら合点がいく 確かススキケ原って町はのび太達の住む町だからなってアレ？のび太とドラえもんは？）と考えていたら またドアが開いた。

そこには、

ジャイ「の のび太じゃねーか！！！！！」

のび太「ジャイアン！スネオ！！！！出来杉！！！！しずかちゃん！！！」

スネオ「ノロマなお前が良く生きてたな」

のび太「・・・この人達は？」

ジャイ「とりあえず 学校まで逃げてきた生存者だ」

零「始めましてだな、俺は霧生 零だヨロシク！！苗字 名前好きなほうを呼んで構わない」

後は大体俺と同じようにのび太に自己紹介した1人を除けば…

金田「私は金田 正宗だ一言で言って偉大な男だ」

のび「えっ？誰ですか？」

金田「私を知らんのか！？　それで良くこの町に住んでいられたな
！！」

のび太「は、ハア」

零「おゝいのび太君あまり相手にしないほうがいいぞ、その人恐怖
のせいか　頭がおかしくなっちまってるから」

俺がそう言っていると、のび太も納得したのか金田さんから離れていった。
とりあえず俺も、誰かに話かけてみるか・・・

零「あのゝ」

咲夜「ん？どうしたの？霧生君？」

零「あゝいや得に用がある訳では無いんですけどね・・・誰かに
話掛けないとイケナイ気がして・・・」

咲夜「ふうん 何で私なの？」

零「いや 見た感じ俺と同じ年っぽいし・・・」

咲夜「クスッ もしかしてナンパ？」

零「なっ！！！！アハハこんな状況でしませんよ」

咲夜「なら、こんな状況じゃなかったら、してたのかしら？」

零「イヤイヤどんな状況でもナンパなんかしませんよ！！」

別に、俺はどっかのイケメンじゃねーと思いつつ

咲夜「ふうん私ってそんなに魅力ない？」

零「えっ！？あっいやっ！！そうゆう訳じゃ・・・」

咲夜「クスクス、冗談よ冗談」

だ、駄目だこの人掴み処がない話題をかえよう

零「はは それより桜井さんはこの町の人なんですか？」

咲夜「そうよ？この学校の近くに住んでるの、ああそれと咲夜でいいわよ？」

零「そうですか、なら俺のことも零でいいッスよ」

咲夜「そうさせて貰うわ」

ってな感じで咲夜さんと話てたら、出来杉が

出来杉「とりあえずこの学校を探索しつつ生存者を捜すってのはどうだい？」

おう流石だ出来杉そういったことは、普通年上の俺が考えるのにな。俺も加わるか：

零「確かにいい考えだが、全員固まっていくなのは効率が悪いんじゃないか？」

出来杉「確かに、なら2人もしくは3人1組で動いたほうが良いで

すね」

零「それなら、通信機みたいな物も必要だな」

のび太「それなら、職員室で結構な数の携帯電話を見ましたよ」

といった感じに通信手段も手に入れ2人1組で行動することになった。因みに組み合わせは

ジャイアン・スネオ組

出来杉・太郎・白峰組

のび太・零組

咲夜・しずか組

金田・・・・引きこもり

零「のび太君かヨロシクな」

のび太「はい！ヨロシクお願いします。それとのび太って呼び捨てでかまいませんよ」

零「そう？分かったよ」

因みにジャイアン組は近くのコンビニに食料を調達する係になった。最初はスネオが行きたがらなかったが、ジャイアンに脅されたので

洩々了解した。そんなこんなで俺達は探索を開始した。

オマケ

コンビニに行くってことになったジャイアン達に俺は

零「ああ ジャイアンついでに タバコも 持ってきてくれよ」

ジャイ「いいけど 零さん未成年じゃないか？」

零「まあ そうなんだが、そこを何とか頼むぜ」俺ニコチン摂取しねーと誰彼構わず暴れちまうからな」

と言うと

スネオ「誰彼構わずって・・・まあいいんじゃない？ ジャイアン僕等も黙ってコンビニから物持ってくる訳だし」

ジャイアン「そうだな！！良いぜ零さん！！」

零「話分かるね」頼んだぜ」あっ！！銘柄はLUCKYStrikerなんだけど・・・分かる？」

スネオ「それなら僕が知っているよ」

零「マジ？ スネオ君　ならヨロシク」

なんてやり取りがあったとか

零視点…終了

N o 2 保健室（後書き）

出来杉が溺杉って文字になってますが…ただのギャグなんで気にしないです

オリ主と原作キャラの登場人物紹介（前書き）

修正しました!!!

オリ主と原作キャラの登場人物紹介

霧生 キリユウ 零 ゼロ

年齢 18 歳

利き腕 左

身長… 186 ?

体重… 65 Kg

容姿… ジュエルペットの登場人物アンディ・サマエル（ディアンが魔法で人間に変身した姿）を黒目にしたような感じ。

この小説の主人公 突如現れた変な光が原因で、のびハザの世界に飛ばされた 不幸な高校生。

最初は戸惑っていたが次第に慣れていった。

性格は超がつくほどマイペースだが、のび太と同じで命が掛かっている時はものすごい力を発揮する。容姿はスネ夫がひがむほどのイケメン。

だが馬鹿が付く程の鈍感。この世界に飛ばされる前の時も、毎日下駄箱にラブレターが大量に入っている程にモテていたが本人は、全く気付かず寧ろ「俺は伝説級に女子に嫌われてんのな…ハハハ…」と的ハズレな事を言っている。

零いわく手紙の内容が、呪いの言葉のように同じ言葉が手紙にびっしり書いてあるのが大多数らしい（好きデス×∞みたいな…）実は、幼少の頃に自分の異常な能力が原因で実の親に捨てられ、更に拾われた先の研究施設で実験台にされた過去を持つ。

だが7歳の頃研究施設を脱走、その後老夫婦に拾われた。
その際に5歳前後の記憶を失っている。

拾ってくれた老夫婦は零の異常能力を見ても拒絶する事なく、寧ろ
実の息子のように可愛がられた為零は、人間的に腐ることはなかつ
た。

その後老夫婦とは15歳の時に死別その後、老夫婦の残した遺産で
高校に通っていた。

身体能力はこの作品最強クラスで、射撃能力はのび太よりやや劣る
まあ能力を使えばのび太を上回るが……

異常能力 コンプリート 完全零がもともと持っていた能力、だが本人は自分の能
力に気づいてない。

「まっ！なるようになるさ！！」

野比のび太

年齢 多分11歳

利き腕 恐らく右

準主人公、知る人ぞ知るダメダメの始祖、勉強、スポーツ、何をや
っても人並み以下という永遠の小学5年生 だがのびハザの世界で
はB・O・Wを相手に恐れずに立ち向かう勇気を持ち、中々に頭も
切れるなど人が変わったようにカッコ良くなる。只テンパるど「ド

ラえもーん!!!!!!」と叫んでしまう

因みに作者はのびハザの中でトップクラスに好きなキャラクターです
今作では、零によってしずかが落とされてしまった為時たま零に嫉妬する。その場合名前のテロップが黒のび太になる。

能力は射撃で、初動から0.3秒で撃てるくらいで　ゴルゴとタメ張れるくらいの腕で作品中最強クラスに入る。そのほかはどうしても人並み以下になってしまう

この作品では主に零とコンビを組んで行動する

「やっやるしかない!!!!!!」

ドラえもん（又はドラエモン）

22世紀の猫型ロボット　好物はドラ焼き

ダメダメなのび太の未来を変えるために　のび太の前に現れた、様々な秘密道具をのび太に貸し与えてのび太の未来を変える為に奮闘する。以前耳を鼠にかじられ更に塗装がハゲてしまい青ダヌキのような姿になる

更にほかの機能も故障してしまい不良品扱いになってしまいがのび太の子孫のセワシの家が無い金を叩いて購入した

のびハザではB・O・Wとの戦闘の際に四次元ポケットがオシャカになる、　そのためドラえもんのび太のバイオハザードというタイトルにも関わらず空気になりがち。

因みにシリーズによって敵にも味方にもなる

まあどちらにせよ空気なのだが。

今作では、遅い登場に加えて更に作者に青ダヌキのネーミング貰う

という本人にとって迷惑極まりない物を貰った。

何故かたまにテロップがドラエモンになるが 作者にその理由は分からない。

「Tウィルスの恐ろしさを目の当たりするがいい……」

剛田 武 (ゴウダ) (タケシ)

通称ジャイアン、のび太の悪友 ガキ大将をそのままにした風貌
体格で

ジャイアリズムの始祖

(お前の物も俺様のもの) 原作ではスネ夫と一緒にのび太をイジメ
ているが本当は妹のジャイコを想う優しい性格、映画に多いが感極
まると、「心の友よ」と叫ぶ

のびハザでは小学生にも関わらずマグナムを巧に操り先陣を切って
B・O・Wと戦う頼もしい存在。

今作では主にスネ夫と行動する。

因みに聖奈のファンらしいので聖奈が零に好意を持ってる事を良し
としない。

弱点は母親。

「のび太の癖に生意気な〜!!!!!!」

骨川 ホネカワ スネ夫

のび太とジャイアンの悪友、骨川グループの御曹司で自慢屋、どっ

から出てくる自信なのか 自分の容姿に絶大な自信を持っているが
実際は短足に母親似の狐顔でお世辞にも容姿が良いとはいえない。
原作では金持ちスキルをフルに使ってのび太やジャイアン達に自慢
しまくっているが 大体新しいおもちゃなどはジャイアンに奪われ
る。

のび太では、どこで覚えたのかハッカースキルを習得しておりコ
ンピュータに詳しい

戦闘面では主にマシンガン系統武器をを好む

だが怖がりで自身の危険が限界に達すると

「ママー!!!!!!」と泣き叫ぶ 今作では主にジャイアンのや
やパシリ的な感じになってしまう。

因みにジャイアンと同じく聖奈のファン、やはり聖奈が零に好意を
持っているため、零に激しく嫉妬してる。

「ゴメンよのび太このゲームは君には難しくてヤラセられないな」

源 静 (ミナモト) (シズカ)

原作のヒロインお風呂に入るのが趣味だが、のび太に偶然とはいえ
覗かれるパターンが多い

のび太シリーズになると敵にも味方にもなる。だが敵になればタ
イラントに串刺しされてしまい味方になっても空気になってしまう
という不幸な運命である

この作品では味方として登場するよていだが空気になる確率は90
%である…筈だったが零に落とされた為どうなるかわからない。

「のび太さんのエッチ!!!!!!」

出来杉英俊

のび太達の同級生のび太が一方的にライバル視している。

勉強 スポーツ あらゆる点で天才と褒めたたえられている。のび
ハザではシリーズによって敵にも味方にもなる

無理シリーズでは作戦参謀的存在

今作は一応味方だが作者は出来杉のキャラがイマイチ掴めないため
空気になる可能性が高い……と思われたが、作者いわく思いの外扱
いやすかった為空気は回避された。

零の鈍感っぷりに最初に気づいた為に苦労キャラに設定にされた。

因みドラえもんと同じくたまに名前のテロップが溺杉になる 理由
は不明

「絶好のチャンスだ!!!!!!」

オリ主と原作キャラの登場人物紹介（後書き）

特に無し！！！！

のびハザオリジナルキャラの登場人物（前書き）

修正しました。

のびハザオリジナルキャラの登場人物

緑川 聖奈

年齢多分12歳

のび太の通う学校の生徒会長

のびハザに出てきたオリジナルキャラ　なんか結構な人気らしいシリーズによっては一瞬だけのび太と良いカンジになる：が、零によってフラグを破壊された。

戦闘では　主にハンドガンを使う　その他に応急処置など回復要因にも使える

山田 太郎

のび太達の学校の一年生原作では戦闘能力が皆無なのにちゃっかり生き残った　今作では出来杉と行動するが
果たして生き残れるのか？

桜井 咲夜

推定年齢10代後半～20代前半

のびハザG版に初登場したキャラ　のび太と共に行動する

それ以外は得に設定がない　今作ではしずかと聖奈と共に行動する、零の微笑みに落とされた人第一号である

因みに、零をどうやって落とすか3人で画策中。戦闘能力は中々あるようで　ハンドガンやショットガンを好む因みに関係ないが　作者が結構好きなキャラである

金田 正宗

年齢50～60

のび太の町の町内会長そんな実権のあるような役職でもないはずなのに、のび太達に対して極めて横柄な態度を取る

のびハザでは誰とも行動せずに保健室に引きこもるが 後にB・O・Wに殺される 因みにB・O・Wに殺される前に金田に向かって発砲すると・・・ 今作では横柄さに更に研ぎがかかっており、のび太達からは頭のイカれた人間だと思われる。その横柄さのせいで、切れた零によって思いきりジャーマンスープレックスを掛けられて、頭を強打そのせいかは知らないが、パンツ一丁場合によっては全裸で、女性を（年齢関係無し）襲う変態と化した。

白峰

無理シリーズ？に登場したキャラ今作にも一応登場する予定

だが原作どうりに坑道でお亡くなりになる可能性95%である

今作の白峰は、結構気性が激しいキャラになってしまった。

原作と同じく聖奈を軽く妬んでいる。

のびハザオリジナルキャラの登場人物（後書き）

金田の紹介が異常に長い気がする。

零の能力（完全版）（前書き）

能力名と詳しい効果を修正しました。

ですが零の能力（得に3つ目の能力）は、余程自分又は、仲間がピンチな時しか発動しません。

零の能力（完全版）

ノーマル時

常人を遥かに上回る身体能力。この時は、ゾンビ1体程度なら素手で倒せる。

この時の零は、大体銃火器で戦うスタイルで行く。

コンプリート
完全

能力発動中の容姿…瞳の色が赤くなる。

零が子供の時に発現した異常者の能力で、^{アップノーマル}この時点では未完成の能力。

相手の能力を初見で見切り尚且つ、見切った能力を完全に再現し自分の能力に出来る異常能力。

相手の能力が例え未完成の能力でも、奪えばその能力を問答無用で完全に完成させて自分の能力にできるが、同一の能力は奪えない。

例…某異常者のバトル漫画に出てくるスキル完成の能力（理由…ほぼ同じ能力の為）だが完成の能力でも完全の能力は使えない。^{ジ・エンド}

更に戦っている相手が自分の能力を使いこなしている場合は、奪った相手の能力を問答無用で上に行く（相手が自分の能力を100%発揮して使えるとするならば零は150%能力を発揮して使いこなす）

なので零に能力を奪われた相手は、決して同じ能力では零に勝てなくなる。

このモードの限界発動時間は、3分である（3分越えて発動すると、勝手に解除された揚句疲労感が半端ないらしい）

N O 3 校舎1Fトイレ（前書き）

．
．
．
．
．
もつと話を進めるはずだったのに．
．
．
．

No3 校舎1Fトイレ

前回まで とりあえずニコチンの心配が要らなくなった。……

零「えーっと 確か俺達は校舎1F全域を探索だよな？」

のび太「そうですよ？1階以外は出来杉達に任せてますので……
って聞いてなかったんですか!？」

零「えっ？ああジャイアン達にタバコの調達を頼もうと思ってたかな」

のび太「（この人 自分の命が掛かってるって自覚してるのかなあ）」

とごもつともな事を心の中でツッコまれる零でした。

零「大丈夫、大丈夫今キチンと覚えたから、んな事よか早く出ないか？ なんか知らないけど金田さんがめっちゃガン飛ばしてくるんだが……」

のび太「は ハァ（ホントに大丈夫か?）」

不安いっぱいなのび太である。

そんなこんなでやっと保健室を出た二人、だが
ガシャアアアン!!!!!!!!!!!!!!

「「「ぐわあああ」「」」」

零・のび太「「!!!!!!!!!!」」

のび太「ま マズイ!!!! 校舎玄関の窓を突き破って入ってきた!!!!」

零「今の俺達では、相手にするには数が多すぎる!!!!!! とりあえず逃げるぞ!!!!」

のび太「はっ ハイ!!!!!!」

零「とりあえずすぐそのトイレに隠れるぞ!!!!!! 来い!!!!!!」

零達は保健室のすぐ隣の男子トイレに入ってしまった。

零「ふう〜どうやら逃げ切れたみたいだな」

のび太「でも、どうします? いつまでもこんなところに 居る訳に

はいきませんよ？」

零「まあ待て待て ついでなんだから今の内に用ぐらい済ましとけよ？どこのトイレも安全とは限らないんだし」

のび太「ええ まあ」

零「心配するな！俺が見張っといてやるからさ」
のび太「分かりました（逆に心配だなあ）」

小学生に信用されてない零なのだった。

のび太「ふう〜スッキリした〜」

零「よし！！！！のび太今外の方を見てたが奴ら分散している、俺としちゃあ一気に走り去りたいと思うんだが、お前今走れるか？」

のび太「ハイ 大丈夫です、ここから走るとなると西校舎が近いので……」

零「よし！それなら、のび太が先頭を走ってくれ、俺はこの学校の地理は分からないからな」

のび太「分かりました」

零「ところでのび太、お前の武器ってその拳銃だけなのか？」

のび太「いえ、一応トンファーなら有りますが」

零「そのトンファー使わなければ 俺に出来ないか？考えてみりゃ俺武器ねーんだわ」

のび太「いいですよ ハイ」

零「サンキュー」

のび太からトンファーを受け取った零だが

ズキッ

零「ぐっ!？」

突然零に軽い頭痛が襲いつてきたがすぐに治まった。

だが零は後にこの頭痛が只の頭痛では無いことを知る。

のび太「どうしました？」

零「イヤ．．．何でもない（なんだ？突然頭痛が．．．まあ
ぐに治まったしこんな状況じゃ頭痛も起こるわな）それより出るぞ
．．．よし！！走れ！！！」

零とのび太は、西校舎に向かって猛ダッシュしたなんとか、ゾンビ
を避けて西校舎に辿り着いたのだった。

N O 3 校舎1Fトイレ（後書き）

次はもっと話の展開を早くしてみます

N o 4 西校舎く給食室くはる夫登場!!!!!!そして退場(前書き)

タイトル通りです!!!!!! 軽く戦闘シーンが入ってます。
..... 難しいな戦闘シーン.....

No4 西校舎く給食室くはる夫登場!!!!!!そして退場

前回まで トイレでスッキリして軽やかな足で、西校舎へダッシュ
!!!!!!

零「ふう〜なんとかまいたな〜」

のび太「ハアハア 人間って極限状態になれば、僕でもこんなに速く走れるんだね。」

零「大丈夫か? のび太? 出来れば休ませてやりたいが.....
そうも言ってもらえねーみてーだ。前からゾンビのお出迎えだ」

のび太「ええ らしですね..」

零「とりあえず、2体みたいだからな、最初にお前が拳銃で1体片付ける、その後俺が接近して残りの1体を片付ける」

のび太「接近って 大丈夫ですか?」

零「ああこー見えても近接格闘は得意だからな、って速く片付けねーと、どんどん近づいてくんぞ」

のび太「・・・（イマイチ信用出来ないけど速くしないとゾンビにやられる）分かりました。いきますよ!!！」

バンッ!!!!バンッ!!!!

のび太がゾンビ1体をヘッドショットする。

ゾンビが倒れたと同時に零が一気にもう1体のゾンビに、接近する

零「フッ!!！」

まずローキックでゾンビの体を崩す

零「オラァァ!!!!!!」

そのまま左手にもっていたトンファァーを
ゾンビの頭におもっすり叩き付ける。

「ゴキヤ!!!!!!」

何かが折れる音と共にゾンビが崩れる。そのままゾンビは動かなくなった

零「ふう〜まっザッとこんなもんかな？」

のび太「す．．．凄い！！」

のび太は心底驚いていた　そらそうだろう、年上の癖に頼りになるかどうか分からなかった零が拳銃を使わずにゾンビを倒したのだから。

のび太「凄いですよ！！！！零さん！！銃を使わずに倒すなんて！！」

零「だから言っただろ？まあゾンビと言えど元人間だからな　弱点も大体同じだしな」

のび太「それでも、凄いですよ。僕てつきり頼りにならない人だと思っていたので．．．」

零「．．．のび太．．．お前．．．．．まあいいや早く行くぞ」

のび太「ハイッ！！」

のび太に頼りにならないと、思われてたことに結構なダメージを心に喰らいつつも、先に進む零達だった。

先に進んだ零達だったが

零「此処は家庭科室か？鍵がかかってるな．．．結構頑丈そうだな、ドアも蹴破れそうもないな．．．その隣は．．．資料室か？此処も鍵か．．．仕方ない此処は後回しだ。のび太！そっちはどうだい？」

のび太「こっちの給食室は開いてますね．．．」

零「ならまずは給食室からだな」

てなわけで、給食室の前にいる零達

のび太「では入りま「待てのび太」しょー零さん？」

入ろうとするのび太に零が、止める。

のび太「どうしたんですか？早く入りましょうよ」

零「いや．．．考えてみる．．．のび太 いきなり入ってゾンビがいないなんて保障ないだろ？ここは慎重に入ったほうがいい」

のび太「あっ！！！！確かに……どうしましょう？」

零「俺が横から開けるから、のび太お前が先中に入ってくれ。慎重にな」

のび太「ハイ」

そんなやり取りがあり今度こそ中に入った。

幸いゾンビなどは居なかった。零とのび太は給食室を物色し始めた。

零「うーん何もねーな」

と言いつつ何と無く冷蔵庫を開けた零そこには…

零「お！！！！リポ○タ○Dじゃん、ラッキー♪」

ファイト一発的な栄養ドリンクを発見した。

のび太「零さーん何か見つけ……って何してるんですか！？」

零「ん？ のび太か？それより見ろ！！！！リポ○タ○Dだぞ、しかも大量の！！！！！！これで飲み物には暫く困らないぞ」

のび太「飲み物って 別に水道の水飲めば……」

零「いや駄目だろ こんなゾンビ共が居るところの水道水なんて、衛生的にマズいだろ？ そう思わないか？ 少なくとも俺はそう思う」

のび太「確かに（凄いなそこまで考えてるなんて ホントに、この人が、さっきまでの人だとは思えないよ）なら2人で持てるだけ持ちましよう。幸い此処に袋があるし」

とのび太の中で零の株が上昇していた。

零「なら先に、その扉の中を調べてからにしよう」

零がすぐその扉を指をさす。

のび太「確かあそこは、準備室だった気がします……駄目です鍵が……でもこれくらいのドアなら 鍵を壊せば、開けられると思います」

のび太が扉に向かって銃を構える。

零「待てのび太、銃は使うな、弾が勿体ない此処は俺が蹴破る」

と言ったと同時に
ドカッ 一撃で、ドアを蹴り飛ばした。

零「うゝしのび太ゝ開いたぞゝってどうした？」

のび太「・・・イヤ何でもありません（普通ドアってあんなに簡単に蹴り飛ばしたり出来るのか？）」

最もな疑問である

色々あったが、零達は準備室内に入った、中には

??? 「うゝゝ」

零・のび「「!!」」

青い服を着た太った少年が、片から大量の血を流しながら呻いていた。

零「オイ!!!! のび太!!! 誰がいるぞ! 酷い傷だ!」

のび太「お前は、はる夫!? 大丈夫か!？」

はる夫「そ．．その声．．．は．．．のびた．．．？のびたな
のか．．．！？．．．目が．．．何も見えないんだ．．．死にたく
ないよ．．．助けて．．．！」

のび太「はる夫！しっかりしろ！この傷は一体！？」

はる夫「のびたあ．．．気をつけろお．．．体育館に．．．巨大な
化け物が．．．」

のび太「はる夫！！？」

零「．．．」

零は、はる夫の首に手を当て、ゆっくり首を横に振った。

零「駄目だ．．．死んだ．．．」

のび太「．．．」

零「肩に噛まれた跡がある．．．だが．．．ゾンビにしては大き過ぎる．．．」

零がはる夫の傷を調べていたら、のび太が口を開いた。

のび太「はる夫とは、よくジャイアン達と野球をしました……」

零「……のび太……行こう……」

のび太「……ハイ」

零「1度、保健室に戻ろう。ドリンクを、置いて来ないと……な？」

のび太「……わかりました」 零達は、給食室を後にした。

N o 4 西校舎く給食室くはる夫登場!!!!そして退場（後書き）

はる夫君死にました!!!!!!もっと明るい感じにしたかったです
が、何故かあんな感じに.....

N o 5 保健室にて近状報告その1 (前書き)

はる夫「オイ!!!!!! 作者!!!!」

作者「あんだよ」

はる夫「俺の登場から退場まで、早過ぎじゃねーか!!!!」

作者「ああー そりやお前のキャラが分からねーからだ」

はる夫「だからって、ひど過ぎだ!!!!!!」

作者「じゃかましー!!!!!! 文句あるなら、原作にもっと出てから
言えやー!!!!!!」

はる夫「そ・そんなモブキャラの俺無茶言うな!!!!」

作者「フン!!!!!! ならサツサと・・・・・・消えろ!!!!!!」

!!!!!! 偽ライダーキック!!!!!!」

はる夫「うばあー!!!!」

零「何やってんだ? あいつら・・・」

のび太「さあ?」

咲夜「始まるよー♪」

N o 5保健室にて近状報告その1

前回やる夫 O U T!!

(ガ○使風)

とりあえず保健室に、戻った2人そこには、他のグループも戻っていた

零「アレ？皆どうしたの？」

出来杉「皆に、連絡してとりあえず近状報告に、戻って貰ったんです」

ジャイ「ってか、のび太!!!! 零さん!!!! なんで1度も連絡しなかったんだよ!!!」

零「あ？連絡？そりゃ・・・」と言おうとした零だが。

のび太「それは、こっちの台詞だよ!!! 皆から連絡来ないし、零さんと2人だからって、不安だったんだぞ!!!!」

のび太がキレた。

出来杉「……いや君達には、僕等の携帯の番号は、教えておいたけど、君達の番号は、教えて貰ってないんだけど……」零・のび太「あっ!!」

そう、のび太達は、他のグループに、連絡先を、教えるのを忘れてたのである。

零「いや……スンマセン……」

ジャイ「いいよ零さんは、それよりのび太!!!!!! お前俺様に逆ギレしたなコンニャロ!!!!!! ギタギタにされてゝか!!!!!!」

スネオ「そうだぞ!!!!!! のび太の癖に生意気だぞ!!!!!!」

のび太「わわわゝゴメンジャイアン!!!!!!」

出来杉「まあまあ、零さん達が、無事が確認出来たんだから、ヨカッタじゃないか、それより……探索していて何か変わったことはあったかい?」

ジャイ「……まあそうだな」

怒りの矛を納めるジャイアン

スネオ「僕等は、近くのコンビニに、食料を調達したよ。途中にいたゾンビ達の数は、少なかったから、また数回に分けていくことになったよ」

出来杉「・・・・・・・・明らかに食料では無いものもあるけど・・・」

ジャイ「コンビニの近くに猟銃を扱っている店があったんだ、まだ弾や武器が、大量にあるから取りにいっけ！！！」

零「出来杉君達は？」

白峰「家庭科室の鍵と体育館の鍵を見付けた、いずれも、1階の場所にあるから、あんた達に、やるよ」

スネオ「しずかちゃん達は？」

しずか「裏山の近くに治療に使えるハーブがあったから、何個か持ってきたわ、また数回に分けて持ってくるわ。」

のび太「裏山！？危険じゃないのか！？」

しずか「大丈夫よ、咲夜さんもいるし、凄く頼りになるの！」

のび太「なら、良いんだけど」

なんてやり取りが小学生達であったその頃。

零「へえ、咲夜さん頼りに、されてますね」

咲夜「まあね、まあイザとなったら、零君に助けて貰うからね」

零「ハハハ、俺なんかより、のび太のほうが頼りになりますよ
本当に小学生か？　ってくらい射撃が上手いし」

咲夜「へえ、そういえば零君、銃は？」

零「んにゃ　まだ持ってませんよ？　のび太に貰った、トンファー
なら有りますが」

咲夜「銃無しで、探索してたの？　良く生きてたわね」

零「まあ　のび太が銃持ってたし、ゾンビくらいなら近接戦闘で、

倒せますからね」

咲夜「零君のほうがよくぽど凄いわよ？・・・でも流石に銃無しじゃ・・・あっ！！！！さっき警察官の死体から拳銃拾ったのが1つ、余ってるわこれあげる」

零「マジっすか？あざーす！！！！！！」

咲夜から拳銃を貰った零所代わってのび太達

出来杉「それでのび太君達は、何かあったかい？」

のび太「…実は…はる夫が死んだ…」

零・のび太以外
「！！！！！！」

ジャイ「嘘だろ！？はる夫が！？」

しずか「そんな・・・はる夫さん・・・」

皆が驚き悲しんでいる時零が入ってきた

零「俺達が、見付けた時には、手遅れだった……それに、気になることがあった」

出来杉「気になること？」

零「明らかに、ゾンビから噛まれた傷ではなかった……もつと大型の何かに噛まれた傷だった」

のび太「それに、はる夫がいった、体育館には気をつけろ……と」

スネオ「体育館に、何があるんだ？」

零「分からない……だから俺達は、これから体育館に向かうことにする」

スネオ「本気で、言ってるのかい!？」

しずか「そうよ!……! 危険だわ!……!」

のび太「だけど誰かが行かなければ、体育館に何かが、あるかもしれないし」

出来杉「……………そうだね、なら……………頼めるかい？」

零・のび太「「ああ」」

出来杉「なら決まりだね、のび太君達は体育館の搜索……しずかちゃん達は裏山でのハーブ調達、剛田君達は、武器と食料の調達……・僕等は引き続き学校内の探索で良いかい」

全員「「「^{ハイ}応！！！！！」」」

全員これからの、行動が決まった、果たして体育館には、何かあるのか！？続く……………

軽いオマケ

スネオ「そーいえば零さん、はいタバコ。確かLUCKY STRIKEで良いんだよね？」

零「おゝありがとうゝ心の友よゝ!!!」

零はどつかで聞いたことがあるような気がする、台詞を言いながらスネオに、抱き着いた

スネオ「辞めろよ!!!!!!!!!!!!!! ジャイアンみたいなこと言うな!!!!!!!!!!!!!! 気持ち悪い」

「ジャイ」なんだと！！！！！！スネオ俺様が気持ち悪いだと！！！！！！ぶん殴らてーか！！！！！！この野郎！！！！！！」

スネオ「わわわ ママ！……！！！！！！」

のび太「……カオスだ」

咲夜「……ちよつとスネオ君が羨ましいわ」

出来杉 「えっ!!??? 咲夜さん!!???」

白峰 「俺空気だ……」

太郎「僕……一言も喋ってない……」なんてことが在ったとか、無かったとか。
オワレ

No5保健室にて近状報告その1（後書き）

急いで執筆したため文章目茶苦茶になっちゃった

作者「ああゝ充電切れさえなければゝ!!!!!!」

はる夫「ボソッ（自業自得だ・・・・バゝカ（笑）ククッ）

作者「偽ライダーパンチ!!!!!!」

はる夫「ひでぶ!!!!!!」

N o 6 金田さん遂に発狂する!!!!!! (前書き)

余り本編とは関係は・・・・・・・・・・ないな・・・・・・・・

そしてぐだぐだな上に キャラ崩壊全開!!!!!!
・・・・・・・・まあ今に始まったことでは、ないが・・

No6 金田さん遂に発狂する!!!!!!

前回・・・咲夜から拳銃GET!!!!!!

各々の目的も決まり、ジャイアン達が調達した武器・装備も、皆で分けて、イザ解散ってなろうとしたが・・・

金田「オイ!!!!!!ちょっと待ちなさい!!!!!!何故私を無視して、解散しようとしている!!!!!!」

そう突然金田が、入口の前で騒ぎ始めた。因みに咲夜とせずかは、既に裏山へ向かった。

のび太「・・・無視って・・・別に僕等は・・・」

金田「喧しい!!!!!!もっと私を、褒めたたろ!!!!!!崇めろ!!!!!!」

出来杉「・・・」

スネオ「ボソツ（あのオッサン、ジャイアンより偉そうだな・・・）」

ジャイ「聞こえてるぞ!!!!!!スネオ!!!!!!ギタギタにされたいのか!!!!!!」

スネオ「ああ!!!!!!ゴメンなさい!!!!!!（汗）」

零「（五十歩・百歩・・・）」

皆が金田に困り果てたら、勇者が現れた。

白峰「じゃあ、オッサンはどーしてほしーんだよさっきから黙ってりゃ、ぎゃーぎゃー騒ぎやがって!!!!」

ジャイ「そうだぞ!!!! さっきから一人で、騒いでるだけで、オッサン何もしてないだろ!!!!」

零・のび太・スネオ

「そうだ!!!! そうだ!!!!」

出来杉「ちょっと! 皆やめなよ!!」

太郎「ZZZ」

白峰とジャイアンが、遂にキレた。それを筆頭に他の者も金田にキレる、出来杉は皆を止める、太郎は爆睡中・・・・よく寝られるな太郎・・・

金田「そんなこと決まっている、これまでの私の輝かしい人生を、聞いていけ!!!!」

金田は、まるで聞いちゃいなかった。それを聞いたジャイアンと白峰は、更にヒートアップするが・・・・

零「白峰君、ジャイアンストップ! ちょっとこっち来て」

金田「オイ!!!! 私の話は終わってないぞ!!!!」

それを無視する零。

零「(ってなわけでしょう？あのオッサン俺達の話まったく聞いてねーぞ?)」

出来杉「(ちょっとこれは、いくらナンでもヒドイですね……)」

白峰「(いっそのことぶん殴って、気絶させるか？そのほうが早いぞ?)」

ジャイ「(そうだ!!!!!!白峰さんの言う通りだ!!!!!!)」

スネオ「(確かに……)」

のび太「(そんな、乱暴な……)」

出来杉「(僕も、ちょっと……)」

白峰「(じゃなにか？お前等2人で、あのオッサンの話を聞くのか？恐らく物凄く、長い話だぞ?)」

のび太・出来杉

「……」

そう言われ黙る2人流石に、金田の話は聞きたくないようだ。

零「(俺は、嫌だぜ？あんな頭イカれたオッサンの話聞くなんざ)」

ジャイ・白峰

「(俺も!!!!!!)」

スネオ「(僕もいやだよ)」
のび太「(僕だって)」

出来杉「(僕も、出来れば・・・)」

零「(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・太郎を置いてくか？寝てるし起こすのも、悪いだろ？)」

零がそう切り出した。
すると・・・・・・・・

黒いのび太「(・・・・・・・・・・良いですね・・・・・・・・それ・・・・)」

何故か、ちょっと黒いオーラを出したのび太が賛成した。

出来杉「(ちよっ・・・・・・・・のび太君！？零さん！？)」

白峰「(俺は、賛成だな・・・正直丸腰の太郎を守りきるのは難しいからな、だったら比較的に安全な、保健室に置いといたほうがいい。いくらナンでも子供くらい守るだろあのオッサン)」

出来杉「(まあ確かに・・・)」

スネオ「(・・・・なんか嫌な予感が・・・)」

ジャイ「(何でもいいが早く終わりにしよーぜ？　あのオッサンまだ入口で騒いでるしよ・・・)」

零「(よしっ！決まりだな・・・)　オーイ金田さんちよっ頼みがあるんだけど・・・」

金田「漸く話を、聞く気になったか！！！」

零「いや その話は、そこで寝てる太郎君にしてくれない？俺等そろそろ動かないとヤバイしね！」

金田「ふざけるな！！！！」

あんなガキに、話たってしょうがないだろが！！！！」

白峰「別に、こっちはあんたの話なんぞ聞きたかねーんだよ！！！！どけっ！！！！！」

金田「嫌だ！！！！話を、聞いて貰うまで、絶対どかんぞ！！！！！！私は神だ！！！！！」

遂に金田がおかしくなった。そして零もキレた

零「ジャーマン・スープレックス！！！！！」

金田「げふっ！！！！！」

金田は口から泡を噴いて気絶した。

出来杉「零さん！？なんてことを！！！！！！ああ！！マズイ！！！！金田さんの耳からどす黒い血が！！！！！」

零「知るか！！！！流石の俺でも、我慢の限界だ！！つく」

スネオ「まあ自業自得だな・・・私は神だ！！なんて言ってる時点で・・・」

ジャイ・白峰

「「だな」」

黒のび太「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・フツ」

出来杉「・・・・・・・・のび太君？フツって・・・・・・・・ってどうするんですか！？金田さん結構危ないんじゃないですか！！！！」

零「さあ？放つといっても大丈夫だろ？まあそんなに心配ならお前が金田さん看病すれば？俺は、止めないけど？じゃっ今度こそ解散だね お疲れした」

のび太・スネオ・白峰・ジャイアン「「ういゝす」」

皆は出来杉と金田と太郎を放置して保健室を後にした。

出来杉「・・・・・・・・・・ってちよつと待ってゝ！！！！！！」

出来杉も保健室から逃げた。

N o 6 金田さん遂に発狂する!!!!!! (後書き)

・ ・ ・ ・ この間からパソコンに入っている《のびハザ》を最初から全部プレイしているのですが ・ ・ ・ ・ 白峰よ、あんまり喋んねーな ・ ・ ・ ・

N o 7 体 育 館 へ の 道 の り (前 書 き)

相変わらず話が進まないそして駄文……………
それでも読んでくださるなら ドウゾ!!

そして出来れば感想も……………来るわけねーか

No7 体育館への道のり

前回 金田にジャーマン・スープレックスを掛けて逃げた……

とりあえず頭のおかしい金田から逃げ、各々の役割に戻った零達。

零「とりあえず体育館に行く前に、西校舎の家庭科室を探索したほうが良いと思うんだが？」

のび太「そうですね 給食室の隣の部屋も、気になりますし……」

そんな感じで、体育館に行く前にまた西校舎に向かう零達、とりあえず家庭科室を開け中に入る。

零「暗いな……のび太あゝ電気つけてくれ」

のび太「はい」

のび太が電気をつけた。そこには、案の定ゾンビがいた。

「ウウウウ」

零「……無視してもいいんだが……声がウザいな、まっ！1体だけだし永遠に……オヤスミ……！」

零が、左ハイキックをゾンビにかます。見事にゾンビの顔の左側にヒットしゾンビの左側の顔が消し飛び、そのまま完全に絶命した。

のび太「……………やっぱり凄いですね？ 零さん銃要らなくないですか？」

零「いや 流石に複数相手にするのは、無理」

のび太「まあそうですけど、なんか零さんなら、やりかねない気がするので」

零「イヤイヤ無理よ？ 無理なことより早く探索しようぜ」

のび太「ハイ（ってか零さん一人で探索しても大丈夫なような）」

そんなことを、思いながらのび太も家庭科室を物色し始める。

零「ここも使える物はないか……この引き出しは………ん？ なんだこれ？ パスコードA？ なんのことだ？ 一応取っとくか……」

のび太「零さ〜ん此処は 全部調べましたよ〜」

零「んじゃ出るか」

零達は家庭科室を出た。歩きながら、部屋で見つけた物なんかを、お互い出し合う。

零「なんかあったか？」

のび太「ハーブが3つと、何故かあったハンドガンの弾を2つですね。零さんは？」

零「学校に弾丸？ まあいいか。俺はこのパスコードAってのを見付

けたんだけど のび太なんか知らない？」

のび太「さあ 僕には心当たりは。」

零「ふゝん分かった、とりあえずこれは置いて次は此処の部屋か」

零達は給食室の隣の部屋に入った。中には死体が大量にあったが、慣れてしまった零達は軽くスルーした。

零「今度は誰かの日記に、パスコードBか………のび太ー何かあったか？」

のび太「いえ 特にはーッ！……！」

零「ツチ！……コイツら……！」

「「「あああああ」」」

突然死体がゾンビとなって、襲い掛かってきた。

のび太「クソッ！逃げ切れない……！仕方ない……！」

バンッバンッバンッ

のび太は冷静に、活確実に3体のゾンビを仕留めた。

一方零は――

バンッバンッ

銃を使い、2体のゾンビを倒し。

零「ウラァー!!」

残りの一体のゾンビの腹に向かって蹴りを繰り出す。俗に言うヤクザキックである。

そのまま倒れたゾンビに素早く近づきゾンビの頭に向かって銃を撃って仕留めた。

零「ハァービックリしたぜ、まさか起き上がるとはな〜」

のび太「そうですね、今度から死体にも気をつけないと」

零「ああ 早く出ようぜ? 気分悪くなってきた」

のび太「そうですね」

零達は部屋を後にした。

そのあと資料室も調べたが特に何もなかった。

西校舎も調べ尽くし今度は体育館を目指して東校舎に向かう、その道中職員室・校長室を調べ、ショットガンを手に入れた零達、とりあえずのび太が持つことになった。

途中数体のゾンビに出くわしたが、零とのび太の前ではさほど問題ではなかった。

のび太「それにしても、銃の扱いも凄いですね、何処で覚えたんで

すか？」

零「ん〜？ いや銃なんて使うの初めてだぞ？」

のび太「えっ？ そうなんですか？ それにしては初めてとは思えないような扱い方でしたよ？」

零「う〜んなんか知らないけど、こうなるとゆうか知らず知らずの内に体が覚えてた？ ってゆうか…」

のび太「知らず知らず？」

零「う〜ん自分でもよくわからん」

のび太「そうですか…」

のび太は腑に落ちなかったが、頭の悪いのび太なので気にしないことにした。が零にはある能力が備わっていることをのび太、そして零自身知らない。

東校舎に入った零達途中管理室なる部屋見つけた、鍵が掛かってたが零が蹴り飛ばし中に入りまた物色を始めた。因みにドアを一発で蹴り飛ばした零に対してのび太は、もうスルーすることにした。

零「おお！！！ のび太ーロッカーの中にショットガンの弾があったぞ。のび太使えよ」

のび太「ありがとうございます。じゃあ零さんには、ハンドガンの弾を…」

零「おおサンキュー」

お互いに見つけたアイテムを交換した。

のび太「この2つのパソコンは、なんですかね？」

零「んゝ何々？コッチのパソコンは防火シャッターの鍵が必要みたいだなんでコッチは――パスコードを4つ入力してくださいか…このパスコードのことか？だとしたらあと2つか…」

のび太「どっちも、まだ揃ってないので後にしますか？」

零「だな」

零達は、管理室を後にし体育館に向かった。東校舎から体育館までの道のりは、スネオに似た死体があったりしたこと以外特に無いので割合させて貰う。

そんなこんなで遂に体育館の前に着いた2人

のび太「此処が体育館です」

零「やっと着いたな。うしっ、入るぞゝのび太鍵は？」

のび太「此処に――」

「バリッ！！」

突然近くの窓ガラスが割れた。

零「なんだ!？」

のび太「さっきから体育館から、唸り声が聞こえるような…」

零「確かに聞こえるな…のび太慎重に入るぞ…」

のび太「ハイ」

のび太と零は慎重に体育館に入っていた。
一体体育館には何がいるのか？

続く

N07 体育館への道のり（後書き）

無理シリーズの安雄って良いところ取りだなくと
ちよっぴりイラッとする子供な俺……………

N08登場!!!!リアルステルス迷彩のカメレオンその名も…えーっと……

作者「くそー!!!0時に予約投稿しようと思ったら、うたた寝して予約すんの忘れた」

零「別によくね？」

作者「いやほら 0時ピッタリに表示されるのが、なんかいいんだよ」

零「別にお前見ないじゃん、それに予約投稿なんて生意気なことお前がするなよ…別に凄い作品じゃないんだし…」

作者「……………」↑部屋の隅っこで体育座り

零「あっ泣いてる……まあいいか…それではドウゾ」

N08登場!!!!リアルステルス迷彩のカメレオンその名も……えーっと……

前回 遂に体育館に潜入！

体育館に入った零とのび太しかし、複数の死体だけで何もいない。

零「……何もないな」

のび太「おかしいな 確かに唸り声が聞こえたのですが…」

零「はる夫君が警告したんだ 警戒しながら行くぞ」

零とのび太は、周囲を警戒しながら体育館を物色し始めた。
だが何もない。

零「何もないな……のび太そっちは、何かあったか」

のび太「いえ特には……あれ？」

のび太が何かに気づいた

零「どうした？」

のび太「あの警備員さんの死体の手が一瞬光ったような…」

零「何？アレは鍵だな……よし取りに——あれは……！！！！
のび太……！！！！伏せろ……！！！！」

のび太「えっ!? うわ!？」

咄嗟に叫ぶ零、のび太はビクリして尻餅をつくその瞬間…

バキッ!!!!!!

のび太の後ろの壁がまるで槍に刺さったように貫通した。そして、それは突然現れた。

「グウオオオオオ!!!!!!」

それはまるで大きさを除けば、カメレオンのような姿だった。

のび太「嘘だろ? なんてデカサだ」

零「クソッ! はる夫君が言ってたのは、コイツのことか!」

そしてカメレオンの方は雄叫びをあげた後……姿を消した。

のび太「き 消えた!? 逃げたのか!？」

零「違う!!!! 多分保護色か何かで姿を消したんだ!!!! マズイ!!!! に突っ立ってたらやられる!!!! とにかく俺が鍵を取るのび太は逃げ回って攪乱しろ!!!!」

のび太「ハイッ!!!!」

零とのび太は走った。

零「よしっ！！これが鍵だな！のび太逃げるぞ！！」

のび太「分かりました——うわっ！！」

「ドテッ」

お約束というか…のび太は死体に躓いて転んだ。その瞬間カメレオンのような化け物は、ステルスを解きのび太に襲い掛かった。

「グウオオオ！！！！」

のび太「うわわ！！！！」

零「のび太あゝ！！！！クソッ！！」

咄嗟にハンドガンを構えカメレオンに向かって撃つ零　だがあまり効いていない。

「キシヤアア！！」

今度は零にターゲットを変更し、零に向かって猛突進してきた。

のび太「零さん！！」

零「今の内だのび太！！！！コッチは大丈夫だ、早くいけー！！！！」

のび太「は　ハイ！！」

のび太は、零のお陰で先に体育館を脱出した。

零「よしっ!!! 脱出したな!!! 俺もさっさと逃げさせて貰うぜ!!!」

零は、カメレオンの突進を避けて体育館の入口へ猛ダッシュする。
だが カメレオンも以外に素早く、直ぐに方向転換して零を追い掛ける。

零「ツチ!!!! 飯食って無いから、思ったより動けないな…仕方ねえ!!! 一か八かだ!!!」

零もカメレオンの方へ方向転換すると、カメレオンに向かってダッシュした。

「グウオオオ!!!!!!」

カメレオンが口を開けて零に飛び掛かるが。

瞬!!!

咄嗟に右に避け……………そして

「ウオラァァ!!!!!!」

ドカツ!!!!!!

カメレオンの右腹に向かって全力の蹴りを放つ。

「キシヤァァ!!!!」

カメレオン悲痛な叫びと共に、カメレオンの体は宙を舞そのまま倒れ込むそのままハンドガンを構え撃つ。撃ちながら体育館の入口まで走り体育館を脱出した。

入口にはのび太がいた。

のび太「零さん!!!!!!」

零「のび太か　なんとか逃げたが、この入口を突き破って来るかも知れないから東校舎の中まで逃げるぞ!!」

のび太「ハイ!!」

零とのび太は、東校舎まで逃げようとしたが。

ドカーン!!!!!!

「グアアア!!!!」

のび太「何かが破壊された音と、あの化け物の雄叫びが聞こえますね」

零「ああ　どうやら違う場所に行ったみたいだな……もう大丈夫だ」

のび太「しかし、よく無事でしたね? 僕てつきり……………」

零「いや　俺も結構危険だったぞ、飯食ってなかったから力が出なくてな……あの化け物の右腹に全力で蹴り入れたが、上手い具合に力が入らなかったよ。ちよつと浮いたただけだった」

のび太「へへ　って!!!!!!　あの化け物に蹴り入れたんですか!?!　しかもちよつと浮いたって!?!　あんな巨体が!?!」

零「え？うんそうだけど？」

のび太「今更ながら、凄いですね…普通蹴りなんて入れようとなんてしませんよ？」

零「まあ咄嗟だったしな　しかも一か八かだったしな　まっ！！逃げられたんだ　どうでもよくね？」

のび太「……（どうでも良いことなのか？あんなのを蹴り飛ばすことについて）」

のび太が零の人外っぷりに心の中で突っ込んだ。

零「それよりさっき拾ったこの鍵、調べたらどうやら防火シャッターの鍵らしいぞ　これで2階も調べられるぞ」

のび太「ならさっきの管理室に――」

???「うあああ！！！！」

零・のび太

「「！！！」」

突然誰かの叫び声が聞こえ咄嗟に反応する2人。

のび太「今の声は出来杉！？西校舎から聞こえるぞ！！何があったんだ！？まさか化け物！？」

零「ああ！！！！多分な それなら給食室か家庭科室のどちらかに居るはずだ。急いで助けるぞ 走れるか？のび太？」

のび太「ハイッ大丈夫です！」

零「よしっ 行くぞ！！」

2人は西校舎に向かって走り出した。
果たして 出来杉を助けられるのか！？

続く

N o 8登場!!!!リアルステルス迷彩のカメレオンその名も……えーっと……

作者「うーん」

のび太「どうしたんですか？」

作者「ああ のび太か……いや さっきこんな物が届いたんだが…」

のび太「何ですか？……こっ これは!!」

作者「知っているんだ？のび太、そうこれワームを倒すためにZ E C Tが開発したマシンガンなんだけど……使い道が……」

のび太「いや 僕に下さいよ!!!!それあればゾンビは愚かたいていのB・O・Wは倒せますよ!!!!」

作者「いや これ出しちゃ、何か駄目だろ」

黒のび太「フザケルナ、コツチハ イノチガケナンダヨ ヨコセ」

作者「げっ!!!!ブラックのび太!!!!分かった分かったやるから早くいけ」

黒のび太「フハハハハハ コレサエアレバ オレハムテキダー」

作者「あーあ 行っちゃった」

注意!!!!このやり取りは本編にはなんの関係もございません。

N o 9 出来杉? ああ、天才って皆から持て囃されてる癖に 映画シリーズじゃ

タイトルは…僕が昔思ってたことです。ハイ

今回は、短い上に結構ハシヨります…O r Z

N o 9 出来杉？ ああ、天才って皆から持て囃されてる癖に 映画シリーズじゃ

前回 体育館を脱出した 零とのび太。

安心したのもつかの間 西校舎から出来杉の叫び声がしたので救助しに行こうとなった。

零とのび太は出来杉が居ると思われる、西校舎に向かって全力で走っていた。

零「ハアハア 急げよ！！！！なんか嫌な予感がする」

のび太「ハアハア 分かってますよ！」

そんなやり取りをしながら、東校舎を抜け 管理室を通り過ぎようとした時。

バリン！！！！！！

零・のび太

「！！！！」

「「グルルル」」

突然感染した犬別名ケルベロスが3体ほど窓ガラスを突き破って侵入してきた。そしてそのまま零とのび太に襲い掛かった。

のび太「クッ　こんな時に……!!」

即座に銃を抜き、のび太に飛び掛かってきた1体のケルベロスに向かって撃った。

「キャイン!!」

そのままケルベロスは頭を撃ち抜かれ死んだ。
その間約0・3秒ゴルゴも驚愕だ。

のび太「ふう……って!!!! 安心してる場合じゃない零さん!!」

と言って零の居る方に向く、カメレオンの化け物から逃げた時、腹が減って力が出ないと言っていたのを思い出したのび太は、必要なら援護を……と思ったが――

零「邪魔だあ……!!!!」

ケルベロスの顎にアップパーカットを決めていた。そのままアップパーを喰らったケルベロスは顎が消し飛びそのまま動かなくなった。もう1体は頭を銃で撃ち抜かれてすでに死んでいる。

零「クソッ 余計な時間を掛けちゃった のび太先を急ぐぞ」

のび太「……ハイ（本当に腹が減って動けない人の動きか？アレ）」

毎度のことながら心の中で零に突っ込んだのび太だった。それを知ってか知らずか、零が走り出したのでのび太も後を追いつけていた。

東校舎を抜け中央校舎も走り去り西校舎に着いた零とのび太。

零「よしっ着いたぞ！！！！出来杉君は何処に――」

バンッバンッ！！！！！！

家庭科室から銃声が聞こえた。

のび太「零さん！家庭科室から聞こえました！！！！」

それに頷き家庭科室の扉を開けたそこには。

出来杉「クソッ！！！！コッチに来るな！！！！」

出来杉が4体のゾンビに、教室の角に追い込まれていた。

のび太・零

「出来杉（君）！！」

零とのび太は、即座に銃を構えてゾンビに向かって発砲した。
発砲した弾丸は綺麗に4体のゾンビの頭に命中し一撃で倒れた。

のび太「出来杉！！！！大丈夫かい！？」

出来杉「のび太君に零さん　ありがとう銃の弾が無くなってしまっ
て　どうなるかと思ってたよ」

零「そうだったのか……まあ無事で良かったよ」

出来杉「ハイ　2人共本当にありがとうございます」

のび太「アレ？　そういえば白峰さんは？」

出来杉「それが…白峰さんと相談してバラバラで調べることにしたんです。さっきも連絡がきたので無事だと思います。」

零「そうなのか？まあ　こんな状況じゃ1人だろうが2人だろうがあまり変わらないからな」

出来杉「そういえば　さっき武君達が、学校にまた戻って来るって連絡があっただんだそれを皆に連絡しようとしたところだったんですよ、なので　一度保健室に戻りませんか？」

のび太「そうなのかい？なら一緒に行こうか」

零「ああそうすっか…ああ！！ヤベー思い出しちゃった…金田さんまだ寝てるかなあ？起きてたら面倒くさいことになりそうなんだけど…」

出来杉・のび太

「「……確かに」」

3人が保健室に居る金田の存在に不安がりながら保健室に向かうのだった。

続く

オマケ

3人が保健室に向かってる途中

零「そういえば 出来杉君銃の弾無くなったって言ってたよね？俺の弾やろうか？」

出来杉「えっ？それは有り難いのですが それでは零さんはどうするのですか？」

零「いや なんか俺アイツら大体素手で倒せるから、銃あんまり使わねーんだよ」

出来杉「へえー…って！！素手で倒すんですか！？」

のび太「出来杉、零さんの言うこと本当だから。零さん大体素手で戦ってるよ？しかもほぼ一撃で倒すし…」

出来杉「…それは凄いですね」

零「そうか？まあそういうことだから、ハイ弾これくらいあれば大丈夫だろ？」

出来杉「じゃあ、お言葉に甘えて……」

出来杉が零の人外っぷりを知るくだり。

N O 9 出来杉? ああゝ天才って皆から持て囃されてる癖に 映画シリーズじゃ

次回は、金田がまた出て来ます。

N o 1 0 金田死す! ? (前書き)

ハイやらかしました……キャラ崩壊全開です
それでもよければ、どうぞ

あっ 出来れば感想お待ちします。

No10 金田死す!?

前回 出来杉を救助成功!!!そして保健室に向かった

保健室に着いた、零・のび太・出来杉の3人は中に入る。
すると……

金田「うへへ〜良いではないか良いではないか〜」

しずか「キャー!?!?!」

咲夜「ちよっ!?!?!コッチに来ないで!?!?!」

太郎「ZZZ」

金田がパンツ一丁になって、しずかと咲夜を追い掛け回していた。
因みに太郎は未だに爆睡中……ほんとよく寝てられるな…

零「…何なの?これ…」

のび太「し…しずかちゃん!?!?!?」

出来杉「一体何があったんだい!？」

しずか「知らないわよ!! 30分前に来た時、金田さんが、耳からどす黒い血を流して倒れてたから、咲夜さんと2人で看病してたのよ。そしたら突然起き上がったと思ったら、パンツ一丁になって追いついてきたのよ!!!」

のび太・出来杉

「それって…」

のび太と出来杉は揃って零の方をみる。

零「あれ? ……やっべ…もしかして俺のジャーマンで頭オカシクなったのか?」

もしかしくなくても、そうである。すると金田は零を見て

金田「おお!!!! 君は!!!! イヤ、君には感謝しなければならぬ君のお陰で私は、より開放的になれたよ!!!! ワッハハハ、やはり私は神だ!!!!」

零「えっ? ……俺のお陰? 嘘? あれ俺のせいであんなっちゃったの? そんな馬鹿な…力加減かなりしたはずなのに(ブツブツ)」

零は、一人でブツブツ言い初めた

のび太と出来杉は、どうしたらいいか解らずボー然とするが、直ぐに戻り2人を助けようとする。

のび太「ハッ！！！！ボーッとしてた、今助けるよしずかちゃん！！！！」

そう言っのび太は金田の前に立ちはだかる。そして

のび太「しずかちゃんに手をだすな！！！！！！」

金田「なんだ貴様！！！！私のプチ桃源郷の邪魔をするな！！！！」

そう言いながらのび太に襲い掛かる、のび太はそれを避けて足払いをして転ばす。そして金田の上に馬乗りになる。

が 所詮は小学生の体重更に言えば、永遠の落ちこぼれの称号を持つ者、B・O・W.には強くても、人間相手では、どうしても勝てない。

金田「小癪な！！！！」

のび太「うわっ！！」

金田はのび太を、突き飛ばした。

更に追い打ちを掛けようとする金田に、出来杉が止めようとするが、所詮脇役、映画シリーズでもワンシーン出てれば良い方なモブキャラでは金田は止められ無かった：

金田「貴様達 如きに新世界の神である私は止められんわ！！！」

出来杉「クソッ！！！！地味に強い そしてなんでか知らないけど精神的にもダメージが……」

のび太「このままでは、しずかちゃんと咲夜さんが……」

金田「フンっ！！貴様達はそこで見ているがいいわ！！！！……さうと」

金田はニヤニヤしながらしずかちゃんと咲夜に近いていく、そして……

金田「ワッハハハゝ良いではないかゝ！！！！」

そう言いながら、ルパンダイブの如く2人に襲い掛かった……………が！！！！

しずか・咲夜

「きゃー！！！！来ないでー！！」

金「！！！！！！」

金田「ぐうわばー」

読んでる人なら、分かるであろう……そう飛び掛かろうとした金田に、咲夜としずかが蹴りを入れようとしたら、都合よくキ○タ○に、入ったのだ……更に……

零「ファッック！！！！」

零がそう叫びながら金田の脇腹にドロップキックをした。そして床にのたうちまわる金田に零は

零「オイコラ！！！！テメエさっきから黙ってりゃ調子くれやがって！！！！！！！！！！もー！！！！我慢の限界だ！！！！殺す！！！！のび太あ！！！！！！出来杉い！！！！手伝え！！！！」

零は、のび太と出来杉に指示します金田の両手両足を、のび太と出来杉に抑えさせ仰向けに寝かせた。

金田「なっ！！！！何をする！！！！」

のび太・出来杉

「……………うわぁ」

のび太と出来杉は、金田の有様を見て自分の男の勲章を、抑えながら冷や汗をかいた。

零「フツ……また下らん物を潰してしまった…」

しずか「……………出来杉さんとのび太さんどうしたのかしら？突然うずくまって」

咲夜「しずかちゃん……男の弱点を潰されたのを間近で見ればあななのよ？」

零は、どっかの斬鉄刀使いの決めゼリフを言いしずかは、うずくまっているのび太と出来杉に不思議がり咲夜はしずかの疑問に答えていた。

続け。

オマケ

零「さうてと咲夜さんにしずかちゃん大丈夫だった？」

零は、ニコッと微笑みながら2人に聞いた、先に言って置こうこの主人公イケメンなので 当然……

咲夜「えっ!? え ええ大丈夫よ／＼」

しずか「は ハイ／＼」

ハイ!!!!!! こうなります

咲夜としずかはとっさに零から顔反らす。

だが零は……

零「(ハッ!!!!!!) しまった!!!!!! 俺男相手に笑うと何も無いのに、女だと何故か知らんが、顔真っ赤にして逃げるんだっ!!!!!!!」

零はやらかした!!!!!! と言わんばかりに 咲夜としずかを見る。2人は零と顔が合うたんびに 顔を逸らす。

零「あ あのゝスイマセンゝ俺の顔そんな変ですかねゝ? そんなあからさまに逸らさなくてもゝ」

零が2人に近づきながら言うすると

咲夜「ち 違うわよ!? ただちよつと あまりにも アレだった
というか以外だったというか／／…ね!? しずかちゃん?」

しずか「は ハイ!!!!!! 決して変とかじゃないですよ／／」

黒のび太「……………何時か潰す」

出来杉「零さん……普通気付きませんか?」

のび太は、零に対し嫉妬しまくり 出来杉は、普通に突っ込んだの
だった。
終われ

N o 1 0 金田死す! ? (後書き)

金田って のびハザシリーズでは 忘れ去られるか 死ぬ運命なん
ですよ

そして金田の死体グラは使い回されますし：報われないと作者は
思う

N o 1 1 保健室にて近状報告その2（前書き）

あれえゝこんな風にするつもりなかったのに……

何時ものようにキャラ崩壊全開のグダグダっぷりです。しかもオマケのほうが長いです…

それでも宜しければ是非どうぞ

感想もお待ちしてます。

そう、さっきからしずかと咲夜は、零をチラチラ一瞥してくる。だが零が2人を見ようとすると おもいきり顔を逸らす。のび太はさっきからブラックなオーラを出しながら「潰す」を連呼してる。

出来杉は、そんな状況を見て苦笑いをしている

太郎は、解りやすい寝言を言いながら爆睡中である。

零「……ハア とりあえず速く皆来てくれ……」

心の底からそう思う零だった。

出来杉「後5分程したら 皆来ますよ。

もう少しの辛抱ですよ」

零「あ ああ、ってかのび太の奴はさっきから何なんだ？俺を見ながら潰すって連呼しまくりだぞ？なんかしたのかよ？俺……」

出来杉「さ さあ？（本当に気づかないんですかね……）」

出来杉は、心の中で思ってた。

しばらくそんなことがあったが、白峰・ジャイアン・スネオが保健室に来た。

白峰「皆来てる、みたい……だな?…」

ジャイアン「ワリイ皆　ちよつと遅れ…ち…まっ…た?」

スネオ「何なのこの状況は?」

零「え? ああまあ色々あってね………」

3人が保健室に入って似たようなリアクションをしていた。

そらそうだ、金田はパンツ一丁で隅っこの方で泡吹きながら気絶してるし、しずかと咲夜は物陰に隠れて顔を赤くしながら零を見ているし……っかお前等はアイドルの追っかけか?

のび太はのび太で、零の真後ろで黒いオーラ出しながら潰すを連呼しまくりなのだ。

出来杉「まあ　皆戻って来たようだし、報告を始めたんだけど、いいかな?　ほらっのび太君?」

のび太「ハッ!! 僕は何を!?!」

零「(忘れてたんかい!!)」

出来杉「ほらっ　しずかちゃんと咲夜さんも」

しずか「う　うん／＼／＼（零を見ながら）」

咲夜「そ　そうね／＼／＼（零を見ながら）」

ジャイ「どうしたんだ？あの2人」

白峰「…さあ？」

スネオ「…」

疑問に思いながらも、それぞれの報告を開始した

ジャイ「さて　まず俺達だな　またコンビニと武器屋から食料と武器を手に入れたぜ」

スネオ「まあ　またもう一往復するけどね　学校組は？」

咲夜「私達は、また裏山に行ってハーブを持って来たわ　もう調合済みだから、後で皆に分けるわ」

零「へえ、調合なんて出来るんすか？ 凄いですね」

と咲夜の方を見ながら、言うが

咲夜「サッ／＼／」

また顔を赤くして逸らされる。零は軽く傷つきながらも、なんとか持ちこたえた。つか気づけやー！！

ジャイ「白峰さんと出来杉は？」

白峰「俺は、1階は調べつくしたが特には無かったな。」

出来杉「…ゴメン僕は、銃の弾が切れてゾンビ達に追い掛け回されて、零さんとのび太君に、助けてもらって調べるところじゃなかったんだ」

スネオ「へえ、やるじゃん零さんにのび太」

のび太・零

「いや」

ジャイ「で のび太と零さんは？」

零「ええっと 2階のシャッターを開ける鍵を見付けたよ……あ
あ……皆に言うことが」

ジャイ「何？なんかあったのか？」

のび太「そうなんだ……！体育館に巨大な化け物がいたんだ……！！」

一同

「「「！！！！！！」」」

ジャイ「……本当か？2人共？」

零「ああ カメレオンのような姿でな……一番厄介なのは、姿を消す
ことだな」

出来杉「姿を、消す……か確かに厄介だね」

零「なんとか逃げたけど、アイツ体育館の壁ぶっこわして、何処かに行っちゃった…もしかしたらこの校舎に居るかもしてないな」

のび太「しずかちゃんと咲夜さんは見なかった？」

しずか「いえ…見てないわ」

白峰「俺も見なかったな」

ジャイ「なら その化け物には注意だな…とりあえず零さん達は2階のシャッターを開けてもらって俺達はもう一往復して、咲夜さん達はまた裏山にハーブを取りに…それ以外は2階の探索でいいか？」

一同

「「^{ハイ}応！！！！！」」

それぞれの役割も決まり各々探索に戻る一同だった。

続く

□オマケ□

それぞれ探索！！！！の前にジャイアン達が、調達してきた食材を使い料理をして皆で食べることにした。因みに太郎は叩き起こした※保健室にガスコンロなど調理器具が一色揃っている設定

因みに役割は

調理担当

零・咲夜・しずか・ジャイアン

家庭科室から食器の調達のび太・出来杉・スネオ・白峰

その他雑用

太郎

金田・何もしないため料理お預け

となった。因みに料理の様子は

零「へえ〜ジャイアン料理出来たんだ〜」

ジャイ「まあ たまに母ちゃんが、出掛ける時とかジャイコ…あつ妹と一緒に作るんだ」

零「へ〜偉いね〜」

ジャイ「零さんも 手際いいじゃん何時覚えたんだ？」

零「ああ 俺って15歳の頃から一人暮らししててな自然に覚えたよ」

咲夜「へえー15から自立したの？ 凄いわね」

しずか「本当 零さんステキー」

因みに、この2人零に少し慣れた

零「そおっすか？ そーゆー咲夜さんとしずかちゃんも、上手いじゃないですか？ 流石女の子ですねー」

ジャイ「そうだぜ！！ 零さん、しずかちゃんが作ったケーキなんてスッゲー美味いんだぜ！！！！」

零「へえー 脱出したら何時か食ってみたいねー」

しずか「——ッ！！ 是非！！／／／／」

しずかが、物凄い切羽詰まったような顔で、零に迫った

零「お おお（汗）」

軽く引きながらも頷く零

咲夜「…（先越されたわ）」

咲夜は越されたと、軽く悔しがるのだった。一方のび太達一行は

のび太「よしっ人数分の食器は、揃ったね」

出来杉「よし保健室に戻ろう！！」

スネオ「ねえねえ ここに左半分顔のないゾンビの死体があるんだけど」

白峰「コッチには綺麗に頭が撃ち抜かれたゾンビの死体があるぜ」

出来杉「ああ この死体は僕が零さんとのび太君に助けて貰った時のゾンビなんだけど……コッチの死体は、解らないな」

のび太「…それ零さんがやったんだよ…」

一同「「えっ!?!」」

のび太「イヤ…そのゾンビに零さんが左ハイキックをしたらそんな感じに……」

スネオ「げっ!!」

白峰「マジかよ…」

出来杉「素手で戦えるとは聞いたけど まさかここまでとは……」

のび太「しかもさっき話した、カメレオンの化け物にも、素手で挑んで右腹に蹴り入れたをだよ? しかもあの巨体が少し吹っ飛んだんだって」

一同「……」

一同零の人外っぷりにア然とするのだった。

保健室に戻ったのび太達は食器を洗い並べた

のび太「零さん はい土鍋持ってきたよ」

零「おっ！サンキュー待ってろよ！！！！すぐ、作るぜ今回はすき焼きだー！！！！」

一同「シャッ！！！！！！！！」

すき焼きと聞きテンションうなぎ登りの一同だった。

やがて、すき焼きも完成し皆で鍋を囲んで座った。因みに零はのび太の隣に座ったが、直ぐに咲夜が反対隣りに座り、しずかはのび太を無理矢理退けて零の隣に座った……零はしずかの行動に引きつつのび太を心配した。

零「うおっ！！！！のび太！？ってか、なんで2人共俺の隣？」

咲夜「さ さあ？何と無く／／／」

しずか「わ 私もです／／／」

零「ああ！！！！成る程成る程隣に座れば、俺の顔が視界に入らないからなあハハハ……グスッ」

咲夜「って 違うわよ!? ボソッ… (鈍いわね)」

しずか「そ そうですよ!!!!!! ボソッ… (鈍感)」

そんなやり取りを見ていたのび太達は。

黒のび太「…零コロス」

スネオ「し しずかちゃんまで!? 僕のほうがカッコイイのに!!!」

白峰「ってか零さん普通気づくだろう…」

出来杉「アハハハ (汗)」

ジャイ「んなことより早く 食お〜ぜ」

太郎「お腹減ったよ〜」

のび太とスネオは嫉妬しまくりで相変わらず零は、全く気づかない
出来杉は苦笑いしか出来ずにいた、白峰は気づいてるみたいだ。

零「よしっ！！！！じゃあ皆手を合わせて」

一同「「頂きまゝす！！！！」」

皆はそれぞれ食べ始めた途中、金田が起きだし全裸になって咲夜と
しずかに襲い掛かったが、零が金田にアルゼンチン・バックブリー
カーを掛けて気絶させたあと、近くにあった布団で金田を簀巻きに
したあと、また隅っこに放置した。

なんにしても、飯を食って体力を回復した零達だった。

終わり

N o 1 1 保健室にて近状報告その2（後書き）

……次回こそは、本編に戻ります。

No12シャッター開けて2階へ…そしてのびハザキャラ遂に登場!!!!!! (前)

深夜にひっそりと 投稿

今回は一気に進めます!! なのでのびハザキャラが、1人出てきます。

そしてまたやらかします、更に長いです。

それでも良ければどうぞ!!!!

あっ あと感想頂けたら嬉しいです

No12シャッター開けて2階へ…そしてのびハザキャラ遂に登場!!!!!!

前回 飯を食べて零の体力も、元に戻り探索再開!!!!

保健室を出て管理室に向かった零とのび太、途中ゾンビに襲われるが飯を食って体力の戻った零とのび太の敵ではなかった。

零「ホワァチャ!!!!」

ゾンビ3体

「ぐぎゃあああ!!!!」

のび太「フッ」

バンバンバン!!!!!!

ゾンビ3体

「バタッ」↑ゾンビの倒れる音

のび太は銃を使い一撃で頭を撃ち抜く、零はケ○シ○ウ みたいな声を出しゾンビを蹴散らす。段々チートじみて来たなこの2人……………そんなこともあり管理室に到着した2人。そのままPCを操作し、

何事も無くシャッターを開けた。

零「これで開いたか？」

のび太「でも3階以降のシャッターは、開かないみたいです…」

ピピピピ

のび太の携帯が鳴ったのでハンスフリーにして出るのび太。

のび太「ハイこちらのび太」

出来杉「のび太君かい？　どうやら2階のシャッターが、開いたみたいだ。これから2階の探索に向かうあとで君達も来てくれ」

零「ああ分かった　そういや3階と4階のシャッターは別の鍵が必要らしんだ、出来れば君達も捜しておいて欲しい後、白峰君にも連絡しといてくれると助かる」

出来杉「ハイ　解りました」

出来杉との連絡を、終える2人。

零「うし 俺達も2階に行くぞ」

のび太「ハイ 行きまー」「ガタン!!!」

突然天井のダクトの扉が落ちてきた。2人は咄嗟に天井のダクトに銃を構える。そこには――

「キシヤアア!!!」

ダクトから4足歩行で、明らかに人間ではない化け物が出て来た。そのまま床に降りる化け物。

のび太「な 何だアレは!?!」

零「チッ!!!! 新手か!?! 気をつけろよ!?! のび太」

2人で化け物に向かって銃を構えたが。

ガッシャァン!!!!!!

化け物は窓ガラスを突き破って外に出た。

のび太「に 逃げた？」

零「解らんが……チッ！！！ゾンビが入ってきやがった！！」

割れた窓からゾンビが2体程侵入してきた。だが所詮ゾンビなので。

零「オラッ！！」

2体共零のヤクザキックで腹を貫かれた後壁に吹き飛び絶滅した。
のび太も、零の行動はスルーする。

零「んじや行くか」

のび太「ハイ」

2人は割れた窓ガラスを板で補強した後、管理室を出た。

東校舎から2階に上がった零とのび太、するとさっきの化け物別名キメラが3体いた。

零「チッ！！！　　やっぱり2階に居たか……………のび太ショットガン
を使え」

のび太「ハイ」

のび太は、ショットガンを零は、トンファーを構えた。
まずこちらに気づいて襲い掛かってきた3体のキメラにのび太が近づきながらショットガンをぶっ放す。

バンッバンッ！！！！！

ショットガンは広範囲に弾をばらまく武器で近距離で撃てば人間の体などは簡単に消し飛ぶ。
なので…

キメラ

「「キシヤアア！！！」」

キメラの体の一部は、簡単に消し飛び断末魔をあげながら2体は絶命した。

のび太「よしっ！！！　後一体！！！」

のび太は最後の一体を、倒そうと銃を構えるが、キメラはのび太の頭上を飛び越えて零に襲い掛かった。
だがそれは零の計算の内だった。

キメラ「シャアア!!!」

零に飛び掛かるキメラ、零は避けずに正面からトンファアを構え、
がら空きになったキメラの腹の部分に、突きを放った。

零「フンッ!!!」

ドコオと嫌な音と共に、キメラの腹に思いっきりヒットする。その
まま3?は、吹き飛ぶキメラ、そのまま倒れ込むが、まだ死んでい
ない。そのまま零は倒れ込んだキメラにダッシュしてキメラの頭を
……

零「ハッ!!!」

グシャア!!

踵落としを決めてキメラの頭を潰した。

零「ふう〜結構見掛けに寄らず弱かったな〜」

のび太「それは、零さんの基準でしょうが…」

零「えー？のび太もショットガン捌き上手かったじゃん 俺はあんなに上手く扱えないよ」

のび太「ショットガンで倒す相手を、トンファー使って倒す零さんのほうが凄いですよ！？しかも止めはトンファーじゃなくて足ですし。見てくださいよ！！！！零さんが倒した化け物なんて頭が丸ごと消えてるじゃないですか！！！！」

零「イヤ 案外柔らかかったからねー ハハハ」

のび太「もう良いですよ！！！！（こんな人の何処がいいんだ！？しずかちゃんは？）」

のび太は、心の中で嫉妬心全開だった。

零「まあ 早く行こうぜ」

そんなのび太の葛藤を知ってか知らずか零は探索を促す。

黒のび太「……（絶対いつか潰す！！！！）」

そう誓うのび太だった。

2人は、東校舎の敵を蹴散らしつつ探索を続けていた。途中警官の死体からハンドガンの弾を入手したり、新たに相談室という安全地帯を見付けたり、ハーブを保健室に置いたという連絡を、何故か零の持っている携帯に咲夜とすずかから電話が来たり（その際またのび太は、黒いオーラを出した）と東校舎はあらかた調べた2人は、中央校舎にむかった。

中央校舎に向かう途中の廊下を歩いていたら3体のケルベロスが2人に襲い掛かってきたが、のび太はハンドガンで確実に2体を仕留め、零は残り1体のケルベロスの首根っこを掴んで、窓から外に投げ捨てた。

そんなこともあったが中央校舎2階に着いた2人。まずエリアに居るゾンビを、速攻で片付けた2人そのあと各教室や視聴覚室を調べたが、特に何も無かった……

のび太「特に、変わった物はありませんでしたね」

零「最後は…あの図書室だけだな。行くぞ」

2人は図書室に入った 中には、化け物等などは居なかったため手分けして探索した。

零「おっ!! レッドハープじゃんラッキー♪後で咲夜さんに調合してもらおうと」

のび太「零さ〜ん、コッチはあらかじめ調べました〜」

零「じゃあ後はその扉だな……鍵が掛かってるな……そろそろよ!!」

バキヤ!!!!!!

扉を蹴り飛ばし中に入った零。のび太もそれに続く。中に入ると、死体が3人いた。中には……

のび太「こ これは太郎!?!……………イヤ違うか?」

零「違う違う…よく見ろよ…んなことより早く調べるぞ」

のび太「は ハア」

2人は図書準備室を調べ始めた、途中射撃の本なる物があったので2人で読んだ。

のび太「へえ、こうゆう時はこう対処すればいいのか、ナルボド」

零「結構勉強になったな、さうして探索再開すつぞ」

また探索に戻る2人すると。

零「んっ？この死体何か持ってるな……ええつと……おっ……！！パスコードC？やった見つけ……！！」

パスコードの紙を見付けた零、するとのび太の携帯が鳴る。

のび太「ハイ、こちらのび太」

出来杉「出来杉だけど、何か手掛かりは見付けたかい？」

のび太「パスコードのメモ書きを見付けたよ……だけど防火シャッターの鍵は、まだだよ」

出来杉「そうか…僕も今捜している所だ。それよりも一つ聞きたい事があるんだ。」

のび太「何？」

出来杉「何処かで緑川聖奈さんを見なかったかい？彼女にそっくりな子を見掛けた気がするんだけど…」

零「誰？それ？のび太知っている？」

のび太「緑川って…あの生徒会長の？」

出来杉「うん2階の廊下に…」

???「キャー！！！！」

のび太・零「！！！！！！」

のび太「悲鳴！？」

零「すぐ近くだ！！」

出来杉「のび太君！零さん！今何か聞こえなかったかい！？」

零「2階の俺達のいる所からだ近いぞ！！生存者かもしれないから助けに行くぞ！！！！」

のび太「ハイ 零さんそういう事だ、出来杉また後で！！」

出来杉「気をつけてくれ、零さんのび太君！ープツン」

零「行くぞ！！！！のび太！！！！」
のび太「ハイ！！」

出来杉との電話を切り急いで図書室を出ようと2人で入口に向かったが…

ガタンガタンガタン

零「あれ？開かないどこか引っかかったのか？」

ガシャン！！！！！！

のび太「——ッ零さん!!!!」

窓ガラスを破ってカラスが大量に入ってきた。

零「クソッこんな時に!!!のび太あ!!!!俺がカラスを蹴散らす!!!!お前は扉をなんとかしてくれ!!!!」

のび太「は ハイ!!!!」

零は銃を構えてカラスに特効した。のび太は、扉を開けようとする。

零「邪魔だあ!!!!このクソ鳥がああ!!!!」

零はハンドガンを駆使しカラスを打ち落としていったのび太も援護する。すると…

白峰「オイッ!!!!誰かいるのか!?!」

のび太「白峰さん!?!ドアがおかしくなって開かないんです!?!凶書室はカラスだらけで今零さんが相手をしています!?!助けてください!!!!」

白峰「待ってろ！今コイツで…」

そう言い白峰は、外から扉に向かって銃を撃ってこじ開けた。

白峰「コッチだ野田！！零さん！！！！早く来い！！！」

零「サンキュー白峰君！！！」

のび太「野比です！！！」

なんとか脱出出来た2人。

白峰「大丈夫か野比？零さん？怪我は？」

零「ああ大丈夫だ助かったよ」

のび太「僕も大丈夫ですありがとうございます」

白峰「よかった……それにしてもこの学校もボロイのかね？ドアが歪んで開かなくなってやがった」

のび太「びっくりしましたよ…」

零「あっ！！マズイ！！こんな事をしてる場合じゃ無いぞ！！」

白峰「????何か用事でもあるんすか?まあ、俺は1階をもう一度見てきますよ」

のび太「えっ?あ…」

白峰は1階に戻っていった。

零「オイ 急ぐぞ嫌な予感がするぞ!!!!」

のび太「解りました!!」

2人は叫び声のした方角へ走っていった。

零「のび太!!!!この更衣室前の床の血まだ新しいぞきつとこの中だ!!」

のび太「急いで中に!!」

男子更衣室に入る2人、中には、一人の女生徒を食い殺しているゾンビ2体がいた。

零「ちい！！！！退けええええ！！！！クソ共があああ！！！！」

零は直ぐにゾンビ2体に近づき蹴り飛ばす。ゾンビは首から上が消し飛んだ。

零「クソッ！！！！のび太そこに倒れてる子は？」

のび太「ダメです…死んでます。死んで間もないと思います。」

零「間に合わなかったのか…」

のび太「ゴメンよ…僕が、僕がノロマなばかりに」

零「のび太のせいじゃない……俺の責任でもある」

ピピピ

出来杉から電話がきた。

のび太「出来杉君…間に合わなかったよ…僕が…僕の足が遅かったばかりに」

零「済まない、出来杉君俺もこの子を見付けるのに時間がかかってしまったばかりに……」

出来杉「のび太君…零さん…自分を責めないでくれ。2人共最善を尽くしたんだろう?……しょうがない事だよ…2人が悪いわけじゃない…」

のび太「くそお……………くそおおおお!!!!!!」

零「…」

2人は、助けられなかった事を悔しがった。

出来杉「…しかし、あの緑川さんが死んでしまうなんて…」

のび太「…ん? ちょ、ちょっと待ってくれ! この子は…緑川さんじゃないぞ!」

零・出来杉「え!?!」

のび太「見覚えは無いけど…多分、僕達よりも下の学年の子だよ!

彼女じゃないみたいだ！」

零「それじゃ…その緑川さんは何処に…？」

出来杉「下の階では見てないし、上にいけるはずは…」

ガタン！！カチャ！！

バタン！！！！カチャカチャ！

零・のび太

「んん？」

出来杉「…どうしたんだい？」

零「隣の部屋…女子更衣室か？その部屋から音が聞こえた」

のび太「僕も聞こえたよ」

出来杉「ゾンビかもしれないよ。調べるなら慎重にね。」

のび太「分かってる。一旦切るよ」

出来杉「あ、さっき2階で何処かの鍵を拾ったんだ保健室に置いて

あるから持って行ってくれ」

のび太「分かった。ありがとう出来杉君。」

のび太は電話を切った。

零「確か更衣室は鍵が掛かってたな……扉を蹴り飛ばすことは出来るが、中に人がいたらヤバイな…保健室に置いてある鍵がもしかしたら更衣室の鍵かもしれないな」

のび太「分かりました。僕が取って来ます。零さんは、更衣室前の安全を確保して下さい。」

零「ああ 分かった」

零とのび太は、それぞれ行動した。のび太は保健室に戻り鍵を持ってくるその間零は、女子更衣室前でタバコを吸いながら此処までの事を考えていた。

零「ふうー なんてこんな事になったのかねえー確かバイトの帰りに変な光が目の前に来たと思ったら、こんな状況に巻き込まれたんだよなあ」

零がタバコを吸いながら此処までのこと振り返っていると のび太

が鍵を持って来た。

のび太「零さ〜ん持ってきました…ってこんなにタバコ吸ってたんですか!?!」

零「ああ、まあ俺は結構吸うペースが速いからな……まあんなことより早く入るぞ」

のび太「そうですね…入りますか」

2人は更衣室に入った、中は――

のび太「…あ、あれ? 誰もいない…」

零「いや、あの物音は聞き間違いじゃないはずだ…」

ガタ!

のび太「…やっぱり何か居るみたいですね…ゾンビかもしれません
が。」

零「いるとしたら、あのロッカーの中だな。」

のび太「どうします？ ロッカー越しに銃で撃てば安全だけど…」

零「いや、人だったらマズイぞ…此処はロッカーの扉を壊して開けよう」

2人はロッカーの中の搜索を始めた、……端から見れば犯罪者である。
一番端のロッカーを残し全てのロッカーを搜索したが何もいなかった。

零「後は、このロッカーだけか…よしっ！ このトンファーでぶっこわすか」

のび太「待って下さい、零さんじゃロッカーが洒落にならなくなります。此処は、僕がやります」

零「えっ？ まあ良いけどじゃあ、ハイトンファー」

零からトンファーを受け取り、ロッカーの扉を叩くのび太、やがて鍵が壊れたのか、何時でも開けれるようになった。

のび太「よし、開けるぞ：1、2、3で一気に開けよう」

零「気をつけろよ：」

零も、ゾンビだった時の為に銃を構えている。

のび太「1、2、さー」

バキヤ!!!!!!!!!!

??? 「いやああああ!!!!!!!!!! 来ないでええええ!!!!!!!!!!」

のび太「うげえ！」

零「なっ!?!」

中を開けようとしたのび太だが、それよりも前にロッカーの中から物凄い勢いで、女の子が出て来た：当然のび太はロッカーの扉に、思いきりぶつかる。

出来杉「のび太君！？零さん！？大丈夫？」

零「あっ出来杉君……」

出来杉「あ…あれ？聖奈…さん？」

零「えっ？この子が？」

出来杉「はい、そのはずです」

聖奈「貴方は確か…出来杉君？」

出来杉「良かった、さっき姿を見たものだから心配していたんだよ。」

聖奈「私は何とか無事です、でも……」

聖奈と出来杉は、のび太の方を見ると。

のび太「うー…ん…」

ジャイ「聖奈さん！無事でよかったよ。これでまた一人、仲間が増えたな！」

咲夜「ええ、本当に無事でよかったわ」

聖奈「みんな…本当にありがとう。友達もみんな襲われてしまったもう駄目だと諦めかけていたわ。」

白峰「…」

聖奈「あれ？貴方は確か…」

白峰は何も言わずに、保健室を出ていった。

聖奈「あ…」

スネオ「あれ？白峰さん？どうしたんだろ？」

ジャイ「さあ…しかし、怪物だらけの中よく無事だったね。」

聖奈「出来杉君とのび太君とそちらの方に見つけてもらわなかった

ら私…」

ジャイ「生徒会長の聖奈さんがいれば、心強いぜ！頑張って一緒にここから脱出しようぜ！」

スネオ「心強いのが根拠がよく分からないけど…僕もそう思うよ。生きてここから出よう」

聖奈「はい。非力ではありますが、私も行動を共にさせて下さい。」

出来杉「よろしくね。」

しずか「頑張りましたよね」

皆が決意を固めた時。

ジャイ「で、あの馬鹿は何時まで寝ているつもりなんだ？」

しずか「特に目立った怪我は無いから、すぐに目を覚ますと思うけど…」

聖奈「ご、ごめんなさい！！ゾンビだと思ってつい…」

スネオ「聖奈さんのせいじゃないよ。悪いのはボケーっとしてたのび太だよのびた!!」

ジャイ「そうそう!のび太がいけないんだ」

出来杉「そ、そうなのかな…」

零「…(鬼だな…)」

ジャイ「まあ、起きないならしょうがない。俺達だけで行動を開始しようぜ」

零「のび太…不幸すぎるだろ(汗)」

のび太の不幸っぷりに同情する零だった。

続く

□オマケ□

聖奈を救助したあと保健室にて皆聖奈に自己紹介した。

ジャイ「じゃあ、改めて自己紹介するね。俺は剛田 武、通称ジャイアンよろしく!!」

聖奈「はい武君ですね宜しく願いします。」

スネオ「僕は、骨川 スネオよろしく聖奈さん」

聖奈「はい スネオ君ですねよろしく願いしますね。」

しずか「私は、源 しずかよ、よろしくね」

聖奈「はい、しずかちゃんですね！」

咲夜「私は、桜井 咲夜よろしくね聖奈ちゃん」

聖奈「ハイ 咲夜さんよろしくお願いします」

出来杉「僕は、さっき言ったから省略するね。あそこに寝てる子が
山田 太郎君であそこに簀巻きにされているのが 金田さんだよ」

聖奈「は、はあ（何故簀巻きに）」

咲夜「金田さんには近づかない方がいいわよ？襲われるから」

聖奈「（ビクッ）は、ハイ!!」

ジャイ「んでそこで寝てるのが 野比 のび太だよ」

聖奈「分かりました…それでそちらの方は（さっきも思ったけどやっぱりカッコイイなあ／／／）」

零「んあ？俺か？…俺は霧生零ってんだ」

聖奈「霧生さんですねよろしくお願いします」

零「あゝ緑川さん？出来れば下の名前で呼んでくれない？零のほうがいい」

聖奈「分かりました零さん 私の事も下の名前で結構ですよ」

零「そっか…なら聖奈ちゃんだなヨロシク!!! ニコッ!」

零は微笑みながら言うだが前にも言った通り、この男イケメンなのだ だから…

聖奈「は、ハイ……よろしくおねがいます／＼／」

こうなるだが悲しいかなこの男。

零「ハッ またやってしまったー！！！！クソッ！！！！馬鹿か俺は！！！！スマン！！！！怒らないでくれ！！！！！！悪かったー！！！！！！」

そうこの男、自分が異性に笑いかけると顔を真っ赤にして怒り出すと、勝手に思い込んでいるのだ。

聖奈「ふえ／＼／ち 違いますよ！？怒ってませんよ／＼！！！！」

零「え？でも…顔真っ赤じゃん…本当に怒ってないの？」

聖奈「いえ 全然寧ろ逆というか／＼／ボソボソ」

零「?????なら…いいんだけど（やっぱり怒ってるよなあ）」

スネオ・ジャイアン

「おのれ！！零さんめえ！！（怒）」

咲夜「増えたわね…」

しずか「増えましたね…」

出来杉「ハハハ（汗）零さんまたですか…」

零は、勝手に勘違いしジャイアンとスネオは、零に嫉妬し、咲夜としずかは増えたことに嘆き、出来杉は、もう苦笑いしかできなかった。

因みにのび太は、気絶しながらも黒いオーラを出していたとかいなかったとか。

終われ

No12 シャッター開けて2階へ…そしてのびハザキャラ遂に登場!!!!!!

(後

作者「ふう〜やっとな此処まで進んだなあ〜」

のび太・ジャイ・スネオ

「「ちよつとまてや〜!!!!!!」」

作者「あゝ何？」

スネオ「なんで、零さんだけモテてんだよ!!!!」

ジャイ「そうだぞ!!!!!! 零さんだけズリイぞ!!!!」

のび太「しずかちゃんまであんな感じにする必要ないじゃないですか!!!!!!」

作者「うっせ〜な〜主人公はイケメン設定なんだからしょうがないだろうが、大体お前のその顔でモテるとか想像できね〜よ」

3人「「「……(怒)」」」

作者「まあそーゆーことなんでバイバイ〜」

3人「「「あっ!!!!!! ちよつと待て!!!!!!」」」

この間3人と作者の追いかけっこが始まった。

零「…何やってんだ？アイツ等？」

出来杉「さ、さあ？（貴方が原因です…）」

N o 1 3 探索中盤…やっとな3階のシャッターを開ける（前書き）

結構飛ばします。

スイマセン…

No13探索中盤…やっと3階のシャッターを開ける

前回 ジャイアン、スネオ、のび太から嫉妬された零。

聖奈への自己紹介も終了し、また各々探索を再開することにした一行。聖奈は咲夜とせずかと一緒に行動することになった。因みに聖奈から3階の防火シャッターを開ける鍵を貰った零。

零に渡す際に顔を赤く染めながらというオマケ付きで…まあ零は全く気づかなかったが、スネオとジャイアンもそんなやり取りを見て零を物凄い顔で睨みつけていた。

零「のび太…相当なダメージだったんだな…」

今零は、絶賛のび太の看病中である。その他のメンバーは探索に戻ったが…

零「早く目え覚まさないかねえ」

タバコを吹かしながら、のび太が起きるのを待つ零。すると白峰が保健室に戻ってきた。

白峰「零さん、野比の奴目え覚ましました？」

零「いや、まだだ…まあもう少ししたら覚ますだろうよ…」

白峰「そうですか…」

しばらく2人でのび太を見てたらようやく目を覚ました。

のび太「うー……？ここは…保健室か？…あの後どうなったんだっけ…？」

零「おっ！目え覚ましたなのび太」

のび太「零さん…」

白峰「大丈夫かのび太？災難だったな」

のび太「白峰さん…ええ…でも、聖奈さんが無事でよかったです」

白峰「……聖奈、ね…俺、あいつのことあんま好きじゃないんだがね…」

のび太「えっ…?」

零「白峰君?」

白峰「いや、別に性格とかは普通だし恨みやそういうのもコレと言
っては無いんだが………まあ、優等生への嫉みみたいなもん
か…2人に言ってもしょうがない事だよなあ」

零「白峰君…」

白峰「スイマセン、聞かなかった事にして下さい」

そう言って保健室を出た白峰。

のび太「白峰さん…」

零「…のび太探索を再開するぞ、動けるか?」

のび太「え? あっ、ハイ大丈夫です」

零「さっき、聖奈ちゃんから3階の防火シャッターを開ける鍵を貰

ったからまずは、管理室に行くぞ…それとのび太に謝って置いてくれってさ」さっきは、スイマセンでした」ってな」

のび太「そうですか…解りました、行きましょう」

零とのび太は管理室にむかった。

管理室に向かった2人途中エアダクトから2体のカメラが襲い掛かって来たが、のび太はハンドガンで特に苦勞することなく倒し、零は飛び掛かって来たカメラに回し蹴りを食らわせた、カメラは壁にぶつかり、グチャッ！と嫌な音と共に絶命した。

そんなこともあったが無事管理室に入り3階のシャッターを開けた。

零「やっぱり3階から上は開かないか…」

のび太「4階の起動キーを捜す必要がありますね」

零「そうだな…まあとりあえず3階に行くか…」

2人は3階に向かおうとしたが零の携帯が鳴った、相手はしずかからだった。

しずか「零さん、私です」

零「しずかちゃんか、どうしたの？」

黒のび太「（何故僕じゃなく零さんの携帯に！？）」

またもや零に嫉妬するのび太、そんなことは知らない零はしずかと話している。

しずか「警備員のおじさんの遺体から重要そうな書類を見つけたんです。多分、裏山への扉の事についてだと思っんです。」

零「マジ！？で、内容は？」

しずか「バンツ―えっと…裏山への扉は山中での不審者目撃の報告から一般的な鍵をやめて電子ロックに変更したみたいなの。―バンツバンツ　それで…解除の仕方が―ガシャン！！！」

咲夜「入って来たわ！！！」

聖奈「しずかちゃん逃げて！！！」

しずか「ごめんなさい！また後で電話します！！！」

咲夜「急いで！―バンッ！」

零「しずかちゃん！？もしもし！！！！…切れた…」

のび太「大丈夫なんですか！？」

零「多分大丈夫だろ…しずかちゃん達を信じよう」

のび太「…解りました…」

2人はしずか達を心配しつつ探索を続ける事にした。

東校舎から3階に上がった零達いきなりゾンビが出迎えて来たが、
2人の敵では無かった。

あっという間に東校舎の敵は、殲滅した。

そのまま先に中央校舎に向かう事にした2人。

その途中の廊下…

零「んっ？此処は指導室か？鍵は…蹴破るか…」

何時ものように簡単な鍵だったのでドアを蹴破り中に入り物色し始める2人。

のび太「零さん、此処に折りたたみナイフが在るんですけど零さん使います？」

零「フーム…まっ、一応貰っとくか…」

零は折りたたみナイフを手に入れた。その後私服警官からマグナムの弾を手に入れ（銃本体はシリンドーが折れて使えなかった）指導室を後にした。

指導室を出て、中央校舎にまた向かった零達、途中6体程のゾンビに囲まれたが、零のラリアットが炸裂し6体共首から上が消し飛び絶命した。

なんだかんだあったが無事中央校舎に着いた2人。

のび太「着きましたね…まずはーッ！！！犬か！！」

零「チッ！！結構数が多いな、のび太俺は右側から片付ける、のび太は左側から回ってくれ！」

のび太「ハイ!!」

手分けして10体のケルベロスを倒す事にした2人、のび太は飛び掛かって来たケルベロスをハンドガンで冷静に頭を狙い撃つ程なくして5体のケルベロスは倒れた。

零はというと、飛び掛かってくるケルベロスにヤクザキックをかまし頭を潰したり、首根っこを掴んで窓から捨てたりと、銃は一回も使わなかった……

のび太「零さん! コッチは終わりましたよ」

零「あー! コッチも片付けたぜ、じゃっ調べますかと…」

零達は中央校舎を調べ始めた。教室中には得になにもなかったがパソコン室にて保健医の死体があり調べると小さな鍵が出て来た。

のび太「何ですかね? その鍵?」

零「さあな、まあ何かの手掛かりになるかもだから、一応取っとくけどな」

零達は後にその小さな鍵がある人物を救うのに役立つ事を知らない。

のび太「それじゃ他は特に無いようですし東校舎に戻りますか？」

零「だな」

2人は後で調べることにした東校舎に戻ることにした。
果たして東校舎には何が在るのか：

続く…

N o 1 3 探索中盤…やっと3階のシャッターを開ける（後書き）

感想お待ちします！！！！

N o 1 4 …… 遂に…… 遂に登場!!!!!! 国民的青ダヌキ!!!! とモブキャラ (前

ハイ更新!!

タイトルどおり遂にあの青ダヌキが登場です!! そしてハイパー駄
文全開ですね…ハイO R Z

No14……遂に……遂に登場!!!!!!国民的青ダヌキ!!!!とモブキャラ

前回―先に中央校舎を調べ終わり、東校舎に戻った2人

東校舎に入った零とのび太、とりあえず直ぐ近くの扉に入る。
中は…

のび太「うっ!!!こ、これは…」

零「酷いな…」

中は複数の警官の死体と緑色のゴリラのような生物の死体が複数いた。

この緑の生物に疑問に思う2人だったがとりあえず警官の死体から、かなりの弾丸を手に入れ部屋を後にする。

零「此処は、理科室か…チッ!!向こうから打ち付けられて開かないな…仕方ない…蹴破る―」

のび太「待って下さい零さん、隣の理科準備室は、開いてますよ」

零「ああそう?なら準備室から入るか…無理に蹴破る必要ないし…」

扉の破壊をやめて準備室にから入ることにした。準備室に入るとそこには…

のび太「ど…ドラえもん!!」

ドラ「のび太君!! 無事だったんだね!!…そちらは？」

零「あ、ああ俺は霧生 零ってんだよろしく! (…オイオイ!!! やっべー!! 生ドラえもんだよ!! マジか! 感激だぜ!)」

態度とは裏腹にテンションMAXな零だが…

のび太「お前は…安雄!? 安雄!! どうしたんだ!!」

安雄「の、のび太か? のび太、この学校もマジでヤバイ。早く街から出るんだ…とんでもない化け物がいるぜ。」

ドラ「喋っちゃ駄目だ! 安雄君! じっとしてるんだ!」

零「一体どうしたんだ!？」

ドラ「何か巨大な生き物に噛まれたみたいなんだオマケに衰弱の具合から毒が体に回ってるみたいだ…蛇とかそういうレベルじゃない。何だろう、一体…」

安雄「あれは地球上の生物じゃねえ…バケモンだ。お化け嫌いの僕にはゾンビなんてちびる程怖かったがもう慣れちゃった…でもあの化け物を見た時はホントに腰が抜けたよ。まるでカメレオンのように体の色を変えて襲ってくるんだ。」

のび太「カメレオン！？まさか…体育館にいた奴か！」

零「だろうな…あの野郎校内に入り込んで来たのか…」

ドラ「このままじゃ危ない。血清を打つ必要があるんだ。でも、安雄君から離れる訳にもいかないんだ。何時ゾンビが中に入ってくるか分からないし…」

零「俺が取りに行く…のび太お前は、此处でゾンビを警戒しといてくれ」

のび太「ハイ！」

ドラ「本当ですか霧生さん！？血清は多分保健室にあると思います。出来るだけ急いで下さい！安雄君の容態は一刻を、争う状況です。」

零「…分かった、ああそれと俺は零と呼んでくれ…じゃっ行ってくる！！！！安雄君待ってろよすぐに持ってくるからな」

ドラ「分かりました零さん、よろしくおねがいます」

零は急いで保健室に向かうことになった。
だが…一つ問題があった

零「…ん？カメレオンに対する血清なんて存在するのか？……ま、まあとりあえず保健室に急がないと！！！！」

変な不安に苛まれる零だがとりあえず後回しにし保健室へ向かった。

校舎の敵をほぼ一掃してた為に特に苦労する事無く保健室に到着した零中に入り血清を捜す。

零「違う！！これじゃない、これでも無い！！クソッ！！！！何処にあるんだ！！！！って考えてみりゃ小学校に血清なんてあるのか！！？」

中々見つからない為一人で愚痴る零。そこに：

金田「何か捜し物か？」

突然簀巻きにされっぱなしの金田が首だけを出して零に聞いてきた。

零「ああ！？ってアンタか…血清だよ血清！！！今急いでるからアンタに構ってる暇無いんだよ！！」

血清が見つからない為若干イラついてる零。
そんな零に金田は。

金田「まあ待て…私の話を聞け…血清ならその戸棚で見たぞ」

零「うっせーな！！だから構ってる暇は無い……………って…えっ！？マジ！？…マジだ…鍵はさっきの保健医の鍵が合うな持っというて良かった…」

金田「フフン…だから言っただろ？早く行ってやれ…急いでるんだろ？」

零「…今だけアンタに感謝するぜ…サンキュー金田さん!!」

金田「ああ…」

金田は再び首を引っ込めた。

零は準備室に急いだ、しかしそうは問屋が降ろさない。保健室を出た瞬間ゾンビの群れに出くわした。

零「クソ!!今テメェらに構ってる暇はねえんだよ!!」

零は、群れの先頭のゾンビをナイフで首を落とし倒れたそのゾンビの両足首を持ち、自分も一緒に思いきり回転した。
まあジャイアント・スイングである。

零「オラオラー!!!!!!」

周りのゾンビは死にはしなかったが、一斉に吹き飛び壁に激突した。
残りの群れは無視し、先を急いだ。

何とか準備室に着いた零

のび太「零さん!!」

零「のび太、ドラえもん、安雄君!! 持ってきたぞ」

安雄「ア…ありがとうございます。霧生さん」

零「零でいい」

ドラ「安雄君、血清を打つよもう大丈夫だからね」

ドラえもんが安雄に血清を打った。

「あの手で注射機を持てるのか?」というツツコミを心の中で思う零。

何にしても安雄の命は救われた。

安雄「零さん…ありがとうございます。それとのび太あ…僕、お前の事見直したよ。普段はどうしようもなく駄目で弱虫な癖に、侵入して来ようとしたゾンビ相手に あんな勇敢にたたかう…な…ん…て…」

のび太「安雄…安雄!?! おいっとうしたんだ安雄!!」

ドラ「…大丈夫、気を失っただけだよ。命に別状はないはず」

のび太「…よ、よかった（汗）」

零「…（あの血清で本当によかったのか？）」

ドラ「近くに相談室があったよね、そこで休ませよう」

零「いや、待ってくれ、保健室へ運ぼう。今から皆を呼ぶね」

3人で保健室に運んだあと皆を電話で呼び出した。

出来杉「ドラえもん！無事だったんだね！」

ドラ「出来杉君こそ、無事で何よりだよ」

のび太「ジャイアンとスネオは戻ってくるのに、時間がかかるってさ。ゾンビが多くて迂回してるんだって」

出来杉「しずかちゃんと聖奈さんと咲夜さんとも連絡がとれないんだ。どうしたんだろう…」

零「そういや最後に連絡があった時、何かに襲われたような感じがしたな…」

のび太「無事だといいんだけど…」

ドラ「皆大変だね…何か僕に出来ることは無いかい？」

のび太「出来れば四次元ポケットで…って…!! ドラえもん!!…!ポケットは!?!」

ドラ「…ゴメン、ママとの揉み合いの時に…」

のび太「そうだ!! ママは!?!」

ドラ「…」

のび太「…そうか…ママ…どうして…」

零「のび太…」

出来杉「のび太君…」

のび太のママの死にのび太は悲しんだ

なんとか落ち着いたのび太、すると零の携帯に電話が来た。

因みに出来杉とドラえもんはトイレにいった………ってかドラえもんって付いてるのか？

聖奈「聖奈です。零さん聞こえますか？」

零「聖奈ちゃん！？無事だったんだな！！」

聖奈「はい、私は無事なんですが…」

零「…？どうした？」

聖奈「しずかちゃんが負傷して動けない状態なんです。場所は校庭の裏庭です」

のび太「しずかちゃんが！？大丈夫なのかい！？」

聖奈「負傷と言っても足を捻挫しただけです。ですが、外はゾンビだらけで動くには危険すぎます皆さんが来るまで3人で器具庫の中に隠れています」

零「そうか…ならそのまま隠れていてくれ」

聖奈「足手まといになってしまっって申し訳ありません」

零「そんなことはないさ、俺だって同じ立場になって居るかもしれないしな…よしジャイアン達が帰ってきたらそっちに向かうように頼んどくよ」

聖奈「えっ？零さん来てくれないんですか？」

零「は？イヤ…まあ俺が行っても良いが…俺器具庫の場所なんて知らないし…ならこの学校に通ってるジャイアン達の方が抜け道とかにも詳しいだろうと思って…」

聖奈「え…ハイ…」

何故か残念そうな聖奈だった。

零「まあそういうことだからじゃあ上手く隠れてろよ？」

聖奈「…ハイ…：お願いします…：ですが、気をつけて下さい物凄いですいくつか校舎に入るかもしれないですから」

零「ああ、サンキューな！」

聖奈「では…（本当は零さんに来て貰いたかったなあ）」

電話を切る零…のび太が何故か零を睨みつけていた。零は気づかなかったが…

すると出来杉とドラえもんがトイレから戻ってきた。

出来杉「何かあったんですか？…って…のび太君？」

のび太「ハッ！僕は何を！？」

どうやら記憶に無いらしい…危ないなコイツ…それに気づいて無い零は出来杉にさっきの電話について話した。

零「咲夜さん達は無事だ。今さっき連絡があった…が、しずかちゃん
が足を怪我をして動けないらしい」

出来杉「しずかちゃんが！？助けに行かないと！」

零「行きたいのは山々なんだが、ゾンビだらけで危険らしい。皆が
集まったら助けに行こう」

出来杉「……解りましたそれまで裏庭の扉の件を片付けましょうか」

のび太「裏庭の扉…あ！！零さん！！管理室の時の電話！！」

零「分かってる、今電話する」

もう一度聖奈に連絡を入れる零。

「プル―あっ！！零さん！？聖奈です！どうしました？」

零「出るの早っ！！」

ワンコールで出た聖奈に思わず突っ込んでしまった零。

聖奈「え!?! あっ!?! いや零さんから電話が来たからつい!」

零「…俺だから?…イヤ別に、咲夜さんもしずかちゃんも居るだろうに…そんなに外ゾンビだらけなのか?」

聖奈「……………」

零「おい、どうした?」

聖奈「いえ…別に…(鈍いです…) それよりどうしました?」

零「あつ、そうそうしずかちゃんの荷物に裏の扉についての書類が無かった?」

聖奈「書類? 少し待ってください…ありました。セキュリティに関する書類です…え? しずかちゃん? なんですか?…零さんちよっと待って下さいー(何です? しずかちゃん? 電話の相手? 零さんからですけど…えっ? 私が話すからいい? いえ!! しずかちゃんは怪我しているんです、此処は私に任せて下さい! えっ? 電話するのに足の怪我は関係ない? 関係あります!! なので静かにしといてくださいゾンビにバレますーって! 咲夜さんも! 私から電話を取ろうとし

ないでください!）」

何やら電話の向こうで零に関することで問題が出たらしい。
だがそんなことを知らない零は…

零「オーイ早くしてくれ〜! どうしたんだ〜」

零が急かすと、何故か息を切らした聖奈がでた。

聖奈「ハアハア…お待たせ…しま…した…ふう〜えっとセキュリティに関する書類ですね。要点だけ伝えますと…扉は電子ロックに最近変わったらしいです。管理室内にあるパソコンに4つのパスワードを入力するらしいです」

零「パスワード? この5桁の数字が書いてある紙のことか?」

聖奈「そうみたいです…書類にも5桁の数字を書いてありますし、どうやら週ごとに数字が変わるみたいです。この書類と一緒に警備員さんの手記もありました、どうやらこの警備員の人忘れなために、パスワードをメモしてたらしいですね…メモは落としたらしいですが…」

のび太「それなら僕達が3つは手に入れたよ残りのパスワードも捜さない…」

零「だ、そうだパスコードの事は解ったありがとな！後は俺達が最後のパスコードを捜すから…3人は隠れてなよ？」

聖奈「解りました、お願いします。では」

電話を切る零。切る際にまた3人でギャーギャー言ってたような気がしたがスルーした。
それを聞いていた出来杉がとても苦い顔をしてた。

出来杉「……零さん…貴方って…まあいいか…次にやる事が決まりましたね」

零「ああ、パスコードを探して管理室の端末からロックを解除しないと」

出来杉「先程、理科室の鍵を拾ったんです。行ってみて何か無いか調べてきます」

零「分かった、後で俺達も行くからな…」

のび太「気をつけて。安雄を襲った怪物がどこかにいるかもしれないな

いからね」

出来杉「うん…2人も気をつけて」

のび太「ドラえもんは安雄を頼むよ。此処も安全じゃ無いからね…」

ドラ「のび太君…分かったよ。のび太君も気をつけて」

各々行動する目標も決まりかけてきた時、白峰が現れた。

白峰「皆、理科室から変な声が…!! 化け物!!」

白峰がドラえもんを化け物と勘違いし銃を構える。

ドラ「!!」

のび太「わー! 待ってください!! これは化け物じゃありません!!」

白峰「冗談言うな! コレのどこが化け物じゃ無いって言うんだよ!」

出来杉「落ち着いください！彼（？）はドラえもんと言って未来からきた…（…いきなりこんな事言っても信じて貰うほうが難しいよ…）」

のび太「事情はまた落ち着いたら詳しく話します！とにかく、ドラえもんは敵じゃ無いんです！！信じてください！！」

零「2人の言う通りだ、彼（？）は敵じゃない、保障する」

3人は白峰に説明した。白峰も納得したのか銃を降ろす。

白峰「…3人が敵じゃ無いって言うなら信じるしかないな…が、もし何か妙な真似をしたら遠慮なく叩き殺すからな…」

ドラ「…」

白峰の警告にドラえもんは何も答えなかった。

白峰「…で、俺は何をしに此处に？…ああそうだ！！理科室から化け物としか言いようの無い声が聞こえるんだ！！何だかヤバイ気がするが…一応中を調べてみたいんだ。誰か鍵持っていないか？」

出来杉「あ、理科室の鍵ならさっき僕が拾いました。これから調べに行こうと…」

白峰「鍵を貸してくれ。俺が見に行く」

出来杉「いえ、大丈夫ですよ。白峰さんはどこかに僕達他にも生存者がいるかもしれないので探しに…」

白峰「上に命令するとは中々…いや、んな事言ってる状況でもないな。理科室は頼んだぜ」

出来杉「はい…」

結局理科室は、出来杉が調べることになり白峰は生存者探し、のび太と零はパスコード探しになった。

続く

No14……遂に……遂に登場!!!!!!国民的青ダヌキ!!!!とモブキャラ（後妻

ポケットの無いドラえもんって例えるなら

「ポケットの無い青ダヌキは、只の青ダヌキだ（紅の豚風）」ですよね（笑）

感想お待ちしております。

No15 2ndバトル!!のび太VSバイオゲラス! (前書き)

とりあえず原作どうりに進めます…ハイ

感想お待ちします。

あつ!後書きに軽い小話?的な物を書きました良かったら見てくだ
さい!

No15 2ndバトル!! のび太VSバイオゲラス!

前回 零とのび太は、残り1つのパスコードを探すことになった。

残りのパスコードを探す為、とりあえず3階に戻る事にした2人。
だが2階に上がった時に事件が起こった。

ピロピロピロ

のび太の携帯が鳴った相手は出来杉だ。

のび太は出るが出来杉は何も喋ってはこない変わりに聞こえのは、
銃声だった。

バンッバンッ!!!

のび太「出来杉君!!! どうしたんだ!」

出来杉「の…び…た君…ぜ…零…さん…理科室…何か…い…る…!
ーバンッ!」

零「オイ! どうした! 良く聞こえないぞ!」

「バンッ！バンッ！バンッ！―グオアアア！―グシャッ―ワアアアアア！！」

のび太「出来杉君！？おいっ どうしたんだ！？出来杉！！」

零「マズイ！理科室で何かあったんだ！行くぞ！！」

のび太「わかりました！！」

零とのび太は理科室に向かって走り出した！！

理科室の準備室に着いた2人中には血まみれで床に横たわる出来杉がいた

のび太「で…出来杉…？」

零「ま…まさか…？」

最悪の出来事が2人の脳内を駆け巡る…が

出来杉「ああ…く…のび太君…に…零さんか…」

のび太「!!大丈夫なのか出来杉君!!」

出来杉「なんとか…しかし…中に…大きな…怪物が…」

零「怪物?チィ!まさか、あの野郎…理科室に移動してやがったのか!!」

出来杉「気をつけて2人共…とんでもない強さだ…銃を…何発か撃ち込んだけど…まったく…」

零「もう喋るな!!急いで皆の所に運ばないと!!」

すると、のび太の携帯にジャイアンから電話がきた。

ジャイ「のび太、まだ生きてるか?もうすぐ学校に着くぜ。だがこれ以上物品は取りに行けそうないな、ゾンビが殖えまくってる」

のび太「ジャイアン!学校に着いたらすぐに理科準備室に来てくれ!!出来杉君が怪物にやられてしまった!!」

ジャイ「出来杉が！？何があった！？」

零「さっき話したカメレオンの怪物だ！理科室に移動してたらしいんだ」

のび太「これから僕等でなんとかしてみる！！」

ジャイ「待てよ2人共！何とかするってどうする気なんだ！ーオイ」

のび太は電話を切った。

のび太「ジャイアン達まで危険に晒せない…僕が何とかしないと…！」

零「ああ…だが体育館みたいには行かないぞ場所が狭いから、上手く動けないしな」

2人は覚悟を決めたその時、白峰が来た。

白峰「な、何だこれは！？野比！こいつ…死んだのか…？」

のび太「白峰さん！丁度良かった！出来杉君を保健室へ運んでくだ

さい、これから僕達が理科室の怪物を何とかします!!」

白峰「ちょっと待て! 一人じゃ無理だ!! 見た感じ余り無理に動かせるのは危険だ!」

零「……仕方ない俺と2人で運ぼう…のび太そこで待ってろ! 出来杉君を運んだらすぐに戻る。よし運ぶぞ白峰君」

白峰「わかりました! …オイのび太絶対戻って来るまでそこにいろよ! いいか!? 一人で無茶しようとするなよ!!」

零と白峰は出来杉を保健室に運んでいった。

のび太SIDE

待ってろと言われたのび太だが、居ても立ってもいられず2人の言い付けを破り理科室に入ってしまう。

―理科室内―

のび太「……」

神経を張り詰め気配を探ると背後からバイオゲラスの舌が槍状になってのび太に襲い掛かった。

バキィ！！

貫通する壁

のび太「っ！？」

それと共にバイオゲラスが姿を現す。

「ゲオアアア！！！！」

のび太「やっぱりこいつか！！こ、今度は逃げないぞ！！」

今、のび太VSバイオゲラスの戦いが始まる。

開始早々バイオゲラスが姿を消す。のび太はそれに冷静に分析する。

のび太「こいつには姿を消す能力がある…姿が見えてるときがチャ

ンスのはずだ!」

ショットガンを装備するのび太。まず姿を消している時に逃げ回るのがび太、次第に姿を見せるバイオゲラスをすかさずのび太はショットガンを撃つ、という繰り返しだ、だがバイオゲラスには殆どきいてなかった。やがて…

のび太「くそう、全然歯が立たない…なんて生命力だ。」

その一瞬のスキにバイオゲラスの舌がのび太に炸裂する。舌の攻撃に当たったのび太は後ろに吹き飛び教卓に思いきりぶつかる。

のび太「うわあ!!」

のび太は動けなくなりその場に倒れ混む。のび太の目の前が暗くなっていく。

のび太「ああ…まずい…目の前が…やっぱり僕なんかじゃ…無理だったか…ドラえもん…パパ…ママ……………零さん」

のび太の意識はそこで閉じた…だがバイオゲラスは何を思ったか、のび太を食い殺さずに、窓を突き破って外に出てっていった。少しして…

のび太「うう…う…」

意識を取り戻したのび太直ぐに辺りを見渡すが…

のび太「あ…あれ…?…?…助かったのか…?」

助かった、のび太だが…相当なダメージは体に残った。とりあえずボロボロになった体で、理科室を物色する。
教卓の上にパスコードの紙と警官の死体から防火シャッターの鍵を手に入れたのび太、他には得に無かったので、保健室に戻ることにした。

のび太SIDE終了

保健室に戻ったのび太中には白峰と零とドラえもん以外にジャイア
ンとスネオが戻ってきたようだ。

のび太を見た瞬間大騒ぎになったが。
直ぐさまドラえもんが、のび太の手当を始めた…

ドラ「…うん、これで大丈夫だよ」

のび太「ありがとうドラえもん。」

ジャイ「まったく、のび太の癖になに考えてるんだ!」

のび太「ゴメン…でも、これで奴は学校の外へ行ってしまったから大丈夫だと思うよ。これで校内も大分安全に…」

そう言ったのび太に白峰がのび太に怒りを表にしながらビンタをします。

白峰「ふざけるな馬鹿野郎！！誰もお前一人で怪物退治をやれなんて言っていないんだよ！！その怪我だって自業自得だ！！俺と零さんと一緒に戦ってたら確実に怪我なんかしなかったんだ！！」

スネオ「し、白峰さん…」

白峰「いいか！！今大事なのは皆で協力して生き延びる事だ！！一人で負いすぎたり、単独でカッコつけるような真似は2度とするなよ！！」

零「…」

のび太「…はい…」

白峰がのび太に怒る皆のび太に同じことを言いたかったのか何も言わないするとドラえもんが空気を変えようと口を開く

ドラ「でも、のび太君のお陰で校内の安全は少しは確保できたようだよ。今のうちに脱出する準備を進めよう」

ジャイ「そうだな。まず聖奈さん達を助けに行かないと。零さんに言われた通り俺とスネオで言ってくる。警察署で良いものを見つけただ俺達だけで大丈夫だ4人は出来杉と安雄を見ていてくれ」

零「解った…3人のこと頼むぞ」

のび太「うん…」

ジャイ「のび太、お前は怪我してるんだ。絶対無茶な事をするなよ」

のび太「分かってるよ…」

そう言いジャイアンとスネオは咲夜達を救助しに行った。

しばらく保健室で休むのび太達だが。

のび太「…駄目だ、じっとしてられない…さっきシャッターの鍵を手に入れたんだきつと4階に何か手掛かりがあるはずなんだ。きつ

と…」

のび太の眩きに零も思ったのかのび太に言う。

零「のび太…仕方ないな行くか！」

のび太「零さん…ハイ!!」

ドラ「のび太君…止めても行くんだろう?分かってるよ。でも、絶対一人だけで何とかしようと考えないでくれよ。君がいなくなったらセワシ君も…」

のび太「分かってるよ…ドラえもん…ありがとう」

零「心配するなよドラえもん俺も付いて行くから無茶はさせないさ」

ドラ「零さん…のび太のこと宜しくお願いします」

零「任せときな」

零は笑いながら言う。出来杉ものび太に声をかける。

出来杉「のび太君…気をつけてね…僕の怪我也…見た目ほど…酷く無いんだ…もう少し休めば…大丈夫だから…」

のび太「出来杉君…」

零「よし、じゃ行くぞのび太」

のび太「はい」

零とのび太は、再び探索に戻った。

続く

No15 2ndバトル!!のび太VSバイオゲラス! (後書き)

注意!!! このやり取りは本編に何の関係もございません!!

黒のび太「アノ クソ カメレオンガ!!! ヨーシ コイツ デ
バラバラ ニシテヤンヨ」

ガシャン↑マシンガンブレード装備(ゼクトルーパー専用武器)

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ!

バイオゲラス

「ギャアアオ!!!」

黒のび太「クヒヤヒヤ!!!! シネーシネー!!!! ヒヤヒヤヒヤ!
」

バイオゲラスだった物

「……………」

しずか「ね、ねえ零さんのび太さんが怖いわ／／／ギユツ (零に

N o 1 6 原作やって気づいたけど4階って重要アイテム無くな？（前書き）

そろそろ学校探索編は終了ですね…ながかったな…

No16 原作やって気づいたけど4階って重要アイテム無くてね？

前回―無茶をして白峰にひっぱたかれるのび太…

保健室を出て、管理室に向かい4階のシャッターを開け4階に向かった2人因みに1～3階の校舎は、零とのび太（特に零）が全滅させたためゾンビ等は居ない。4階は、西と東が別れているので、まず西から調べることにした。

零「何もねーな…あるのは…死体が2つか…」

のび太「零さん 此処に二つロッカーがありますね調べますか？」

零「まあ…何かあるかも知れないし…調べるか」

左のロッカーを物色する零…だが既に破壊した生徒指導室の鍵だった。

零「チッ！既に破壊したドアの鍵なんざいらねえよ…」

零は鍵をその場で捨て戻ろうとした…その時！！

ガタン！！ドサッ！！

のび太・零

「うわ!!」

なんとロッカーから死体が出て来たのだ!!! しかも腐敗が進んだ…

のび太「うっぷ…」

零「か、かなり腐敗が進んでるな…死後2週間ぐらいか？」

のび太「こ、これって学校で殺人事件でも…？」

零「まさか…（いや、もしかして…）」

零は、もしかして…って考えがあったが…忘れることにした。

のび太「行きましょう…何もないようですし…」

零「…だな」

2人は4階東に向かうことにした。
…が

「ううう」

零・のび太

「ーッ!!!!」

腐敗した死体とさっきの2体の死体がゾンビ化して襲い掛かってきた。

零「ああもう面倒な…のび太お前腐敗ゾンビ頼むわ」

のび太「はい」

のび太は直ぐにハンドガンで復活した腐敗ゾンビを黄泉に返す。

零は、速攻で手前のゾンビに接近し足払いをして転ばす。

その後直ぐにそのゾンビの頭に踵落としの要領で頭を潰す（PS2の仮面ライダーカブトに出るダークカブトのライダーキックみたいな感じ）

残りのゾンビも延髄蹴りをかまし首をへし折り倒した。

……あれ？零って銃いるかな？by作者

零「…何か聞こえたような…まあいいや…のび太終わったぞ」

のび太「僕も終わりましたよ…何時見ても零さんスゴイですね…」

零「…まあ…ゾンビだし？早く行こうぜ？」

のび太「…ゾンビって問題じゃ…まあいいか…」

零とのび太は一度3階に戻り東側の階段を上り4階東側に着いた。

此処もレッドハープを見つけただけで特に何も無かったが…

東校舎に繋がるであろう通路があったので進2人

しかし…

零「あそこに人を食ってるゾンビが居るぞ…のび太…遣れるか？」

のび太「ハイ、任せてください！！」

のび太はハンドガンを構え照準を頭に合わせ撃つ。ゾンビは頭を撃ち抜かれ一撃で倒れる。

死んだことを確認する為ゾンビに近づく2人。

のび太「…この子よく見たら隣のクラスの子だ！！」

零「な！！本当か！？」

のび太「は、はい…こんな事する奴じゃ無かったのに…しかもあの死んでる2人…ま、まさか…間違いない…仲が良かった同級生の男の子です…そんな…どうして…」

零「のび太…」

零はそんなのび太に気休めの声をかけるしか出来なかった。

のび太「この子は…あまり好きではなかった同級生の女の子です…意地悪な娘だったけど…いつか仇は取ってやるからね…」

零「…のび太此処から先は、バリケードが張られて行けそうもない…戻るぞ…」

のび太「…はい…」

2人は戻ることにした。

戻る途中ドラえもんから、のび太に電話が繋がってきた。

のび太「もしもし？」

ドラ「のび太君かい？今大丈夫かな？零さん聞こえる？」

のび太「大丈夫だよ？どうしたの？」

零「ああ、聞こえるぞ」

ドラ「今、出来杉君の携帯を借りているんだ。それはいいとして…ジャイアンが咲夜さんと聖奈さんとしずかちゃんを助けただよ。それに、安雄君の意識も戻ったよ。出来杉君も少し無理してるけど歩けるようだ。」

のび太「本当！？よかった〜」

零「ああ！やったな！のび太！」

のび太「ハイ！」

ドラ「それで、帰る途中セキュリティの解除コードと思われる数字の書かれたメモを見つけたんだって。2人共、4階の探索が終わり次第保健室に戻ってきてくれ。」

零「分かった。パスコードは3つ見つけてあるから直ぐ戻る」

ドラ「ジャイアン達は、しずかちゃんの応急処置が済み次第戻って来るらしいから、まだ時間がかかりそうなんだ。余り急いで戻って来なくても良いから大丈夫だよ。それじゃ」

ドラえもんとの電話を終えたのび太、2人は保健室に戻っていった。

保健室に戻ると皆揃っていた。因みに金田は聖奈を見た瞬間「新しい女子じゃー」といい襲い掛かった：が零のムーンサルト・ドロップをくらい気絶させられた。聖奈はビックリしてどさくさに紛れて零に抱き着た。

その際に、咲夜としずかは聖奈をジャイアンとスネオは、零を睨みつけていた。

ついでに言うところの零という男、仮にも聖奈という異性から抱き着かれたのにも関わらず、5歳ぐらい年下だったのか、何も感じなかった。

零「しかし、3人共無事でよかったな」

しずか「心配かけてごめんなさい（怒）（聖奈を睨みながら）」

咲夜「ええ、なんとかなったわ（怒）（聖奈を睨みながら）」

聖奈「は、ハイ／／（わ、私はどさくさに紛れて零さんに／／／／」

聖奈の様子がおかしい事に気づいた零。
だがこのお馬鹿は…

零「…あゝ聖奈ちゃん？そのゝ悪い…金田さんを撃退するとはいえビックリさせちゃって………しかも抱き着き付いた相手が俺で…スンマセン…」

聖奈「あ、いや！違いますよ！？ボソツ（むしろよかった／／／／」

零「…いや…そうゆうのは…好きな奴のほうが良かったんじゃないの？」

聖奈「ちょっと待ってください！！私好きな人なんていませんよ！？（こ、この人は…鈍いを通り越してます…）」

咲夜「……フッフ（甘いわね……）」

しずか「……フフン（今回は零さんが鈍くて助かったわ）」

ジャイ・スネオ

「死ねっ！！零、死ねっ！！」

黒のび太「零……このタラシが……！」

ドラ「の、のび太君!？」

出来杉「ア、アハハハハ（汗）」

咲夜としずかは、何故か勝ち誇ったような笑みを浮かべ、ジャイア
ンとスネオとのび太は、毎度のことながら零に嫉妬全開だ。

ドラえもんは、黒いオーラを出してぶつぶつ言っているのび太に戸
惑い、出来杉は、冷や汗を出しながら苦笑いを浮かべていた。

色々あったが出来杉が皆を落ち着かせて話しを進めた。……出来杉
は苦劳キヤラ確定だな！by作者

ジャイ「よし皆集まったし…話しを進めるぞ（怒）（零を睨みながら）」

零「（…何だってんだよ…）」

安雄「あれ？6年生の奴とスネオはどうしたんだ？」

ドラ「校内に生存者が残っていないか一回りしてもらってるんだ。すぐに戻ってくると思うよ？」

のび太「そうだったんだ」

安雄の疑問に答えていると聖奈が突然口を開いた

聖奈「あの…一つよろしいですか？」

零「ん？」

聖奈「えと…この青い方は…中に誰か入っているのですか？」

ドラ「………！」

ジャイ「ああそうか、聖奈さんだけドラえもんに会った事ないんだよな。コイツはドラえもん。まあ、色々あつてのび太のお守りをしているロボットだ」

聖奈「ロ、ロボット!?!」

零「（まあ、普通ならそうゆうリアクションだよな…）」

出来杉「22世紀から来た猫型ロボットさ。現代の化学力じゃ考えられない事だよ」

聖奈「ね、猫…型?…どこにも…耳なんて…」

のび太「わー!?!?!それは言っちゃ駄目!?!?!」

ブラック・どらえもん

「……………」

聖奈「え!?!?ご、ごめんなさい!?!」

ドラ「いいよ……ハハハ……気にしてなんかいないさ……」

ちよっぴり哀愁を漂わせながら答えるドラえもん更にのび太が軽く
追い討ちをかける：

のび太「とりあえず、ドラえもんは僕達の仲間だ。ちよっと抜けて
る所もあるけど頼りになる存在さ」

ドラ「のび太君に言われたくないけど…よろしくね、聖奈さん」

聖奈「よ…よろしくお願いします。（結局、中の人はいないってこ
となの？…あまりにも非現実的な事が多過ぎて混乱してきたわ…）」

言葉とは裏腹に混乱しまくりの聖奈だった。すると見張りをしたた
スネオが血相かえて保健室に入って来た。

スネオ「ジャイアン！皆！マズイ事になったよ！！」

ジャイ「何だよスネオ！？何があったんだよ！？」

スネオ「凄まじい数のゾンビがこっちに向かって来てる！！4階の
窓から見たんだ！！5分もしないうちに校門に到達する！！」

全員

「!!!!!!!!!!!!!!」

しずか「そんな…」

安雄「マジか!？」

スネオ「それだけじゃない!!裏庭にでっかいカメレオンみたいな奴がいる!!今、白峰さんが監視してるけど動く気配がないんだ!!あいつ、居座るつもりだよ!!」

出来杉「あいつか!？」

のび太「なんて事だ!!逃げ場が無いじゃないか!」

零「皆落ち着け!こうなったら手分けして時間を稼ぐぞ!!まず、女の子はジャイアン達が持ってきた物を運び出せるように適当なバッグやらカバンに詰めておいてくれ!!」

聖奈「わかりました」

しずか「はい!」

咲夜「ええ…任せといて」

零「出来杉君と安雄君はパスコードを持って電子ロックを何とかしてくれ!!」

出来杉「わかりました!!! やってみなす」

安雄「出来杉一人で全部出来そうな気がするけどな…」

零「で、残った物で裏口の確保とゾンビを可能な限り食い止める!!」

ジャイ「よし!! なら俺様はゾンビを食い止める!」

スネオ「僕はジャイアンと一緒に行くよ」

ドラ「じゃあ僕はのび太君と行こう」

零「どうするのび太? お前はどっちにする?」

のび太「…僕はそろそろあのカメレオンと決着を付けたいです!」

零「フツ…そう言うと思ったぜ!! 分かった任せるぞ! 俺は表のゾ
ンビの数を減らし次第お前の加勢に行くからな!!」

のび太「解りました!!」

零「死ぬなよ…のび太…」

のび太「零さんもね!」

2人は笑いながら言い合う。

役割は決まった…イザ! 開戦!!

続く

N o 1 6 原作やって気づいたけど4階って重要アイテム無くなね？（後書き）

感想お待ちします！！

No17 のび太VSバイオゲラスのラストバトル!!!そして零遂に覚醒!!!

零の能力が覚醒します…結構無理矢理感が半端ないですけど…ハイ

作者「そして最初に言っておく!!!!俺は、かなりり!!!!安雄が嫌いだ!!!!」

安雄「はっ?何言ってるんだ?」

零「…(安雄君…お気の毒に…)」

意味は本文で解ります!

No17 のび太VSバイオゲラスのラストバトル!!!そして零遂に覚醒!!!

前回―校門から大量のゾンビそして裏口にはカメレオン皆で手分けして戦うことした。

零SIDE

チッ!!ザッと100体はいるな…まあ腹も減って無いしジャイアン達も援護してくれるから大丈夫だろ…

ジャイ「零さん!!!来たぞ!!!」

零「ああ!!!!2人共援護頼むぞ!!!!」

スネオ「任せておいてよ!!!!」

校門からゾンビが来たさあ開戦だ!!!!

零「ウラァアアアア!!!!」

まず手前の奴等をショットガンで一気に片付ける撃ち漏らしはジャ

イアン達に任せるって作戦だ。

ガガガガガガ！！！！！

ドンッドンッドンッ！！！！ドカーン！！！！

クソッ！！！！まだこれでも50体程残ってやがるな…

弾も、もうないし…仕方ねえ素手だ！！！！

零「ジャイアン！！！！スネオ！！！！！！俺は今から素手で戦う！！！！
くれぐれも俺を撃つなよ！！！！」

ジャイ「お、オイ！！！！素手って正気か！？」

スネオ「無茶だよ！！！！死んじやうよ！！！！」

零「ハッ！！！！俺は銃より素手のツエーんだよ！！！！とにかく任せた
！！！！！！！！」

俺はゾンビの群れに突っ込んだ。後ろで何か言ってる気がするが無視した

零「ハアアアア！！！！！！！！！！」

ドカツ！！！！バキィ！！！！ズガツ！！！！ベキィ！！！！ボキツ！！！！

アッパー、ハイキック、ジャイアント・スイング一本背負い、ヤクザキックなど俺の力をフルに使う……だが何故だ？体が軽い……しかも力が沸いて来る……何故だ？俺はこの力を知っている……そう……思い出した！俺は……俺は！！異常者だ！昔、親に捨てられどっかの研究機関に5歳の頃まで実験台にされたんだった！確か……俺の被験体名は……そうだ！！

俺は声に出して言う……

零「俺は！！俺は！！！！異常者だ！！！！アブノーマルフリート異常完全それが俺の能力だ
あ！！！！！！」

幼少の頃の記憶が戻った零そして能力に関する記憶も戻る、これが
零の能力、完全である……コンフリート

ジャイ「ぜ、零さん！？な、何言ってるんだ！？」

スネオ「なんだよ！！異常者だの完全だのどうしたんだよ！！零さん！！」

零「……漸く全ての記憶が戻った……そうか……あの頭の痛みは……これ

だったのか…ジャイアン!!! スネオ!!! 俺は大丈夫だ! 心配かけて悪かったな!!! 後は俺があゝのゾンビ共を片付ける……全てなあ!」

そういつた俺は一瞬でゾンビの群れに突っ込んだ身体が軽い…力がみなぎる!!!

「ハッ!!!」

俺は15?は飛んだ、これが俺の完全の能力、その1身体能力の完全化、俺の身体能力は完全に強化する…そしてそのまま地面へ思い切り蹴りを入れた…

ドカーーーン!!!!!!

俺を中心に、地面にはクレータが出来た…ゾンビ共はほぼ壊滅した、これで終わりだ…疲れたな…いや!!! まだだ!!! のび太を助けに行かないと!!!

零SIDE終了

とりあえず零の能力が覚醒したお陰で、校庭のゾンビは壊滅した。

零「ふう〜!! やべえな久しぶりに使ったから身体がキツイな…だが! のび太を助けないとな」

零はのび太のいる裏口に向かった。道中ジャイアンとスネオに質問攻めにあつたが…

ジャイ「スッゲーよ!! 零さん!!!! 映画みたいでカッコ良かったよ!!」

スネオ「でも、何なの? さっきの異常者だの完全って」

零「えっ? ああ、まあとりあえず落ち着いたら話すよ全部ね…」

ジャイ「零さん…」

スネオ「…」

道中そんなやり取りもあったが、とりあえず裏口に急いだ3人だった。

やがて裏口に着きドアの先で誰かが「くらいやがれ!」と誰かが言っていたが急いでた零はドアを蹴り飛ばす。その際ドアの先で「ぐげ

え」と言ってた気がするが気にしないことにした…

のび太SIDE

時は少し戻り…のび太は裏口でバイオガラスと対峙した。

のび太「今度こそやってやる!! お前なんかにもう負けたりしないぞ!」

グルルル

ドラ「のび太君!! 犬だ! 犬が近くにいる!!」

のび太「!」

ドラ「僕はどっちかを集中的に狙うよ! どっちをやればいい!？」

のび太「なら、ドラえもんは犬を頼む!!!!」

ドラ「犬だね！僕に任せてよ！！」

ドラえもんは犬を任せてのび太はバイオゲラスを狙う作戦でいくことにした。

白峰「俺も犬を狙う！！犬のほうが多い！！…のび太気をつけろよ！！」

のび太「わかりました！！！！——コイツ！！！！決着を着けてやる！！」

遂にバイオゲラスとのび太の最後の戦いが始まった…作戦は理科室の時と同じだ。ドラえもんは白峰はのび太に襲い掛かるケルベロスを始末する。

ドカッ！！ドカッ！！ドカッ！！バンッ！！バンッ！！バンッ！！

大量の弾をバイオゲラスにヒットさせたのび太！！遂にバイオゲラスを追い詰めた！！

「グルオオオ」

のび太「もう一息だ！覚悟しろ！！化け物め！！」

追い詰めた…までは良かったのび太だが。

「グルアア!!」

バイオガラスの舌の攻撃が炸裂! しかも銃を落としたもや形成逆転か?と思われたその時だった。

??? 「うおおおおおおおおお!!!!」

誰かの雄叫びと共にドアを破壊してそいつは現れた…

ドカツ!!!!

のび太「…安雄!？」

まあ原作を知っている人ならご存知の筈だ。

この後安雄がグレネードランチャーをバイオガラスに乱射して、バイオガラスを倒すのだが………だが!! 前書きにも書いた通り作者は、この時の安雄の横取りっぷりが大嫌いなのだ!!!!なので…

安雄「喰らいイイイーやがー」

??? 「っしゃー!?!?!」

安雄 「ぐげえ!?!」

更に安雄の背後のドアが何物かに破壊される。

反応が遅れた安雄は扉の下敷きになる。これを行った人物は…読者ならお気づきでしょう。

零 「ダッシャアアー! のび太あ!! 助けにきたぜ!?!」

のび太 「ぜ、零さん!?!」

そう完全の力の使い方を思い出し、若干おかしなテンションの零である。そのまま零は、下敷きになってる安雄に気づかず踏み付けバ
イオゲラスの横っ腹に全力の蹴りを放つ

零 「オラァ!?!」

バイオゲラス

「グウエエエ!?!」

バイオゲラスは奇声をあげながら近くのコンクリートの壁に激突する。

その様をボー然と見るドラえもと白峰…

零「よしっ！！今だ！！のび太！！とどめをーってん？これは？な
んでここに？まあいいや…のび太コイツを使え！！」

零は、近くに落ちてた安雄のグレネードランチャーをのび太に投げた。

のび太も、零の行動に引きつつも今はバイオゲラスを何とかしなければと思いグレネードランチャーを拾いぶっ倒れているバイオゲラスに狙いを定め……

のび太「これで！！！！終わりだああ！！！！」

ズガン！！ズガン！！ズガン！！

バイオゲラス

「グギャアアア！！！！！！」

ボンッ！！！！！！

バイオゲラスの首から上は吹っ飛び今度こそそのび太はバイオゲラス

に勝った。

のび太「やった……やったぞおおお……!!!!!! 零さん……!! やり
ました……!!」

零「ああ……!! やったな……!! のび太……!!」

のび太はめっちゃ喜びながら零に言う、零もののび太に微笑みながら
答えたのだった。

のび太SIDE終了

2人で喜んでいると、皆がやってきた。

ジャイ「スゲーなのび太! あんな怪物倒すなんて!」

のび太「いやあ……零さんが助けてくれたお陰だよ」

零「フツ……謙遜するなよのび太、実際追い詰めたのはお前だろ?」

スネオ「お前の方が、よっぽど怪物だよ」

のび太「へへ、これで漸く借りが返せたよ」

安雄「……」

出来杉「スゴイよ、のび太君！！本当に君には参ったよ！！」

しずか「凄いわ、のび太さんかっこいいわ！（零さんの次の次ぐらい）」

聖奈「凄いですねのび太君。出来杉君を襲った相手を…カッコイイです（零さんの次の次ぐらい…）」

咲夜「本当よカッコイイわよ？のび太君（零君の次の次ぐらいだけど…）」

ドラ・白峰

「（皆、安雄を忘れてる…）」

出来杉「ところで、安雄君を見なかったかい？突然飛び出していったんだけど…」

白峰・ドラえもん以外

「さあ？」

ジャイ「まったく皆頑張ってるのに何やってんだ？アイツは」

スネオ「トイレにでも逃げたんじゃないか？アイツ怖がりだし」

しずか「皆頑張ってるのに…酷いわ…」

随分な言われような安雄である（笑）

すると白峰とドラえもんが口を開いた…

白峰「あ、あのよう」

ドラ「安雄君…その扉に下敷きに、なってるんだけど…」

一同

「はっ!？」

安雄「……」

のび太「……あっ!？」

のび太も思い出したようである。
だがそんなことは知らない他の人は安雄を非難する。

ジャイ「なくにやってんだ!？ 安雄!！」

スネオ「大方、のび太の手柄でも横取りしようとしたんじゃないか?」

出来杉「…酷いよ、何も言わずに勝手に飛び出して…」

しずか「…安雄さんサイテー」

各々勝手に安雄を非難し始めた。

ドラ「いや、安雄君が扉から出て来た後に零さんが扉を吹っ飛ばしたのが原因なんだけど…」

のび太「うん…その吹っ飛んだ扉の下敷きになったんだよ…」

零「えっ？嘘？マジ？俺のせい？ヤッベ…安雄君スイマセンー！！」

安雄「いや、別に大丈夫です…」

スネオ「零さんが謝る必要ないよ！零さんゾンビ100体倒した後だったし…悪いのは勝手な行動した安雄だよ！やす お！！」

一同

「100体！？」

一同零のゾンビ100体倒しに驚く。

ジャイ「そうそう！！！！あの時の零さんかつこよかったぜ！！しかもその後、のび太を助けにいったんだぜ？そんな零さんを邪魔した安雄がいけないんだ！」

出来杉「嘘っ！100体もゾンビ倒したんですか！？…まあ仕方ないですね…のび太君を助ける為だったんだし…」

ドラ「…まあ100体も倒してその上のび太君を助ける為にしてくれた行動だし…しょうがないよね」

白峰「…だな」

唯一安雄の味方になってくれるであろう出来杉にすら見捨てられる安雄。

聖奈「零さんの戦ってるところ見たかったな／＼／＼」

しずか「私もです／＼／」

咲夜「できれば写真かビデオに納めたかったね／＼／」

聖奈・しずか

「うん！それ良い／＼／」

女子3人は零の勇姿を聞いて安雄をほったらかしにしてガールズ・トークを始める。

零「…良いのか？」

黒のび太「良いんじゃないんですか？…何か知りませんが…別の世界じゃ僕じゃなくて、安雄が持て囃されてる気がするんですね…」

零「は、はあ？」

安雄「…いつそ殺せ…」

のび太は、謎の電波を受信し、零は何と無く皆の流れに流され、安雄は自暴自棄になるのだった…

続く

オマケ

白峰「なんでもいいけど早く行こうぜ。モタモタしてるとまた化物が来るぞ」

のび太「出来杉君がロックを解除した！さあ、皆いこう！！」

零「よしっ！」

ジャイ「おう！」

スネオ「ああ！」

しずか「ええ!!」

聖奈「はい!」

咲夜「わかったわ!!」

ドラ「のび太君、立派になって…ウツ」

零「ドラえもん泣くなよ…ホラッ! ハンカチ」

ドラ「ありがと…零さん」

安雄「……………おー」

安雄の立場がぶち壊しのくだり。

終われや

No17 のび太VSバイオゲラスのラストバトル!!!そして零遂に覚醒!!!

注意…後半から目茶苦茶になります!!そしていつもの様に本編には、何の関係もありません!!!

安雄「オイィ!!!!作者!!!!なんだよ!!!この扱いは!!!」

作者「あゝ?だから前書きにも言っただろうが!!俺はのび太の手柄を横取りしたお前が大嫌いなんだよ!!うぜえ!!」

安雄「なっ!?!全国の安雄ファンに謝れ!!」

作者「ククク…モブのテメェにファンなんぞ居るわけねえだろうが…」

安雄「黙れ!!!!居るはずだ!!!!」

作者「チッ!!!!お前顔もだが存在自体うざくなってきたな……もういい消えろ……来いコーカサスゼクター……」

安雄「はっ!?!なんでお前が持ってんだ!?!」

作者「…変身」

《Henshin》

《Change Beetle》

作者「はいそうゆうことなんで…消えてくださーい」

安雄「ふ、ふざけるな！消えてたまるかー！！」

逃げる安雄だが…

作者「…ハイパークロックアップ」

《Hyper Clock Up》

ハイパークロックアップを発動してまったく動かない安雄に近づき…

作者「散れ…」

ハイパーゼクターのゼクターホンを倒し…

《Maximum Rider Power》

作者「ライダー…キック」

ハイパーゼクターから供給されるマキシマムライダーパワーをコーカサスの三本角に集めそして…

作者「うらああ!!」

安雄「くうわばあら!!」

安雄は粉々になった…

No18 零の正体（前書き）

本当は、次ぐらいに零の正体的な話にするつもりでしたが急遽変更しました！！！

えーっとまず今回の話はご都合主義全開に加えてWJに掲載されている異常者のバトル漫画に出て来る能力が出てきますが

零がいた世界はその世界では無く、あくまで似たような世界という設定ですので、あしからず。

それではどうぞ…

No18 零の正体

前回 見事バイオゲラスとの決着を着けたのび太安雄は単なるヤラレキャラと化した。

裏口から裏山へ繋がる扉を開けて裏山に向かう一同。

のび太「ここは確か、学校行事で裏山を登山したりする時に使う登山ルートだったな。土砂崩れがあって立入禁止になっていたが……ちよっと進んでーあ……?」

突然倒れ込むのび太。

零「のび太!?!」

白峰「野比!?!」

聖奈「のび太君!?!」

スネオ「のび太!?!」

ジャイ「大丈夫かのび太！？どうしたんだ！？」

ドラ「…貧血みたいだね。元々体が強い方じゃなかったし…」

出来杉「よかった、何か厄介な病にでもかかったと思ったよ…」

白峰「どうする？此処で休ませるか？金田さんと太郎も動けないしこれ以上動けなくなった奴を動かすのは無理だぞ。」

安雄「…：大分登ったけど…：まだなのか？俺もちよつと疲れてきた…（チッ！！のび太の奴…俺を差し置いて、でしゃばるからだ…）」

出来杉「僕ちよつと足が…」

スネオ「僕も喉渴いてきて…：そろそろ休まないかい？」

ジャイ「皆だらしねえぞ！！：零さんと聖奈さんと咲夜さんを見習え！！：特に零さんなんか、金田さんと太郎を担ぎながら登ってんだぞ！！！！」

聖奈「私は元々運動部でしたし、皆さんほど走り回ってませんから大丈夫です」

咲夜「私は、一応皆より年上だしね」

零「俺はまあ、異常者だしな…」

ドラ「無理はできないよ、ここで少し休もう」

ジャイ「ったく、しょうがねえなあ」

スネオ「そういえば零さん、さっきの話なんだけどさ…異常者とか完全ってなんなの？」

出来杉「異常者？完全？何のことだい？スネオ君？」

スネオ「いや…零さんがゾンビと闘ってる時…自分のことをそう言ってたから」

ジャイ「そういえば…記憶が戻ったっていったな…」

ドラ「どういうこと？零さん」

零「…そうだな…ドラえもんが居るし…言っておくか…」

ドラ「?」

零「まず始めに…俺はこの世界の人間じゃない…」

一同

「!?!?!?!?!」

ドラ「この世界の人間じゃない!?!? ということ!?!?」

出来杉「まさか…ドラえもんみたいに未来から?」

零「いや…違うな…うゝんなんて言うか…異世界? から来たんだと思うよ」

スネオ「異世界?」

零「そうだ…」

零は語り始めた。自分が家に帰る途中に謎の光に包まれてこの世界に来了こと。

ドラえもん達はアニメや漫画の登場人物だってこと。

自分が記憶を失ってた事。その記憶が蘇り自分が異常者だった事を思い出した事。

出来杉「…信じられないな…」

スネオ「…うん、まさか僕達が零さんの世界ではアニメの登場人物なんて…」

ドラ「何より、異世界から来たってのが謎だね…それに…異常者の能力って…」

零「ああ…異常者については説明は…いるか？」

一同

「コクっ」

皆が一斉に零の説明を聞く。

零「そうだな…簡単に言えば、まず異常者は天才の部類に入るらしいぞ?」

一同

「はっ!？」

零の言葉に混乱する一同。

出来杉「それって…」

零「例を挙げると、俺は物心が付いた時からなんでも出来た。勉強に運動に何でもだ…
2歳から物心が付いたんだが…その時に因数分解を頭で計算出来るようになったんだ」

出来杉「!!!」

スネオ「何? 因数分解って?」

ジャイ「さあ?」

ドラ「早くて中学遅くて高校でならう数学の公式だよ…」

スネオ「うそ!？」

ジャイ「そんなことを小さい時に…」

出来杉「まさしく天才ですね…」

零「…まあ、そのお陰で実の親に気味悪がられて捨てられたんだけどね…」

一同

「……!!」

零の発言に驚く一同。

しずか「そんな…」

咲夜「酷いわね…」

聖奈「零さん…」

零「んで、捨てられた俺を拾ったのが、天才を人為的に作る研究機関なんだ…」

出来杉「天才を人為的に？」

零「そっ！俺みたいな異常者が集められた施設さ…異常者を研究して普通の人を天才にするんだってさ、まあ何故だか知らんがそこまでの記憶が失ってたんだが…」

ドラ「そんなことが…」

出来杉「何より、零さんの他にもそういう人がいるなんて…」

零「まっ！異常者って言ってもそれぞれ異常度が違うからな！」

スネオ「へえゝ例えば」

零「えゝっと…そうだなゝ例えば…只単に身体能力がスゴイ程度から反射神経が異常に良すぎて俺以外そいつに触れることが出来ない奴とか…殺人衝動が異常に強い奴とか…人心支配が出来る奴とか…かな」

皆零の言葉が信じられないと言った表情だが一つ気になることがあった。

出来杉「人心支配って？」

零「ああ、なんかそいつが言葉を発すると、言われた人間はそいつの言葉に逆らえなくなるんだよ」

ドラ「なんか…信じられないな…」

スネオ「うんちよつと非現実的だよね…」

ジャイ「そんなの漫画みたいな話だし」

白峰「ああ…言える言える」

零「あつ！因みにさっき言った異常の能力、殺人衝動以外なら俺も使えるぞ」

一同

「「嘘っ！！」」

零「マジよマジ！俺の記憶が戻った時に思い出したんだよ！なんなら試してやろうか？」

スネオ「へえ〜なら人心支配ってのをやってみてよ〜」

零「良いけど…ああ、じゃあ誰でもいいから一人実験台になってよ」

零が言うど皆誰が実験台になるか相談しようとする。
すると…勇者もとい馬鹿が出て来た

安雄「よしなら俺がやってやるよ!」

ジャイ「安雄!？」

スネオ「お前大丈夫か!？」

安雄「大丈夫、大丈夫!!（ケツ!!!どうせ嘘に決まってるだろうが!!これで零に恥かせて俺が女の子にモテモテさ…フフフ）」

零のせいで自分の活躍する所を奪われたので恨みがあつた安雄だった。

しかも下心全開だ。

安雄「さあ!零さんやってくれ!!!（ククク…さあ失敗しろ零!）」

零「自分で言っというてなんだが本当にいいのか？」

ジャイ「いいよ！いいよ！安雄だし俺様も見てみたいしな！」

出来杉「それって危険なんですか？」

零「いや、別に危険じゃないんだけど…」

スネオ「ならいいじゃん！早くやってよ！」

しずか「私も見てみたいです！！！」

咲夜「うん私も興味あるわ」

聖奈「…零さん見せて下さい！（少なくともドラえもんさんの話より現実性がありますし…）」

ドラ「僕も、異世界の人の能力ってのを見てみたいです」

皆、零にやれと急かすので。

零「なら…安雄君？最初に謝っとくよ？」

安雄「大丈夫ですから！（チッ！！！！出来ねえからって先伸ばしにしようとするなよ！！）」

零「じゃあ、んっん！——『平伏せ』」

零が言うすると…

安雄「（平伏せだあ？平伏す訳ない——）だあ！？？」

全員

「「！！！！！！」」

安雄は頭から地面に伏せた。

ジャイ「安雄！？どうした！？？」

スネオ「オイ…本当かよ？」

安雄「ガガガッ！（な、何だよこれ体が勝手に！！）」

ドラ「零さん！もう良いですよ！」

零「ああ、分かった分かった―よしもう大丈夫だよ」

零がそう言ったら安雄は解放された。

ジャイ「安雄、今のって演技じゃ…ないよな？」

安雄「…ガチ演技無し」

白峰「…マジかよ」

出来杉「…凄い人間にこんなことが出来るなんて」

零「まあ、こんなとこだな…まあ、これが異常者ってやつさ…どうだ？少しは信じた？」

零が聞くと全員首を縦に振った。

零「…まあそういう反応になるわな…うん…これ使おうと皆俺を不気

味がるんだよな…」

零は悲しそうな顔をして言う。

零「まあ…そういうことだからこれで俺は化け―」

零が自分は化け物と大差ないと言おうとしたら。

ジャイ「すっげー!!!!!!」

零「へっ?」

零は間拔けな反応を示す。

ジャイ「ズツゲーよ!!!!!! 零さん!!!!!! カッコイイぜ!!!!!!」

零「はぁ?」

スネオ「本当だよ!!!!!! 人間って不可能な事ってないんだな!!!!!!」
ジャイアンとスネオを筆頭に次々に、零に詰め寄った。安雄は作戦が失敗したのか地面に体育座りをしてる。

零「お前等…俺が気持ち悪くないのか？こんな妙な力を持つて俺が…」

ジャイ「なくに、言っただよ零さん俺とスネオはもっと凄いのをさっき見せて貰ったじゃん！！」

スネオ「そうそう！！それに僕達もドラえもんが居る時点で充分異常な体験してるしね！！」

ドラ「ちよつと！それは言い過ぎだよ！！まあそうだけど…」

白峰「更に言えば、化け物がいる今の状況が異常だしな！！！！」

出来杉「ハハハ、それは言えますね！」

咲夜「確かにね！零君が異常者でも零君はカッコイイしね！」

しずか「私も咲夜さんと同じです！！」

聖奈「私もです！！」

安雄「…（完全に裏目った…）」

零「み、皆…」

零は泣きそうだった。
更に…

のび太「僕も零さんは異常者だろうがなんだろうが零さんは零さん
だと思います」

全員

「「「のび太（君）！？」」「」」

のび太が意識を取り戻したようだ。

ドラ「大丈夫かい！？ のび太君！？」

のび太「ああ、大丈夫だよ、もう少ししたら動けるよ。零さん…ス
イマセン途中から話聞いてしまいました…」

零「い、いや良いよそんなこと…」

のび太「零さんは確かにゾンビを素手で倒したり蹴り一発で扉を破壊したりしますが、そのお陰で僕は…皆は零さんに助けられたんですよ？」

嫌いになる訳ないじゃないですか…ねっ？皆？」

安雄以外

「「うん！！」」

零「の、のび太あ…み、皆あ…クッ」

スネオ「ああ…零さん泣いてるな…！！」

ジャイ「本当だ！泣くなよな」

零「う、うっせーグスッ嬉しいんだよお馬鹿野郎…グスッ」

皆、泣いてる零をからかうだが女子3人は…

咲夜・しずか・聖奈

「（か、カワイイ…／／／）」

…どうやら別の事を考えていたようだ。
皆は零の正体を知っても拒絶すること無く絆を深めた。

安雄「(クソ〜!!!)」

…安雄以外。

続く

□オマケ□

異常者についてある程度知った一同。
だが零自身の能力を聞いてなかった為、出来杉が聞いてきた。

出来杉「そういえば、零さん自身の能力ってなんですか？」

零「ああ、そういや言って無かったな」
俺の能力名は完全簡単コンプリートに言えば相手の持つてる能力や得意なことを
完全に自分の物に出来る能力だよ(確か…)」

ドラ「す、凄いですね…コピー能力みたいで」

のび太「成る程…だから使った事の無い銃が使えたんですね…」

零「そっ！銃捌きはのび太を見て覚えたんだよ」

出来杉「本当…世の中凄い人が居るんですね…」

零「更に言えばこの能力は、奪った相手の能力が例え未完成でも、無理矢理完全に完成させて更に相手以上に使いこなす…らしいんだ」

白峰「まさしく完璧超人だな」

スネオ「らしいって？」

零「いや…俺ってそこまで、この異常能力使ったこと無いし…これからもむやみやたらに使う気も無いしな！使いすぎると筋肉痛になるし…」

出来杉「筋肉痛って…」

聖奈「それが能力使った代償ってやつですね」

咲夜「ねっ！ねっ！零君自身の能力見せてよ！」

零「えっ?…まあ良いですが…」

零、能力発動。

零「じゃあ、反射神経でも…」

一同

「「ワクワク」」

皆で零を囲む様にするが…
瞬!!!

全員

「「え!?!」」

零「此处だよ!此处」

全員

「「「!!!!!!?!!?」」」

零は一瞬でその場から消えて咲夜の背後に回った。

スネオ「す、スッゲェ」

出来杉「うん、さすがだよ零さん」

ドラ「22世紀の戦闘ロボットでも、こんな動きが出来るロボなんていないよ！」

のび太「零さんとは、結構組んできてたけど初めて見る動きだね」

白峰「本当、ゾンビが楽に倒せる筈だよ」

安雄「……（ちくしょう！！ちくしょう！！ちきしょうがああ！！！！）」

安雄、心の中で嫉妬パワー全開である。

聖奈・しずか

「「ポー／＼／」」

聖奈としずかは、絶賛トリップ中である。

零「まあ…こんなもんですかねえ」

零が能力を解除しようとするのと咲夜があることに気がつく。

咲夜「へえゝ能力発動中って零君の目が赤色になるんだねゝ」

しずか「あつ、ホントだわ」

零「えっ！？本当ですか！？…何か嫌だな…俺日本人よ？赤って…」

咲夜「いいじゃない？カッコイイし」

聖奈・しずか

「そうそう！カッコイイですよ」

零「ハハハ…カッコイイって（汗）」

ジャイ「まあ！何にしても零さんは零さんだな！」

スネオ「そうだね!! 天然タラシだけど…」

黒のび太「確かにね…」

ドラ「の、のび太君!？」

出来杉「零さん…これから大変ですね（汗）」

零の能力の一端を知るくんだり。

終わり

N o 1 8 零の正体（後書き）

もう安雄は完全に噛ませ犬キャラですね（笑）

N o 1 9 誤解をされるような発言は止めた方がいい（前書き）

もう言い訳しません！！！！

零の馬鹿さ加減全開でございます！！！！

どうぞ！！！！

No19 誤解をされるような発言は止めた方がいい

前回…零の正体が分かった。

零の正体もわかり零も幾分か心が楽になった。

のび太は、目は醒ましたもののまだ動けそうになかった。

因みに零・出来杉・ジャイアン・聖奈・スネオ・しずか・安雄・白峰以外は仮眠中である。

零「のび太？大丈夫か？」

のび太「大丈夫です、もう少ししたら動けます」

ジャイ「無理はするなよ…この先に何がいるかわからないんだし…」

のび太「ありがとう…ジャイアン…」

皆、のび太を心配する。だがこのガキだけは違った。

安雄「……………ケッ！！（ちきしょう！！！！ドイツもコイツものび太を心配しやがって！！！！ホントなら俺がのび太のポジションだったのによ！！！！だいたい零さんのせいで扉の下敷きになった俺も心配しろっつーの！！！！）」

安雄だけはのび太がチャホヤされているのが面白く無いのか一人勝手にヤサグれていた。
すると聖奈が…

聖奈「あの…少し先を見てきましようか？」

聖奈がそういった。

ジャイ「聖奈さん？」

聖奈「私も少しは、お役に立ちたいですし…皆さんは此処の安全を確保してください」

白峰「おい、単独で…」

出来杉「聖奈さん、無理しなくてもいいんだよ？」

スネオ「そうそう、皆で助け合って行かないといけない状況だから、一人で無茶は…」

聖奈「大丈夫です。任せてください！」

と言うか早いか走り出した聖奈。

しずか「聖奈さん!!」

聖奈「何かあったら連絡します!! そんなに深い山じゃないからすぐに戻って来ます!!」

白峰「おい!？」

スネオ「聖奈さん、焦ってたね」

白峰「何がいるかわからないってのに…」

零「仕方ないな…後3分休んだら俺も追いかけるかな…」

ジャイ「別に、零さんと咲夜さん以外で年上だからって変に気を使わなくていいのになぁ。俺はいるだけで嬉しいよ」

スネオ「ジャイアン、聖奈さんのファンだもんね」

零「ファン？」

ジャイ「へへ、知ってやがったか」

出来杉「聖奈さんは六年生でもファンが多いからね。彼女も苦労しているかもしれないよ」

スネオ「ジャイアンみたいなのに付き纏われたり？」

ジャイ「スネオ！！それはどういう意味だ！！」

スネオ「な、な、なんでもないよ！！！！」

零「ファンって…スゲーな聖奈ちゃん」

ジャイ「そうだぜ！！！カワイシな！！！」

スネオ「生徒会長だしね」

安雄「うんうん！！」

皆、聖奈を褒めちぎる。零は、別に変な意味も無くある意味誤解されるような事を口に出す。

零「ふーん？まあ…確かに俺が言うのも何だがカワイイかもな…」

全員

「「「！！！！？？？」」「」「」」

皆、驚いた表情で一斉に（特に女子が）零を見る。するとさっきまで寝てた筈の咲夜が無表情で零に詰め寄った。

咲夜「零君…それ…どういう意味？」

零「はい？…イヤ別にそのままの意味なんすけど…って近い近い顔が近いんですけど？」

咲夜「質問に答えて？何？聖奈ちゃんが好きなの？」

零「え？…まあ好きですけど…（仲間として）」

全員

「「「!!!!????」」」

皆、零が肝心の所をすっ飛ばして言うため驚愕する。

零「な、何だよ皆？俺変なこと言ったか？…ってあれ？咲夜さん？
しずかちゃん？」

咲夜としずかは、2人で黒いオーラを出してぶつぶつ言い始めた。

咲夜「あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘
娘あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘あの小娘」

しずか「泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒
猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が泥棒猫が」

出来杉「し、しずかちゃん！？咲夜さん！？」

零「お、オイ！？どうしたんだよ！？」

出来杉「貴方のせいですよ！！」

零「ハッ!?俺のせい!?なんで!?!」

出来杉「(こ、この人は…)」

相変わらず零の鈍感っぷりに呆れる出来杉。

零「な、なんだよ!?その可哀相な人を見る目は!?!酷いぞ!なあ
!ジャ…イ…アン?」

零がジャイアンに助けを求めようとしたが…

ジャイ「零殺す零殺す零殺す零殺す零殺す零殺す零殺す零殺す
零殺す零殺す零殺す零殺す」

スネオ「僕の方がカッコイイのに僕の方がカッコイイのに僕の方が
カッコイイのに僕の方がカッコイイのに僕の方がカッコイイのに」

安雄「リア充死ねリア充死ねリア充死ねリア充死ねリア充死ねリア
充死ねリア充死ねリア充死ねリア充死ねリア充死ねリア充死ねリア
充死ね」

3人共に呪いの如く零に言葉を発する。

零「えっ!?! えっ!?! 何!?! マジで何!?! どうしてこうなったんだ!?!」

出来杉「零さん? 貴方さっき聖奈さんが好きって言いましたよね?」

零「えっ? あ、ああ、まあ…それと何の関係が?」

出来杉「それって…恋愛感情でって意味ですか?」

零「は、はあああ!?!? なんでそうなるんだ!?!?」

出来杉「良いから質問に答えて下さい!?!? どうなんですか!?!?」

出来杉の質問に皆呪いの言葉を止めて零の答えを聞こうとする。

零「いや、確かに好きって言ったが仲間としてだぞ!?!?」

零が答えると…

全員

「「「ほっ!!」」」

皆、安心したようだった

出来杉「（この場に聖奈さんがいなくて良かった…）」

出来杉は別の意味で安心したようだ。

零「皆…そうか！そんなに聖奈ちゃんが好きなんだな！！！！悪かったな…誤解するような事言って！！！」

のび太・出来杉・ドラえもん以外

「「「まったくだ！！！！」」」

しずか・咲夜

「「……」」

零の発言に、のび太・出来杉・ドラえもん・以外はそう言い咲夜としずかはジト目で零を見ていたのだった。

出来杉「（聖奈さんが零さんの事が好きだって分かったら暴動が起きるな…）」

出来杉は、これから起きる未来を予知してしまうのだった。

零「じゃっ！！！！そろそろ時間だし、俺も聖奈ちゃんを追うから後よろしくな！！！」

出来杉・ドラえもん・のび太以外
「「行つてらっしゃい」」

零は聖奈を追う為一人で裏山を進んでいった。
それを零の発言が誤解だと解りルンルン気分を送りだす男共。
だが…

咲夜「な〜んか嫌な予感が…」

しずか「咲夜さんですか？私もです…」

出来杉「…まさかね…」

のび太「零さん…大丈夫かなあ」

ドラ「零さん…大変だね」

咲夜としずかは嫌な予感を察知し。

出来杉は零がまたやらかすのではないかと心配になり。

のび太は、純粹に零を心配し、ドラえもんは零に同情するのだった。

続く

N o 1 9 誤解をされるような発言は止めた方がいい（後書き）

次回……！次回こそは本編に戻ります……！！！！！！

N o 2 0 裏山探索そしてVSハンター（前書き）

のび太はしばらく戦線離脱です

No20 裏山探索そしてVSハンター

前回…零がアホな事を言った為誤解されるが何とかなった。

零が聖奈を追いかけた少し前。

聖奈「皆、頑張っているのに甘えてばかりじゃいけないわ…！私もしっかりしないと！よし！行くわよ！」

聖奈は、裏山の奥へと進んでいった。

少し進むと奇妙な物を発見した。

聖奈「此処にも亡くなっている方が…でも…何か違和感が…」

とりあえず考えてもわからない為更に進む事にした。

途中ケルベロスが何匹か襲ってきたが、持ち前の運動神経でケルベロスの攻撃を避けながら進む聖奈だった。

大分進んだ聖奈、だが問題が起きた。

聖奈「土砂崩れ…？これじゃあ進めないわ…」

裏山の道が土砂崩で先に進めないのだ。

聖奈「此処まで来て…」

来た道を引き返そうとする聖奈だったが。

聖奈「…ん？この先は、登山ルートの裏道かしら？進んでみようかな…」

裏道のルートを発見した聖奈とりあえず進む事にした。

裏道にしては、足場が良く進むには苦労はしなかったが…

聖奈「何かがおかしい…街にいたのと違って腐敗が進んでる？」

そう街がおかしくなった時間を考えても明らかに腐敗が進んでる死体があるのだ。

聖奈「…考えても仕方無いわ！とにかく先を急がないと！」

とりあえず疑問の方は保留にして先に進む。

裏道を進む途中にケルベロスと腐敗の進んだゾンビが、中々の数で襲ってきたが、銃の扱いにも慣れはじめたのか、一体一体確実に仕留める。

進んで行くと比較的新しい死体があった、手に何か持っていたので読んでみる聖奈。

内容は：

見ろアンブレラめ！！終焉だ！破滅だよ！！

社撰な管理の前々から指摘してたというのに上層部の能無し共はことごとく無視し続けてきた！

これがその結果だ！！

こうなった以上研究所も隠蔽用の施設も

山の麓にある街も皆終わりで。

そうなる前に私は逃げてマスコミにチクってやる

あのウィルスの感染力は凄まじい

下手をすれば放射能以上に拡散の被害が出る可能性は十分にある。

その前に手を打たないと日本全体が危険に晒される事も考えられる！！

だが、逃げる途中で檻から脱走したと思われるケルベロス型に証拠品と施設の鍵の入った小箱を奪われてしまった…
命は惜しいがアレだけは取り戻さねば…

聖奈「…………アンブレラ？ウィルス？何の事かしら…………とりあえず…

この施設の鍵が入ってる箱を探してみようかしら」

聖奈は鍵探しに目的を変えて探索を再開した：

しばらく歩くとまたもや腐敗したゾンビと：緑色のゴリラのような生物の死骸が行く手をさえぎっていた。

聖奈「たけし君！？：な訳ないじゃない！何なの？：これは：どかす手段さないと：」

何故か一人乗り突っ込みをする聖奈。

緑のゴリラの生物をどかす手段を捜すため、とりあえず来た道に戻った。

聖奈「一体鍵は何処に：：あら？：あれは？：他の花と違って色がちがうわね：ちよつと見ていこうかな：」

色違いの花に目を奪われ何と無く見てみる聖奈すると花の傍らに何かの鍵を発見した。

だが：鍵のタグが雨のせいでグシャグシャになってしまい、文字が読めなかった。

聖奈「：ダメだわ読めないわ：」

聖奈が鍵のタグの文字の解読を諦めた：その時さつき緑の生物のせ

いで行き止まりになってた所から生物の雄叫びが聞こえた。

???

「キシヤー!!!」

聖奈「…何!? 今の声…さっきの所から聞こえたような…」

とりあえずさっきの場所へ戻ることにした。

行き止まりだった所に戻った聖奈。
すると携帯がなった。

ジャイ「もしもし!? 聖奈さん!?! プッ」

聖奈「もしもし! もしもし!?! あ…充電が……とりあえず、この先
を見てから一旦戻りましょう…」

聖奈は先進む、するとさっきの緑の生物の死骸が無くなっていた。

聖奈「えっ!? さっきまであったのに…一体何処に?…考えても
仕方がないわ…進むわよ!」

決意を新たに進む聖奈、すると妙に見晴らしの良い所に出た。

更に

聖奈「…建物？こんな所に―ハッ！」

前方に、さっきの緑の生物―別名ハンターがいた。こちらに気づいたのか聖奈に振り向く。

聖奈「な、なんなのあいつ！？こっちに…来る！！」

聖奈は直ぐに銃を構えハンターに向かって撃つだが…

聖奈「あ、あまり…効いてない！？そんな！？」

ハンターはお返しとばかりに聖奈へ飛び掛かる。そのスピードはケルベロスの比ではない！！！！

聖奈「…くっ！」

聖奈は、持ち前の反射神経で何とか避け、距離を置いたためハンター

から離れる…が！！！！

ハンター

「キシヤー！！！」

ハンターが常人より遥かに早く聖奈にダッシュする。

聖奈「なっ！？早い！？」

ハンター

「キシヤー！！！」

雄叫びを挙げながら、その長い爪で聖奈を切り裂こうとするハンター。

聖奈「くっ！こうなったら…」

ハンターは聖奈に鉤爪攻撃、別名即死の首刈りを放つ、だが聖奈はバックステップで避ける。そのまま後ろに後退しながらハンターにハンドガンを撃ち込む聖奈、何十発か撃ち込みなんとかハンターを倒した聖奈。

聖奈「何て頑丈な奴なの…?!?――?!?」

ハンター

「シャッ!」

なんと!?!? やっと倒したと思ったハンターがもう一体現れたのだ
!!

聖奈「も、もう一体…!…でも!?!?」

もう一体のハンターに銃を構え撃とうとする。
…が!?!?

カチツカチツ

聖奈「そんな…! た、弾が…!」

なんと! 最初のハンターに弾を消費し過ぎたお陰で弾切れが起きて
しまう! しかも予備の弾も、もう無い!

ハンターは相手が攻撃して来ないと分かると、聖奈に思い切り飛び
掛かった。

聖奈「そ、そんな…こんな所で…零さん…」

聖奈は自分の死を覚悟し、目をつむる……が……！！

???

「ラァ……！！」

ハンター

「キシャー……！！」

何物かがハンターを蹴り飛ばした。

聖奈「…え？…」

聖奈は訳が解らず、ゆっくり目を開ける…そこには自分が呟いた人の背中だった…そして聖奈の方へ向き。

零「よう……！待たせたな……！」

零が聖奈に微笑みながら言う、それに安心したのか。

聖奈「零さん…よかった…来てくれて…」

聖奈の意識はそこで途切れた。

零が聖奈と合流する少し前。

零「聖奈ちゃん、何処まで行ったんだ？」

零は聖奈の後を追っていた。

零「それにしても…この山は死体を埋めるスポットなのか？明らかに腐敗進みすぎだろ…」

一人勝手に推測しながら走る。

やがて行き止まりになった道から裏道を見つける零。

裏道に進むすると、ハンターの叫び声と銃声が聞こえた。

零「……！！なんだ！？…東の方から聞こえたな…何か胸騒ぎがするな…逃げ俺……！」

東に向かって走りだした零。

すると物陰から大量のケルベロスとゾンビが襲い掛かってきた。

零「ああー！！もうっ！！！！こっちは急いでんだよ！！！！邪魔すんなー！！」

即座に戦闘体制に入る零しかしある事が気になる

零「そういや、ゾンビや犬ツコロにあいつの異常って効くのか？………ちよつと試してみるか」

構えを解き自分の能力完全モードを発動させる零。
そして2・3度咳ばらいをしてある言葉を発する。

零「『跪け』」

この能力名は、創帝^{クリエイト}ある人物からパクった能力である。

（都城 王土に限りなく性格に近い別名の人物）

零が言葉を発すると：

ゾンビ・ケルベロス

「「「?????」」」

零の周りにいるクリーチャすべてが地面に跪くかのごとく動かない。
なる。

零「おうちちゃんと機能するな〜ゾンビだからてっきり脳なんて機能してないかと思ったんだけど」

クリーチャは零を囲みまるで忠誠を誓ってる騎士的な感じだ。

零「まっ！しばらくそのまま置いてね〜じゃっ！」

零は地面に体を伏っぱなしのクリーチャ達をほったらかしに先を急ぐのだった。

零「しかし、この俺の能力…使いこなせてないせいか腹がへるな…」

そんなことをボヤキつつ銃声のした方へ到着する零、辺りを見ると聖奈がハンターを1体目を倒しすぐに2体目が現れたところだ。

零「あっ！聖奈ちゃんいた！！でも、なんだ？あの化け物…初めて見るぞ…しかもまずい！！！！聖奈ちゃん弾切れ起こしたのか！？クソッ！！！！今助けるぞ！！！！」

零は完全モード ハードラッピング ver 棘毛布を発動する、因みにこの能力は、創帝

と同じく棘毛布の能力を持った奴からパクった。
前述にも言ったとおり決して高千穂仕種では無い。

とにかくその能力で、反射神経を強化、更に身体能力の完全強化も加え、聖奈に飛び掛かろうとするハンターに一瞬で近づき、その顔に蹴りを入れた。

零「ラァ!!!」

そのままハンターは、吹き飛んたが死んではない。
目を開けてボーッとしながら零を見ている聖奈に

零「よう!!!待たせたな!!!」

どっかのバンダナ蛇の決めゼリフを言う零だった。

聖奈は、零を見た瞬間安心したのかその場に座り込む。

聖奈「…零さん、良かった…来てくれて」

聖奈は、そのまま気絶した。零は気絶した聖奈を木の幹に寝かせると、気絶してる聖奈に優しく声をかける。

零「よくがんばったな……待ってな直ぐにあのゴリラをぶちのめすからな！」

零はそう言ってハンターと対峙する。

さっきはハンターを蹴ったが、あくまで聖奈を助ける為に蹴った為余り力を入れていない。

蹴られたハンターも起き上がり零に威嚇する。

ハンター

「キシヤー!!!!!!」

零「シャーシャーシャーうっせーな!!!!!!早くこいや!!!!!!」

零が挑発するとハンターが腕を振り上げながら飛び掛かる、喰らえば一撃で死に至る攻撃だ。

だが零は避けることもせず、振り下ろしてきたハンターの腕を…

零「ハッ!!!」

「ガッ!!!!!!」

片腕で掴んだ、ハンターも予想外だったのか、幾分か動揺している

ようだ。

だが零は掴んだその腕をそのまま…

ブチッ！！！！

ひきちぎったのだ。

ハンター

「ギャアアア！！」

零「へっ！！！！コイツは聖奈ちゃんに怖い思いをさせてくれた礼だ！！！！」

ハンターは腕をひきちぎられ絶叫を上げている、だが零は、そんなハンターの反応を無視して…

零「そのまま…あの世に召されなああ！！！！」

ハンターの頭に全力の踵落としを決める。

ハンターは断末魔すらあげられず粉々になった。残ったのは巨大なクレータだった。

続く
⋮

N o 2 0 裏山探索そしてVSハンター（後書き）

零の能力、完全は長時間使うと腹の減りが増加します。

No21 到着!!! 廃旅館!!! (前書き)

最初に言っておくと

零は、仲間がピンチの時とか余程やバイ敵が出現しない限り能力は使いません。

大体零は、体力が全開に限り能力無くてもゾンビ程度なら素手で倒せます。

No21 到着!!!! 廃旅館!!!!

前回…零がハンターを跡かたくもなく粉々にしたのたが…

零「ぐっ!?!」

突然目の前が一瞬暗くなる零、そしてあることに気付く。

零「…マズイなこの力…使いすぎると空腹感に加え眠気も起こすのかよ…ち、ちくしょう…とりあえず…みんなを呼び出して…」

ジャイアン達に電話で事情を説明してこちらに来て貰うことに、そしてその場に座り込む零。

零「…力が戻ってから調子に乗って使いすぎたな…これからは余程ヤバイ状況の時のみしか使えないな…使いすぎてその場に倒れこんでアイツ等の餌になる…みたいなことに成り兼ねないし…」

零は銃ではどうにも成らない相手にのみ、力を解放することにした。しばらくすると聖奈が目を覚ました。

聖奈「うー…ん…零…さん？」

零「目を覚ましたか…よかった…大丈夫か？」

聖奈「は…い…助けてくれて…ありがとうございます」

零「まあ皆を此処に呼んだからしばらく休めるぞ…って行っても、もう来たけど…」

零が見た視線を追うと、ジャイアン達が手を振りながらこちらに来る…

ジャイ「オーイ！！2人共！！！」

スネオ「あれ？何で2人共座り込んでいるんだろう…」

咲夜「…まさか怪我なんてしない筈だし…」

出来杉「まあ、早く行こう！話はそれからだよ！！」

全員合流した。

ジャイ「聖奈さん零さん!! よかった無事だったんだね!!!」

聖奈「はい、なんとか無事でした」

スネオ「でも、2人ともどうしたの? 座り込んで...」

聖奈「さっき、緑のゴリラのような生物に襲われて... 私は零さんに助けられたから大丈夫ですが...」

聖奈が零の方を見るとすると零が疲れ切ったような顔をして座り込んでいた。

のび太「零さん! どうしたんですか!?! ...まさか怪物に!?!」

零「イヤ... 大丈夫だ怪物自体は無傷で殺ったんだが... 調子に乗って力を使いすぎて思いの他疲れただけだよ...」

出来杉「力を使いすぎた? やっぱり使いすぎると何か副作用があるんですか!?!」

零「そうみたいだな... どうやら使いすぎると極度の空腹感と眠気がくる... だから... 悪いけどこれからは余程やバイ敵が来るまで... 力は

使わないぞ……」

全員

「……」

全員、零の宣言に黙って了承するしか無かった……何故なら会って数時間しか一緒にいないが、ここまで疲れ切った表情をする零は、初めて見るからだ。

その後少し休み聖奈は完全に回復し、零は食事を取ったあと10分程眠り、気休めの回復をした。

気休めの体力の回復をして、完全とは行かないが動けるようになった零は先に進み、謎の施設に到着した。

零「ここは……」

聖奈「どうやら、旅館のようですね……」

零「なんで？こんな所に？」

ドラ「昔使用していた所が潰れてそのまま放棄されていたんじゃないかな？」

ジャイ「何とも怪しい所だな。何かいるような気がするぜ」

聖奈「そうね…でも、今はここを利用するしかないわ。ちよつとひっかかる事があるけど…」

ジャイ「2人が倒した怪物か？大丈夫今度は俺達が何とかしてみせるぜ！」

聖奈「うん…（もう一体は此処から出てきた気がした…もしかすると…？）」

零と聖奈を先頭に皆中に入るが早速大量のゾンビのお出迎えだった。

聖奈「!!!!」

零「チッ！早速かよ！」

皆、銃で大量のゾンビを撃ちまくる。

聖奈「みんな！その扉へ！！」

零「先入ってろ！！俺が数ん減らす！！」

皆、一斉に小部屋に入る、零もゾンビの数を少しでも減らそうとする。

零「ラァ！！」

零が一体のゾンビを全力で殴るが、いつもの様に消し飛ばなかった。

零「クソッ！！全力で殴ってもこれかよ…やっぱり異常の力つても、いいもんじゃねーな…」

一人愚痴りつつのび太の動きをトレースした拳銃捌きで、ゾンビの頭を打ち抜き大分減らし自分も中に入る。

――聖奈Side

零がなんとか数を減らし中に入るが、状況は悪い。

今の状況を整理すると…

？今の所、戦闘が出来る人物。

零（ただし、完全な状態では無い）

聖奈

ジャイアン

咲夜

白峰

ドラえもん

スネオ

出来杉

非戦闘員

金田（野に放つと録でもない事をしでかす）

太郎（銃が持てない）

のび太（貧血のダメージが抜けてない）

しずか（戦闘より回復要因）

安雄（最初にバイオゲラスから受けた傷が開いた）

？部屋の外には、大量のゾンビ尚且つ、動けない人が増えた所為でこの部屋から動け無い。

状況を整理すると中々の絶望っぷりだった。

とりあえず、みんなに話かけて状況を整理することにした聖奈。

白峰の場合「マズイ所に飛び込んだかもしれないな…さっきの見たか？ゾンビだらけだ…」

しずかの場合「ママは大丈夫なのかしら…」

出来杉の場合「古びた旅館に大量のゾンビ…何か匂うね」

スネオの場合「ぼ、僕の所為じゃないぞ！！こんな所にゾンビがいるなんて…」

安雄の場合「…（返事がない只の屍のようだ）」↑嘘

ドラえもんの場合「やっこの思いで着いたと思ったら…でも！僕は諦めてないよ。此処にも何か手掛かりがあるはずだよ！」

咲夜の場合「…零君、力の所為で相当疲れてるみたいね…」

金田さんの場合「YA☆RA☆NA☆I☆KA?」

太郎の場合「お姉ちゃん! 金田様は最高だよ♪」

聖奈は皆に話かけて状況を打破するヒントを得ようとするが…何一つ無かった。

しかも途中3人程訳が解らなかった。

最後にのび太と零に話かける聖奈。

聖奈「…零さん…」

零「…おお…聖奈ちゃんか…どうしたの…?」

聖奈「スイマセン! 私の所為で…」

零「はっ? 何で謝るんだ?」

聖奈「だって…零さんがそんなに疲れたのって…私の為に力を使っ
て…」

零「ああ…これ以上言うなよ…別に調子に乗って力を使ったのは俺
だしな気にするなよ…それじゃ助けた意味が無くなる…」

聖奈「零さん…じゃあ！ありがとうございます！！」

零「…ッ！！」

一瞬驚いた表情になった零だが…

零「フフ…どう致しまして」

笑いながらごまかした零だった。

零の言葉に少しだけ気持ちが悪くなった聖奈。
次に話掛けたのは、のび太だ。

聖奈「大丈夫ですか？のび太君？」

のび太「ああ…うん。ちょっとふらついただけだよ」

聖奈「（顔色が悪い…やはり今動けるのは私だけかもしれない…今は皆を休ませてあげないと…よし）」

聖奈は決意をし皆に言った。

聖奈「皆さん、聞いて下さい！残念ですが、此処も安全な場所とは言えそうありません。ですが、何か脱出の手掛かりになるものがひよつとしたらあるかもしれません。なので…私が、単独ではありますが…館内を調べてみようと思います」

白峰「お前…」

咲夜「…聖奈ちゃん」

出来杉「聖奈さん！いくらなんでも無茶だよ！何がいるかわからないだよ！！！？？」

しずか「そうよ！みんなで…」

聖奈「のび太君も出来杉君も負傷しています。

そして安雄は衰弱から回復しきっていません零さんも力の影響で何時ものように動けません」

零「…」

聖奈「彼らが動けるようになるまで時間が必要です。そして、それを怪物達がまってくれるとは思えません。武器さえあれば私でも戦える事が分かりました。大丈夫です、任せてください」

のび太「聖奈さん…」

ジャイ「聖奈さん…俺、マジで惚れそうだよ…」

スネオ「ジャイアン…」

ドラ「…彼女の言う事には一理ある。聖奈さん、任せていいかい？」

聖奈「勿論です。助けて貰った借りをまだ返せていませんし」

ジャイ「よし！じゃあ聖奈さんに探索を任せて俺達はここを死んでも守り抜くぞ！！聖奈さん！頼んだぜ！」

白峰「どうなっても知らんぞ…」

聖奈「はい！」

皆、聖奈の意見を聞き賛成した。すると のび太 が聖奈に銃の強化パーツを渡す。

のび太「聖奈さん、これを持って行ってください多少ですが銃が使いやすいかなと思います」

聖奈「ありがとう。 のび太 君」

のび太 から パーツ を貰い 部屋 を出ようとする 聖奈 だが…

聖奈「えっ…?」

部屋を出ようとドアを開けようとしたが突然向こうからドアが開いた、そして中に入ってきたのは金髪にガングロの男だった

全員

「「「!!!!!!」」」

全員男に銃を構える、すると男は慌てたように言う。

男「な、何だよ!!! 此处にもゾンビがきやがったか!!!」

男は引き返し部屋を出ようとする。

聖奈は慌て男を引き止める。

聖奈「えっ…あ、ちょっと待って! 私達は怪物じゃないわ!!! 普通の人間よ!!!」

男はピタッと止まり聖奈達を睨みつけながら言う。

男「普通の人間だと…? そんな事信用できるか!!! 皆そんな事言ってたがゾンビになっちまった!!! お前等もすぐにああなっちまうんだ!!!」

ジャイ「おい、それはどういう意味だよ? お前何を言って…」

出来杉「貴方…何か知っているんですか? 出来れば教えて欲しいのですが…」

男「……………命が惜しければ早く此処から出て行くんだな…ここには…」

出来杉の間を無視し何かの忠告をしながら男は、去っていった。

ドラ「…何だったんだろう？何か知っていそうな感じだったけど…」

聖奈「此処に何かあるのかしら…」

白峰「どうも何かを隠しているようだったな…危ない気がするが、俺も探索に行くよ」

聖奈「白峰君…」

白峰の言葉に嬉しくなる聖奈…だが…

白峰「ただし、お前と一緒に行く気はねえ。俺は一人で行かせてもらうぜ」

聖奈「…」

この言葉がまずかったのかジャイアンとスネオが白峰を非難する。

スネオ「白峰さん！学校で「単独で無茶するな」って自分で言ってたじゃないか！！」

ジャイ「スネオの言うとうりだ！のび太をぶん殴っておいてそれかよ！！」

だが白峰は、難癖をつけて聖奈との行動を拒否する。

白峰「…こんな状況だ。後ろからうっかりうっかり撃っちゃうかもしれないからな…お互いそんなの嫌だろ？」

そう皮肉っぽく言ってさっさと部屋を出てった白峰だった。

出来杉「…結構自分勝手な人だね」

しずか「酷い事言う人ね…」

ジャイ「何だよあいつは！？聖奈さんに失礼だろ！！」

聖奈「…」

のび太「白峰さん…」

零「…（優等生への妬み…か…）」

白峰を皆で非難した後仕方ないので聖奈一人で探索になるはずだったが。

零「ハァ…仕方無いな…俺と一緒に行くぞ…」

聖奈「零さん!？」

咲夜「零君!?! 駄目よまだ身体が回復してないじゃない!!」

出来杉「そうですよ!!」

皆、零を止めようとするが。

零「大丈夫だ…さっきのやり取りの間に大分回復した…それに借りを返すのは俺も同じだ」

のび太「借り？僕達は別に零さんに何も…寧ろ助けて貰ってばっかですよ」

零「違う…そういうんじゃない（まだ返してないぞ…俺を拒絶しなかったっていう借りがな…）とにかく！！誰が何と言おうが俺は付いていくぞ…それこそ一人でもな…」

皆、零の気迫に押され渋々了承した。

咲夜「ふう…仕方無いわね…良いわよ行っても…ただし！！死んじや駄目よ？」

零「咲夜さん…はい！ありがとうございます！」

出来杉「まったく…しょうがないですね」

零「ハハハ、悪いな…出来杉君」

出来杉「まあ…良いんですけど」

のび太「零さん気をつけて…」

零「ああ、のび太はゆっくり休んでくれよ！」

そして聖奈を方を向く零。

聖奈「…分かりました…ならよろしくお願いします！零さん！」

零「ああ！！よろしく！」

ともかく零と聖奈で旅館を探索することになったのだった。

続く

N O 2 1 到着!!! 廃旅館!!! (後書き)

ふう、ウエスカのキャラをもうちょい勉強しますか…

NO22 聖奈と探索!!! (前書き)

…くっ！上手い具合に書けない…

今回からは戦線離脱したのび太に代わって聖奈と一緒に探索します。

NO22 聖奈と探索!!

前回…零が皆の反対を押し切って廃旅館を探索する。

今、零と聖奈は部屋を出て旅館一階廊下に居る。

零「さてと…何処から調べるか…」

聖奈「そうですね…（何気に了承したけど…零さんと2人きり…）」

何か別の事を考えてる聖奈。

零「とりあえず、あそこの大浴場から調べるか…聖奈ちゃん?…
おい聖奈ちゃん?」

聖奈「ひゃー!ひゃー!!!」

零「（ひゃい!?）…いや…だから大浴場から調べるって言ったんだけど…って大丈夫か?顔真っ赤だぞ?」

聖奈「は、はい!大丈夫です!!大浴場からですね!!行きましょ

う！！！すぐに行きましょう！！！！」

零「お、おおう…」

なんとも前途多難な出だしだった。

大浴場に着いた2人早速キメラが3体いた。

零「チッ！！やっぱり言うかなんというか…此処にもいたか…まだ力は使えないな聖奈ちゃん…いくぞ…」

聖奈「はい！」

即座に戦闘体制に入る2人まず聖奈がのび太から貰ったグリップパ
ーツで連射力を強化したハンドガンで1体目のキメラを倒す。その
後すかさず、零が残りのキメラに近づき、のび太から借りたシヨ
トガンで固まっていた2体のキメラをミンチにする。

零「…ふう…のび太からシヨットガンを借りって良かった…」

聖奈「零さん大丈夫ですか？」

事あるごとに零を心配する聖奈に零は、

零「フフ…大丈夫だよ…心配してくれてありがとうな！」

微笑みながら聖奈に返す零…まあ零の顔を見た瞬間聖奈がフリーズしてしまったが…

とにかく2人は大浴場を物色し始めた。

零「特に何もないが…やはり所々怪しいな此処…床が抜けてる所から考えれば閉店してかなりの時間が経ってるはずなのに自販機がこんなに綺麗な状態であるし…」

零が一人推測していると聖奈が声を掛けてきた。

聖奈「零さんここに、立入禁止の扉があるんですがどうします？」

零「え？うーんとりあえず他の所を調べてからだなそこを調べるのは。とりあえず男湯と女湯を別れて調べるぞ」

聖奈「分かりました」

2人はそれぞれ別れて脱衣所を調べた。

男湯の方は特に何も無かったが、女湯は聖奈が103号室の鍵を見つけてきた。

2人は、大浴場を後にして103号室に向かった。

101と103号室の部屋の前の廊下に入る2人だったが3体のゾンビが襲い掛かって来た、内1体は何故か回転しながら襲ってくるという奇妙なゾンビがいたが零がショットガンを使って片付けた。103号室を開ける前に101号室が開いていた為中に入る2人すると白峰が何かを読んでいた。

零「白峰君此処にいたのか…」

白峰「…零さんですか…」

聖奈「白峰君…どうしたの？」

白峰「…2人共これ、読んでみろよ…吐き気がするぜ…ここはどうやら安全所か地獄の入り口かもしれないぞ…」

零「何？」

聖奈「どうということ？」

白峰「…お前の事は気に入らないが…死にたくなければ力を合わせないと駄目っばいな…」

そう言っつて白峰は部屋を後にする。

聖奈「どういうことなの？白峰君…一体何を見たの？」

零「…どうやらこの日記を見たらしいな…」

零と聖奈は白峰が言っていた。飼育係の日記を2人で読んでみることにする。

内容は…

7月16日

夜、警備員の森山と佐藤、研究員の三田村とポーカーをやった。三田村の奴、やたらついてやがったがきつとイカサマにちがいないえ

7月17日

今日、研究員のお偉方から、新しい化物の世話を頼まれた。皮をひんむいたゴリラのような奴だ。生きた餌がいいってんで豚を投げ込

んだら奴ら、足をもぎ取ったり内臓を引きずり出したり遊んだあげくやっと食いやがる。

7月18日

今朝の5時頃、宇宙服みてえな防護衣を着た森山に突然叩き起こされて宇宙服を着せられた。

なんでも研究所で事故があったらしい。

研究員の連中ときたら、夜も寝ないで

実験ばかりやってるからこんなことになるんだ。

7月19日

昨日からこの忌ま忌ましい宇宙服をつけたままなんで、背中が蒸れちまって妙にかゆい。

イライラするんで腹いせにあの犬どもの餌を抜きにしてやった。良い気味だ。

7月20日

あまりに背中がかゆいんで医務室に行ったら背中にでけえ絆創膏を張られた。それから、もう俺は宇宙服を着なくていいと医者が言った。今日は良い夢が見られそうだ。

7月21日

朝起きたら背中だけでなく足にも腫物だできてやがった。犬共の檻がやけに静かなんで見に行ったら数が全然たりねえ。

飯を三日抜いたくらいで逃げやがって。

お偉方に見つかったら大変だ。

7月22日

昨日、この旅館から逃げだそうとした研究いんが一人射殺された、
って話した。

夜、からだ中あつかゆい。胸のはれ物 かきむし たら 肉がく
さり 落ちやがた。 いったいおれ どうな て

7がつ23日

やと ねつ ひいた も とてもかゆい 今日 はらへったの い
ぬ のエサ くらう

7がつ24 にち

かゆい かゆい、三田村——きた ひどいかおなんで ころ
し うまかった です

かゆい うま

END

読んだ2人は顔面蒼白になった。

聖奈「こんなことって…!? 嘘よ…気持ち悪い…!」

零「これが…さっきの男が言ってたことか…（この日記…俺前に何
処かで見たような…）」

2人が考えていると…

ガシャン！！！！

「「ウワァァ」」

零・聖奈

「「！！」」

クローゼットと部屋の扉からゾンビが出てきた

零「クソッ！！！！ッ！！」

聖奈「このっ！！」

聖奈は扉から来たゾンビを倒すが、零は反応が遅れてゾンビに組み付かれる。

聖奈「零さん！？」

零「ぐぐぐ！！クソッ！！力が出ねえ、噛み付かれてたゝまゝるゝ

かゝ!!」

聖奈「えゝつとえゝつとこれは!?!よしっ!えいっ!!」

聖奈はすぐ近くにあった花瓶でゾンビの頭をカチ割った。

ゾンビ

「ぐげえ!」

零「ナイス!!聖奈ちゃん!!...ツラァ!!」

その隙に零が、ゾンビの腹を全力で蹴る。

だが何時ものように腹を貫けずに壁に吹き飛ぶゾンビ。

すかさずショットガンを構え、ゾンビに撃つ。

ゾンビはなすすべも無くショットガンの餌食になりそのまま動かなくなった。

聖奈「零さん!!!大丈夫ですか!?!」

零「ハアハアハア…びつつくりした〜!! サンキュー! 俺は大丈夫だよ…」

聖奈「よかった…零さんに何か遭ったら私…」

零「聖奈ちゃん…」

今にも泣きそうな聖奈に零は。
ポンツと聖奈の頭に手を乗せて撫でながら。

零「ゴメンな…心配掛けて、でももう大丈夫…今度はあんなミスは起こさないよ…」

ゆっくりそして、優しく聖奈に言った。

聖奈「…はい」

零「さてと、さっさと部屋をでるかな」

聖奈「…はい／＼／＼（頭撫でられた頭撫でられた頭撫でられた頭撫

でられた頭撫でられた」

若干アツチの世界に飛び掛かってる聖奈に気づかない零は2人で部屋を出た。

その際ゾンビの死体から201号室の鍵を入手した。

次は103号室の鍵を開けて中に入る。

零「バスルームは…何もないな…ふゝむこれは？人形」

バスルームを出て部屋の奥に入ると、人形とオルゴールがあった。

聖奈「これはフランス人形のようなですね…これは…オルゴールか…壊れては無いようですね…鳴らしてみます？」

零「うん」

聖奈はオルゴールを動かしてみる、すると零にとってこれまた聞いたことあるような音が流れた。

零「…どっかで聞いたな…この音…」

聖奈「そうなんですか？」

零「うん、まあ思い出せ無いけど…他には特に無い様だし出るか」

聖奈「そうですね」

二人は部屋を出て次は一番奥の部屋に入った。
すると更に奥に扉があったので入る。

聖奈「変わった部屋ですね…奥にあるのは…猟銃ですね…ああ駄目
です何かでロックされているみたいです」

零「ふゝむ石像が二つに…目の方向が違う床に真ん中にスイッチね
…これって、まんまバイオやん…」

聖奈「バイオ？何です？バイオって」

零「ああ、いやこっちの話、それよりちょっと手伝ってくれない？」

聖奈「? ? いいですけど」

零は聖奈と一緒に石像を目の方向が違う床の上に動かし真ん中のスイッチを押した。すると…

カチッ

何かのロックが外れた音がする。

零「よしっ！これで猟銃が取れる筈だよ！聖奈ちゃん取ってみて」

聖奈「はい…あっ！取れました！」

聖奈が猟銃を取ると鍵がロックされる音がした。2人は気づかず部屋を出ようとする。

だが、部屋の入り口にて問題が起きた

聖奈「あ、あれ？おかしいわね…開かない…」

零「嘘！？…マジだ…よしっ！！！！蹴り飛ばす！！！」

聖奈「ぜ、零さん！？」

聖奈が零を止めようとするが零は構えて全力の蹴りを放つ距離、パウー、スピード申し分ない……が。

ガン！！！

零「イデデデデ！駄目だまだ力が出ねえ」

何時もなら蹴り飛ばせば楽に吹き飛ばす扉も体力が回復していない今の状態ではただ足にダメージをおっただけだった。

聖奈「だから言ったのに……でもどうしましょう」

零の扉を蹴り飛ばす作戦も失敗し……途方に暮れる聖奈すると救世主が現れた。

白峰「？ここも鍵がいるのか？」

零・聖奈

「！白峰君！！」

白峰「その声は……聖奈と零さんしかいないよな。開けてくれ。この中を調べたいんだが」

聖奈「こっちから鍵なんてかけてないわ！！部屋の中の猟銃取ってきたら開かなくなっちゃったの！！零さんも力が戻ってないから扉も壊せないし…」

白峰「…だったら猟銃戻してくればいいんじゃない？」

聖奈「う…た、確かに…」

零「いや…この猟銃結構状態よくて直ぐに使えるから出来れば戻したくないんだが…」

白峰「…ハァ…仕方ないな…2人共ドアから離れてくれ一発かましてみる」

そう言われドアから離れる2人、白峰は扉に銃を撃ちまくり扉を破壊した。

聖奈「！開いた！？」

白峰「…ドアノブもちゃんと回るな。ロックしていたものが壊れた

みたいだ。出れるぞ」

聖奈「ありがとう白峰君！！助かったわ！」

零「マジ、助かったよ！サンキュー！！」

白峰「…ん、ま、まあ…この旅館、罠もあるみたいだな、此処は
前が調べ尽くしたようだから俺は他へ行くよ。気をつけろよ」

二人に礼を言われ若干てれながら言う白峰

零「ああ、待て白峰君これを持っていけ」

白峰にハンドガンの弾を渡す零、最初は断った白峰だったが零がど
うしてもと言うので仕方なく受け取り去っていった。

次は201号室を開ける為2階に向かう零と聖奈。

途中ゾンビに出くわしたが軽く退け2階に到着し、直ぐに201号
室の鍵を開けて中に入り調べると頑丈そうな金庫とその金庫を開け
る説明の手紙があった。

読んでみるが肝心の金庫のナンバーの手掛かのところが破れて読め

無かった。

零「重要なところが破れて読めないな…」

聖奈「大広間の扉は力ずくで破壊するしかありませんね」

零「ああ、今の俺じゃ扉は破壊出来ないから銃を使えないな…
弾が勿体ないけど…」

零は愚痴りながら201号室を後にする。

零「次は…あのバーに行ってみるか…」

2人は、バーに入った。中には少し変わった大型のグランドピアノがあった。

零「この…鍵盤の横にある小さい溝はなんだ？」

聖奈「確か…何かを入れると動くって話を聞いたような…」

零「まあ…わかんないし…此処も特に何もないからとりあえず後回しだな」

バーを出て次は202号室を調べた2人中はハーブがあっただけで特に何もなかった。

その直ぐ隣の部屋は鍵が掛かっていた為後回しにし更に隣の倉庫に入った、早速物色を始める2人。

零「うゝんこの本棚は…何だこりや…フロッピーディスクか？…何と無く気になったから取ったが…中身はなんだ？そーいや皆がいる部屋にパソコンが電源いれっぱなしで放置されてたな…調べるか…聖奈ちゃん！何かあった？」

聖奈「零さん、何か妙に重い本がありました」

聖奈から本を受け取り調べる零。

零「うゝんタイトルが…「EAGLE of EAST WOLF
or WEST」か…あれ？？？これって確か…」

零はおもむろに本を開き始める…すると本の中に狼の模様が刻まれたメダルが入ってた。

零「…やっぱり…」

聖奈「メダルが本の中に？よく分かりましたね？」

零「いや…前に見た似たような事を見たような気がしてね、もしかしたらと思ったら…そのとうりだったよ…（やっぱりバイオと同じだ）」

聖奈「へえ」

聖奈は何故知ってるんだ？という疑問はあったが気にするのをやめ
2人で倉庫を後にした。

2人は先程拾ったフロッピーディスクの中身を確認める為、皆の居る部屋に戻りパソコンを使って中を確認める。中身はベーターベンの月光の音源だった。

出来杉「…月光だね？」

ジャイ「零さんと聖奈さん、何か見つけたの？」

聖奈「え、ううん…気になるディスクがあったから調べてみただけ」

スネオ「いい曲だったね」

しずか「少しだけど、癒されたわ」

金田「上品な私にピッタリだな」

太郎「さっすが金田様♪」

咲夜「…（金田に呆れて言葉が出ない）」

聖奈「曲のフロッピーディスクか…何か使い道があったかなあ」

零「うーん…あっ！あれだ！バーにあったピアノの横の溝に入るんじゃない？」

聖奈「あっ！それですよ！」

2人は急いでバーに戻り早速フロッピーディスクをピアノに入れる。するとパソコンと同じ様にピアノが月光を自動演奏を始めた。演奏が終わると…

バンツ！！

大きな音と共に扉とゾンビが現れた。

聖奈「…っ！？びっくりしたぁ…」

零「何だ？扉が…」

中に入ると何かをはめ込むような窪みがある壁があったが手持ちのアイテムではあわなかった為、とりあえず保留にしバーを後にした。

次に向かったのは、大広間に繋がる広場だった。

零「此処は…ハープと緊急スプレーがあるな…この部屋は電子ロックか…えーっと」

零は、電子ロックをいじり始めた。
だが…

零「あーっ！！！！解除できねえええ！！」

元々堪え性の無い性格の零、だんだんイライラしてきた。
そこで聖奈が。

聖奈「クスクス…零さん私がやってみますよ（以外に子供っぽい所もあるのね…カワイイな）」

零「え？ああ…頼む（笑われた…変な所みられたな…）」

聖奈に笑われ若干恥ずかしくなりながらも聖奈と代わる零。

聖奈「えーっと…ここと、ここと、ここを押せばあっ！開きましたよ！」

零が苦戦してた。パズル式の鍵をいとも簡単に解除する聖奈、そんな簡単に解除する聖奈を見ながら「俺って…」と心の中で気落ちする零なのだった。

部屋の中は、酒蔵だった部屋を物色すると、大量の弾丸と緊急スプレーとゴールドエンブレムがあった。

零「中々の収穫だったね」

聖奈「でもこのエンブレムって何に使うんでしょう…」

零「ああ、それ多分さっきのバーの隠し部屋にあった壁の窪みに入るんだと思うぜ？」

聖奈「ああ！なるほど！！早速行ってみましょう！！！」

零と聖奈はさっきのバーの隠し部屋に行く。

早速壁の窪みにエンブレムをはめ込むと、棚が横にスライドした。
そこにあったのは…

零「レーザーポインター？」

聖奈「これって…映画とかで銃につけてる奴ですよ？」

零「そうだよこれ、聖奈ちゃんの銃に付けられば？」

聖奈「え？私が貰って良いんですか？」

零「ああ、俺はいいや…銃の照準は自分の目でやってるし」

聖奈「そうですか…ありがとうございます頂きますね」

聖奈の銃を強化した後、部屋を後にし、大広間にの扉の前に戻る2人。

零「さてと、後調べて無いのは、鍵が掛かってる203号室と…同じく鍵の掛かってるこの大広間だけだね」

聖奈「やっぱり此処も鍵が掛かっていますね…でも、鍵は金庫だし…：やりますか（オセロツ的な意味合いで）」

零「…（何故そこでオセロツネタ？知ってるのか？）そうだね…銃で壊すしかないな」

若干ネタ発言をした聖奈に、それに軽く突っ込む零、2人はそれぞれ銃を構えて扉に打ちまくる。何発か打ち込み扉の鍵が壊れたので中に入る2人。

大広間の中に入った2人中は結構な広さで特に気になる物も無かったが、奥から前回部屋に現れた謎のガンダロ男が肩から血を流しながら2人に大声で叫んできた。

男「おい！！」

聖奈「貴方は…！？どうしたんですか、その傷は…！？」

男「早くここから出ろ!!」 奴が、奴がここに…!!」

零「奴!?!何んのことだ!?!」

男「奴ら天井裏に潜んでやがった…ここなら安全だと思ったのに…」

天井?と思いながら2人は上を見上げる。
すると…

「グオオオオ!!!!」

零・聖奈

「!?!?!」

なんと天井のシャンデリアに黒いゴリラの様な生物が3体雄叫びをあげていた。
そして、そのままシャンデリアから降りて3体で男を囲む。

男「ひっ!!!うわっ!!!!うわああああ!!!!」

囲んでいた内の2体の怪物が男に飛び掛かり、それぞれ上半身と下半身を掴み引っ張り合い…そして…男の上半身と下半身はひきちぎられた。

聖奈「!!」

零「マジかよ…また新手か!!」

聖奈「…逃げられない…戦うしかなさそうね…」

零「俺もまだ体力が半分ぐらいしか回復してねえ…聖奈ちゃん…いくぞ!!」

聖奈「はい!!」

今、零・聖奈VS黒ゴリラ…別名フローズウィニルトの戦いが始まる。

体力の回復していない零は、切り抜くことが出来るのか!?

続く…

NO22 聖奈と探索!!! (後書き)

太郎は金田に洗脳されました(笑)

N o 2 3 フローズヴィニルト改め、黒ゴリラとの激闘！ (前書き)

あゝあ…まゝた性懲りもなくやっちゃまう俺…

眠気と戦いながら執筆すると何時もこうだよ…
それでも投稿する俺も俺だが…

No23 フローズヴィニルト改め、黒ゴリラとの激闘！

前回…ガングロ男（恐らく健治）が死去しました…黙祷をささげましょう。

聖奈「どうします！？3体もいますし…」

零「うーん…囲まれたらジ・エンドだな…」

零と聖奈は絶賛フローズヴィニルト（以下黒ゴリラ）の攻撃から逃がっている。

黒ゴリラの動きは図体の割に素早く、一瞬のスピードならハンターを凌ぐ程だった。

零「仕方ねえ…聖奈ちゃん！！俺が奴らを引き付けるから聖奈ちゃんは遠くから銃で奴らを撃ってくれ！！でも恐らくそれじゃ死なないから…此処は…ボソボソ」

聖奈に耳打ちをする零。すると聖奈が驚いた顔をして、零に言う。

聖奈「えっ！？零さん！？確かにいい作戦ですが…体力を回復していないのに大丈夫なんですか！？」

零「奴らに追い付けられないぐらいのスピードで走れる自信はあるよ……まあ……確かに君と探索してて良いところは見せてないけど……」

聖奈「零さん……分かりました……やってみます……!!」

作戦は決まった。

まず零が黒ゴリラの近くに行き、黒ゴリラ3体に銃を撃つがハンドガンではダメージがほぼない、すると3体共零に向かって吠えながら追いかけて回す。

零「よしっ!! 来たなっ!!!! (聖奈ちゃん……頼むぞ) オラァ!!!!
!! どうした黒ゴリラァ!!!! 図体だけかぁ!!!! ギャハハハハハハハハ!!!!!!!!」

聖奈「ぜ、零さん……そ、そんなに挑発しなくても (汗)」

若干壊れた零に引きながらも、黒ゴリラに照準を合わせる聖奈、レーザーポインターで黒ゴリラの頭に照準を合わせて……撃つ……撃つ……撃つ。

黒ゴリラA

「グルオオオ!!!!!!」

頭を撃たれた黒ゴリラAはダメージを受けたが死ななかった、遠くで銃を撃ってる聖奈を発見し襲い掛かる。

黒ゴリラA

「グォアアア!!!!」

両腕を振り上げながら聖奈に飛び掛かる黒ゴリラAだが：

聖奈「よしっ!!!! 掛かったわね!!!!」

即座に猟銃を構える聖奈、そして至近距離で4発ほどぶち込む。

黒ゴリラA

「グギヤアア!!!!!!」

黒ゴリラAは倒れた。

聖奈「よしっ!!!! 倒した!!!!」

零「聖奈ちゃんナイスだ!!!!!! よし!!!!!! 次行くぞ!!!!」

零が、また残り2体をまた引き付けて聖奈が黒ゴリラBを倒す残り

1体だけだ。

零「うゝし残り1体だ!! 聖奈ちゃん頼むぜ!!」

聖奈「はい!―ッ!―!!」

零「マズイ!!!!あの黒ゴリラ聖奈ちゃんに標的を!」

零が残りの1体を引き付けようとするが、何を思ったのかこの黒ゴリラC聖奈に、ターゲットを変更し襲い掛かった。

聖奈「くっ!―!!」

零はすぐに黒ゴリラの方へ走り出した。聖奈はすぐにショットガンを構え撃とうするが…

カチツカチツカチツ

聖奈「し、しまった!―!!リロードするのを…」

何とリロードを忘れていたのだ!―!!そのまま襲い掛る黒ゴリラ…

だが！！！

零「させるかあ！！！！黒ジャイアーじゃなかった…黒ゴリラア！！！！」

ガンッガンッガンッ！！！！

若干ジャイアンの名前を出しそうだった零が、黒ゴリラの後頭部にハンドガンを撃ちまくる。
黒ゴリラは、後頭部を撃たれたうちまわる。

黒ゴリラC

「ギャアアア！！！！！！」

零「よしっ！聖奈ちゃん！！今の内に銃に弾込めろ！」

聖奈「有難うございます！……………リロード完了しました！！！！」

零「よしっ！！！！挟み撃ちでトドメを刺すぞ！！！！」

ガシヤッ！！！！！！

か照れる」

若干顔を赤くしながら聖奈に言う零だった。
それを見た聖奈はつい…

聖奈「クスクス…零さんカワイイです…ハッ！」

つい思った事をポロリと言ってしまった聖奈、恐る恐る零の顔を見ると…

零「か！？カワイイ！！！？おおお俺がか！！！？？」

聖奈のカワイイ発言に顔を真っ赤にしながらめちゃんこ驚く零。

聖奈「（うっ…！！！！本当にカワイイ／／／／）」

零があたふたしてるのを見て鼻から薔薇が出てきそうな聖奈だった。
しばらく経って冷静になる零。

零「…カワイイって始めて言われたよ…」

聖奈「イヤ…本当に可愛かった物でつい／／／／」

また可愛いと言った聖奈に零はまた顔を赤くしながら周りを見渡し
小さい扉を発見する。

零「ヴッ／＼／…あっ！あそこに扉があるぞ！！！！行こう！今すぐ
行こう！！！！うん！！！！この話終わり終了ね！！！！はい！！！！探索再開
しま〜す！！！！」

零は一気にまくし立てながら聖奈の手を取り扉に向かうのだった。
因みに手を捕まれた聖奈は、最初は状況が掴め無かったが、零と手
を繋いでいるのに気づくと。

聖奈「はうっ！！！！（零さんと手を…／＼／／）」

気絶寸前まで追い込まれる聖奈だった。

続く

□おまけ□

その頃の待機組…

きゅぴ〜ん！！！！

咲夜・しずか

「「ムムッ！！！」」

ドラ「??? 何したの? 2人共?」

咲夜「いえ…何か、誰かに先を越されたような気がして…」

しずか「私もです」

ドラ「先を越された?」

咲夜「そうね…例えば、何かお気に入りのおもちゃを横から掻っ攫われたような…片想いの彼が別の女に寝とられたみたいなの、何かこう切ない感情が…」

しずか「私も同じような感覚が…」

ドラ「ふん…」

ジャイ「白峰さんと聖奈さんと零さん大丈夫かなあ」

スネオ「大丈夫なんじゃない？（あれ？　そういえば…聖奈さんと零さんで2人で探索してたよね？　……………）
……………　　（もしか…）」

出来杉「……（まさかね…）」

金田「太郎君！！安雄君！！これが女を襲う為の秘技！！ル○ンダイブだ！！！！」

太郎「金田様！！！！最高ッス！！！！」

安雄「ヒヤッハー！！！！流石だぜ師匠！！！！」

何気に平和かもしれない…

終わっちまえ…

N O 2 3 フローズヴィニルト改め、黒ゴリラとの激闘！ (後書き)

次回で廃旅館編終了です…多分…

N O 2 4 廃旅館から坑道へ（前書き）

一気に坑道まで進めますその為無理矢理感全開です…ハイ…

No24 廃旅館から坑道へ

前回…中々のコンビネーションっぷりで黒ゴリラ（フローズヴィニルト）を蹴散らした零と聖奈。

黒ゴリラとの激闘を制した2人は、男の死体から（多分モブキャラと化した健治）管理室の鍵を入手し、大広間の入り口の扉の横に小さな扉を発見した為中に入る零と聖奈。

中を物色すると、小さいバッテリーと地下通路の鍵を入手し物置を後にした。

零「さてと…後調べて無いのは203号室と大浴場の立入禁止の扉だけだね」

聖奈「なら、まずは203号室から調べましょうか」

零は、そうだなと了承し大広間を出ようとしたが。

黒ゴリラ達

「「「グロオオオ！！」」」

なんと！！！！前回倒した筈のフローズヴィニルトが突然起き上がった

ただ。

聖奈「嘘！……倒した筈なのに……！」

零「何て回復力だよ……今までにこんな奴居なかったぞ……チィ……！
相手にする必要なんてねえ……逃げるぞ……！」

大広間の入り口にダッシュする2人だが黒ゴリラも簡単に逃がしてはくれない……！

黒ゴリラ達

「「グォアアア……！」」

雄叫びをあげながら3体の内の1体が（黒ゴリラA）入り口を塞いだのだ。

聖奈「そ、そんな……！これじゃあ出られないじゃないの……！」

零「くっ……！！駄目で元々……やるっきゃねえ……！！」

零は、残り少ない体力を振り絞りながら能力を解放し黒ゴリラに突っ込んでいく。

聖奈「零さん!!!!」

黒ゴリラA

「グォアアア!!!」

突っ込んで来た零を迎え撃とうと両腕を振り下ろす黒ゴリラ、聖奈が零の名を叫ぶ。

零「フッ!!!」

振り下ろされる両腕を避ける零、その隙について黒ゴリラの顔面までジャンプをし…

零「ファック!!!!」

黒ゴリラの顔面を蹴る零、そのまま横に吹っ飛んだ黒ゴリラは残り2体の黒ゴリラに激突する。

黒ゴリラ共

「「「ゲアアアア!!!!!!」」」

零「今だ！！！」

聖奈「は、はい！！」

二人は急いで大広間を出て、なんとか逃げ切った零と聖奈だが。

聖奈「ハアハア…な、なんとか…に…逃げ切りました…ね…」

零「ハアハアハアハア…あ、ああ…………ぐっ…」

無理矢理能力を使った為体力を大幅に消費し、その場にへたり込む零。

聖奈「ぜ、零さん！？」

零「だ、大…丈夫だ…無理矢理…能力を…引きずり出して…使った…ただか…ら…」

聖奈「全然大丈夫そうに見えませんか！！」

顔面蒼白で聖奈に大丈夫だと言っているがまるで説得力が無い。

聖奈「時間はまだありますし…ここで少し休みましょう…」

零「いや…俺の事はいいいから…一人で行って…くれ…今の俺は…足手まといだ…」

そう言う聖奈は、怒ったような顔をして。

聖奈「駄目ですよ！そんな動けない身体で一人でいたら怪物に襲われるかもしれません！！それに、助けて貰ったのに置いていけません！！」

零「…」

何も言え無い零だった。

しばらく休憩することになり敵がいない201号室で休む2人だが零の顔は引き攣っていた。

零「あのさ…聖奈ちゃん…別に一人で食えるから…」

聖奈「とかなんとか言っさっきカ○リーメ○ト渡した時一人で食べられなかったじゃないですか、はい！！口開けて下さい！！」

零「…（世話焼きは、ドラえものの役割だった筈なのに）…ハァ」

何故こうなったかというと、少し時間を遡る…

聖奈に支えられ201号室に入って休む事になった零。少しでも体力を回復する為に食料が必要になった。

零「聖奈ちゃん…何か食い物持っていない？」

聖奈「えっ？えっ…と…あっ！！カ○リ○メ○ト（メープル味）が6つありました！！どうぞ！！！」

零「サンキュー」

聖奈からカ○リ○メ○ト（メープル味）を受け取った零だが…
ポロッ

零「…あれっ？」

聖奈「零さん？」

零「あ、あれ？ 掴め無い……おかしいな」

なんと、無い体力を捻り出して能力を解放した為に一次的に物すら掴むことが困難になるほど握力が低下したのだ。

聖奈「もしかして…お一人で食べられない…とか？」

零「……………食うの……………諦めよ」

零が食うのを諦めて横になったが…

聖奈「駄目です！！ 零さん、お腹が減っているのに食べないなんと、体力なんて回復しませんよ！！」

突然怒り出す聖奈、それに対し零。

零「いや…だって掴め無いし…まあ、回復速度は下がるけどあと10分したら、銃を握れる所まで回復するから…」

聖奈「いいえ！！ 許しません！！ こうなったら私が直接食べさせます！！！！ 口を開けてください。そうです最初からこうすればよかつ

たんですよ」

零に食べさせると言い出す聖奈、心なしか目がキラッキラッしているが…目の錯覚だと思う零。

零「嫌、迷惑だし…」

聖奈「いえ……！迷惑なんて思いません……！寧ろやりたいです……！」

零「目が怖いんだけど……じゃあ……少しだけ……」

軽く引きながら了承してしまうが、それがまずかった、聖奈は心の中で狂喜乱舞しながら、いそいそと零の口にカ○リーメ○トを食べさせようとするのだ、そして今に至る。

零「あのーもぅいいよ……」

聖奈「嫌です！まだあります……！」

零「いや……もう腹一杯だし、なんか体力も思ってた以上に回復したよ」

聖奈「え…そんなあ…」

ガチで残念そうな表情の聖奈に思わず…

零「まっ！！正直言って助かったよ！お陰でさっきより動けるよ、ありがとな！！」

笑顔でお礼を言う零、聖奈は間近で見てしまった為顔を真っ赤にしてフリーズしてしまう。

零は零で、またやらかした！！！と思い込み聖奈に謝りまくる。

それこそマジ土下座で…とにかく、聖奈のお陰で体力を大幅に回復させたので探索を再開した。

――

203号室の鍵が発見出来なかったので、扉を破壊して中に入る。調べると本棚の後ろから風の音が聞こえるたので本棚をどかすと、地下に繋がる梯子を発見するので降りた。

零「いよいよ怪しいぞ…この旅館、普通に考えて部屋の中に隠し梯子なんてつけないよな？」

聖奈「確かに…怪しすぎますね…」

零「まっ！先に進んで行けば何かしら分かるでしょ……早速犬ツコロのお出迎えだけど…」

聖奈は銃を構えるが零が制止する。

零「待て…此处は俺がやる」

そう言うなり零は、突っ込んでくるケルベロスに

零「ハァ！！！」

カウンターでパンチをケルベロスの顔面にかます。
するとケルベロスの顔面は潰れそのまま死んだ。

聖奈「零さん…体力が戻ったのですか？」

零「んっ？まあ…全体の70%回復ってところかな…本当なら顔面
消し飛んでるし…」

聖奈「ほえゝ素手で倒すのは、初めて見ました」

聖奈は零がハンターを素手で倒した際気絶してた為見ていなかったのだ。2人は襲い掛かってくるケルベロス銃で軽く退け、地下通路の鍵を使い扉を開けて奥に進み管理室の鍵で扉を開けて管理室を

物色した。

零「えーっと…この箱はハンドガンの弾×2とショットガンの弾×3とハンドガンの強化パーツか…他には無いな」

聖奈「零さん！管理人さんの遺書と思われる手紙とまた分厚い本がありました」

聖奈が管理人の遺書と最後の書（上）を見つけた。

零「えーっと…「EAGLE

of EAST or WEST」ってこれ…さっきと同じ本じゃん…えっと…あっ！あった大鷲のメダル」

零は本を開き大鷲のメダルをGetした。

次は研究員の遺書を読んでみることにした。

内容は以下の通り…

ある研究員の手紙

7月23日

一緒に逃げていた宮部に、化け物の兆候があらわれはじめたので、仕方なく殺して浴室に入れておいた。多分、これで私が最後の一人だ。

何故このようになってしまったのか？今となっては、この研究に参加した事が悔やまれる。もはや、私が生きて、この旅館を出ることは、無いだろう。

準備は終わった。後は勇気を待つだけだ。

悔いが残るが仕方ない。このまま化け物になって人間としての自分が消えてしまおうぐらいなら自ら幕を……

許してくれ、真理奈。

E N D

零「…決まりだな…この廃旅館の何処かに研究所がある筈だ…」

聖奈「そうみたいです…私の予想だと大浴場にあった立入禁止の扉が怪しいと思いますね」

零「なら、決まりだな…大浴場に戻るぞ」

2人は地下通路を後にして1階に戻り大浴場の立入禁止の扉の前まで着いた。

聖奈「此処にも鍵が…」

零「銃弾は勿体ないな…やるかね…」

零は全身に力を込め…そして全力の正拳突きを放つ。

零「セイツ!!」

ドカーン!!!

見事に扉をくの字にへしませ破壊した零。

零「よしっ!!! やったよ聖奈ちゃん!!!」

聖奈にVサインをしながら喜ぶ零。

聖奈「扉をあんな簡単に破壊するなんてスゴイですね!!!」

零「まあ、あれだけ回復すればこのくらいはね……そんなことより速く行こうぜ!!!」

2人は、早速扉の中に入り奥へと向かう、途中窓からケルベロスが2体侵入してきたが。

零「フンッ!!」

聖奈「えいっ!!」

銃を使いこなしケルベロスを楽しに葬った。その後奥に階段を発見し階段を降りていくと。

零「なんだ?ここ:墓みたいのが3つあるけど:」

聖奈「零さん、このお墓大鷲の模様が彫られてます、こっちは狼です」

零「てことはだ:この2つのメダルをそれぞれこの窪みにはめ込めば:聖奈ちゃんこの狼メダルを嵌めてくれないかい?」

聖奈「分かりました」

2人はそれぞれメダルをはめ込む、すると地面が揺れた。

聖奈「な、何なの…？」

零「やっぱりな…」

地面が揺れた後、真ん中の墓が奥にスライドし、地下に繋がる階段が出現した。

すぐに降りてみる2人そこは水を溜めるプールがあり機械が起動する音が聞こえる。

零「機械の音が煩くて奴らの足音が聞こえないな…慎重に行くか」

2人は、周りに気配を配りながら歩くすると突然ハンターが飛び掛かってきた。

零「！！あぶねえ！！！！」

聖奈「零さん！！大丈夫ですか！？」

零「ああ！！この野郎…んな所にもいやがったか…聖奈ちゃん下がってて！！！！」

直ぐさま零の後ろに下がる聖奈。ハンターは奇声を叫びながら零に飛び掛かる。

零は後ろにバックステップした後ショットガンを構えて、ハンターの顔面に2発程ぶち込む。

ハンター

「キシヤー!!」

零「今だ!!!…ハッ!!!」

ハンター

「ギャッ!!!」

ショットガンを顔面にくらいのけ反ったハンターに零は素早く近づき回し蹴りを放つ。

ハンターは零の回し蹴りをモロにくらいプールにダイブしてそのまま沈んでいった。

零「ふう〜これで大丈夫だろ、このプール見た感じ生物反応槽だし」

生物反応槽とは水質を検査する為に水の中に大量の酸素が混ざっている、そのため生物がそこに入ると浮けない為溺れ死ぬ。

聖奈「大丈夫でした？」

零「ああ！！余裕だよそれより先に進もう！」

2人は先に進み地下に繋がるエレベーターを発見、最初は起動しなかったが先程見つけたバッテリーがピッタリはまり、エレベーターの起動に成功した。

零「よし此処から先は、皆を呼んでからいくよ？聖奈ちゃん、準備はいいかい？」

聖奈「はい、大丈夫です」

その後皆を呼び付け、エレベーターの前に全員集まった。

のび太「聖奈さん、零さん、ご苦労様もう大丈夫だよ」

ジャイ「後は俺達に任せて少し休んでくれ」

しずか「聖奈さん、零さん、大丈夫？」

聖奈「ええ、でも気をつけて…この旅館には化け物としか言いよう

の無い生き物がいました。」

零「ああ…中々やばかったな…もしかするとこの先にも」

聖奈「ええ…零…さんの…言う…と…う…り」

突然倒れる聖奈。

スネオ「聖奈さん！」

零「…大丈夫、疲れて気絶しているだけだよ…」

のび太「こんなにボロボロになって…ここからは僕が頑張らないと…！」

ドラ「無理に気負わないで、のび太君。皆で脱出…でしょ？」

ジャイ「そうだぜのび太。俺達は全員でここから生きて脱出するんだ」

のび太「そうだね…みんなで…だね」

出来杉「零さんと聖奈さんが見つけたエレベーターへ行こう、ここももう安全な場所じゃない」

ジャイ「よし！出発だ！！」

全員エレベーターにのり地下に降りていくと妙に広い坑道に出た。

のび太「坑道か…？どう見ても下水道とは思えないし…いったいどうなってるんだ…あの旅館は…」

因みに今仮説を立ててた零と聖奈は睡眠中である為のび太達は零の仮説を知らない。（零に至っては咲夜にひざ枕されています）零が何故寝ているかはオマケを見てください。

ジャイ「もう何が出てもおかしくないな。この次には巨大な蜘蛛でもでてくるか？」

と、ジャイアンがサラッと、この後当たってしまう予言をした。

のび太「この先に何があるんだろうか…？」

ジャイ「さあな、俺は何かあると思うぜ！」

出来杉「うん、あんな山奥にこんな地下道まで掘ってあるんだぜ？
怪しすぎる」

スネオ「僕達の知らない間にこんな物が裏山に作られていたのか…」

出来杉「この坑道一つにしても、大規模な削岩機が無いと無理な筈
だ…一体…これは…」

ドラ「今は考えていても仕方ないよ。先へ進んで何かあるか調べよ
う」

しずか「あ…ちょっと待って!!…ここは携帯が使えないわ!!…」

金田「なぬっ!!…神である私を愚弄するか!!…この携帯め!!…」

安雄「!!…ミーのもだ!」

太郎「オーウマイゴッド!!…」

アホな事を言っている3人はシカトして、出来杉が口を開く。

出来杉「電波が地中で届かないのか…これでは分散するのは危険すぎる！零さんと聖奈さんも寝ているし…」

皆がどうするかと悩んでいると…

のび太「よし、休んでいた分ここは僕が様子を見てくるよ」

ジャイ「おい、のび太…」

のび太「零さんが動けない今、この中で一番足が速いのは僕だ、何かあった時でも僕一人なら何とか振り切りやすいでしょ？ジャイアン達にイジメられたお陰で逃げ足だけは自信あるからね」

ジャイ「てめえ…よし、いいだろうのび太、俺達も非戦闘員を守らなくちゃいけない、武器が持てる奴は全員ここを確保だ！探索はのび太に任せる！！のび太何かあったらすぐに引き返せ！お前一人でも死なせることはできねえからな！！！」

のび太「ジャイアン…ありがとう！行って来る！！」

のび太は一人坑道を探索を開始した。
果たして何が待ち受けるのか！？

続く…

☆オマケ☆

エレベーターで坑道へ降りる時に零が気絶したのだが…

咲夜「零君は大丈夫？」

咲夜が零の身を心配する。

零「咲夜さん？…いや、俺もぶっちゃけ…かなり…つ…か…れ…て」

ガバッ！！

そう言いながら咲夜に抱き着くように倒れ込む零。メンバーの中で中々の冷静さを誇る咲夜だったが。

咲夜「ぜぜぜぜ零君！？ち、ちよつと！こんな狭い場所で！！！！皆が見てる前に！！！！こういうのはもつと段階を踏んでから／／／」

物凄いテンパる咲夜だった。

出来杉「…あのく只氣絶してるだけなんですけど…」

出来杉が冷静に咲夜に突っ込む。

咲夜「へっ！…わ、分かってるわよ！！冗談よ！？冗談／＼」

咲夜が必死でごまかすが真っ赤な顔で言われても全く説得力が無い。

しずか「……………」

……………」

しずかは何故か無言で咲夜を睨みつけている。

のび太「ドラえもん…しずかちゃんが怖いんだけど…そして零さんに軽い殺意が…」

ドラ「のび太君…君も怖いよ…」

しずかの無言の圧力に怖がりながら零に殺意を抱くのび太に、それに突っ込むドラえもんだった、因みに聖奈も黒オーラが出ていたと

後に出来杉が語っていた。

終わろうよ…

N O 2 4 廃旅館から坑道へ（後書き）

感想お待ちします!!!

N o 2 5 原作主人公のび太! 動く!!! (前書き)

2時間で書き上げた為色々飛ばしまくりで支離滅裂かも…えー? 此処で退場? っとなるかもしれません…ハイ
後書きにオマケがあります。

あつ、それと明日から職業訓練校に通うのもしかしたら更新速度が大幅ダウンするかもしれません…
スイマセン

No25 原作主人公のび太!動く!!!

前回…聖奈と零が戦線離脱いたしました。

零が今睡眠中の為のび太が動くことになった。
とりあえず西側から調べる事にした。

のび太「敵はいないようだけど薄暗いな…」

先程何処かの特殊部隊の死体から入手したグレネードランチャーを
構えながら慎重に進むのび太。奥に進み少し明るくなる所とこち
らに呼び掛ける声が聞こえた。

???「…そこに居るのは誰だ!!」

声がした方へ行くと、足を負傷して動けない特殊部隊の人がいた。

のび太「!?!?こ、これは…!?!」

???「こ、子供!?!?どうしてこんな所に!?!」

のび太「あ、貴方は一体…」

???「こ、この際誰でもいい…聞いてくれ坊主!! お、俺達のチームの中に裏切り者がいる!!」

のび太「え、ど、どういう事ですか!？」

???「黙って聞いてくれ!」俺達はある施設へ研究員の救助の為派遣された…!! だが、あいつは違ったんだ!! 最初から研究員の救助なんてどうでもいい作戦に過ぎなかったんだ!!」

のび太「何を言っているんですか!？研究員って…」

???「俺達の派遣主はアンブレラ…! 知っているかもしれないが、巨大製薬企業だ!」

のび太「アンブレラ! テレビで見た事あるあの大企業の!？」

???「そうだ!! それで…「バンツ!!」——!!」

銃声が聞こえ、撃たれた特殊部隊の人なすすべも無く死んでしまう。

のび太「誰だ!!」

言っではみたが何も反応は無かった、直ぐに追いかける事にしたのび太。

のび太「駄目だ…心臓に一発入ってる…手に何か持っているな、これは…クラランク？」

クラランクを入手したのび太。

のび太「こんな所で何をしていたんだろう…そして、この人を撃った奴は一体…？」

様々な疑問がのび太の無い脳に駆け巡るがとりあえず来た道に戻ることにする。

来た道に戻る途中ハンターに出くわしたがのび太の銃捌きでハンターを無傷で倒す。エレベーターに戻るのび太、すると案の定怪物の死体があった。

のび太「皆!!!!」

ジャイ「のび太か! 予感的中だここには何かありそうだぜ!!」

のび太「それより此処に誰か来なかったかい!？」

スネオ「いや、僕達以外は誰も来なかったよ?」

出来杉「何かあったのかい?」

のび太「いや…何でもない!それじゃ今度は南を調べるよ!！」

ドラ「あ、のび太君!！」

南の方へ進むと崖がありその隣に四角形の穴がある機械があった。
先程入手したクランクを使い橋を出現させ更に進む、進むと岩で道が塞がっていた。

のび太「岩で道が塞がってる…とりあえず戻るか…」

のび太が戻ろうとした…その時だった!!

—ゴゴゴ—!!

のび太「うわ!！」

なんと岩がこちらを押し潰すかのごとく転がってくる。

のび太「うわわわー！！！」

だがジャイアン達から逃げる為に鍛えられた逃げ足が役に立った、押し潰されるすんで横に逃げたのでのび太は助かった。

のび太「ハアハアハアハア…あ、あつぶなかった」（汗）

マジで死ぬ5秒前をガチ体験をしたのび太、岩で塞がってた場所に穴があり進むとまた声が聞こえた。

のび太「ー！！あの人は！？」

声を押し殺し聞き耳を立てるのび太。

「……ああ、作戦は成功だ。ちゃんとアレも回収しました。予想以上に良いデータが取れた。…指示通り生存者は私だけです」

「証拠？証拠なんて残りませんよ。政府には原子力発電所の事故だと伝える手筈です…すべてが終了しだい街ごと…それではこの辺で

…
■ ■ ■ ■ ■ 殿…」

最後の方は聞こえなかったがのび太は通信が終わったのを見計らい飛び出す。

のび太「貴方は…ここは一体何なんですか！？貴方達は何物なんですか！？」

突然声を掛けられたのに驚くようすの男。

男「！？何だお前は！！どうしてここにいる！？まさか、例の組織の奴らか！！」

のび太「な、何の事を言っているんだ！？組織って何の事だ！？」

突然訳の解らない事を言われ混乱するのび太、すると相手の男もよく見ると、のび太が子供だと分かり。

男「…なんだこいつは？どうみても子供じゃないか…」

のび太「お前は何者だ！？どうしてこんな所にいる！？ここは一体何なんだ！？」

男「誰でも構わんか、情報を守るためにここで死んで貰うしかないな」

のび太「な、何!？」

男はのび太の問いに答えず銃を取り出す、のび太もすかさず銃を取り出すが：

バンッ!!!

のび太「くっ！」

銃を弾き飛ばされる、幸いのび太には当たらなかった。

男は男でのび太の抜き撃ちの速さに驚愕していた。

男「(何だ今のこいつの抜き撃ちの早さは!？こいつ…やはり只の餓鬼じゃないな!?) 残念だったな!!!! Tーウィルスの情報渡さー」

男が何か言おうとしたその時!!!

「ぷしゅー」

男「ッ!？」

天井から巨大な蜘蛛が降りてきた。

男は突然の事に驚く。

男「な、何だこいつは!？うお、く、来るな!!」

だが巨大蜘蛛はそんな事を無視し糸を吐き男の身体に絡み付きそのまま近くの穴に落ちていった。

男「うわあああああああああ————……」

落ちていく男の悲鳴が聞こえなくなり巨大蜘蛛はのび太に標的を変える。

のび太「!!!!こっちに来る!!!逃げられそうに無い!」

咄嗟に銃を構え巨大蜘蛛別名ジャイアントスパイダーを撃ちまくる。

蜘蛛

「ふしゃー」

蜘蛛の糸を吐き出しのび太に絡み付けよとするがのび太はそれをかわしてグレネードランチャーを5発ぶち込みジャイアントスパイダーの頭を吹き飛ばしのび太は勝利した。

のび太「……………思ってたより弱かったな…」

一人そういったのび太だった。

ジャイアントスパイダーに勝利し男が落ちた穴からC4爆弾とマグナムコルトパイソンを入手し先を急ぐのび太。
途中に塗り固められた壁を破壊して奥に進む。

中は更に地下へと続くエレベーターを発見する。

のび太「この先に重大な何かがあるかもしれない。皆を呼ぼう」

皆を呼ぼうと戻ろうとするのび太すると一行に戻らないのび太を心配したジャイアンと白峰がやって来た。

白峰「のび太！此処にいたか！！」

ジャイ「大丈夫かのび太!! 何時まで経っても戻ってこないから心配したぜ」

のび太「ゴメン…ジャイアン、白峰さん」

白峰「全く…」

ジャイ「時期皆も来るよ! 此処でまってる!! 零さんと聖奈さんも全快したからな」

のび太「そうか…良かった…」

白峰「偉そうな事を何度も言ってたが…俺もあんまお前と変わらん事が分かったよ…でも、これだけは言っておくぞ?…一人で先走って死んでも誰も喜ばんからな」

のび太「…はい」

白峰「もう…死んでるかもしれないが…お前等見るとダチが心配になってきちゃった。今俺の同学年で生きてるのが判る奴と言ったら聖奈の奴しかないからなあ」

白峰が喋っているとジャイアンが聞く。

ジャイ「なあ、何でそんなに聖奈さんが嫌いなんだ？何か恨みでもあるのかよ？」

白峰「なんもねえよ。そんなもん。…ただ、なんだろうな？出来の悪い子が優等生を妬む…そんな感じた」

「お前らだってそんな気分になったことはないか？」

ジャイ・のび太

「…」

何も言わない…嫌言えなかった…白峰の気持ちは痛いほどに判るからだ。白峰は更に続ける。

白峰「…俺はそれが強いみたいだな…脱出したら聖奈に謝る―」

キシヤー！！！

のび太「そ…そんな…もっと聖奈さんと仲良く出来るよう努力するんじゃないかったんですか…!! 白峰さん…!!…!!」

ジャイアンとのび太が泣いていると零がやって来た。

零「のび太!! ジャイアン!! 白…峰…君？」

のび太「零さん…白峰さんが…白峰さんがあ…」

ジャイ「怪物からのび太をかばって…」

零「…そうか…白峰君…」

零は、ジャイアンが倒したハンターの死体を全力の踵落として跡形も無くバラバラにした後、近くに穴を掘り白峰の遺体を埋めた。

零「…皆、白峰君に別れを…」

のび太「はい…」

皆白峰に別れを告げたこの時ばかりは金田も真面目だった。

のび太が発見したエレベーターの前に全員集合した。

ドラ「のび太君頼むから…無茶はしないでくれ…」

のび太「ゴメン…じっとしていらなくて…でもそのせいで白峰さんが…」

零「のび太…すまない…俺がもっと早く駆け付けてたら…」

聖奈「白峰君…」

スネオ「…のび太…少し休んだほうが…」

のび太「大丈夫だよ…それよりも出来杉君。こんな所に立派な設備があるけど…どう思う？」

出来杉「…ありえない、の一言だね。明らかに鉱山の規模じゃないよ。…この下には何か重要な施設があるかもしれない」

ジャイ「だ、大丈夫なのか？俺達、そんな所に入ってタダで済むの

か??」

零「でも、逆に考えればチャンスだな」

ドラ「え？」

出来杉「うん、零さんの言うとうりだ：こんな地下に施設を構えるとなると、当然脱出を考えなくちゃいけない」

零「そうだ：上手くいけば安全な場所まで続いている道がある筈だ」

しずか「そんなに上手く行くかしら：」

咲夜「でも：これしか道は無いわ」

ジャイ「確かに今はこれしか道が残ってない：俺達が先に行く、のび太、お前は零さんとドラえもんや聖奈さん達と一緒に後ろから来い！」

金田「神である私の部下の白峰君を殺してくれた罪は重い：私もいくぞ！ついてこいっ！！！！太郎君！！！！安雄君！！！！」

太郎・安雄

「「ハッ！！神の仰せのままに！！」」

のび太「分かった…」

ドラ「僕は先に行くよ…のび太君には零さんもいるし後ろの壁は塞いであるから怪物は入ってこれないはずだ。」

咲夜「私達も先に行くわ…のび太君を頼むよ零君…」

零「咲夜さん…任せてください！！」

皆は先に地下へ降りていった。

のび太と零は少し休んだ後、エレベーターに乗って地下研究所へ向かっていった。

研究所では何があるのか…何故か嫌な予感がする零だった。

その頃…何処かの部屋で一人の男が、モニターを見ていた。そこに映るのはエレベーターにのる直前の零達。

モニターに映る零

「行くぞ…のび太」

モニターに映るのび太

「はい!!」

男は何も言わずにモニターを見る。

??? 「…」

ピッ!!

男は黙ってモニターの電源を切り部屋を出た。

次回！研究所編突入!!!!

N o 2 5 原作主人公のび太!動く!!! (後書き)

☆オマケ☆

零が目を覚ました時のやり取り。

零「あのー…咲夜さん?俺が寝てる間にずっとひざ枕しててくれたんですか?」

咲夜「えっ?う、うん…迷惑だった?」

零「イヤ…寧ろ寝心地が良くて、体力が全快したから感謝したいくらいですよ…でも…」

咲夜「でも?」

零「咲夜さんに彼氏居るんじゃない?いたら俺殺される(汗)」

咲夜「……………いないわよ!!!!!!」

見当違いな事を言う零。

零「嘘っ！……俺が言うのもなんですけど咲夜さん相当美人ッスよ？」

超、真顔で言う零。

しずか・聖奈

「「なっ!？」」

咲夜「あ、え、いやっその……あ、ありがとう／＼／」

真顔で言われる為顔を真っ赤し、下を向きながら言う咲夜。

しずかと聖奈は、零の言葉に動揺する。

ジャイ「咲夜さんと零さんに近づけない……」

出来杉「零さん気づけー！！！！しずかちゃんと聖奈さんが無茶苦茶睨んでますからー！！！」

ドラ「マズイ……のび太君の未来が代わってしまう！！！！タイムパラドックスだ！！」（青野 武 風）

N o 2 6 研究所探索…は大幅に飛ばして V S タイラント前!!! (前書き

スンマセン!!!!!! 1時間で書き上げたので
研究所の探索の描写は飛ばしまくってます!!!

本当にすいません!!!!

でも「研究所の探索の描写? んなもんいらねえや!!!!」って方は
是非読んで下さい!!!!

あと例の人を出す為にご意見をくれた矢部野 和麻呂さんありがとう
ございます!!!!

No26 研究所探索…は大幅に飛ばして VSタイラント寸前!!!

前回…エレベーターで研究所を降り立った零達、時間に一人の男が監視カメラで見ているのに気づかず…

零「とりあえず警戒しながら進むぞ」

のび太「はい」

先に進む2人進むと緊急脱出の通路の前を見張ってる聖奈としずかに軽く挨拶をして更に進む、梯子を使い下に降りるとゾンビがいた。

零「チッ!!!! 毎回毎回テメエ等は…邪魔だあ!!!!」

のび太から貰ったショットガンを3体のゾンビにぶち込む零ゾンビは頭が無くなったり下半身とサヨナラしたりと色々な死にかたをした。

のび太「…（荒れてるなあ）ーフッ!!!!」

のび太はコルトパイソンでゾンビの頭を吹き飛ばす。

零「けっ！！！！こいつら数だけはいんだから」

のび太「零さん、此処にボディーマが2着ありますよ」

零とのび太はボディーマを装備した後、先に進むと更に地下へ続く階段とその隣に研究所独自の扉を発見する。とりあえず扉の方から入る2人。
すると黒ゴリラが出現した。

のび太「な、何だあれは！？見たことないぞ！！」

零「こ、この野郎…こんな所にもいやがったか…のび太あ！！！！気をつけろ！！こいつ頭を吹っ飛ばさない限り死なないぞ！！」

のび太「頭ですか！！！！分かりました！！」

黒ゴリラA・B

「「グオアアア！！！！」」

黒ゴリラがそれぞれ零とのび太に襲い掛かる。

のび太「はっ！！！！」

のび太はコルトパイソンの火力を使い黒ゴリラの頭を吹き飛ばす。

のび太「よしっ!!」

その頃零は。

黒ゴリラ

「グオアアア!!」

零「ぎゃーぎゃーうるせえなあ…さっさと消えろ黒ゴリラが!!!」

飛び掛かかる黒ゴリラのボディに腰の入ったフックをかました後、直ぐにアックスボンバーをかまして黒ゴリラを吹き飛ばす、その後すぐに倒れてる黒ゴリラへ近づき頭にショットガン突き付けて5発程撃った。

黒ゴリラはなすすべも無く死んだ。

のび太「大丈夫ですか？」

零「ああ、この黒ゴリラ野郎には腹がたってたからなあ…まあいい物色すんぞ…」

物色し始める2人あるのはプロジェクターと電子ロック式の金庫だった。

零「ゲツ!!! またかよ」

えーつとここをこうしてあれを…こうして…」

ビーツ↑解除できなかった音

プ
チ
ン
ッ
！

零「だーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! イライラする!!!!!!!!!!」

のび太「ぜ、零さん!？」

零「無理……もう無理……この金庫ぶっこわす……」

のび太「ちよっ!!」

零「ファック!!!!!!!!!!」

バキヤ!!!!

イライラの限界が来て遂に金庫を破壊する零。

零「おっ!!!!開いた開いた……中は小実験室の鍵か……おい、ここに用は無くなったからいくぞ」

のび太「は、ハア」

零の奇怪な行動に引きつつ部屋を出て下に向かう2人だった。

――――――――――研究所B2

地下2階に着いた2人は電子ロックが掛かってる部屋以外はすべてしらべた。手に入れたアイテムは以下の通り。

X線写真×2（合わせてみるとA D A Mの文字が浮かび上がる）

スライドフィルタ―

カードキー

ある研究員の手紙

（読むと、小実験室のパソコンから電子ロックを外す為のユーザー名とパスワードをが分かった）

小さい鍵

それらすべてを引っ提げて小実験室のパソコンから電子ロックの掛かっている部屋をすべて解除した。

零「ヨッシャ！！！！後は電子ロックの扉だけだ！！！」

のび太「…なんか随分飛ばされているような（作者の手抜きか？）」

はい…スイマセン…ここらへんの描写難しいから無理！！！！

作者の力不足により前半をすっ飛ばして研究所東へ入る。

入ったと同時に黒ゴリラが襲ってきたが…

零「しつけー！！！！！！」

バキヤ！！！！

零の跳び蹴りにより一瞬で顔面を消し飛ばされて死んでしまう黒ゴリラ……哀れ

その後休憩室に入ると、金田、安雄、太郎が素っ裸でカメラを銃で殺しまくってた。

金田「神なら裸でも最強だ!!!!」

太郎「さっすが金田様　痺れるう」

安雄「聖奈さ〜ん!!!」

零「……………どうするよ?……………これ?」

のび太「見なかった事にしましょう…」

零「だな」

2人は部屋を出て北へ向かうがエレベーターの電源が落ちている為
入れ無かった。

仕方無い為南の動力室へ向かった。

零「地味にアチィな…」

のび太「資料によるとこの先にエレベーターの電源を回復させる機
械がある筈です」

零「よしなら――！！！！のび太あぶねえ！！！！」

零はのび太を突き倒したすると、のび太の立っていた所に、カメラの強化体が降ってきた。

のび太「な、何だ！？コイツは！！！！」

零「くそっ！！！！のび太挟み撃ちだ！！」

のび太と零のショットガンとコルトパイソンによる銃弾の雨霞攻撃でカメラ改はぐちゃぐちゃになった。

零「……中々耐久性あったなコイツ……」

のび太「コイツなんか持ってますよ？」

のび太に言われカメラ改の死体を調べる零、すると死体の中にドロドロした何か……と、鍵が落ちていた。

零「なんの鍵だ？これ」

のび太「さあ？まあ…とにかく先に進みましょう」

のび太に言われ先に進み動力室最深部に入り、カードキーを使い研究所内の動力をすべて解除した。

のび太「これでエレベーターが？」

零「その筈だ…行くぞ!!」

2人はエレベーター前まで戻った。

戻る途中キメラ改が何体も襲い掛かってきたがのび太と零の雨霰攻撃により倒されたのだった。

――研究所B3エレベ

ーター前

零「この下に何かがある筈だ…」

のび太「…ハイ…行きましょう」

のび太と零がエレベーターを呼び出したその時だった。

出来杉「零さん!!のび太君!!」

出来杉が合流した。

零「出来杉君か、後はこの先だけだよ。」

のび太「どうしたの慌てた顔して…」

出来杉「うん、この研究所を調べていたらとんでもない物を見つけ
たんだ、行きながら話そう」

零「…? わかったよ、とにかく先へ進もう」

3人はエレベーターに乗った。

エレベーター内で出来杉が調べた事を2人に話し出す。

のび太「それで、何を見つけたんだい？」

出来杉「この施設に関する情報と、今回の惨劇という名の事故はこ
こが発端だったという証拠さ」

のび太「なんだって！？…あれは…事故だったのか！？しかも、ここが…！？」

出来杉「うん、資料室と研究者の遺体から見つけました」

零「やっぱりな…それで？」

出来杉「この研究所は製薬企業アンブレラが所有する極秘軍事研究施設「Tーウイルス」を拠点として運用していた所らしい」

のび太「Tーウイルス？」

零「（なんてこったい…ウイルスの名前まで一緒かよ…）」

出来杉「Tーウイルス、正式名称「Tyrant Virus」生体の遺伝子を組み替える始祖ウイルスというのを強化したものの…あらゆる生物を突然変異させ肉体や凶暴性を強化する生物兵器の主となるウイルス」と書いてあった」

零「（んだこりゃ…まんま同じやん…）」

零が一人突っ込んでいる中出来杉は続ける。

出来杉「もし、人間に投与すれば死んだ細胞を復活させることも出来るかもしれない…医療や軍事に応用すれば、歩行不可能な人の足を元道理に出来るかもしれないんだ」

「でも投与しても抗ウィルスを投与し続けないと細胞が突然変異を起こし体が耐えられなくなり死にいたる。
そして死んだ人間は再び蘇り突然変異の影響で皮膚の腐敗が進行、それでゾンビのようになる、らしい…」

のび太「…彼らはそのウィルスに犯されてあのような姿になったのか…」

零「チッ！胸糞悪いな…」

のび太「ということは…ママも…もう死んでいたんだ…」

零「…残念だが…そうなってしまふな…」

のび太「…」

出来杉「のび太君…続けるよ」

のび太「うん…」

出来杉「彼らの異常な生命力の源となっているのは急速に働く新陳代謝機能。

これにより常に膨大なエネルギー供給を必要とするため一定の行動を取り続けるとレポートには記されていた」

のび太「一定の行動…？まさか…！」

零「ああ…成る程ね…」

出来杉「その通り、食べる事だ」

零「（Tーウイルスの強化ウイルスのGーウイルスは存在するのかわかる？）」

Gーウイルスの存在を気にする零。

出来杉「信じられないウイルスだよ…君たちはこれが広がる前にどこかに行っていたみたいだけど、零さんはともかくとして僕や聖奈さんと咲夜さん達がどうして何も起きないのかはわからない…とに

かく、街は完全に汚染されてしまった。」

のび太「だね…」

零「まいったね…」

出来杉「…ここからが重要なんだ。
これからおる地下4階の先、最重要機密フロアには、奴らの研究
の集大成があるらしい。」

のび太「この…先に…」

零「(……………んっ？この状況…まさか)」

出来杉「行ってみようのび太君、零さん。
アンブレラが何を隠していたのか…」

零・のび太

「「ああ(うん)」」

3人は、最重要フロアへと降り立った。

続く

■オマケ■

その頃、3人がエレベーターでウィルスの事を話していた時…地下4階の最深部の3人が向かおうとする部屋に一人の男がいた。

??? 「…」

男はある最深部にあるカプセルのコードの一つをパソコンにつなげたカタ、カタカタ、カタと、キーボードを打つ音が響く。

??? 「…」

ピーッ

という音と共に横からディスクが出てくる。

??? 「…（データの回収は済んだ）」

男はそのディスクを取り、ケースにしまう

その後、男はパソコンを証拠隠滅の為に破壊した後出ていくパソコンの画面から：データロストの文字が映っていた。

N 0 2 6 研究所探索…は大幅に飛ばして V Sタイラント寸前!!! (後書き

次回ついに巷でバイオの裏の主人公と呼ばれる方と邂逅します!!!

N o 2 7 異常者と超人の邂逅（前書き）

えーっと…わかりにくいかもしれませんが、本文中にも説明がありますが…零が元々いた世界のバイオハザードのウエスカーは、自分を含め読者様達知ってるウエスカーとは、容姿が違ふという設定にしてあります…そこのところヨロシクお願いします。

今回でやっと思せました…駄文ですが…

それと、ご意見をくれた矢部野 和麻呂さん、本当にありがとうございます。

N o 2 7 異常者と超人の邂逅

前回…3人が地下4階に降りたった時謎の男が先にいた。

出来杉「あの部屋です！」

のび太「あそこに…重要な何かが…」

零「ああ…（恐らく…この流れで行くと…あの部屋にタイラントがいるはずだ）」

零が推測しているとのび太が人影を発見した。

のび太「あれ？、エレベーターの前に誰がいる！」

零「本当だ…だけどなんだ？あの人…何か違和感が…」

出来杉「貴方は…」

その男の風貌は金髪をオールバックにしサングラスを掛けていて、どこことなく常人は違う何かを醸し出していた。

男の方もこちらに気付いたが、動揺する事無く3人に語りかける。

??? 「ほう、まだ生存していたか…」

出来杉 「そこで何をしている!？」

??? 「いや、もうデータも回収したので用は無いのだが…」

零 「(この人…何処かで見たことが…いやそれよりも…この人…強い…!!)」

男が通り過ぎようとするが…

カチャ

出来杉が男に銃を突きつける。

出来杉 「まってください!! 貴方の持つてるそのデータメモリーを渡してください!!!」

??? 「…」

男は出来杉の銃を一瞥した瞬間…一瞬で出来杉の後ろに移動した。

3人

「「「!!!!」」」

出来杉「なっ!?!消えた!?!」

零「出来杉君!!!!後ろだぁ!!!!!!」

出来杉「えっ!?!」

零が出来杉に言ったが出来杉が後ろを振り向いた瞬間!!!!!!

????「…ふん!!」

ドゴォ

男は瞬時に腰を低くして出来杉の腹部を豪打をする。

出来杉「ぐはっ！」

出来杉は3?程吹き飛び壁にめり込む。

???「フッ」

のび太「出来杉!この!!!!——グッ!!!」

零「ガッ！」

男は出来杉を殴り飛ばした後、一瞬で零とのび太の前に移動し、零とのび太の首を締め上げる。

のび太「ぐぐぐ…（なんて力だ…!?!この人、人間なのか!?!）」

零「ぐっ！（動きがまるで見え無かった!だが!!!!）ぬ、ぐうう
う」

???「…ほう（この目は…）」

零が完全モードを発動し男の腕をはがしてゆく。

零「この…！離しやがれ…！」

そして男の顔を蹴りあげた

バキッ

零の蹴りが男の右の頬を掠り、男のサングラスが外れる。
そして…男の妖しく光る赤い瞳が露になった。
零はその瞳を見て驚く。

零「…！その目…」

???「…」

パッ

男はのび太と零から腕を放す。

???「フッフ…おもしろい、じつにおもしろい」

のび太「げほっ、げほっ」

零「な、なにが…」

??? 「フッフ、また会おう」

のび太「待て！お、お前の名は…」

??? 「…私は、ウェスカー、アルバート・ウェスカーだ」

零「！！！」

ウェスカーと名乗った男は、そのまま零達に何もせず去っていった。

ウェスカーが去った後、出来杉はしばらく気絶していたが目を覚ます、のび太もたいした怪我はしなかった。

出来杉「…何物だったんだろう…あの人…」

のび太「僕と零さんが手も足も出なかったよ…」

零「ああ…奴は強い…それこそ…能力を完全解放した俺よりもな…」

出来杉「そんな…!! 本当ですか!？」

のび太「いや…あながち嘘じゃないと思うよ? あの人に締め上げられたけど…とても人間の力じゃ無かったよ…」

零「それに、あの目…明らかに人間の目じゃ無かった…」

のび太「うん…あの人はアルバート・ウェスカーって名乗ってたけど…」

出来杉「アルバート・ウェスカー…何物なんだ…データを回収したと言ってたけど、まさかアンブレラの人間なのか…?」

のび太と出来杉が話していると不意に零が口を開く。

零「…俺…奴に似た奴を知っているんだ…」

のび太「えっ!？」

出来杉「どういう事ですか？…まさか零さんと同じく別の世界から？…」

零「ああ…おそらく」

のび太「そ、そんな！！零さんの他に別世界から来た人がいるなんて…」

零「いや、少し違うな…奴は―」

零は話し始めた、バイオハザードというゲームがある事、そのゲームにウェスカーというキャラクターがいたという事、だけど…零の知っているウェスカーとは少し違う事を、零が知っている事をすべて話した。

出来杉「し、信じられない…ま、まさかそんな人がいるなんて…ウェスカーを取り込んだ人間って」

のび太「しかも、ゲームに出てくる人物って…」

零「いや…そうとは限らないよ、俺がいた世界のゲームのウェスカーという人物は「ウェスカーを取り込んだお陰で超人的な力を手にされる」という設定だけど、さっき会ったウェスカーとは容姿がまるで違う」

のび太「なら一体あの人は？」

出来杉「これは、僕の推測だけど…恐らくさつき会ったウェスカーは…パラレルワールドの人間だと思うよ」

零「多分…な、恐らく俺の世界とは別の世界にあったバイオハザードというゲームに存在した「ウェスカー」…だと思っぜ？」

のび太「うーん頭がこんがらがる…つまり？」

出来杉「えーっと、零さんの世界に存在する「バイオハザード」というゲームがあつてそのゲームの世界に「アルバート・ウェスカー」というキャラクターがいるけど…零さんが言うには、さつき会ったウェスカーとは容姿が違う…これは分かる？」

のび太「うん、それは」

出来杉「それでこっからは僕達の推測だけど、今さつき会ったウェスカーは、零さんのいた世界にあるゲーム「バイオハザード」とは別の世界のゲーム「バイオハザード」に出てくるウェスカー、という事だよ」

零「…どうだ？分かったか？」

のび太「????」

出来杉「…」

零「出来杉君…諦めようコイツ、分かってない」

出来杉「はい…」

まるで分かつちやいないのび太だった。

零「とにかく、この先の部屋に行くぞ…それと、この事は此処だけの話にするぞ」

のび太「え???何ですか?」

出来杉「そうですよ、零さん理由を話してください」

零「考えてみろ、こんな事皆に話しても頭がこんがらがるだけだろうが。得にジャイアンとか…」

のび太「…ああ」

出来杉「確かに…分かりました、この話は、一旦保留にしましょう」

零「話が分かって宜しい…よし、なら行くぞ俺の記憶が正しければこの先はヤバイ奴がいたような気がするんだ」

のび太「この先に…」

出来杉「一体…何が…」

零「（…何も無い事を祈るかな）」

3人は部屋に入っていった、果たして部屋で待ち受ける物とは？

続く

N o 2 7 異常者と超人の邂逅（後書き）

次回は、VSタイラントです！！

調子が良ければ直ぐに投稿します！！！！

N O 2 8 V S タ イ ラ ン ト 戦 そ し て 脱 出 へ … (前 書 き)

薄い内容ですが…どうぞ

No28 VSタイラント戦そして脱出へ…

前回…ウェスカー、マジパネエ…

ウェスカーにボコボコされた3人だったが、気を取り直してB4の最重要部屋に入った。

のび太「なんだ…この部屋は？」

零「（やっぱりゲームに似てるな…）」

出来杉「ここが最重要機密室か…」

3人それぞれ似たような部屋の感想を漏らす。
しばらく部屋を見ていた出来杉が何かを発見する。

出来杉「―！？2人共！！！！このカプセルの中に何かいないかい！？」

のび太「カプセル？…！！！」

零「まさか…」

3人がカプセルを覗くと巨人のような生物が眠っていた。
心なしかちよつと目を開けたような気もする、3人はビックリして
後ずさる。

零「オーマイガ!!!!!!!!!! タイラントいやがった!!!!」

出来杉「コイツも零さんのいた世界のゲームの化け物ですか!?!?…
な、なんて化け物だ!?!?」

のび太「こんなものの為に僕達は……」

出来杉「僕達だけじゃない：家族も友達もみんな：！こんなものを外に出すわけにはいかない！のび太君、零さん！僕はこの施設を破壊する手段を探す！！」

「きつと機密保持の為の自爆装置のような物があるはずだ!!」

のび太「出来杉君!!」

出来杉「ここでコイツが完成したら、僕達の街以外も危険に晒されるかもしれない!!」

零「あっ！おい！！」

出来杉は、急いで部屋を出ていった。

零「…行っちゃった…」

のび太「…それより、カプセルに入ってる化け物どうします？」

零「まあ…下手に動かさないほうがいいな…」

のび太「…そうですね」

零とのび太は、タイラントが入っているカプセルを放置する事にした…が

カタ、カタタ、カタ、ピー！

なんと！！カプセルを管理しているコンピュータが勝手に起動し始めたのだ。

のび太「な、なんだ！？ 零さん！！勝手に動き始めた！！」

零「ま、まさか！！！！ウエスカーの奴！！！！勝手に起動するように細工しやがったな！！！！」

カプセルに入っている液体が無くなっていく、それから中からカプセルを殴る音がする、更にカプセルが凹み始め…そして…

ドカーン！！！！

タイラントが現れた…

のび太「…！！う、動いた」

零「く、くそっ！！！！ウエスカーの野郎…今度あったら一発殴る！！」

のび太「零さん！！逃げられそうにありません…」

零「戦うしかないだろうな…俺の体力は全快だが、能力は使えんぞ、脱出する時の体力が無くなる！！！！だからあまり期待するなよ！」

のび太「…わかりました」

零「――！！！！来るぞ！！！！幸い奴は動きが鈍い！！！！距離を取りながら銃を使い――！！」

のび太「はい！！！！」

今、零、のび太VSタイラントの戦いが始まる。

開戦早々、2人はバラバラに別れる2人の内のどちらかにタイラントが集中している所に、もう一人が背後から銃で撃つ作戦だ。

のび太「よしっ！！！！ここに来た！！！！おい！！！！こっちだ！！！！化け物め！！！！」

のび太の挑発にタイラントが乗ってきた。

タイラントが早歩きでのび太を追いつける。

零「よしっ！！！！良いぞ！！！！のび太！！！！」

零は、タイラントの背後に回った後、急接近してショットガンを構える。

零「鉛弾をくらいな！！！！」

ドウッ！ドウッ！ドウッ！

ショットガンを連射する零、中々効いたようで一瞬ぐらつくタイラント。だが、タイラントも零に気付き巨大な爪のある左腕を零に振り下ろす。

タイラント

「があ！」

零「うおっ！！あぶねえ！！」

爪攻撃をかわす零、すかさずのび太に指示を出す。

零「今だ、のび太！！撃て！！」

のび太「はい！！」

バンッ！バンッ！バンッ！

のび太は、グレネードランチャーを構えて4・5発撃った。

タイラント

「グウオオオオ!!」

今度は効いたようで、タイラントは苦しそうに吠えながらその場に倒れた。

のび太「…倒した…のか？」

零「…みたい…だな…だが…念のために」

零は倒れたタイラントの首を踵落としてへし折る。

零「うしっ!!これで完全に死んだ筈だ（スーパータイラントになられたら厄介だからな…）」

のび太「よかった～早くこの部屋から出ましようよ」

のび太の意見に頷きながら零は、カプセルの隣にあったコンピュータを使って扉のロックを解除して部屋を出た。

部屋を出た2人だが、突然アラームが研究所中に鳴り響くいた後に英語のアナウンスが鳴る。

ビーツビーツビーツ

のび太「な、なんだ!？」

零「げっ!!! 多分出来杉君が自爆装置を作動させたんだよ!!! アナウンスがそう言ってる!」

のび太「えっ! まさか?」

マジで作動させた出来杉に驚いていると、その本人からの放送が入る。

出来杉「みんな! 聞こえるかい!!! 今、館内放送を使って呼び掛けている! 聞いてくれ!」

のび太「出来杉?」

出来杉「館内の自爆装置を作動させたんだけど、予想以上に早く作動してしまうみたいだ!!! 急いで地下一階の咲夜さん達がいる緊急

避難通路前に集まるんだ！図面によるとそこから先に列車がある！
！列車に乗れば街からも脱出できる！！とにかく緊急避難通路前に
集まってくれ！！」

のび太「出来杉…本当に破壊する気だったのか！」

零「だろ？彼も中々過激な事するねえ」

のび太「感心してる場合ですか…」

零のコメントに呆れながら突っ込むのび太、すると出来杉から2人
に何か言ってくる。

出来杉「零さん！！のび太君！！聞こえていたら、研究所西の地下
3階にある機密情報管理室に向かってくれ！！そこには、これまで
の実験データが残されているらしい！！！！それを持って脱出できれ
ばアンブレラ社を追及する重要な手掛かりになるはずだ！！」

零「はっ？何だって！？西の地下3階って…」

のび太「確か結構遠いけど大丈夫かな？」

出来杉「出来るだけ急いでくれ！！2分以内に管理室のロックを解
除しないと機密保持の為にロックされてしまうんだ！！そうしたら

もう開ける事ができなくなるんだ！！！急いでくれ！！」

のび太「え！？」

零「もうっ！！そういう事ならデータを回収してから自爆装置を起動しろよな！！ああ！！もうっ！！！！仕方ねえ！！！！走るぞ！」

のび太「は、はい！！」

2人は、急いで西地下3階へ向かった。途中にゾンビやらなにやらが襲ってきたが、若干イラついてた零に蹴散らされた。何はともあれ、時間内に機密フロアに着いた。

零「ここが機密部屋か…」

のび太「鍵が掛かってるみたいですね…あっ！！このパズル使って解除するみたいですよ？」

零「あ！？パズル！？んなもんやってられっかよ！！！！退けのび太！！！！このドアぶっこわす！！！！」

のび太「えっ！？あっちゃっ！？」

零「ドロップキック!!」

パズルと聞いた瞬間零はドアを破壊した。
扉はメキョ!!と音がしながら吹っ飛んだ。

零「シャツ!!!!早く調べるぞ!!」

のび太「…まあ急いでたし…いいか…」

零の行動に若干納得がなかったのび太だが、急いでいたと理由にして部屋を物色する。

零「空っぽの金庫ばっかだな…」

のび太「零さん!!ありました!!恐らくこの金庫です…けど鍵が…」

零「またかよ!!えーっと鍵は…ああ無理!!このっ!!」

零は無理矢理金庫の扉を引っぺがした。

零「オラ！！開いたぜ！この野郎！！」

のび太「ああゝまた…まあいいや、えゝつと中は…紙が一枚だけ…」

零「な、なぬ！！紙が一枚だけだど！！！！？？？？」

のび太「えーつと…中は、「残念だったな、機密データは渡さんb
y. アルバートウェスカー」…ってこれ…」

零「あ、あ、あ、あの野郎おお！！！！！！絶対今度会ったらぶん殴
る！！！！」

のび太「と、とにかく脱出しましょう！！！！ね！？」

零「……………うん…………」

仕方無く2人は、脱出通路にむかった、因みに隣の部屋には、大量
の弾丸と札束があったので、全部掻っ攫った。

脱出通路へ入った2人、すると皆が出迎えてくれた。

のび太「みんな!!」

出来杉「のび太君!! よかった!! 研究データは回収できた?」

のび太「それが…」

零「…やられたよ…ウェスカーだ奴に先を抜かれた…」

出来杉「…そうですか…でも!! みんなで脱出できる事が一番です!! 何も機密データが無くて、アンブレラは追及できます」

零「…すまないな…」

3人だけで会話していると、ジャイアン達が急げと急かす。

ジャイ「急げ!!!! 時間が無いぞ!!」

スネオ「早くしないとこの場所脆とも消し飛んでしまうぞ!!」

しずか「零さん、のび太さん行きましょう」

ドラ「のび太君、希望が見えてきたね!! 行こう!」

聖奈「こっちです!!」

咲夜「2人共無事でよかった…早く行きましょう」

零・のび太

「「ああ!!」」

皆エレベーターに乗って列車格納庫に向かう。
エレベーターに乗ってる途中に金田のテンションが若干高かった。

金田「こんな所さっさとおさらばして、キャバクラに行きたいな!!」

太郎「金田様!!!! 僕も行きたいです!!!!」

安雄「俺もツス!!!!」

金田「フハハハハ!!!! 私にまかせなさい!!!!」

零「…お前等が行くと犯罪になるぞ…」

そんな阿呆っぽい会話があったが無事に列車格納庫に着き、零とのび太以外電車に乗る。

ドラ「急いで2人共!!!何時でも出せるよ!!!」

のび太「ふう〜なんとか間に合いましたね…」

零「ああ…よしっ!!!乗るぞ!!!」

零とのび太が電車に乗ろうとした…その時だった。

ドカーン!!!!!!

零・のび太・ドラえもん

「「「!!!!!!」」」

突然天井が突き破れて何かが上から降ってきた。その正体は…

スーパータイラント

「グォアアア！！！！！」

ドラ「ば、化け物だ！！！！」

のび太「そ、そんな！！！！零さんが止めを刺した筈なのに！！」

零「…首の骨を潰したくらいじゃ死ななかったか…」

3人がタイラントの生存に感想を漏らしていると。

アナウンス

「爆破まで5分前です」

零「くっ！！5分前か…しかたねえ…のび太！！ドラえもん！！先に電車に乗ってろ！！！！俺が奴をぶちのめす！！！！」

ドラ「え！？」

のび太「な、何を！！！！」

零「時間が無いんだ早く行け!!!」

零の迫力に押された2人は電車の中に消える。そして零とスーパータイラントが睨み合う。

零「正直…今になってお前の止めを刺しきれなかった事を後悔してるよ…だがな…」

零は静かに目を閉じる。

零「お前だけは…殺す!!!」

零は目を開けた、その瞳の色は赤い。

Sタイラント

「ガアアアアア!!!」

今、完全モードの零とスーパータイラントの戦いが始まった。

N O 2 8 V S タ イ ラ ン ト 戦 そ し て 脱 出 へ … (後 書 き)

次回で第一章は終了します…といいつつ最終話をあと少しで書き終わります。

N o 2 9 第一章終了（前書き）

風邪をひいてしまいしばらく執筆を怠けてました申し訳ございません。

今回で第一章は終了なんですが…執筆していて気付いた…
俺纏めるの下手！！！！

まあ…そんな感じなんでそれでも宜しかったら見てやって欲しいです。

No29 第一章終了

前回…スーパータイラントと零の一騎打ち寸前で終わった。

零SIDE

零「ハアアアア!!!!!!」

Sタイラント

「グオアアア!!!!」

遂に始まった、俺とタイラントの一对一の戦いが…俺は自分の力を
今だけ完全解放して戦っている。

Sタイラント

「シャッ!!!!」

奴の左腕が振り下ろされるさっきまでの奴の動きとは比物にならない
いくらい速い…が俺は反射神経を極限まで上げてそれを避ける。

零「オラアアア!!!!!!」

タイラントの左腕に乗りそのままタイラントの顔に跳び膝蹴りを放つ、タイラントはそのまま壁に吹っ飛び減り込んだ。

零「…」

俺は壁に減り込んだままのタイラントを見る、もちろん警戒しながらだ、これくらいでは奴は死なない…奴を倒すには、バラバラにしなければならぬからな。
するとタイラントが突然動き出し俺に向かって吠えながら猛ダッシュしてきた。

Sタイラント

「ガアアアア!!!!!!」

明らかに怒ってるな…奴の攻撃を避けた地面がクレータになってるな…だが!!!!

零「動きが大振りなんだよ!!!!」

俺は振り下ろしてきた腕を掴みそのまま振り回した。

零「オラオラオラー!!!!!!」

ジャイアントスイングの要領でタイラントを回転してタイラントをまた壁に減り込ませた。

Sタイラント

「グウ…オオ…オ」

零「うゝし！今のは中々効いたみたい…ぐっ！！」

突然目の前が歪んで見えた…マズイ…時間切れか！？

零「チッ！やっぱりこの力…チンタラやってる暇は無いな…一気に決める！」

俺は、タイラントに止めを刺そうと走り出すが…体が突然鉛の用に重くなった。

零「ヤバッ！身体が重い…畜生…限界…か」

Sタイラント

「ウオオオオオ！！！！！！！！！！」

零「くっ！」

タイラントの右フック的な物が飛んでくる、俺は咄嗟にガードをしたが、そのまま壁に吹き飛ぶ。

零「ガハッ！！！」

その場に倒れ込む俺、幸い外傷は無かったが、身体が動かない、タイラントは追撃をしようと猛突進してくる。：やべー俺死ぬかもと思ってたら不意に銃声がした、銃声がした方向を見るとコルトパイソンを片手にロケットランチャーを装備した、のび太がいた。

零SIDE終了

三人称…SIDE

タイラントにコルトパイソンをしこたま撃ち込んだ後急いで零に駆け寄るのび太。

のび太「零さん！！！！大丈夫ですか！？」

零「の、のび太か…何で戻って…来たんだ…」

のび太「零さんが戦っているのに僕だけじっとしてられません！
！！お願いします！！！！僕も零さんと一緒に戦わせてください！！
！！」

のび太が零に必死な顔をして言う、そんなのび太に零は可笑しくなり。

零「く…フフフ…ハハハハ！！！！」

のび太「な、何が可笑しいんですか！！」

零「クク…いや…すまない、俺は何をやってたんだろうな…と思っ
さ。」

零は嬉しかった、自分はもう一人じゃ無い、自分より年下だがこんなにも頼りになる仲間…いやトモダチがいる事に、心から笑った。

Sタイラント

「グッ…グウオオオ！！！！」

タイラントがダメージから回復しかかっている。

零「奴が動く…のび太そのロケットランチャー撃てるか？」

質問されたのび太は、一瞬驚いた表情になったが、すぐに笑顔になり。

のび太「勿論です!!!」

元氣良く返した。

零「そうか…なら俺が奴を攪乱するから、その隙に奴にロケットランチャーをぶちかましてやりな!!!」

作戦を言われたのび太だが疑問に思う事があった。

のび太「いいですけど…でも零さん身体の方は…?」

そう、能力を使った影響で零の身体は疲労困憊なのだが。

零「フツ！大丈夫だ、何だか知らんが身体が軽いんだ…それだけじゃねえ、今までで一番力がみなぎるんだ。」

そう言ったと同時に零の左の瞳の色が銀色に変わった。そう、能力に身体が慣れたのだ。

コンフリクト
これが完全の完全な能力解放だ。

のび太「…零さん…左の瞳の色が…変わってますよ?」

零「え? マジで?…なんか嫌だな…俺、前にも言ったけど日本人よ?」

のび太「…でもカッコイイじゃないですか…」

零「オイオイ、俺がカッコイイだと? 俺が格好よかったら、世界中の人間がアイドルになれるぞ?」

のび太「…それ…ジャイアン達の前で言わないほうがいいですよ? さもなければ殺されますよ?」

零「はっ? 何で?」

のび太「何でもです!!!! (まったく…こういう時の零さんは妙に腹が立つな)」

2人でコントじみた事をしてしていると忘れ去られていたSタイラントが吠えた。

のび太「…何かアイツ…怒ってません？」

零「まあ、散々無視してお前とくっちゃべってたからなあ」

のび太「なら、さっさと倒しましょう、こんな所さっさとオサラバしたいし」

零「だな…じゃあ行くぞ…!!!!」

タイラントに突っ込んだ零、思った以上に身体が軽く動く。

Sタイラント

「ギャオオオ!!!!!!」

タイラントの左腕攻撃が襲い掛かかる、零はそれを横に避けた後思い切りジャンプする。

零「ハッ!!!!」

Sタイラント

「!?!?!?!?!」

タイラントは零が飛んだのに気づかず、何処に行ったのかキョロキョロさがすが。

零「オリヤア!?!?!」

タイラントの後頭部に零の踵落としが決まる。そのままタイラントは叫び声をあげながら、地面に前のめりで突っ伏す。

零「中々頑丈な奴め…これが普通の雑魚なら粉々になってる筈なんだけどな…のび太!!準備出来たか!?!」

のび太「……よしっ!?!準備出来ました!?!零さん!!離れてください!?!」

のび太に言われたとうりタイラントから離れる零。タイラントも苦しそうに立ちあがる、のび太は照準をタイラントに合わせて。

のび太「これで終わりだ!?!化け物め!?!」

タイラントに向かってロケットランチャーを撃ったのび太。ロケットランチャーのミサイルがタイラントに近づく、だがタイラントは。

Sタイラント

「ガアアアア!!!!!!!!!!!!!!」

零・のび太

「「!」!」

なんとロケットランチャーの弾頭を左腕で掴みそのまま真横に薙ぎ払ったのだ。

零「うそ〜ん…」

のび太「な、なんて奴だ…片腕でロケットランチャーの弾頭を弾くなんて…」

零「もう一度だのび太!今度は奴の腕を使い物にならないようにしてやる!」

のび太「分かりました!」

のび太はもう一度ロケットランチャーを構える、タイラントは立ち上がった後のび太に吠えながら突っ込む、それはちゃんとタイラントの脇腹にライダーキックの要領で蹴りを入れる零。

零「オラァ！！！」

Sタイラント

「グウオオオ！！！！！」

零に蹴られたタイラントの脇腹が軽くえぐれたがタイラントは止まらないまた立ちあがりのび太に突っ込むが…

零『動くな、そして何もするな！！！！』

零がそう言葉を発するとタイラントの動きが止まる。

Sタイラント

「グウオオオ！！！！！！！！」

零「のび太！！！！今だ！！！！」

のび太「今度こそ終わりだー!!」

ロケットランチャーを発射するのび太、弾頭は零の能力で動け無くなったタイラントへ命中してそのままバラバラになった。

のび太「や、やったの…か？」

零「ああ！奴は、バラバラになったよ、俺達の…勝ちだ！」

のび太「や、や、やったー！」

2人でタイラントへの勝利に喜んでいると。

出来杉「零さん！のび太君!!! 急いでくれ!!! 爆破まで2分を切った！電車はもう何時でも動く!!!」

2人は出来杉に急かされ急いで電車に乗って、研究所から離れた。

電車の中にて…

2人が車両に入るとドラえもん、出来杉、ジャイアン、スネオが出迎えてくれた。

ドラ「のび太君！！！！零さん！！！！よかった！！！！一次はどうなるかと……」

のび「ゴメン、ドラえもん心配かけて……」

ドラ「いいよ、無事だったんだから……」

ジャイ「のび太が、俺様のロケットランチャーを持ち出した時は、何をするかと思っただぜ！」

のび太「ゴメンよ、ジャイアン勝手に持ち出して……」

ジャイ「まったく……一人で無茶すんなって言ったのによ。」

零「いや、スマン、俺がさっさと倒せばよかったんだけどな。」

スネオ「零さんも、無茶し過ぎだよ！」

零「ハハハ、ついね（汗）」

スネオ「まあ…良いけどさ…それより零さん、目の色が変わってない？」

出来杉「あれ？本当だ、零さんどうしたんですか？」

零「ああ、これは、能力を解放中なんだけど…あれ？そういや解放中なのに疲れないな…」

出来杉「もしかして、能力に身体が慣れ始めたのでは？」

零「うーん、そうかもなくまあ何時までも解放しとくのもあれだから…」

そう言いながら、能力を解除する零だったが。

「グウオオオオ！！」

出来杉「な、何の音だ！？」

一同謎の音にビビる。

零「わ、ワリィ…俺の腹の音だよ…」

スネオ「はっ？　すげえ音だな…」

零「うーん、眠気に襲われる事は無くなったけど、空腹感に襲われるのは変わらないな…やっぱりあまり能力は使え無いねコリャ…」

のび太「そうですか…」

零「まあ、世の中そう思い通りにはならないってこったな！！」

あっけらかんと言う零に4人は揃ってため息を吐く、そんな4人を不思議に思いながらも残りのメンバーがいない事に気付く。

零「あれ？　そういえば咲夜さん達と金田さん達は？」

のび太「あっ、そういえば居ませんね…ドラえもん、他の人達は？」

ドラ「咲夜さん達は、先頭の車両にいるよ、皆心配してたから会い

に行った方がいいよ？」

のび太「ですって零さん、行きますか？」

零「だな」

2人は、先頭車両に向かったその後ろには、ドラえもん達もいる。

先頭車両に入った零とのび太だったが。

零「おーい！みん…グヘッ！！！」

のび太「ぜ、零さん！？」

入った瞬間に零の視界が遮られる。
その原因は…

咲夜・聖奈

「「零さーん（君）！！！！！」」

なんと零が車両に入った瞬間、咲夜と聖奈が、零に飛び付いたのだ、そのまま仰向けに倒れる零、まあ要は押し倒されている。

咲夜「零君！！！無事で良かった…」

聖奈「うっ…グスッ本当です…」

2人共零の無事を喜んでいるが、出来杉が苦い顔をして2人に言う。

出来杉「あ、あのゝ（汗）零さん苦しそうなんですけど…」

咲夜・聖奈

「「へっ？」」

揃って押し倒した零を見ると。

零「く、くるしー！！死ぬゝは、早くどいてくれー！！！」

酸欠状態になったのか青白い顔してる。
慌てて退く咲夜と聖奈。

咲夜「ご、ごめんなさいー！！つい…」

聖奈「す、スイマセン零さん大丈夫ですか!？」

零「ゲホッゲホッ!危うく三途の川を渡る寸前まで来たよ…」

咲夜「本当に、ごめんなさい…心配でしかたなかったのよ…」

聖奈「私も、咲夜さんと同じく…」

マジであやまる2人、そんな2人に零は。

零「ハハハ、心配かけた俺が悪かったんだから謝らないでくださいよ…」

しずか「…(ちっ!!!)」

軽く笑いながら許す零だった。

ちなみに、しずかは、2人が零に嫌われた所で零に言い寄ろうとしたりらしい。策士め…

のび太「でも、これで…脱出できたね…」

不意にのび太が言う。

零「ああ、そうだな」

スネオ「でも、これからどうやって生きて行けば…」

聖奈「事の全てを誰かに話しても信じてはくれないし…」

ジャイ「そんな事は、後で考えようぜ！！今は生き残った事を喜ばうじゃないか！！」

咲夜「そうよ、これからの事なんてどうにでもなるわ！！」

ドラ「しかし…Tーウィルスなんて22世紀じゃ存在しなかった筈なんだけど…」

出来杉「恐らく、この無数にある未来の中でもこの世界の未来はTーウィルスが存在する歴史になってしまったんじゃない…」

零「確かに、俺も本来なら存在すらしない人間だからな。（ついでに聖奈ちゃんとか咲夜さんもだけど）」

皆、疑問に思ってた事を口走るが、のび太が決意を込めた表情で話

始める。

のび太「僕は、何をするかなんてもう決めてるよ」

ドラ「のび太君？」

ジャイ「何だ？のび太、まだ何かあるのか？」

のび太「あるさ…僕達の街をメチャクチャにしたアンブレラを許せない…だから」

零「ほほう…奇遇だな のび太、俺も考えていた事だよ」

スネオ「えっ？何だっただよ」

のび太「そりゃあ…」

零「決まっただろ？」

2人は宣言する。

零・のび太

「「アンブレラをブッ潰すのさ!!」」

零とのび太の宣言に一瞬ア然とする一同だったが。

ジャイ「へへへ、脱出した安心感ですっかり忘れてたぜ!!」

スネオ「へえ、のび太にしちゃあ、いい事言うな」

出来杉「僕も、2人と同じ意見だよ」

ドラ「歪んだ歴史を修正しないとね!」

咲夜「フフ…やっぱり零君は、カッコイイわね…私もついていくわ!!
(一生)」

聖奈「私もついていきます!! (零さんに一生)」

しずか「ええ!! (2人に出し抜かれてたまるもんですか!!)」

金田「フン!! 神である私に逆らった事をアンブレラに死ぬ程後悔

させてやるわ!!」

太郎「金田様、最高!!」

安雄「流石だぜ!! God金田!! 俺も一生ついていくぜ!!」

一同、アンブレラを潰すという、零とのび太に賛同した。
若干おかしいが…

のび太「みんな…」

零「(フッフ…良いなあこういうのも)」

何にしても無事脱出出来た、零達これから彼等に待ち受ける物とは?
零達は生き残れるのか?

第一章…地獄の始まり? 完

◆オマケ◆

賛同してくれた一同にちょっぴり感動する2人だったが、出来杉があることに気付く。

出来杉「でも、行動を起こすに当たって資金とかはどうするんですか？」

ジャイ「確かに、これからどうするかなあ、家も無いし…」

聖奈「そうですね…」

零「ああ、その事なんだが、金の事ならなんとかあったぞ。」

零・のび太以外

「「「えっ??」」」

皆一斉に零を見る、すると零は何処からか、アタツシケースを取り出した。

出来杉「なんですか？それは？」

零「まあ、みてな」

そう言いながらアタツシケースを開く、すると中は札束ギッシリ、

金銀財宝ギッシリ詰まっていた。

スネオ「うおっ！！！！こ、これは！！！」

ジャイ「スツゲェ！！！！何だコリヤ！！！！」

出来杉「どうしたんですか！？これ！？」

一同、目をキラッキラツさせながら零に聞く、金田に至っては「クケケ、風○行きたい放題じゃい！！」と、ヨダレを垂らしながら見ている。

のび太「うん、最重要機密データの部屋の隣が武器庫だったんだけど、何故かお金と宝石もあったんだ、それを零さんがありったけ、持って来た……てな感じ」

ジャイ「ほえーやるじゃん零さん！！これだけあれば、食い物には、困らないな！！！」

スネオ「でも、このお金、どれくらいあるのかな？」

零「んーと、このアタツシユケースは一億円分の札束が入るから、

それが2つで二億ぐらい？」

と、言いながらも一つアタツシユケースを引っ張り出す零。

出来杉「に、二億…」

ドラ「凄い（…フッフ、上手く零さんを誘導すればドラ焼き食べ放題…）」

咲夜「まあ、お金は入手出来たから良いとして、家は？」

しずか「確かに、どうしましょ？」

聖奈「借家でも、借りるのには戸籍が必要ですからね…」

零「まあ、あまりやりたくは無いけど、借りる時に貸主を軽く洗脳すれば…戸籍なんて必要無いっすよ？（…ガキの頃の手口だけど…）」

やっと脱出したばかりだというのに、これからの生活について話し合う一同、中々余裕があるようだった。

その頃…零達が研究所を脱出した少し後、何処かの部屋にて、ある男がスーパータイラントと零のタイマンをモニターで見ていた。

ウェスカー「…ほう…あの青年…やはり普通の人間とは違うようだな…ククク…やはりスペンサーやクリス達が存在しないこの世界に飛ばされたのは正解だったな…」

興味深そうに、零の動きを観察しているウェスカー、やがて別の映像に切り替える。

ウェスカー「それに…あの少女…あの男の血縁か…」

モニターに映っているのは…聖奈だった…

ウェスカー「ククク…調度良い…ラクションの時に出来なかった実験を再現してみるか…まずは…このデータをあの男に送るか…」

モニターの映像をまた切り替える、そこに映るのは…DNAの螺旋構造の映像で、タイトルにG・ウィルスと英語で書かれていた。

ウェスカー「…今度こそ…選ばれし物達だけが生きる世界を…」

モニターの電源を全て切り部屋を出るウェスカー、彼の瞳はサンダラス越しに赤く、妖しく光っていた。

第二章に続く……か？

N o 2 9 第一章終了（後書き）

しばらく番外編で繋ぐかも…しれません

脱出の後…（前書き）

番外編スタートです！！

今回で咲夜の年齢を勝手に設定しました。

脱出の後…

第一章にて、無事に研究所から脱出した零・のび太・出来杉・ドラえもん・スネオ・ジャイアン・しずか・咲夜・聖奈・安雄・金田・太郎。

これからどうするか、どう生きるか等…これは、とあるファミレスでの打ち上げから住家を決めるまでの零達を記録した物である。

零 「ってなわけで…無事脱出、出来たぞおお!!!」

一同

「「「イエーイ!!!!!!」」」

只今零一行は、絶賛打ち上げ中である。回りの客は脱出?と、首を捻っているが…

ちなみに席順で咲夜と聖奈としずかが、誰が零の隣に座るかで揉めたのは、言うまでもない。

のび太「いやあ…あの電車が何処に向かっているのか些か心配でしたが、着いた場所が普通に隣街で、良かったですよ」

零「ああ!!! てっきりアンブレラに関係ある施設にでも行くのかと

思ってたぜ」

咲夜「フフン…やっぱり零君の隣は、渡さないわよ？」

聖奈・しずか

「「くっ!!」」

皆、脱出する緊張感から解放されたのかハシャギまくりだ。

ドラ「つてか…皆ハシャギ過ぎだよ…」

出来杉「うん…回りの視線が…」

メンバーの中で比較的常識人の2人は、回りの視線が痛いようだ。

ジャイ「なくに、言ってやがる!! 無事脱出出来たんだ、もつと喜べや。」

スネオ「そうそう」

ドラ「ハア…仕方ないね…出来杉君」

出来杉「うん、今日だけは、嵌めを外しますか…」

金田「フハハハ！！やはり世界は神である私を中心に廻っておるわ！！！！」

太郎「金田様！！ステキ！！」

安雄「流石ですぜ！！！！KING！！」

しばらく、1時間くらいハシャギまくった一同、途中テンションが最高潮に達したジャイアンが「ジャイアン・リサイタルだ！！」とか言って店の中で、歌おうとするジャイアンを皆で全力で止めたのは、別の話。

段々皆が、落ち着いてきた所で、零が本題を口にする。

零「で…だ、これからの事を電車で話したと思うが、今一度整理するぞ」

のび太「はい」

一同が零の言葉に耳を傾ける。

零「俺達は、これからアンブレラを潰す為に行動する…これはいいな？」

一同

「「「はい」」」

零「んで…なにか意見はあるか？」

出来杉「うーん…只、アンブレラを追求するにしても色々必要だからね」

スネオ「まあ、とりあえずは住む家が欲しいよね」

ジャイ「それは、言えるぜ！！」

聖奈「でも…金田さん以外未成年だし…前にも言ったけど部屋を借りるには、戸籍等が必要なんですよね…」

ドラ「でも、僕達って死んだ事になってるんですよね？戸籍が存在してるかどうか…」

零「ああ、そこんところは、俺がなんとかするから大丈夫だよ」

のび太「何とかって？」

のび太の問いに零が自分のこめかみを指で2・3度叩く…まあ要は、貸す相手を洗脳するのだ。皆は、納得したようだ。

出来杉「それで…現時点での僕達の活動資金が2億弱ですか…」

ドラ「ちょっと…心許ないですよね…」

零「まあ…イザなったら銀行の店長を洗脳すれば、いい話しだけだな」

のび太「零さん…それ犯罪ですよ…」

サラッと犯罪的な事を言ってる零に突っ込むのび太。

零「じゃ、まあ打ち上げもここまでにして、手分けしてアパート捜しでもするか。」

一同

「「はい!」」

ファミレスを後にし、手分けして借家探しをする事になった。
結局なんだかんだで、直ぐに決まった。

場所は、駅から徒歩5分で2LDK、家具・家電完備の家賃9万と
いう安いんだか高いんだか訳がわからないマンションに決まった。
ちなみに家賃は、管理人とその他諸々の人物を零の「人心支配」で、
住む限り一生無料で借りれる事に成功した。

そして部屋の中にて。

零「ヨッシャ！！洗脳成功だ！！！」

のび太「搜索から手続きまで随分、飛ばしたような気がします…」

出来杉「しかし…随分立地条件がいいですね」

ドラ「元あった家より、住み心地が良さそうだよね」

スネオ「まあ…僕が住むには、まあまあかな…」

ジャイ「しかし…なんでまたこんな高そうなマンションにしたんだ
？」

零「ああ…それはだな…近くに昔懐かしい感じの銭湯があったからだ！…！」

出来杉「ま、また随分とアレな理由ですね（汗）」

零「いやさゝ俺こう見えても風呂メツチャ好きなんだよねゝ」

しずか「えっ！？零さんお風呂好きなんですか！？私もです！」

零「おゝそういや、しずかちゃんも風呂好きだったね。」

金田「ホホウ…霧生君…君とは、話が合いそうだな…」

零「あっ！金田さんも好きなんですか！？いいですよゝ」

金田としずかの3人で風呂について語っていると出来杉とのび太が
気まずそうに零に話し掛ける。

のび太「あのゝ盛り上がってる所悪いんですが…ちょっと聞きたい
事が」

零「ん、何？」

出来杉「女性組の人達とは別々の部屋じゃないんですか？」

零「あ…」

何かを思い出したような感じで、しずかとさつきから下を向きながら黙ってた咲夜と聖奈を見た。

零「やっべ…普通に忘れてた…どうすっかな…」

のび太「流石に一緒の部屋じゃマズイですよ？いくらなんでも…。」

出来杉「うん、プライバシー的な…」

ドラ「うん…一応この部屋お風呂が完備されてるから、事故なんて起きたら…」

ドラえもんとのび太と出来杉が零に進言するが、他の男共が黙っちゃいなかった。

零「しょうがねえな…また管理人を洗脳―「ちよつとまった！…!!」し…は？」

言葉を遮られる零、

安雄「いいじゃん一緒に部屋のでも!!」

太郎「そうだよ!!」

スネオ「僕も一緒に良いと思うよ」

ジャイ「うんうん!!」

金田「キキキ…私も一緒に良いと思うがね…」

零「な、なんだあ? お前等いきなり…」

安雄・太郎・スネオ・ジャイアン・金田の様子の変わり様に若干ビ
じる零。

安雄「だってさあ…管理人が言ってたよ? 一つしか部屋空いてない
って(ケケ…嘘だけだよ…)」

零「え? 言ってたっけか? そんな事…」

太郎「言ってたよ」（子供の振りしてお姉ちゃん達と風呂〜）」

スネオ「いや…零さん聞いて無いだけで普通に言っていましたよ？（ククク…これで上手い事いけば…）」

ジャイ「そうだぜ！！零さんは洗脳する時にしかその場に居なかったから、知らないだけだぜ（上手く行けば聖奈さんと一緒に部屋）」

金田「まあ…別に狭いって訳では無いんだしわざわざ別にする必要無いのではないか？…（フッフッフ…プチ桃源郷じゃい！！）」

言葉巧に、零を丸め込もうとする5人、でも全員下心全開だ。

零も5人の言葉（表の）に傾きかけるが、ドラえもんのび太と出来杉が反論する。

出来杉「ちよっ、ちよっと待ってよ！！そんな事言ったっけ！？」

のび太「そうですよ！！！！大体、只でさえ危険事考えてる人が大多数いるメンバーと女の子を一緒に部屋に出来ないよ！！」

ドラ「そうだ！！のび太君の言うとうり！！」

のび太のごもつともな意見で、凶星を突かれたジャイアンがキレる。

ジャイ「なんだと!! のび太の癖に俺様に意見する気か!!」

のび太「フン!! こればかりは、譲れないよ!!」

零「お、オイオイ!!」

ジャイアンがのび太の胸倉を掴む、それを止めようとする零。

スネオ「ジャイアンのび太!! : : : ちょっと待って!! : : :」

ジャイ「なんだ! スネオ! 止めるな!! これは男の戦いだ!!」

スネオ「まあまあ、いいから: : : 2人共こっちに来て」

スネオが2人を連れて部屋の隅に言ってゴニョゴニョと喋り始めた。
ちなみに聖奈・咲夜・しずかは、3人で何やら話し込んでいる。
やがて話し終わったのか戻って来る3人。

出来杉「のび太君? 何を話してたの?」

のび太「えっ、別に！？それより零さん！部屋は一緒の方が良いと思いますよ！？」

出来杉・ドラえもん

「「のび太君！！！！？」」

零「おいしい！！何があったああああ！！！！」

のび太の変わり様に、突っ込む3人。

のび太「いやあ、思い出しんですが、確かに部屋が1つしか空いて無いつて言っていましたよーハハハ…（しずかちゃんと一緒の部屋く
♪）」

ドラえもん・零・出来杉

「「「買収されやがった！！！！？」」」

まさかの、のび太の買収にますます不利になった3人。
だが、ここで終わらせる訳にはいかない。

出来杉「皆、肝心の咲夜さん達の意見を聞いて居ないじゃないか！

！」

ドラ「そうだそうだ!!」

のび太「ウグッ!確かに…」

零「ってな訳で、咲夜さん達はとうする?やっぱり別々の部屋の方がいいだろ?」

男共全員で咲夜達3人を見る、片方の男共は「断るな」と念を入れまくりだ。

咲夜達の答は…

咲夜「私は、べ、別に一緒でも良いわよ。」

聖奈「わ、私ものです」

しずか「わ、私も…」

変態共

「」「」「イエース!!!!!!」

まさかの回答に男共6人は、互いに抱き合ったりガッツポーズしたりと喜びまくった。

零達は、まさかの回答に突っ込んだ。

零「お、オイオイ！！！！ちょっと色々待てや！！」

出来杉「そうですよ、咲夜さん達正気ですか！？」

ドラ「危ないですよ！？」

だが、咲夜達は。

咲夜「別に…わざわざ部屋を別々にする必要ないし…」

聖奈「それに…何かあっても零さんに守って貰えそうですし…」

しずか「なら、近い方が良いかなあ…なんて…」

零「うっ！…随分と信用されてるな…俺。」

若干、照れる零、結局咲夜達の意見を聞き入れ一緒の部屋にする事にした。

零「まあ…なら…いいか…一緒に…」

男共

「「「イヤッハー！！！」」」」

出来杉「うゝん、心配だなあ…」

ドラ「…大丈夫かなあ…」

咲夜・聖奈・しずか

「「「計画通り！！！」」」」

出来杉とドラえもんは、これからの事が果てしなく心配になり咲夜と聖奈としずかは、どこかの天才のような黒い笑みと言葉を心の中で思ったとき。

続く

○オマケ○

ファミレスにて聖奈が言った一言について。

零「…咲夜さんが、未成年？」

聖奈「あれ？知らなかったのですか？」

零「…ああ」

咲夜「へえ〜？幾つに見えたの？」

零「俺は、てっきり二十歳は越えてると思ってました。」

咲夜「ハア〜零君…私、18歳よ？」

零「なっ！俺と同年！？マジかよ…」

咲夜「なるほどね〜だから私に敬語使ってたのね？」

零「は、はあ…スイマセン…」

咲夜「まあ、良いけどね…というか零君も18なんだ…」

零「以外ですか？」

咲夜「うん…16くらいだと…」

聖奈「私は、逆に二十過ぎだと…タバコ吸ってたし…」

しずか「まあ…私は最初にあった時に未成年って自分で言ってたから分かってましたけど…」

零「…16って咲夜さん…俺ってそんなにガキっぽいですかね…」

咲夜「いや…私に敬語使ってたから…」

零「はあ…まあ良いんですけどね。」

咲夜「まあ！同い年だって分かったし！！敬語じゃなくて良いわよ？」

零「うゝん、咲夜さんには敬語使うの慣れてしまったんで…」

零の答が不服だったのかムツとした顔になる咲夜。

咲夜「えー!! いいじゃない!! なんで聖奈ちゃんやしずかちゃん
は、普通に話して私だけ敬語なの?」

零「いや…だから…なんか咲夜さんには、敬語の方が良いような気が
します…ってちょっと…後ろから首締めないでくださいよ!!」

零が敬語を止めない為、後ろから抱き着く咲夜。聖奈としずかは、
メツチャ咲夜を睨んでる。

咲夜「締めてないわよ、抱き着いてんのよ!!」

零「そういう事は、好きな人にでもやってくださいよ!!」

咲夜「なっ!!…ボソッ―鈍感すぎるわよ…」

聖奈・しずか

「「咲夜さん…ずるい…」」

出来杉「…零さん…いい加減気付いてくださいよ…」

ドラ「大変だな…零さん」

「「「(零、何時か殺す!!!!)」」」

全く気付かない零に、嫉妬しまくりの男共だった。

終了

脱出の後…（後書き）

何時も感想ありがとうございます！！

ここで、お知らせなんですけど、第二章に入るにあたって、しばらく番外編を書いていくのですか。皆さんが執筆している小説の主人公キャラをこちらに、ご出張させて頂ければ…なんて思っちゃったりしてます。

？話の内容は、うちの小説のメンバーキャラと一緒に何故か、銭湯に行く話。

？今話で住む事になった、マンションで何故か鍋大会をする話のどちらかです。

まあ…この話を書くのは何時になるかは分かりませんが…「別にうちの小説から出してもいいぜ！！」っていう人がいれば参加…して…貰えるといいなあ…と思います。

それでは感想お待ちしています！！！！

……………来るかなあ…

ザ・復活とお詫び（前書き）

誕生日の日に携帯復活！！と喜んでいましたが緊急事態が発生！！

内容は、本文にて：

ザ・復活とお詫び

超人類 「ソ○モ○よ…私は、帰って来た〜!!」

零 「…なんだ？久しぶりに出てこれたと思ったらこんな始まりかよ…」

のび太 「仕方ありませんよ…此処の作者は、馬鹿なんですから…」

超人類 「…オイ…聞こえてるぞのび太…」

零 「ってか、何？この話は？本当なら、別の作品から主人公キャラが来て頂ける話じゃなかったのかよ？」

のび太 「そうですよ、早く兄貴に会いたいのに〜」

超人類 「ああ〜いや…実はさ…」

零・のび太

「「あ？」」

超人類「携帯がストップしちまってる間にネタをすべて忘れてしまったんだよ…」

零「…」

のび太「…」

超人類「あのーお二人さん？」

零「ハアアアア!!??」

のび太「どういう事ですか!!??」

超人類「いや…だから、携帯が…」

零「んな事じゃねえよ!!どうするんだよ!?!結局何気に出張して頂けた人が居るんだぞ!!??」

のび太「やばいじゃないですか!!??どうするんですか!!」

超人類「落ち着け!!馬鹿!!」

零「テメエに言われたかねえよ！！ボケ作者！！これが落ち着いて
いられるか！！」

のび太「事と次第によっちゃあ半殺しに…」

超人類「だ〜から！！ちょっと落ち着けて！何も企画がオジャ
ンになった訳じゃねえ！！携帯を復活する間に企画のネタが消えち
まったから、少し企画ネタの投稿を、後にして欲しいんだよ！！」

零「…イヤイヤ…そんなに待ってくれるのかよ…」

のび太「ちなみに、企画は何時頃の投稿で？」

超人類「早くて5話位後、最悪、第二章の間になるな…」

零「アツチャ〜どうしようもねえな…」

のび太「救いようがないとは、まさにこの事ですな。」

超人類「大丈夫…じゃ無いかも知れないけど…次の話から、後書き
に多作品のキャラを試験的に出演させて頂く。」

零「…オイオイ勝手にマズインじゃ…」

のび太「それこそ、怒られますよ?」

超人類「…まあ…そこは博打って事で…」

のび太・零

「「博打にするな!!!」」

超人類「そういう訳で、＊さん フォントムさん 矢部野 和麻呂さん だちけんさん 仮面ライダーディケイドさん、申し訳ありませんが、これからしばらくリハビリがてら後書きに主人公さんを出演させて頂きます。嫌だよと言う人は感想に書いて欲しいです。」

零「…果てしなく、不安だ…」

のび太「僕もです…」

ザ・復活とお詫び（後書き）

つてな訳で感想お待ちしています。

携帯ゲーム機でゲームをする時は、部屋を明るくしてプレイしろ。ちなみにTV

19才かあ…後一年経てば税金を払う年になるのか…嫌だなあ

てな訳で、しばらくリハビリ投稿です。今回は、無駄に長いタイトルだけど内容は薄いです…ハイ

携帯ゲーム機でゲームをする時は、部屋を明るくしてプレイしろ。ちなみにTV

零達が、マンションを住家にして早数日…アンブレラについて特にこれといった、情報も無くダラダラと時間が過ぎて行った。

この話は、欲望に駆られた人間のお話。

零「あれから数日か…暇だな…アンブレラの情報も無いし…うしっ…ヘッドショット!」

のび太「まあ…あれだけデカイ組織ですからね…中々尻尾は、出しません…よっと!」

スネオ「焦っても仕方ないですし…気長に行きましょうよ…って! 誰だよクレイモア地雷なんて小賢しいトラップ仕掛けたのは!」

安雄「フフン…スネオよ、それを仕掛けたのは俺さ!―っておわ!いきなり切られた!クソッ!ステルスなんてありかよ!?」

ジャイ「うおおお!!!俺様のRPGー7が火を噴くぜ!!!」

出来杉「危な!!!武君、見境無くロケットランチャー撃たないでく

れよ！」

ドラ「ふふふ…ステルス迷彩で姿を隠しつつ刀で切りつける…最高の作戦だね」

聖奈「よし…このSVDで…」

咲夜「私は、やっぱりM870が使い易いわね…」

しずか「あら？あんな所にロケットランチャーを乱射しているの…よし、このMk23（ソーコム）で」

太郎「あはは、このP90サブマシンガンの火力は、最強さ」

金田「フンッ！！神である私には、やはりこのAKS-74Uが手に馴染むな！」

皆が何やら、武器の名前を言いながらP○Pのボタンやアナログパッドを操作している、ちなみにゲームのタイトル名が、メ○ルギアソ○ッドポ○ブルオ○ス+である。

本来ならこのゲーム、最大6人対戦なのだが、零と出来杉とスネオの3人が色々といじくり、12人対戦を可能にした。

（とりあえず、のび太達の世界にPSPが存在してる筈が無いとい

う事は置いとく。」

零「おっと、時間切れか…1位はスネオかぁ…流石だな。とても初めてやった動きじゃねえよなぁ…」

のび太「アイツは、以前からゲームやら色々持っていましたからね。」

ドラ「うん、それで何時ものび太君は、仲間ハズレにされてたよね…」

のび太「うっ…ドラえもん…傷をえぐる真似は、止めてくれよ…」

スネオ「まっ！僕に掛ければ、こんな物かなあ」

出来杉「流石だね、骨川君は。」

咲夜「本当、上手ねえ…」

聖奈「骨川君が輝いて見えます。」

しずか「ええ。」

スネオ「あっははくそうかなあ。」

女子がスネオを、褒めちぎるので更に有頂天になるスネオ、だがそれを良しとしない奴らが大多数いたのだ。

零・ドラえもん・出来杉以外の男共がスネオに向かって、

「「「あんの、狐顔があく」」」

と、嫉妬パワーを全開にしていた。
やがてジャイアンが、

ジャイ「このまま、負けっぱなしは、俺様の気が収まらねえ…オイ
！！もう一回やるぞ！！」

「負ける」という単語が大嫌いな、ジャイアンがそういう。

零「うゝし、いいだろう…俺も何時までも最下位は、嫌だしな！」

スネオ「まっ！別にいいよ、どうせまた僕が勝つし」

のび太「なら次は、個人戦では無く、チーム戦にしない？」

出来杉「いいね、個人戦だけじゃ飽きちゃうしね」

ジャイ「おお！皆は、どうだ！？」

一同

「「賛成！！」」

そういう事になり、早速チーム分けを決めようとなったが、スネオがある提案を出す。

スネオ「このまま、只戦ってもつまらないから、今度負けたら、罰ゲームを決め無いかい？」

この言葉で、一斉にスネオを見る一同。

零「罰ゲームだあ？」

出来杉「例えば？」

スネオ「そうだね…今から始まるゲームで1位の人、好きな人に
一つだけ命令できる」

この言葉に、零・出来杉・ドラえもん以外の空気が変わった。

金田「一位の人は…」

太郎「好きな人に…」

安雄「命令…」

ジャイ「出来る…」

聖奈「という事は…」

咲夜「あんな事や…」

しずか「こんな命令も…」

のび太「不可能じゃ無い!」

ドラ「え？何、この空気は…？」

基本、欲望に忠実なメンバーの変わり様に、ビビる零とドラえもと出来杉。

スネオ「とまあ、罰ゲームはこんな感じでどうだい？」

スネオが皆に確認を取ると欲望に忠実な奴らは…

「「「賛成賛成！！超、賛成！！！」」」

阿呆みたいに、息がピッタリだった…残り3人の意見すら聞かずに。

零「何だろう…嫌な予感が…」

出来杉「あれだけ、賛成してる人がいるので、反対しても無駄ですね…」

ドラ「ていうより、なんであんなに息がピッタリなんだ？リハでもやってたみたいだよ…」

あのメンバーの中で比較的常識人の3人の意見等無視されたまま、決まってしまう。

そんなこんなで、チーム分けが始まる。
ちなみに、チーム分けは以下のとうり。

何かにつけ絶対に苦勞してしまうチーム

零

出来杉

ドラえもん

なんだかんだで悪友3人チーム

のび太

ジャイアン

スネオ

ザ・欲望マシンガンズ

金田

安雄

太郎

零の事になると見境が無くなってしまふよチーム

咲夜

聖奈

しずか

チームが決まり各々のチームで作戦会議が始まる。

零チーム

零「ちよつと待てよ…チームのバランス悪くねえか？」

出来杉「うん、確かに…僕達のチームってビリ3に入る位ゲーム下手な人達の集まりだよ…これ」

ドラ「それに比べて…」

3人は、回りのチームを見渡す、確かに他のチームのバランスは合っている。のび太達のチームは断トツにゲームが上手い奴らの集まりだし、金田達のチームも変態3人が集結しているし（この3人が徒党を組むと、のび太達のチームに匹敵する）、咲夜達のチームも中々強いのだ、それに比べて零達のチームは、個人戦ではこの3人のビリ争いをする程、弱い者の集まりだった。

零「まあ…決まっちゃった事を嘆いたって仕方ない…要はビリにな

らなきゃいいんだよな！うん」

ドラ「ですね！」

出来杉（でもなんだろう…何か仕組まてた感が…）

モチベーションを上げる零達、出来杉の勘が当たってるとも知らずに…

のび太チーム

ジャイ「上手く行ったな…スネオ…」

黒のび太「ククク…流石、アミダに細工して零さんのチームを最弱にして咲夜さんのチームを3人共女の子にするなんて…」

スネオ「フツ、僕に掛ければこんな事造作もないさ…」

どうやら零達のチームを弱くするように仕組んだのはスネオのようだ…策士め…

スネオ「これで僕達が、勝てば…咲夜さん達にあゝんな事やこゝん

な事を」

ジャイ・のび太

「「うおおおお!!!!燃えるぜ!!」」

或は、只の馬鹿チームである。

金田チーム

金田「フッフッフッ…これで1位になれば、零君から50万円位のお小遣をもらってキャ○クラに行くぞ!」

太郎「イヤッホーイ!!」

安雄「ですが、K I N G…チーム分けを見ると女の子は一つのチームに固まっていますが…」

金田「ククク…あの3人は部屋が同じなんだ…何時でも襲えるからな…それより先に他の女を知った方が色々といいだろう?」

金田の言葉にハッとする安雄。

安雄「成る程！！流石ですぜEMPEROR金田！！」

金田「ワハハハ！」

相変わらずの馬鹿っぷりだった。

咲夜チーム

咲夜「フフ…何故だか知らないけど、スネオ君が私達を1チームにしてくれたわね」

聖奈「ええ…これで作戦が成功しやすく…」

しずか「1位になれば…私達で零さんを…」

咲夜・聖奈・しずか

「「「フフフ」」」

自分達が狙われてるとは知らずに、零に対し何かよこしまな事を考える3人。

零「何だろう…もの凄い寒気が…まあいいや…おーし!! そろそろ
始めっぞ!!」

一同

「「「よしっ!!!!」」」

一斉にPSPを持つメンバー達果たして、この欲望渦巻くゲームの
勝者とは!?

次回に続け!!!

携帯ゲーム機でゲームをする時は、部屋を明るくしてプレイしろ。ちなみにTV

後書きショーキャラ崩壊注意!!

超人類「ってな訳で!! 前回言ったとおり、後書きショー始めるぞお!!」

零「なんで、アイツあんなに無駄にテンション高いんだよ…」

のび太「何でも、前回の投稿の時に、後書きにも出しても良い…というお優しい作者様がいらしたらしいですよ?」

零「ふ〜ん? で? 今回は、誰が来るんだ?」

超人類「お前等ビビるぞ…なんと!! 今回は、矢部野 和麻呂さんの作品の『魔法少女リリカルなのは ANOTHER AGITO STORY』から木野 薫さんだあ!!」

木野「という事で初めまして…零君にのび太君、こうして会うのは始めてですね?」

零「おおおお!!??? き、木野さん!!」

のび太「ほ、本物だ…」

木野「そんなに驚かなくても…（汗）」

零「いや、驚くなというのが無理があるぜ…やっべ…感動してきたよ…あ、あの！！握手して下さい！！」

のび太「ぼ、僕も！！」

木野「ハハハ…良いですよ？」

こうして木野と握手をした零とのび太だった。

のび太「か、感動だ…」

零「くそ〜カメラとかあれば一緒に写真がとれたのに〜」

木野「残念ですね…ではそろそろ時間らしいので私はこれで」

零「もう時間かよ…」

のび太「まあまあ、もしかしたら企画の時にまた会えるかもしれないよ！」

木野「ええ、そうですね、また会いましょう！」

そう言った瞬間光に包まれて、木野は自分の世界に帰っていったのだった。

終了

矢部野 和麻呂さん！

という感じなんですけど…どうですかね？

すっげえ自信は、ありませんでしたが…

コイツ誰だ！？って感じかもしれませんが…

私の文才だとこれが限界です…ハイ（汗）

欲望渦巻くゲーム大会く零達の作戦編く(前書き)

なんだろう…何故こうなったんだ？作者にも解らない…

あつ！後書きゲストの事なんですけど順番は、ランダムになってしまします…スイマセン…

欲望渦巻くゲーム大会〈零達の作戦編〉

前回…個々の欲望を胸にゲーム大会が始まった。

ルール説明

？4チームに別れてのチームデスマッチ

？チームの持ち点は20

なので20点失うとその場でアウト

？禁止武器は、S・A・Aシングル・アクション・アーミーのみ理由は、弾が跳躍するため。

？禁止行為…フルトン回収・プレイヤーの邪魔等の迷惑行為。

？零は、コンプリート完全等の能力を発動禁止。

？以上の事を踏まえ、正々堂々戦え!!!

※注意!!! 今回の零達の会話は、ゲームの中に入った…みたいな感じの会話だと想像してください。（決してゲームの中には、入ってませんが）

ちなみにチームの色は。

零チーム…赤

のび太チーム…青

金田チーム…黄

咲夜チーム…白

開戦前のミーティング。―零チーム―

零「俺達の作戦は、まずは様子見で他のチームが潰し合った後に一気に攻撃…でいいんだよね？」

出来杉「ええ…さっき話した作戦を成功させ無い限り、普通に戦ってもまず勝ち目はありませんからね。」

ドラ「なら、まずは姿を隠さない…」

零の能力を封じられてる為例の作戦とやらで戦う事にした。

のび太チーム

スネオ「よし、まずは零さん達を攻撃しよう」

聖奈「そうですね…後の2チームは、適当に潰し合って貰えば…」

しずか「私達が1位になって」

咲夜「零君に命令できる…」

聖奈「そしたら3人で…」

しずか「零さんと…」

咲夜・聖奈・しずか

「「ウフフフ」」

メツチャ危険な事を考えていた3人だった。

余談だが、この時零は人生で一番の悪寒が走ったらしい。

遂に戦いが始まった。

ちなみに場所は、港になった。

零「よし、2人共……！まずは、姿を隠す……ってぐわ……！」

出来杉「零さん!?!—ってうわ!!僕も!?!」

ドラ「ぎゃああ!!!!」

開始早々、瞬殺された3人。零チームの持ち点—残り17—

それもその筈…

—港・西倉庫の屋根にて—

のび太「フッフ…先ずは零さん、貴方達から潰していきますよ…」

別の場所—貨物船の屋上—

安雄「ククク…モテる奴は、死ね」

これまた別の場所。

—東倉庫の屋根—

聖奈「フッフ…零さん?待ってて下さいよ?..」

3人共スナイパーライフル（SVD）で開始早々3人を狙い撃ったのだ。

ちなみに、安雄の言葉に何気に気付か無い人も居るかも知れないが、実はこの3人は何気にモテるキャラで編成されたチームである。

零は…まあ省いて。

出来杉は、勉強・スポーツその他諸々なんでも出来る為、小学高に通っていた時は、クラスの女の子にモテモテだった。

ドラえもんは、言わずと知れながら国民的マスコットキャラなので全国の女の子にモテモテなのだ。（しかもミーちゃんという彼女がいる）

なので他のチーム（特に男共からの）恨みを買うのには充分なのだ。それはまあ置いといて。

零「い、いきなり、3点失ってしまった…」

出来杉「これって…」

出来杉が他のプレイヤーの顔を見ると…

「「「ニタァ」「」」

と、物凄く寒気のするようなニヤけ顔で3人を見る。

零「お、オイオイ…まさか…」

ドラ「多分、3チーム共僕達を潰しに、掛かってますね…」

出来杉「さ、最悪だ…」

零「何でだよ!？」

出来杉「大体予想は、つきますよ…（大方零さん繋がりだね…）」

零「ちっ!とりあえず逃げるぞ!」

3人は、固まりながら逃げる。

「「「フッフッフ〜逃がさないよ」」「」」

だが、そうはいかないと他のチームも幽鬼の如く零チームを追い詰めようとするのだった。

開戦から10分後：

港・貨物船―船内：

零「ちっ、残り6機か…だけど…」

出来杉「ええ…例の作戦は成功しましたね…だけど他のチームの残機は、僕達以上にありますが…」

ドラ「やっぱり、アレを執行するには時間が掛かりましたね…」

零「ああ…さて、次はどうするよ…」

出来杉「今度は、こちらから戦いを仕掛ける事にしますか。」

ドラ「ようやく…逆襲の時が来ましたねえ」

零「クックック…だな」

零達が、例の作戦とやらを成功させ攻撃に切りかえようとした…その時だった！

金田「ガハハハ！見つけたぞお！！」

「「「ッ！！」」」

安雄「モテる奴は死ぬ…」

太郎「大人しく…死んで？」

金田チームが総力を集結して襲い掛かって来たのだ。ちなみに金田チームの残機は9

零「早速お出ましか…行くぞ！！フォーメーションAだ！」

出来杉「ハイ！！！！！！」

ドラ「ステルス迷彩発動！！」

ミーティングの時に、決めたフォーメーションで金田チームを迎え撃つ。

金田「小癪な…行くぞ2人共!!」

安雄・太郎

「「はっ!! KING!!」」

一斉にアサルトライフルを構えて零達に向かって撃ちまくる。
だが零は、シールドを装備して金田達の猛攻に耐える、その隙にステルス迷彩を装備したドラえもんが安雄に近づき刀で切り付けた。

ドラ「はっ!!!!」

安雄「な、何だとお!!!! またその作戦かい!!」

金田「ぐっ!! おのれえ!!!!!! これでも喰らえ!!!!!!」

金田がドラえもんに向かってサブマシンガンを撃つ、弾はドラえもんの頭に当たり一撃で沈む。

ドラ「ぐっ!!!! やられた…だけど。」

零「フハハハ!!!! 油断したな!!!! ぐたばれ!!!!」

零がP90サブマシンガンを構え金田に向かって撃ちまくる、ドラえもんに気を取られていた金田になすすべも無く沈む。

金田「そんな馬鹿なあ！！王であり神であるこの私があああ！！」

太郎「か、金田様！！！！クソく金田様の敵！！」

金田を倒された太郎が怒り狂い零にむかってグレネードを投げ付けようとするが。

出来杉「よし、引っ掛かったね！！」

これを待ってましたとばかりに出来杉がRPG-7ロケットランチャーを太郎に撃ち込む。

太郎「そ、そんなああああ！！！！！！」

RPG-7の爆撃をモロに喰らい、一撃で死んでしまった太郎だった。

金田チーム残り9機

零「よし…作戦は成功だな…」

出来杉「ええ…シュミレーション通りですね！」

ドラ「動きが読めた…これなら…勝てますね！」

最初の方の動きとはまるで違う零達に金田チーム達が騒ぎ出す。

金田「な、何だ！！貴様等！！さっきまでとは動きが違うぞ！！」

安雄「どういう事だ！？」

太郎「僕なんて攻撃すら当たらなかったよ…」

零「クツクツ…これから脱落するチームに言った所で意味は無いよ…」

出来杉「そういう事なので…」

ドラ「僕達に戦いを挑んだ事を後悔してくださいな…」

零・出来杉・ドラえものの3人は、一斉にグレネードのピンを外した後、金田達の居る場所に投げまくった。

金田・太郎・安雄

「「ギャアアア!!!!」」

それから零チームは、初めの方の時とは考えられ無いような動きを見せ、無傷で金田チームの残機を0にして勝利したのだった。

金田「そ、そんな…キャバクラが…」

安雄「女の子とイチヤイチヤが…」

太郎「金田様のお役に立て無かった…」

金田達がゲームオーバーになって絶望に打ちひがれているのを尻目に、零達はさっさと去っていったのだった。

零「次は…のび太達に世話になったから…アイツ等を潰すか…」

出来杉「ええ…のび太君達を倒せば、後は楽ですからね…」

ドラ「待っててねえ…のび太君…フッフ」

零チームの静な復讐劇が幕を開けた。

零チーム残り5機―

金田チームが全滅あとの各チームの反応

のび太チーム

のび太「な！？金田さんのチームが全滅！？」

スネオ「馬鹿な！！金田チームは、僕達と同等の実力のチームだぞ
！？」

ジャイ「オイ！！次は、こっちに向かってくるぞ！！」

咲夜チーム

咲夜「一体どうなってるの！？」

聖奈「あのチームは、ゲームが下手な筈なのに…」

しずか「次は、のび太さんの所に行つたみたいだけど…」

零達の異常な実力の上がり具合に、疑問を感じた他のメンバー、のび太がその疑問を零にぶつける

のび太「零さん…なんでそんな急に3人共実力が上がったんですか？」

ジャイ「そうだぜ!!! おかしすぎだ!」

スネオ「まさか零さん…能力使つて無いですよね?」

金田「なんだと!? 貴様…能力は禁止の筈だぞ!?!」

安雄「オイ!!! だとしたら反則負けだぞ!?!」

咲夜「零君?」

皆勝手に零が能力を使つてると思い込んでいる。だが当然だが零は、能力を使っていない。

零「オイオイ…能力なんて使う訳無いだろうが」

出来杉「そうですよ？」

ドラ「言い掛かりは、良くないなあ…」

ジャイ「このっ！…なら何だってんだよ！？」

小憎たらしい零達の喋り方にイラつとしたジャイアンがキレる。

零「うーん別に教えてもいいんだけど…」

そういつつ出来杉とドラえもんの方を見る零。出来杉とドラえもんは黙って首を縦に振る、要はしゃべってもいいという事だ。

零「ああ…分かった…話すよ…」

例の作戦の内容を話す事にした零。
皆一斉に零の顔をみる。

零「簡単だよ、お前等と正面から戦っても勝ち目が無いから、最初の方は、逃げまわってお前等の動きを見た後3人でシュミレートしただけさ。」

と、さも簡単な話さ…みたいな感じで話す零に、仰天する他のメンバー。

スネオ「ちょっ！シュミレートって…」

のび太「そんな馬鹿な！！開始してから10分しか経って無いのにそんな事出来る訳が無いですか！！！」

言葉が信じられないと騒ぎ立てる2人。だが零は。

零「フフン…俺は能力を使わなくても、ある程度動きが見切れるんだよ？しかも、出来杉君とドラえもんは頭がいいからな。」

能力を発動し無くてもある程度動きが見切れる…という事実にはビツクリした一同。

咲夜「くっ！確かに3人は頭がいいから、不可能では無いわね…」

そう、零達のチームは、頭が良いチームの集まりだったのだ。それをフルに活用するのが例の作戦だったのだ。

零「フフフ、能力さえ使えば一瞬で動きが見切れたんだが…能力は使えない…だから3人の力を合わせたって訳さ」

出来杉「まあ…その変わり15機も消費したけどね…」

ドラ「でも今の僕達なら充分だ…さあ続きを始めようか？」

妙に不気味な零達の喋り方に寒気を感じるのび太チームと咲夜チームだった。

次回…のび太チームとの決戦!!!!

欲望渦巻くゲーム大会く零達の作戦編く(後書き)

後書きショー

零・のび太

「…」

超人類「オイ!!!二人共テンション上げろよ!!!」

零「上げろって…」

のび太「本来なら…企画だった筈なのに…」

超人類「ルセエ!!!お前等あ!今回のゲストはマジでビビるぜ。つてな訳でご登場して頂きましょう…地獄の拳と不屈の魔法少女と、仮面ライダーNEW電王×リリカルなのは Strikers + strikeformの主人公…影山 瞬さんと、野上 幸太郎 さんです!!!」

幸太郎「?…あれ?此処は何処だ?確か俺は、なのはの奴に追いかけて回されていたんだが…」

影山「なんだあ…此処は…?俺は確か浅倉さんと話していた後にフアリンの奴に見つかったから逃げていた筈なんだが…」

零「うおおおお!!!幸太郎さん!!!」

のび太「あ、兄貴!!!」

幸太郎「うお！！ってお前等確か、零に…のび太か？」

影山「何で、お前等が居るのさ…」

零「いや、うちの馬鹿な作者が勝手に…」

のび太「スイマセン…」

幸太郎「ああ…話なら聞いてたから別に平気だぞ。」

影山「俺も兄弟に逢えたからな文句はないぞ…」

零「そう言っ頂けるとうれしいッス！！兄貴！！幸太郎さん！！」

黒のび太「まさか、兄貴と幸太郎さんと直に逢えるなんて…ああ…眼鏡が曇る…」

幸太郎「そ、そんなオーバーな（汗）」

影山「分かる、分かるぞ…兄弟…俺も会いたかったからなあ…」

黒のび太「うっうっ…兄貴い…」

厚い抱擁を交わすのび太と影山だった。

幸太郎「何なんだ…あの二人は…」

零「要約逢えたんですよあの2人…俺も似たような気持ちですから分かります…グスッ」

影山（でだ…兄弟…零の奴を捻り潰すのにてこずってるんだって？）

黒のび太（そうなんですよ兄貴…なので企画の時には是非来て一緒に潰してくださいよ…）

影山（まかせろ…俺も幸太郎の奴のせいで、不幸がパワーアップしちゃったからなあ、できれば2人共潰そうぜ…）

黒のび太（分かりました…流石兄貴ですねえククク…）

零・幸太郎

「「な、何だろう…かつて無い位の寒気が…」」

超人類「そろそろ時間切れですので…」

零「マジ！？早過ぎだろ…」

幸太郎「まあ、また企画の時にでも逢えるよ」

黒のび太（では、兄貴…手筈通りに）

影山（ああ…またな兄弟…）

2人は帰っていった。

それぞれのヒロインに又追いかける共知らずに…
ファントムさん、こんな感じですかね？

欲望渦巻くゲーム大会 覚醒と逆襲編（前書き）

そろそろ第二章に入ろうかと思う今日この頃。

そして、先に謝っ時ます…スイマセン今回でゲーム編を終了したかったんですが次回まで先伸ばしにしてみました。

次回…次回こそは！！ゲーム編を終了させます！！

欲望渦巻くゲーム大会 覚醒と逆襲編

前回…零チームが覚醒した。

零チーム残り―5機

のび太チーム残り―15機

ドカーン！ドカドカドカンドカンドカン！ シュパシュパシュパ
バギバギィ！ガンガンガンガンガンガン！↑零チームの猛
攻の効果音。

のび太「うわわわわ！！またやられた〜！！」

ジャイ「この野郎お！！調子に乗r…ぐあ！！」

スネオ「くっ…のび太！ジャイアン！ーって…N O O O O O！！！！
」

零チームの逆襲劇が始まった。

零「のび太チーム狩りじやああああ！！！！」

出来杉「フハハハハ！！！！やはり零さんと組めたのは正確だったよ！！！」

ドラ「ドラ焼き100個じゃあああ！！！！！」

若干「イヤ、かなりキャラが変わっている零達。

のび太「そんな！！何なんだ！？おかしすぎだろ！！！」

ジャイ「す、スネオ！！何とかしろよ！！！」

スネオ「く、クソ！！誤算だった、零さんが実は頭が良いという設定を忘れてた！！！」

のび太チームは後悔した、零チームの能力がこんなに上がるとは予想外にも程があったのだ。

後悔している間にも零達の猛攻は止まらず、着実に残機を減らされるのび太チーム。

零「ホラホラホラ！！！！反撃して来いよ！！さっきまでの元気は、何処に行ったんだあ？ア？ア？」

出来杉「クッフッフ…僕達は無敵ですね…」

ドラ「俺をタヌキと言った奴出て来いやああ!!」

のび太「つ、強すぎる…」

ジャイ「ってかキャラが変わってねーか？」

スネオ「ドラえもんに至っては一人称が”俺”になってるし…予想外すぎだ」

3人のタガも完全に外れているようだ。

零「ナツハハハ!…これでトドメだあ!」

零チームの3人が一斉にRPGー7を構えて固まってるのび太達に発射する。

ドッカーン!!!!

のび太・ジャイアン・スネオ
「「「オーマイ・ガー!!」」」

3人共直撃を貰い、一撃で沈んでいった。
のび太チーム―残り3機

一方の咲夜チームはというと。

貨物船―屋上にて―

咲夜「…流石ね、あの3人…たった10分で此処まで強くなるなんて…」

聖奈「でも、マズイですね…あそこまで強くなってしまったのは、確実に負けますよ？」

しずか「のび太さん達が1機でも多く零さん達から奪えればいいけど…あの様子では、無理ね。」

零チームの力を脅威に感じる咲夜達。

聖奈「マズイですね…これでは零さんに命令が…」

しずか「どうしましょう？」

咲夜「…私に考えがあるわ…」

咲夜が2人を呼び出し何やら作戦を立てている事に気付かない零達は、のび太チームを遂に1機まで減らした。

のび太「な、なんて事だ、残りは僕一人に…」

零「クククク…さあ大人しくヤラレナ…」

零がショットガンを構えて撃とうとしたその時だった。

のび太「こんな所で…僕は…ち、ちくしょう…ちくしょよよよよ
!!!!!!!!!!!!!!」

突然のび太が大声を（若本ボイスで）上げるのでビクッとして少し正気に戻り、銃の構えのコマンドを解除しのび太の方をみる、のび太は顔を伏せている。

零「な、何だ!?!?…ア〇ゴさんの声が…何処からだ!?!」

ドラ「の、のび太君のほうから声が！」

出来杉「何だ！？のび太君の様子がおかしいぞ？」

恐る恐るのび太を見る3人するとゆっくり顔を上げて零達を見る、零達はのび太の顔みて驚愕する明らかにのび太の顔に生気がなく虚ろな目をしながらこちらを見ているのだそしてゆっくりと口を開く。

黒のび太「クソッ！クソッ！！何で…何で！！俺ばっかが不幸な目に遭うんだ！！片想いしてた女の子は、零の野郎に寝取られるし！！しかも当の本人の零は他の女からモテるし！その上イヤミな位イケメンだしよ！！！！！」

零「何時、俺がお前の女を寝取ったんだよ！？モテた事もねえし！イケメンでもねえよ！！！」

突然今までの恨みつらみを吐き出すのび太、零は身に覚えの無い（気付いて無い）事に突っ込む。零チームの2人と咲夜チームはドン引きし、モテ無い男チームはのび太の言葉に多いに頷いていた。

のび太は更に叫ぶ。

黒のび太「もういい！！本当は『兄貴』と一緒にブッ潰す予定だった

たが…今此処で零、テメーを潰す！！！！」

ちよっぴり危ない発言をしながら宣言するのび太だったが。

零「出来杉君…のび太の奴隙だらけだからトドメさしちやえ…」

出来杉「ですね…ハイ…ドーン」

ドラ「でも、のび太君の暴走止まりませんよ？」

零「大丈夫、能力使ったのび太の記憶消すから。ゲームとは関係ないからルール違反じゃ無いしな」

興奮しながら脱落しているとは知らずにPSPを取るのび太。

黒のび太「さあ…くたばれええ！！ぜ…ろ…？」

PSPの画面を見た瞬間固まったのび太、それもその筈、のび太チームの持ち点が0になっていたからだ。

黒のび太「な、な、な、何故じゃああああ！！」

何時の間にかトドメを刺された事に信じられ無いと言ったのび太その場でのたうち回る。

すると、零がのび太の前に行きのび太の頭に手を乗せながら。

零「のび太…さっきの事は、『忘れろ』…」

完全モードに入り洗脳の要領で黒のび太になってからの3分程の記憶を消した。

（しかし、しずかを奪われた恨みは忘れて無い。）

手を離す零、すると…

のび太「あ、あれ？僕は一体…」

零の『記憶消し』で、すっかり忘れてしまうのび太だった。

出来杉「君達のチームは、もう残機が0で負けだよ？」

すかさず出来杉がフォローを入れる。

のび太「そ、そうなんだ…（ちっ、ちくしょおおぅ！！！！しず
かちゃんとのイチヤイチヤがああああ！！！！）」

ドラ「残念だったね、のび太君」

のび太「ま、まあ仕方無いよ…（マズイマズイマズイマズイ
マズイマズイマズイマズイ！！！！これで万が一咲夜さん達が
勝ってしまったら…）」

表向きは仕方無いと言ながらも、内心不安で一杯なのび太だった。
（ちなみに、男共が余計な事をのび太に言わないようにと零が脅し
といた。）

零「さて…少しトラブルがあつたが、改めて再開だな！」

出来杉「これで勝てば、僕達の優勝だ！」

ドラ「優勝した暁には、ドラ焼きを目一杯奢らせてやるぜ！！」

のび太の苦悩に気付か無い零は、咲夜チームの方を見ながら力強く
宣言する。

咲夜「フッフ…遂に決着ね零君…？」

聖奈「正直、最初に脱落してくれると思いましたが…」

しずか「勝つのは、私達ですよ？」

妙に余裕のある喋り方に若干違和感を覚える3人だが、自分達の作戦が破られる事はないと自負している為すぐに切り替えてた。

零・ドラえもん・出来杉「「どちらが最強か…」」

咲夜・聖奈・しずか

「「決めましょうか？」」

お互いに銃を構えながら宣言する。

1分後に咲夜達の余裕の訳を知って後悔するとも知らない零達だった。

零チーム残り―5機

咲夜チーム残り―12機

次号…本当に決着…！！

欲望渦巻くゲーム大会 覚醒と逆襲編（後書き）

後書きショー！！！！

超人類「さあ〜て今日も行ってみましょう！！」

零「うん…もはや何も言わないよ…」

のび太「…右に同じ」

超人類「あ、相変わらず低いな…ま、まあいいやんっん！！それで登場して頂きましょう！！今回は仮面ライダーデイクイドさんの作品『息抜き雑談』から風見大介さんと光 宗谷さんだ！！」

大介「ってな訳でやっと俺達の出番か…」

宗谷「正直待ちくたびれたよ…」

零「ようこそ！お二人さん！！」

のび太「ああ〜出番が遅かったのは、うちの作者が『どういうキャラかイマイチ把握するのが難しいかった』らしいんですよ…」

大介「なんだ？そのしょうも無い理由は…」

宗谷「まあまあ…」

零「いや…本当スイマセンお詫びにうちの作者を4人でサンド・バツクにしましょう」

のび太「どうです？」

大介「まあ、お前等が良いってんなら…」

宗谷「やるけど？」

4人揃って超人類をみる。

超人類「ちょ！ちょっと待て！！そんな話聞い——『平伏せ』ぐわ！！」

零が完全を^{コンプリート}発動。

大介「来い、カブトゼクター…変身！」

《H e n s h i n》

大介「キャスト・オフ」

大介が仮面ライダーカブトに変身しライダーキックの準備を完了させる。

宗谷「じゃあ俺は青眼の究極竜を召喚！」

のび太「僕は作者から貰った、マシンガン・ブレードをと」

超人類「お、おい…マジで俺を殺る気？」

4人「「「うん、殺る気です」」」

超人類「ま、待てって…NOoooo!!!!!!」

4人共良い笑顔で作者をサンド・バックにしたとき（笑）

大介「じゃあ！俺達は帰るから！」

宗谷「お前等も元気でやれよ!!」

零・のび太

「「ハイ!!!!お元気で!!」」

大介と宗谷は光に包まれ帰っていった。

とまあ…こんな感じにしたのですが…『仮面ライダーディケイド』
さんどうですかね？

正直自信ありませんが…

欲望渦巻くゲーム大会・決着（前書き）

あ、あれ？何か書いてるうちに、こんな終わり方に…

今回でゲーム編は、終了しますが…なんでしょう…何とも言えない感じになりました。

聖奈「ホラ、零さん早く逃げないと、負けますよ…」

しずか「アハハハ…」

何故、咲夜達が有利な状況かというと。

10分程前：

両チームは正面から睨み合っていた。

咲夜・聖奈・しずか

「「…」」

零「さて、そろそろ決着だな、逝くぞ2人共フォーメーションBだ！」

出来杉・ドラえもん

「「了解!!!!」」

フォーメーションBとは、まず零がシールドで、出来杉とドラえもんを庇う、その間にドラえもんがステルス迷彩を使い咲夜達に接近

し一人を切り殺す、それを合図に出来杉は零の後ろでスタン・グレネードを投げ付けて目眩ましをした後に2人で銃殺する…といったなんともセコい作戦なのだ。

咲夜達が一斉にAK-47を構え発射した。それを零がシールドでガードする、ドラえもんは既にステルス迷彩を発動させて咲夜達の所へ突っ込む、そして出来杉は、ガードしている零の後ろでスタングレネードを投げる準備をしていた。

ドラ（ククク…何も知らずに撃ってるなあ…まずは一番近くにいる聖奈から殺るか。）

ドラえもんが聖奈にターゲットを絞った後、刀（高周波ブレード）で切り殺そうとしたその時事件が起こった。

ドラ「アディオース聖奈 ああ…!!!」

そう言いながら、ドラえもんが聖奈に切り掛かった……が。

聖奈「クフツ、クフフフフフフフ…思いどうり…！思いどうり…!!! 思いどうり…!!!」

ドラ「ああ…？何言ってるやが…どぐわ…!!!」

突然、不気味に笑った聖奈がなんと、ステルス迷彩を装備して見えない筈のドラえもんの方に振り向きヘッドショットを決めたのだ、一撃でその場に倒れるドラえもん。

零・出来杉

「「ど、ドラえもん！……！！！」」

予期せぬ事態に、テンパる零達。

ドラ「ジーザス……どうなってやがる……！！」

どうやら、ドラえもんも訳が分からないといった様子だ。

出来杉「な、何故ステルス迷彩で見えない筈のドラえもんを……」

零「んん？……あつ！あれは……！！」

零が咲夜達を見て突然大声を上げる、それにつられて2人も零の視線を追う。

ドラ「あ、あれは……」

出来杉「そうか…あれを装備してたからドラえもんを目視できたのか！」

何故ステルス状態のドラえもんが目視出来たのが分かった零達、すると咲夜達がニヤニヤしながら話掛ける。

咲夜「フッフ…どうやら分かったみたいね…」

聖奈「貴方達の計画は失敗よ!!」

しずか「アハハハ」

零「まさか…赤外線カメラを持って来てたとは…」

ドラ「ちくしょう!!」

出来杉「零さん、これでは大半のフォーメーションが潰されましたよ!？」

赤外線カメラ…通称サーマル・ゴーグル、熱源を感知しそれを映像化するカメラ、これさえあれば例えステルス迷彩の相手すら目視出来るのだ。

零「くっ！サーマル・ゴーグルなんて持ってくる奴なんていないと思ってるのにな。」

咲夜「あら？サーマルゴーグルを装備すると結構ヘッドショットが狙いやすくなるから使えるのよ？」

そう、多分作者の勘違いなのかも知れないが、サーマル・ゴーグルを装備するとヘッドショットが狙いやすくなるのだ。
どうするかと考えてる零達だったが、咲夜が何かを思い出したように驚愕の事実を零達に言い放つ。

咲夜「あつ、そうそう…零君達の作戦ねえ…あれ全部見切ってるから」

零「なっ!?!」

出来杉「そんな!?!」

ドラ「馬鹿な、嘘にきまってるあ!!」

咲夜の爆弾発言に、信じられないと固まる零達、咲夜は更に続ける。

咲夜「フッフ…まさか、作戦一つで此処まで零君達が強くなるとは予想外だったわ？だから、貴方達がのび太君達と戦ってる間に、零君達の動きをすべて観察して私達3人で零君みたいにシュミレートしてみたのよ」

零「は？」

出来杉「なんだって？」

そう、零達がのび太相手に暴れてる間に、零達の動きからフォーメーションの穴を導き出したのだ。だが一つ疑問がある。

ドラ「ふ、ふざけんなぁ！！俺達がのび太の野郎を潰した時間は、僅か5分だぞ！？その間に出来る訳がねえ、ハッタリだ！」

出来杉「そ、そうだ！！零さん以上に早く解析するなんてありえない！！！」

聖奈「あらら？信じないならどうぞご勝手に…」

しずか「でも、貴方達も見たでしょう？いとも簡単にドラちゃんを捕らえたのを」

咲夜「何故かは、知らないけど今日は、頭が冴えるのよねえ」

そう言われると3人は黙る、確かにステルスを装備していたドラえもんをいとも簡単に片付けたのは偶然では無い。

とりあえず咲夜達から距離を置き作戦会議を開こうとする零、だがそうはいかないと猛攻撃を開始する咲夜達。

零「クソッ！どうするか：こうしてる今にも相手が攻撃を緩めてくれ無いから作戦を立て直すにも無理が：」

咲夜達の猛攻をなんとか避けつつ話し合う3人。

だが相手が、すぐそこに居て尚且つ猛攻を受けているので避けるのに必死で作戦なんて建てられない。

やがて何かを考え込んでいた出来杉が口を開く。

出来杉「：しょうがない、あまり使いたく無かったけど：僕に考えがあります。」

零「？なんかあるのか？」

ドラ「おい：もったいぶってないで、教えてくれよ。」

出来杉は閃いた作戦を零達に話す。

出来杉「まず、最初に降参する振りをして、あの3人の前に行きます、それから、内緒です。」

零「はっ？な、なんだよそれ…」

ドラ「俺達には、教えられないってか？」

出来杉「違います！他のメンバーに聞かれて、告げ口されるのを防ぐ為です、お願いします！信じてください！！！」

出来杉が頭を下げるので、渋々納得する2人。

零「……分かったよ出来杉君の考えは大体……いや殆ど良い方向に行くからな……俺は信用するぜ！出来杉君……いや英俊！！！」

ドラ「確かに、お前が頭の切れる奴だって忘れていた……頼りにしてるぜ……英俊！！！」

出来杉「ぜ、零さん、ドラえもん……」

何故かちよっぴり3人の間に、友情が芽生えたのだった。

零「だけど、なんと無く分かってたけど…咲夜さんがあんなに頭の切れる人だったとはなあ…」

ドラ「ああ!!女共も中々やるじゃねえか!!」

という訳で、結局「出来杉の作戦」を発動する事になった零チーム、何気に咲夜達を褒めているドラえものの口調の変わり具合については誰も突っ込まなかったが。

そして冒頭にもどり。

只今、咲夜チームの残機は5機、零チームの残機は残り4機まできた。咲夜チームを残り5機まで追い込んだ零チームだったが、メンバーの銃の弾がもう後僅かなのだ。

零「クソッ!こっちの銃は、もうMk-22(麻醉銃)しかねえぞ!!」

出来杉「僕はRPG-7が一発のみです!!」

ドラ「俺はM63(軽機関銃)しかねえ!!」

中々のピンチっぷりの零チームに対し咲夜チームは。

咲夜「聖奈ちゃん！しずかちゃん！あの3人組にRPGー7を撃ち込んで！」

聖奈・しずか

「「ハイ！！」」

メツチャ余裕があるようだ、咲夜に言われ聖奈としずかは零達に向かってRPGー7を撃ち込んだ。

零「ぐおっ！やられた！！」

出来杉「ぼ、僕もです！！」

ドラ「あ、あの女共^{アマ}、まだあんな武器を隠し持ってやがったか！！」

聖奈としずかの攻撃をモロに食らい一気に零チームの残機がのこり1になるが、復活の為に自分達の銃弾がすべてリセットされた。

零「く、くそ…残り1機になっちゃったか…」

出来杉「仕方ありません…もうちょっと時間を掛けてから、発動したかったのですが…作戦を発動します。」

ドラ「!!　　そうか、ようやく作戦実行か!!!」

零「よしっ!!　待ってたぜ!!」

出来杉が作戦を実行に移すと言ったので、待ってましたとばかりに、テンションが上がる2人

出来杉「まず最初に3人で咲夜さん達の前に出ます、それから…まあ、僕に任せて下さい。」

出来杉の言う事に頷き咲夜達の所へ向かう3人だった。

一方、咲夜達は残り1機の零チームが全く攻撃せずに逃げ回っている事に痺れを切らし、残機を減らす覚悟で零チームに特効をしかけようと接近し始めた。

咲夜「よし、敵は後1機のみ!　このまま一気に攻める込めば私達の勝ちよ!!」

聖奈・しずか

「「ハイ!!!!」」

特効しようと接近する咲夜チーム、すると物陰から零チームのメンバーが銃も何も構えずに現れた。

突然現れた零チームに警戒感を抱いた咲夜は、すぐにその場に止り、話掛ける。

咲夜「あら〜? どうしたの?」

聖奈「銃も装備しないで、まさか…諦めたのですか?」

しずか「…」

と言いつつやはり信用等せずに銃を3人に向かって構える。

そして出来杉が口を開く。

出来杉「僕達の残機はもう1機です…しかも、もう咲夜さん達に勝つ作戦ありません…だから…降参をしようと3人で話合いました。

」

咲夜・聖奈・しずか

「「「!!!!!!」」」

零・ドラえもん

（（はぁ!?!?!））

出来杉の突然の降参宣言に咲夜チームが驚く。

何も知らない零とドラえもんも驚いたが、出来杉がこちらに向かつて小さく頷いた為何も言わなかった。

咲夜「ふうん、降参ねえ。」

聖奈「信用できませんね。」

しずか「そうね、だったら何故さっさと自殺のコマンドを使わないのかしら?」

降参の宣言にまるで信用しちやいない咲夜チームだが、出来杉は更に続ける。

出来杉「降参する前に、貴方達にどうしても聞きたい事があります。」

咲夜「聞きたい事…何？」

出来杉の問いに眉を潜めながらも聞く咲夜。

出来杉「…もし一位になったら、貴方達は誰に何を命令する気なんですか？」

零・ドラえもん

（（あっ！））

その言葉を聞いた瞬間咲夜達が固まった。零とドラえもんは何かを思い出したかのようにハツとしながら出来杉の顔を見る。そうこの2人のび太チームを潰した辺りから、ゲームに熱中し過ぎて罰ゲームの事をすっかり忘れていたのだ。

零（や…ヤベエ…罰ゲームの事すっかり忘れてた…もし咲夜さん達が一位になったら誰に何を命令するんだろ…もしかしてここまで苦戦させた俺達か？だとしたら何の命令だろうか…ハツ！…もしかして金の事が心配だって最近3人でぼやいていたから、臓器でも売って金にしろって命令か！？）

ドラ（クソッ！！この俺としたことが、罰ゲームの事を忘れるなん

ざ…マズイな…ドラ焼きプールの夢が…)

罰ゲームの事を思い出した2人だったが、相変わらず何処かズレた考えの2人、しかも零に至っては100%ありえない見解だ。すると何かを考えていた咲夜チームが、語り出す。

咲夜「命令ねえ…ま、まあ別に後で言う事だったから教えてあげても良いわよ？」

聖奈「そ、そうですね。」

しずか「ハ、ハイ」

と、顔を紅くしながら零を見る3人。

零「うっ、な、何で俺を見るんだ？」

零は、自分の臓器が売られるかも知れないと訳の分からない見解をしている為、顔が真っ青だ。出来杉は、こうなる事を予想していたのか冷静に次の言葉を待っている。外野の人間は何を期待しているのか、咲夜達の命令の内容をワクワクしながら聞いている。やがて意を決したように宣言した咲夜達。

咲夜「私達が一位になって…」

聖奈「命令する事…」

しずか「それは…」

咲夜・聖奈・しずか

「「零君とデートする事よ!！」」

零「……………h a?」

と、何処かの世紀末覇者の最後みたいに腕を上げながら高々に宣言した3人その宣言に口をポカーンと開けながら咲夜達をみる零。しばらく回りの空間が止まったような感覚が続いていたが。

男共

「「「「な、なんじゃそりゃ!!!!!!!!!!」」」」

出来杉「やっぱり…(汗)」

ドラ「本当に、なんじゃそら…」

零「…」↑頭の中がフリーズ中。

咲夜・聖奈・しずか

「「……………」」

こんな感じで回り（主に変態共）が何かの期待を裏切られたの如くギャアギャアと騒ぎ始めた。

咲夜「な、何よ！その反応は！？」

聖奈「デートぐらいでそんなに騒がないで下さいよ！！！」

しずか「全く…餓鬼ねえ」

のび太「ちよっ！！ちよっと待ってよ！！！！もしかしたらそうかも知れないとは思ってたけど、それじゃあんまりだよ！！！」

ジャイ「そうだそうだ！！！！それじゃ罰ゲームじゃ無いだろ！！！！」

スネオ「何でいつもいつも零さんばかり！！！！！！」

安雄「イケメンイケメンイケメンイケメンイケメンイケメンイケメンイケメンがあああああ！！！！！！」

金田「か、神である私より零君の方が良いと言うのか…」

太郎「なんで金田様の魅力が分からないんだろう…」

出来杉「（ククク…計画通り…ドラえもん…今の内に…殺るよ。）」

ドラ「（へえ…これがお前の作戦か…オヌシも悪よのお。）」

零「…」

もはや収集が着かなくなり、ゲーム処では無くなっているのだが、ドラえもんとは出来杉が何かをしていた。（零は、未だにボーツしてます。）

咲夜「ちよっと、落ち着いて、今はそんな事よりゲームを…あれ？」

ギヤアギヤア騒ぎまくる男共（変態共）をなんとか抑えゲームを再開し画面を見た咲夜チームだったが。

聖奈「な、な、な、なんでえええ!?!」

しずか「残気が…無くなってる!？」

何が起こったのか、訳が分からない咲夜達だったがフと何かに気づき出来杉達の方を見る、すると何故か勝ち誇った顔をしていたので全て分かった咲夜達。

咲夜「ま、まさか…これは貴方達の…」

出来杉「ええ、咲夜さん達の願いなんて大胆分かったので、そこを利用して頂きました。」

そう、これこそが出来杉の作戦だったのだ。

咲夜達が誰に何を命令するなんて出来杉には、分かっていたので、あえて咲夜達に願いを公表させて、外野共が騒ぎ立ててゲーム処ではない隙に残気を減らす…とまあこんな感じだ。
だが、こんな事では、納得が行かない咲夜達が物申す。

咲夜「ちょっと待ってよ!!! これは無効よ!!!」

聖奈「そうですよ!!! ズルイです!!!」

しずか「反則よ!!!反則!」

咲夜達のもの凄い物言いに外野はびびって黙る、だが出来杉は、涼しい顔して返す。

出来杉「フツ…何を言うかと思えば…確かに『ゲーム中は他のプレイヤーを邪魔しない』って、ルールがありましたけど、『ゲームオーバーになったプレイヤーが他のプレイヤーの邪魔をしない』…なんてルールは無いから違反じゃありませんよ?」

ドラ「だ・か・ら俺達の勝ちだよ〜ん!」

男共

「「「そうだそうだ!!!!零チームの勝ちだ!!!!!!」」」

と2人で小憎らしい顔しながら咲夜達に言い返し、外野は零とのデートを阻止しようと、出来杉の味方をする。それに押された咲夜達は負けを認めるしか無かった。
ちなみに零は、あれからずーっと考え事をしている。

咲夜・聖奈・しずか

「「「そ、そんな…零君とのデートがあ…」」」

絶望の淵に落とされたの如く、その場に崩れ落ちる咲夜・聖奈・し

ずかだった。

何にしてもゲーム大会は、零チームの勝利（？）で幕が降りるのだった。

続く

◇オマケ◇

ゲーム大会が終了したちよつと後。

咲夜・聖奈・しずか

「「「…」」」

未だに絶望感のどん底にいる3人、すると今まで黙ってた零が3人に話掛ける。

零「あ、あのさあ…（って、スゲー泣きそうな顔なんだけど…）」

零が話掛けると、物凄い泣きそうな顔で3人共零に抱き着いてきた。

咲夜「ぜ、ゼロくん!!」

聖奈「う、う、ゼロさん!!」

しずか「ゼロさんとのデートがあ…」

男共（変態）

「「「あああああ!!!!!!!!!!??!!??!!??!!」」」

」

零「ちよっ!!ちよっ!!落ち着いて!!!(何か恥ずかしいな…)」

今まで、女っ気など全く無かったと思っている零は、突然抱き着かれたので少し恥ずかしくかったりしたが、ある事を言う為3人を何とか剥がしたが、変態共がもの凄い嫉妬の炎を燃やしながらか零を睨み付ける。

咲夜「うゝ!何で離すのゝ」

聖奈「わ、私達の事嫌いなんですか?」

しずか「…グスン」

零「オイオイ！咲夜さんしっかりしてくれよ！言動が幼児化してんぞ！…ってそうじゃねえ！！3人に言う事があるんだよ。」

咲夜「言う事って？」

聖奈「何ですか？」

しずか「…グスッ」

零「うっ！！（なんだ！？咲夜さんがメツチャ可愛く見えるんだが…俺どうかしたのか！？）」

咲夜のキャラがメツチャ崩壊している事をツツコミつつ、可愛く見えてしまった零だが、当初の目的を思い出し3人に話す零。

零「いやさ…ほら…もし咲夜さん達が勝ったらデートするって言ってたじゃん？」

咲夜・聖奈・しずか

「」「コクッコクッ」「」

零「あれさ…マジ？」

咲夜・聖奈・しずか

「「「コクっコクっ！……！」」」

零「お、オイオイ…そんな首振ると、痛めるぞ？」

メツチャ首を縦に振りまくってる3人に若干引きつつも、更に続ける零。

零「あゝその、なんだ？…俺で良ければ、別にデート位ならいいぞ？」

咲夜・聖奈・しずか

「「「！……！」」」

男（全員）

「「「！……！」」」

その言葉に再び場の空気が止まる。

零「あ、あれ？どうした？」

零は、咲夜達何故固まっているのか分からず、目の前に手をヒラヒラさせて意識があるか確認している、やがて全員がハッと意識を取り戻した咲夜が零の肩を両腕でガシッと掴む。

零「あ、あれ？咲夜さん？」

咲夜「…今の話本当？」

零「は、はい…まあ俺なんかで良ければ…」

咲夜「うふっウフフフ…ねえ！！聖奈ちゃんしずかちゃん今の聞いた！？」

聖奈「ハイ！！バッチリ聞きました！！」

しずか「私も聞きました！！更にテープ・レコーダーにも入れました！！」

零「て、テープ・レコーダーって…」

しずかが今の一部始終をテープ・レコーダーに録音した事にかなり引いたが、とりあえず咲夜達の機嫌が直ったのでホッと安心した零。

咲夜「でも、なんでデートしてくれる気になったの？」

と咲夜の疑問に答える零。

零「い、いやその、俺って女の人と付き合った事なんて無かったから…他の男の人と付き合う為に、俺をデートの練習相手にするとはいえ、嬉しくてつい…ハハハ…」

咲夜「……って何でそうなるのよ!!」

聖奈「そんな遠回しな事する訳無いじゃないですか!! 大胆他に好きな人なんているわけないでしょう!？」

しずか「というより、なんで!? 普通気付くでしょ!? 鈍いとかじゃないレベルじゃ無いよコレ!!!」

目を逸らし、顔を紅くしながら、全く的外れな事言う馬鹿もとい零。

零「…あ、あれ? 違うの? だとしたら何故俺なんか? のび太とか出来杉でもいいじゃん…」

咲夜・しずか・聖奈

(こ、この人は…)

やっぱり気付かない零に呆れるしか無かった咲夜達だったが、零とのデート権をG e tしたので良かったと思う事にしたのだった。

一方、せっかく咲夜達が負けて、零のデートを阻止した筈なのに、零が余計な事を言ってしまったので、男共の嫉妬パワーがメーターを振り切っていた。

変態共

[illegible]

零に向かって呪いの如く言葉を発していた。

出来杉「な、なんだろう…何時か零さん、刺し殺されそうな気が」

ドラ「ドラ焼き100個〜♪」

そんな零に心から心配する苦勞人出来杉だった。

終われ…

欲望渦巻くゲーム大会・決着（後書き）

申し訳ありませんが、諸事情の後書きショーは、お休みさせていただきます。

主に第一章に出て来た登場人物紹介（前書き）

申し訳ございません。

番外編を幾つか削除して急遽、書き溜めをしていた第二章を放出します。

今回は、取りあえず第一章に登場した人物紹介にしました。

主に第一章に出て来た登場人物紹介

はる夫《苗字は知りません》

零とのび太が、コンビを組み始めた頃に給食室にいた人物。

発見された時には、既に手遅れの状態であった為すぐにあの世に召されてしまった。

原作では、安雄と同じくジャイアン達の野球仲間だった。

当初の予定では生き残る設定だったが、何と無く作者に見限られ死んでしまった。

「目…が、目が見えないんだ……たすけ…て」

安雄《はる夫と同じく苗字は知りません》

初登場は、理科室にて瀕死の状態で見られるといったシチュエーションです。

原作では、はる夫と同じく、ジャイアン達の安雄仲間。

原作のびハザ《無理シリーズ》では、バイオゲラスを倒したり、何かと活躍するが、零のおかげでのび太に出番を取られたりとか何とか不幸な役割だったりする。

だが、戦闘能力は中々あるようで、主にグレネード・ランチャーを使用する。

当初では、のびハザ《初代》と同じくバイオゲラスに喰われて死ぬ…といった出番だけだったが、何と無く生き残ってしまった。

そのおかげで、金田に洗脳されてしまい、変態化したのが、何故か特

に、イケメンをメチャクチャ敵視する。

「あゝ世界中のイケメン滅びろ」

アンブレラ私兵

名前不明、ウェスカーと繋がってた。

ブラック・タイガー《大蜘蛛のB・O・W》に瞬殺されて出番終了。

アルバート・ウェスカー

年齢45歳↑この世界にトリップしたら25歳位。

バイオハザードの知る人ぞ知る人物。

ある意味じゃ裏の主人公かもしれない程知名度が高い人物。

バイオハザード5にて火山地帯でクリス達との最終決戦で破れ更にロケット・ランチャーをモロに喰らってしまい死亡……かと思っただけ、のびハザの世界に飛ばされた。

原作バイオと同じく、ウィルスの影響で、超人的な身体能力を持っている。

更に、バイオ5の時は一定時間の間に薬を使って体内のウィルスを沈静させないと身体が持たないといった弱点があったが、トリップしたこの世界ではウィルスが完全にウェスカーの身体に溶け込み、唯一の弱点が無くなる。

それに加え、トリップのおかげで元々身体にあったウイルスに加え
ウロボロス・ウィルスも体内に侵入・適合、より強靱な肉体へと進
化し、正に究極の生命体に相応しい人物になった。

現在のウエスカーの位置は、アンブレラ社の研究支部の所長の役職
を持っている為、研究開発の状況が手に取るようにわかる。（自分
の身体の事は、伏せている。）
ちなみに例の如くあの計画を再開させようとしている。

「ほう、私と合わせて4人か。ならちようと2対2での戦いができ
るな。さあ、来い……クリス」

主に第一章に出て来た登場人物紹介（後書き）

病室の中ってすんげえく退屈だと思う今日この頃。

相部屋の人達が一々構ってくるのがうっとうしいと思ってしまう俺。

病院食って……思ってた以上にマズイなと知らされる俺。

タバコが吸えずに、発狂寸前な、ニコチン中毒者な俺。

お知らせ

このお話を読んで頂いている皆様、どうも作者の超人類です。

暫くは別のお話ばっかに気が行つたので、更新が止まってましたが、このままじゃあやべえと思いお知らせという形をとらせて頂きました。

先ず第一に、更新はこのまま不定期にはなりますが続けさせていただきます。が、第二章の話を全てカット……削除させて貰います。

理由といたしましては、正直、設定がめちゃくちゃになった……てのが一番です。

あと一つが、バイオ2の話があやふやにしか覚えて無い……てのもあったりします。

一応何回もプレイしたのがどうも記憶が……。

てな訳ですので第二章は無かった事に……というか消しました。

それで、これからの事なんですが……第一章から一気に最終章にします。とどのつまりは原作にあった無理の無い？をベースに造り上げたいかな……と。

その最終章が終わったのちに、番外編として、削除した第二章を最終章に合わせた設定で展開させる……と考えてます。

「いきなりで意味がわからない」と思われるかもしれませんが、何とぞご理解の程宜しくお願いします。

それでは。

EP1..「え？ 久しぶりだって？ いや、自分も半ば忘れてました」(前書き

タイトル通り、自分でも半ば忘れての投稿……ちゅう訳なんで、書き方を台本形式に戻します。

EP1..「え？ 久しぶりだった？ いや、自分も半ば忘れてました」

零

「うーんと……あれから二年弱ってところか？」

のび太

「いきなり何独り言を言ってるんですか？ ボケましたか？」

零

「あ？ いや別に……なんか最近まで作者に忘れられてた気がね」

のび太

「それは僕も同感です、現にタイトルからしてそうじゃありませんかね？」

零

「……ハア、しかもいつの間にか同性同名・同顔が二人増えた気もしないでも無いな」

のび太

「ああ、別の作品ですね……全く、どいつもこいつも殺したくなりますよ」

零

「お前、この二年で遅くなったと言うか、毒舌が酷くなったというか……」

のび太

「イケメンは僕の……いや、世界の敵ですから」

零

「ハア……お兄さんは悲しいわ」

いきなり最終章…E P 1 s t a r t

とまあ、冒頭で説明した通りのび太達の住む街の大災害から二年ちよいが経過していた。

一応俺も咲夜さんも成人したし、金田さんは諸事情があって何故か二十代前半まで若返ってたりする、ちなみに今の所誰も死んでない。そして……今回で全てにカタを付ける気で居る。

出木杉

「みんな、とうとうこの日が来たね」

聖奈

「私達の町の封鎖をしている警察と自衛隊の方が半分以上撤収する日ね」

ドラえもん

「今までは全く近寄れなかったけど、これからは……」

のび太

「うん、漸く帰れるんだ」

皆が意気揚々としている訳……それはのび太達の住んでいた町に帰れる可能性が出たのだ。

というのも、あの災害の時に爆発したのは地下の研究所だけであって、地上の町は消されずに済んだのだ。

………が、その地上もマトモな状態とは到底思え無かったりする。

咲夜

「あの時……R市は跡形も無く無くなってしまったけど」

ジャイアン

「俺達の町は無事だった」

スネオ

「そう、そうなればのび太の家があるかもしれない」

のび太

「僕の家があるなら、タイムマシンがまだあるかもしれない」

ドラえもん

「タイムマシンがあれば」

安雄

「こんな事件になる前に防ぐ事が出来る」

しずか

「その為に今まで頑張ってこれたのよね」

聖奈

「でも……ごめんなさい。本当に……そんなものが存在するの？
過去と未来を行き来出来る機械なんて……」

咲夜

「私も思うわ……何だか非現実的というか」

金田

「私もそう思うが……彼等があると言うんだ……信じる他無いと思
わんか？」

聖奈

「そうですね……ごめんなさい」

咲夜

「私も謝るわ……」

零

「まあ、あれだ……俺もウェスカーとの戦いもうんざりして来た所だし……早いとこ片アつけたいな」

のび太

「ハハッ、そう言えば零さんは事あるごとにウェスカーと戦ってましたからね」

のび太が苦笑いするが、正直奴との戦いは洒落にならなかった。なんせ、元のウェスカーより明らかに強くなってるもんだから、俺の持つ全能力を使って漸く互角に持ち込めるってんだから……バケモノめ。

“G”事件の時なんか、死を覚悟した程だし……。ああ、“G”事件ってのは、のび太達の町を脱出した調度二ヶ月位後の事件で先程説明した通り、R市が消えた原因でもある事件だ。内容はいづれ語るとして、今は作成会議に参加だ。

出木杉

「それじゃあ手順を説明しよう。僕達は警備の薄くなった箇所から監視をすり抜け、僕達の故郷であるススキ原を目指す。街の中はどうなってしまったかは分からない、怪物の檻と化したか、浄土となくなってしまったか……それでも僕らは行かなければならない……僕達の平和の為に」

ジャイアン

「その通りだ！」

零

「目的地はのび太の家ののび太の部屋にあるタイムマシンだ……ドラえもんが着けばその時点で俺達は勝つ……それまで俺は全能力を駆使してドラえもんを守り抜く」

のび太

「え？」

出木杉

「零さん？」

ドラえもん

「何で？」

零

「ドラえもんがタイムマシンで22世紀まで行けば、更にそこから四次元ポケットを入手可能になる……秘密道具さえ手元になれば、巨大企業であるアンブレラを単騎で相手どる事さえ可能になる筈だからな」

そうなれば、アンブレラ……挽いてはウェスカーを相手取る時も常に優位に立てる……だから。

零

「俺がもし……途中でくたばってもドラえもん……いや、君達全員を守り抜く……俺は元々この世界の人間では無いしな」

思わず自嘲気味に笑ってしまった。

が、結果的にあの子達がいい未来に進んでくれるのなら……。

のび太

「……フツ、馬鹿な事は言わんでください。脱出するなら貴方も一緒ですよ」

零

「のび太……ハッ！ そうだったな、スマン」

何だかんだでこの二年でのび太が一番成長したな。

咲夜

「そうよ。もし零君が死んじゃったら私も直ぐに後を追う事になるわよ?」

聖奈

「多分私もそうしますね」

零

「うっ……！　ハハハ。なら尚更死なない様にしないとな」

二年もの間に何か別の意味で怖くなった咲夜さんと聖奈ちゃん。
理由が未だに不明な為、対処のしようが無いのだ。

スネオ

「でも、仮に僕達が過去に帰ったとしたら、この世界はどうなるのかな？」

ドラえもん

「……僕の考えだと、この世界はパラレルワールドとしてこのまま続くかもしれない」

パラレルワールド……つまり平行世界と化すか。

零

「まあ、ウェスカーやバケモノとの戦いから解放されるってんなら俺は一向に構わないがな。もはや俺が元居た世界へ帰る手立ても無いし、帰る気も更々無いし」

ドラえもん

「零さん」

のび太

「零さん……」

零

「それに、あんな出会い方だったけど、お前達に会えて本当に良かったと思ってるしね……。って何かツツけちゃってるんだろな俺……」

どうも今日は何時もの俺と若干違う気がするぜ。

一同

『……』

ああもう。皆黙っちゃもうから恥ずかしくて敵わんわい。

のび太

「全く……。どうして貴方がんなクサイ台詞を吐いても嫌味に聞こえないんだろうね……。本当に腹が立ちますよ」

零

「うっせえなお前は最近一言余計なんだよ」

のび太

「……ハッ！ 貴方と一緒に行動してりゃあこうもなりますってね」

本当にのび太の奴、何処で育て方を間違ったんだろうか……俺がゾンビ共を蹴散らした時に素直にお礼を言って来た時が懐かしいぜ。

出木杉

「と、とにかく。これが僕達の最後の戦いになる事を祈ろう……チヤンスは今夜、二年前にたけし君達が知り合った自衛隊の方に手引して貰うのが最初の作戦のヤマだから……みんな、がんばろう！！」

全員

「おう！！」

俺達は帰る……全てを変える物が存在する、ススキケ原へと。

続く

EP1..「え？ 久しぶりだって？ いや、自分も半ば忘れてました」**（後書き**

いきなり最終章って……飛び過ぎたかしら？

EP2：懐かしきススキケ原……変えられない過去（前書き）

多分自分が執筆してる小説の中じゃあ、この零が戦闘力最強なのかも。

EP2：懐かしきススキケ原……変えられない過去

そんな感じで俺達はススキケ原………の30？手前まで来た。
てのも、ここ二年間もの間に知り合った自衛隊の方との待ち合わせ
の為だ。

のび太

「お久しぶりです……」

自衛隊員

「久しぶりだな坊主。ちよつと見ない間に随分と立派な顔付きに……
…なってねえな」

のび太

「そりゃあ無いよ……」

のび太と軽く話てるこの人物……名前は“尾形大和”二年前に闇に
葬られた“G”事件の時に一緒に行動した人だ。

大和

「んで、そっちの小僧も久しぶりだな」

零

「ええ、相変わらず年が変わらない癖に小僧呼ばわりな所は変わりませんな」

俺を小僧呼ばわりしてるのだが、実際にはこの人とは4つ程しか変わらない。

大和

「ハハッ、悪い悪い。癖になっちまってんな」

聖奈

「あの時は本当にお世話になりました」

大和

「おっ、あの時の嬢ちゃんか……いやいや、随分とご立派になられて。後数年したら美人になるって話はどうかやら当たりみたいだな」

聖奈

「えへへ……」

とまあ、こんな感じで数分話した後、大和さんの手引で閉鎖してある柵を越えさせて貰った。

最後には。

大和

「お前等……零は心配いらねえとは思うが……死ぬなよ」

零

「ハイ、ありがとうございました」

俺達は遂に閉鎖された地域へと足を踏み入れた。

大和

「仕事がなけりゃあ、俺も行ってたんだがなあ……」

☆★★☆

街の郊外の道は整備されて無く、獣道になっている所なるべく慎重に歩いていく。

零

「音は疎か、虫の鳴き声すら無いとはな」

ジャイアン

「流石に化物の奴らも死んでんじゃねーか？」

スネオ

「まあ、一応慎重に行くに越した事は無いだろうけどね」

のび太

「ん？ あれは……？」

他愛の無い会話を繰り広げていると、のび太が前方に何かを発見したらしい。

行っって見ると……そこには居て欲しくない生物の……死骸だった。

ジャイアン

「こいつは……」

出木杉

「まだ血が固まってない。つい最近死んだようだ……」

太郎

「見た事無いよ……こんな生物」

安雄

「気持ち悪い奴だなあ。突然変移って奴か？」

咲夜

「わからないわ……」

聖奈

「気持ち悪いわね……」

ドラえもん

「まさか、こんな生物が街に溢れ返ってるって話じゃ無いよね？」

金田

「私（神）がいるからまあ、大丈夫だろう」

皆口々に感想を漏らすのだが、ハッキリ言ってしまえば先ず80%以上の確率で街に生物がいると思う。

無人でしかも荒廃した街に化物共が、あの時の時点でうようよしてたんだ。生体系が変異して別の化物が生まれた可能性だってある。だが、俺達は進むしか無い、進まなければ終わらない。そして……。

全員

「……」

街が見えて来た。

スネオ

「やっと……」

安雄

「帰ってこれたんだな……」

ジャイアン

「俺達の町に……！」

思えば、この街から始まったんだな。
俺がいつの間にか飛ばされた町もここだったんだ。

零

「行こう……のび太の家はまだ遠い」

のび太

「そうですね……」

俺達は再び進み、遂に街中に入った。

街は予想通り荒廃していて、風の音しかない。

ドラえもん

「まるでゴーストタウンだ」

出木杉

「二年前は賑やかな町だったのに」

ジャイアン

「くそっ……」

零

「ジャイアン……お前の気持ちもわかるが……」

ジャイアン

「分かってる……『冷静になる』でしょ？」

零

「ああ、わかってるならいい」

激情家なタイプのジャイアンを宥めつつ、先へと進むと、またもや何かの生物死体がある。

しかも……烏が群がっていると言うオマケ付きで。

出木杉

「死体に群がるカラス……だね。余り刺激しない方がいいと思うよ」

ドラえもん

「ウイルスで凶暴化してたら襲われるかも知れないし……」

ドラえもんの言う通りだ、無駄な戦闘は極力避けていきたいしね。が、あの生物の死体……何か引っ掛かるなと思っていたら……

カラス

「カァ！」

一斉にこちらを見て来た。

のび太

「うっ……！」

出木杉

「何だか……」

ドラえもん

「嫌な予感が……」

ドラえもんがそう言った瞬間……。

カラス

「ギャァァー！」

明らかにカラスの鳴き声ではない声でこちらへと向かってきた。

のび太

「うわっ!？」

零

「チッ……極力相手にすんな、行くぞ!」

俺達は襲い掛かって来たカラスを相手にせず、一気に走り出した。
途中で犬共も出て来たが、近くにいた奴らのみをぶちのめし、さらに先へと進む。

零

「よしっ! とりあえず此处まで来ればっ……!」

のび太

「零さん、アレ!!」

のび太が走りながら指を差す。
その場所には……。

ティンダロス

「グオオオオ!!」

二年前に金田さんを変えた三つ首の化物がいた。

零

「何であいつがいんだ……よっ!?!」

のび太

「僕が知る訳ないでしょう……がっ!!」

犬ゾンビ共を蹴り飛ばしつつ、のび太に聞くが本人が知る訳が無い。
すると横から金田さんが登場し。

金田

「^{ワタシ}神は奴に借りがある……私にやらせてくれ」

そう言った。

零

「……………30秒で殺ってください」

金田

「5秒で片付ける」

そう宣言し。

金田（神）

「フンッ!!」

一瞬でティンダロスの首を三つ共中段蹴りで切り捨てた。

金田

「貴様等を見てると虫ずが走るわ!!」

零

「金田さん……」

金田

「フン……まあこれで少しはスッキリしたがな」

苦笑い気味に話す金田さん。

そんなこんなで漸くのび太の家へと到着……したのだが。

旧のび太宅

スネオ

「こ、これ……は」

ジャイアン

「う、嘘だろ……？」

聖奈

「家が……」

そう……確かにのび太の家はあった、あったのだが。

ドラえもん

「……2階だけが焼けてしまってる」

1階を残して、2階は全焼してしまいのび太の部屋は跡形も無くなっていた。

出木杉

「そういえば、あの事件の時あちこちで火災が」

咲夜

「そ、そんな……」

太郎

「此処まで来て」

金田

「……」

ジャイアン

「冗談じゃねえぞ!! た、た、タイムマシンは……」

零

「残念だが……もう過去には」

机にあるタイムマシンだけが無事なんて、そんな都合の良い話がある訳では無い。

よって……俺達の希望は脆くも崩れ去った。

のび太

「……」

ジャイアン

「のび太!？」

零

「……心配ない。ショックがデカすぎて気絶しただけだ」

倒れそうにのび太を抱えながら症状を説明するが無理も無い話だ、計画を念入りに練ってやっとの事で全てが終わる所まで来てしまったのに、見事に裏切られたのだから、のび太のショックは並大抵のものでは無いはずだ。

零

「とりあえず……中へ運ぼう。見た所、一階はそれなりに残っている
そうだな」

全員

「……」

そう言って皆を中へと誘導するが、皆の表情は暗い。

だが今は悲観する時では無い……またこれからの事を考えねばならないのだから。

☆☆☆☆

のび太を寝かせてから約30分後。

のび太

「う……僕は一体？」

零

「気が付いたか？」

のび太

「零さん……ええっと、そうだ、タイムマシンは！？ 2階が……
どうなったんですか！？」

のび太の問いに皆の顔が暗くなる。

それを察したのび太は。

のび太

「……そうですか」

皆のび太に掛ける言葉が見つからず沈黙が走が、やがて出木杉が口を開く。

出木杉

「過去へ戻る手段は無くなったよ。でも、これが普通なんだと思う」

のび太

「えっ？」

零

「まあ、確かにそうだな。過去やら未来やらに自由に、それも何の対価も無しで行き来出来るだなんて普通じゃ有り得ないからな」

俺の言葉に出木杉君が首を縦に振りながら続ける。

出木杉

「今までがおかしかったんだよ。そう……漸く「普通」に戻ったんだ」

のび太

「……そうだね」

何時もより力の無いのび太の声が響き渡る。

のび太

「……みんなは？」

零

「部屋の外だ。お前だけじゃ無く皆もショックを受けているよ。暫くそっとしといてあげろ」

のび太

「そうですか……二人は強いですね」

のび太の不意の一言が胸に刺さる。

零

「……さあな。俺の場合はタイムマシンって存在自体が非科学的な所から来たからな……すんなり受け止められただけさ」

出木杉

「僕も……色々ありすぎておかしくなっちゃったかもね」

自嘲気味に笑う出木杉君。

だが……それも一発の発砲音で現実に戻される。

のび太・出木杉・零

「「「!!」」」」

のび太の家の居間にあった茶瓶が割れる。
明らかにこちらに向けての発砲だ。

零

「二人共、壁に隠れろ!!」

のび太

「ハ、ハイ!」

出木杉

「くっ……!」

直ぐさま壁に隠れて、銃撃を免れる。

零

「チッ……どっかから撃ってやがるな……!」

のび太

「えっ!?　だって人はいない……!」

出木杉

「とは限らないと思うよ?　君もみただろ?　あのカプセルみたいなのを」

のび太

「あっ!？」

何かを思い出した様に言うのび太。

確かに、此処に来るまでに何個かのカプセルを見掛けたのだ、形状から考えて明らかにこの街に似つかわしく無い物だった。

のび太

「くそっ! 一体誰が!？」

ドラえもん

「どうしたんだい!？」

部屋の外にいたドラえもん達が一斉に居間へとやってくる。

零

「来るな! もしくは隠れろ!! 誰かに狙撃されてる!!」

スネオ

「うわっ!？」

一斉に壁へとなだれ込み、銃撃を防御する。
暫く発砲音が鳴り響いていたが。

のび太

「……………」

出木杉

「銃撃が止んだ？」

咲夜

「何があったの！ 三人共大丈夫！？」

金田

「クソッ！
ワタシ 神を愚弄しよって……………許さん！！！！」

太郎

「金田様に仇なす者……………許すべからず！！」

咲夜さんが心配している中、金田さんと金田さん信者の太郎が何やら騒いでいるが無視して話を進める。

零

「どうやら。どこぞの野郎に狙撃されてたみたいだな」

スネオ

「で、でもさ……誰かったって……」

聖奈

「この街は無人の筈じゃあ……」

零

「いや、この街に居る異常発達した化物共の事を考えると……恐らく誰かがこの街で化物を放流している可能性がある」

金田

「確かに……そういえば以前駆逐した犬の怪物がいたしな」

咲夜

「R市の時の？」

のび太

「そうです、しかも三体も」

零

「まあ、直ぐに倒したからな……それは置いて、だ。あの怪物は“アンブレラ”が造りだした怪物……それがこの街にいるとすれば？」

そう言った瞬間。
何かを思い付いた様な顔付きになる一同。

ジャイアン

「あいっら……この街でまだそんな事を……！」

ドラえもん

「だとすれば、君達を襲ったのはアンブレラの人間だ？」

零

「その確率は極めて高いな。まあ、確かめるには本人は取っ捕まえて吐かせれば良いんだが……」

のび太

「でも、どこにいるんですか？　少なくともここいら近辺では無いにしても……」

零

「多分……向こうから俺達がまる見えで、尚且つ狙撃ポイントに最適な場所は……やって見るか」

出木杉

「え？」

自分の身体を窓に曝す、上手く行くか……。

のび太

「ぜ、零さん!？」

聖奈

「危ないですよ!？」

咲夜

「早く隠れないと……!」

零

「心配しなくても——《バンッ》つと……俺が銃弾位なら何とかな
るって話、忘れました?」

飛んできた銃弾をキャッチしその銃弾を見せびらかす。

手が熱いな畜生、だが狙撃場所が把握出来た。

此处から約700メートル先にある3階建のアパートか?

全員

「……」

何でポカーンとしてんだよ、知ってんじゃない無かつけ？

のび太

「……半ば貴方が人外だったのを忘れてました」

金田

「フツ……流石神の右腕だな」

とまあ、似たような感想を全員から貰いましたよ畜生。

零SIDE OUT

??? 視点

????

「……信じられない。全弾外れ。整備不良もいいところだわ……しかも」

最後の狙撃時に狙った男……明らかに命中した筈なのに生きてる？
やはり外したのかしら？

???

「ハンター改良型の調査に来てみれば、思わぬ連中がいたもんね…
…さあどうする？ 逃がしはしないわよ……！」

退屈凌ぎに遊んで貰おうと思い、再び引き金^{トリガー}を引く。

??? SIDE OUT

零SIDE

最初の発砲音から数分後。

のび太

「……………かなりいい加減に撃ってますね」

出木杉

「そうだね、僕達を誘い出す為かな？」

零

「或は、単に腕の問題か……」

まあ、出木杉君の推理の方が正解だろうが。

ちなみに俺達三人以外は部屋の外に居る。

出木杉

「それで、場所の特定は？」

零

「確定だ、700メートル先にある木造アパートだな」

のび太

「そこまでわかるんですか？」

零

「ああ、奴のスコープらしきものが太陽で反射して見えたからな」

出木杉

「よし、相手が移動する前に急ごう！！」

：つー訳で俺達は家を出て、ご丁寧な挨拶をかましてくれた相手にお礼を言う為にアパートへと向かう。

零SIDE OUT

??? SIDE

当たらない、これだけ撃っても当たらない。

????

「……当たらない。整備不良では無くて腕の問題？ 目の前に絶好の獲物があるってのに！」

半ば苛々しつつ撃ちまくるが。

????

「あ!？」

暫く撃っていると、不意にカーテンを閉められ、奴らの姿が見えなくなる。

????

「逃げられちゃったなあ……データも取れたし、もう帰ろうかなあ。日本はジメジメしてて嫌になるわ……早くヨーロッパに帰りたい」

なんて思っていると、外から発砲音が聞こえる。

????

「あれ？」

外を見ると、先程までターゲットにしてた連中がこちらに向かってくるのが見える。

???

「あいつら……こっちに来る気？　面白いわね」

連中を迎え撃つ為に再び銃を構えた。

続く

EP3..「ケッ! まだ子供の間合いな!!」 (前書き)

やべえ、原作から離れてらあ。

EP 3..「ケッ！　まだ子供の間合いだな!!」

零SIDE

てな訳で敵が潜伏している木造アパートの近くと道まで来た。

ジャイアン

「随分開けた場所だな」

スネオ

「しかも、向こうからは僕達がまる見えだね」

出木杉

「うん、このまま進むのは危険かもしれないね」

のび太

「どうするか……」

零

「俺が先に行ってくる、か」

聖奈

「零さん？」

俺の一言で皆がこちらを見る。

零

「まあ、銃撃されても弾位なら何とか出来るし……この中で考えた
ら俺が一番動けっからな」

咲夜

「まあ、言われてみたら確かに……」

出木杉

「なら、よろしく願いします」

零

「ああ、行ってくる!!」

皆の期待を背にいよいよ銃弾弾きがスタートした。

《バンッ!》

零

「遅いっ……!!」

《ドカツ!》

零

「見えるっ……!!」

《ピュン!》

零

「俺にも……動きが見えるっ……!!」

とまあ、半ばふざけながら進むと銃撃が止んだ。

零

「あん? あんまりにもばかすか撃ってたから弾切れか? まあ、
いいや皆今の内だ!!」

とこんな感じで、スムーズにアパート内へ侵入した。

零SIDE OUT

??? SIDE

車道に出ていた見た目は私とそんなに歳の変わらなそうな男に驚愕した。

????

「な、なんて奴なの……！ 銃弾を避けるなんて……！」

亜音速に近い速度で飛ぶ弾丸を人間が避けるなんて普通では無い。明らかに異常だ。

????

「このままじゃ……こっちに来る……こうなったら」

私は動いた、奴らを撃退する為に。

??? SIDE OUT

零SIDE

無事アパートへと到着。

出木杉

「なんとか無事に着いたね。問題はここからだ」

聖奈

「まだここにいるのかしら……」

咲夜

「多分、ね」

のび太

「どちらにしても安全を確保しないと話にならないよ」

安雄

「だな。にしても、化物の次はいよいよ人間を相手にするのか……
ここまで来るともはや何でも来いだな」

安雄君の呟きには俺も同意する。

普通の人間相手にするのは化物相手にするにはまた違った面倒さがある。

出木杉

「じゃあ、さっき打ち合わせしたのを確認するね、たけし君としずかちゃんとスネオ君と安雄君は非常階段を、聖奈さんと咲夜さんと金田さんと太郎君は玄関」

のび太

「僕と出木杉君と零さんで内部を調べるんだね？」

零

「そうだ、そうすりゃあ誰かが隠れてても逃げようが無い筈だ……みんな気をつけて、相手は人間だとは限らないから」

という訳でアパートの内部探索が始まった。
皆それぞれ持ち場に付く。

出木杉

「さて……始めますか、零さんが前、僕が後ろ」

のび太

「僕が真ん中だね」

零

「ああ、慎重に行くぞ——！？」

ハンター改良型

《キシヤアア！！》

行動を開始しようとしたその時……窓を打ち破ってハンターの強化

体が現れた。

のび太
「!?」

出木杉
「くっ……! いきなり……!」

出木杉君が銃を構え、撃とうとした時だった。

《ドーン!!》

出木杉
「は？」

ハンターが爆発した。

のび太
「え？」

余りの唐突さにア然とする二人。
まさか……。

零

「面倒な……」

出木杉

「えっと？」

のび太

「どういう事ですか？」

零

「さっきのは、ハンターが爆発したんじゃないやなくて……そこの扉が爆発したんだよ」

のび太

「というと？」

出木杉

「まさか……」

出木杉君は気が付いたみたいだな。

零

「ここにいた野郎が罾を仕掛けたんだろうな……俺達を消す為に」

出木杉

「しかも、かなり危険な」

のび太

「う、嘘？」

零

「んなつまんねー嘘なんざつかねえよ。現に爆発した場所見てみな、火が出てんだろ？」

のび太

「た、確かに……」

零

「作成変更だ……慎重に行く、では無く。神経を擦り減らす位に慎重に行くぞ」

のび・出木

「「ハイ！」」

そういう事で、先に進む。

案の定かなりの数のトラップが仕掛けられていたのだが、神経を極

限まで研ぎ澄ました状態の俺達だったので比較的楽に看破できた。
そして最上階である3階。

出木杉

「後はこの階ですね」

のび太

「1階・2階にはいなかった」

零

「もしここにもいなければ……既にエスケープしちまったって事だな………慎重に行くぞ」

のび・出木

「「ハイ」」

てな訳で一番手前の部屋を調べようとすると……。

《ガチャ》

零・のび・出木

「「「！」」」

調べようとした隣の部屋から軍服を来た女が出て来た。

のび太

「……あの」

のび太が声を掛ける。

???

「!?!?!」

一瞬飛び上がり、こちらをみる女。

零

「ビンゴ……テメエか、俺達を狙撃してたんは」

???

『くっ、もう此処まで!?!』

※『は外国語です。』

のび太

「あ? え? なんて?」

出木杉

「ぼ、僕もちょっと」

零

「英語だな」

???

「Shit!」

そういいながら持ってた銃で撃って来た。

出木杉

「うわっ!」

のび太

「撃ってきた!!」

零

「あぶねっ! って逃げやがった!!」

猛スピードでその場から退散しようとする女。
が、非常口にはジャイアン達がいるんだなこれが。

零

「おい、お前等大丈夫か？」

出木杉

「大丈夫です」

のび太

「僕も……ですが逃げられましたね」

零

「大丈夫だよ。非常口を張ってるジャイアン達がいるし……」

と言いながら非常口を開けると。

ジャイアン

「動くんじゃねえ!!」

スネオ

「ええっと、止まれ! ストップ!! ドンムーブ!!」

しずか

「……」

安雄

「って女かよ!？」

非常階段を張ってた奴らが無力化していた。

零

「ナイスだジャイアン達。……さてと、アンタにゃあ聞きたい事があるからなあ……クツクツクツ、苦労させやがって」

多分悪役丸だしの顔をしながら喋ってんだろぅなあ俺。

???

「(ま、まずいわね……あの男の顔、人を平気で殺して来た顔だわ……なんとか最悪の自体は避けないと)」

おや? 武器を捨てて両手を上げたぞ? どうやら諦めてくれたみたいだね。

???

「エ、エエツト……コウサンシマス、ウタナイデクダサイ……」

のび太

「！ 零さん……」

出木杉

「日本語が喋れるみたいですね……」

零

「ああ、話は早いな……さあて、お姉さん。ちょいと聞きたい事があるからお話ししません？ あつ、答えは聞いてないんで」

こういう時は先手を打たないとね。

零以外

（うわぁ……悪い顔してんなぁ）

???

「ハイ……」

さあて、と。鬼が出るか蛇がでるか？

☆☆☆☆

とりあえず先程この女がいた部屋に連行し、椅子に縛り付ける。

零

「さてさて、とりあえず何から聞く？」

のび太

「零さんに任せますよ。そーゆーのは（・・・・・・・・）零さんの得意分野でしょ？」

全員

「うんうん」

零

「ひ、人を冷血ドS人間みたいに言うなよ」

こいつらは俺を何だと思ってやがる。

全員、頷きやがってからに、まあいいや。

出木杉君、のび太以外の人達には外の見張りを任せ、俺達は目の前で縛り付けた女性に話を聞く事にした。

????

「……」

この目の前にいるお姉さんをイジメ……じゃ無くで尋問してストレス解消だ。

零

「で？ さっきも言った通り……何でこの街にいの？ 目的は？」

???

「シラナイ、ワタシハソバニイナイカラキイテナイ、メイレイサレタダケ」

ああもう……人が優しく聞いてやってんのにこの女は。^{アマ}

出木杉

「ああ、零さん。その人サーシャって名前らしいですよ？ 指令書らしき書類に書いてあります」

ナイス出木杉君。って事で。

零

「……そうなんですか？」

早速本人に聞いてみると。

サーシャ

「……」

沈黙……て事は肯定か。

零

「ハイわかりました、と。じゃあ次、サーシャさんはここで何してたんですか？」

サーシャ

「イエナイ」

零

「……」

フツ……まあ、仮にも軍人だから言わないわなあ？

のび太

「教えてください」

サーシャ

「イエナイ」

出木杉

「どうしても？」

サーシャ

「シルヒツヨウ、ナイ」

頑なに拒むなこの人ったら。
しょうがないな。

零

「Ah... English conversation is
seldom made. (ああ...余り英語は得意じゃ無いん
だがな)」

発音がたまに可笑しいって言われた事あったし、伝わるかどうかす
ら怪しいし。

出木杉

「え？」

のび太

「零さん？」

サーシャ

(この男……)

ん？ コイツ等には英語をある程度喋れるって言って無かったな。
まあ、この際どうでもいいか。

零

「『まあ、あれですわ。いい加減吐いて貰えませんかね、こっちも
急いでるんですよ』」

サーシャ

「『どうやら、ごまかしが効かないみたいね？』」

零

「『色々役に立つと思ひましてね。さて、ぼちぼち話してくれませ
んか？ さもなくば……』」

サーシャ

「『何をする気？』」

キツと睨み付けるサーシャとか言う女。
ふーん？ それなら……。

零

「《kneel down. (跪け)》」

サーシャ

「ぶっ!？」

久しぶりに能力を使った為に、加減を忘れてしまい豪快に床とキスするサーシャさん。

サーシャ

(な、何!？ 今あの男が『平伏せ』と言った瞬間に身体が勝手に……!？)

おー、驚いてる驚いてますなあ。

零

「『(お分かり頂けた？ 信じる信じないは別にして、俺には“人心支配”って能力があるんだよ。だからその気になれば君を完全に洗脳する事が可能って訳なんス)』」

ニタニタ笑いつつ言うが、のび太と出木杉君が引きまくった表情なのはアレだな。

のび太

「見て何と無くわかるけど、まさか零さんって」

出木杉

「うん、能力使ってるね」

零

「『それで？ 俺の力を信じる気になりました？』」

サーシャ

「『アンタ馬鹿じゃ無いの？ アニメの見過ぎよ』」

逆に挑発的な笑みで返された。

へえーまあ嘘じゃ無いからなあ。

それなら……。

零

「『うんうん、そんなに素っ裸の状態でハンターの群れの中に入り
たいと？』」

サーシャ

「『なっ!?!』」

おろ？ 急に顔を真っ青にしだしたぞ？

零

「『ん？ 信じて無いんだよね？ だったら今の話だって信用しなけりゃ良いじゃん？ あれあれ？ もしかして本気でやらないと思うてる？』」

サーシャ

「……」

おや？ 急に黙り出したぞ。

零

「『おやおや、急に黙ってしまっただろう？ 腹の調子でも悪いのですか？』」

何だろ……俺ってやっぱりSなんだろうか？

サーシャ

（どうしよう……コイツが得体の知れない力を持ってるって話は銃弾を避ける時点であながち嘘では無いし、これで虚勢はったらこの男なら……本当にやりかねない！ クッ……しかたない）

あ、あれ、本当に黙っちゃったよやり過ぎたか？

サーシャ

「……………わかったわ、降参よ」

おっ？ 片言じゃ無い日本語……て事は。

出木杉

「あ、あれ？ 普通に日本語喋ってる？」

のび太

「じゃあさっきのは……」

サーシャ

「あなた達を騙す為にわざとやってたんだけど……どうやらこの男の前じゃあ効かないみたいだからね……完全に私の負けよ」

零

「っしやあ！！ 俺の勝利ってな！！」

紆余曲折あったが、終わりよければ全て良しってね！

続く

オマケ

とりあえず皆を部屋に呼び戻した。

サーシャ

「それで？ 何を話せば良いの？」

零

「知ってる事を全部」

ジャイアン

「よく、話させる気になったなあ零さん」

スネオ

「一体何をしたんだ？」

のび太

「さあ、全部英語でわからなかったよ」

出木杉

「うん、でも終始零さんの顔は悪人面だったってのはわかったよ」

聖奈

「悪人面？」

咲夜

「一体何を……」

サーシャ

「ああ、結構エグイ事よ？　今から私を全裸にしてハンターの群れにほうり込む、とか私を【ピーツ】するとか」

先程の仕返しなのか、あること無い事を喋り出すサーシャ。

全員

「はぁ！？」

その瞬間、全員の目が零に突き刺さる。

零

「ちよっ、ちよっと待て！！　誰が何時【ピーツ】するなんて言っ
たぁ！？」

サーシャの胸倉を掴みながら怒鳴る零。

サーシャ

「あら？　今この瞬間にしてるじゃない」

零

「してねえだろうが！？　何シレッと言ってんだ、しかも子供がいる前で……「零さん（君）」？　ああ！？」

呼ばれた方へ振り向く零だったが、2秒で後悔した。
なんせハンドガンを構えた咲夜と聖奈がいたからだ。

零

「な、何ですか？　何でハンドガンを構えてらっしゃるのです？」

聖奈

「フフフ……零さんったら、そんな事を言っただんですかあ？」

咲夜

「これはお仕置きフルコースにしないといけないわねえ、フフフ」

零

「え？　だからこの人の言った事は嘘だって……え、ちよつと何でそんな単色の目をしてる——ウギヤアア……！！！」

咲夜・聖奈

[illegible]

のび太

「で、出木杉君、あの二人が怖いよ!!」

出木杉

「ぼ、僕もだよ」

てな感じでサーシャ以外のメンバーが部屋の隅っここでお互いに抱き合いながらガタガタと震えていたりする。

そして元凶のサーシャはと言えば……。

サーシャ

「あの男、結構モテるのね。まあ顔は良いみたいだし……」

独り言を漏らしていた。

終了

EP3..「ケッ! まだ子供の間合いだな!!」 (後書き)

死亡フラグがへし折られてる感がある。

EP 4..「ジャイアンのデスボイスの強さナメンなよ!」?

此処ら一帯なんて軽

暫く間が開きましたが投稿します。

まあ、ヤツツケ気味ですがどうぞ。

EP 4..「ジャイアンのデスボイスの強さナメンだよ!」?

此処ら一帯なんて軽

零

「し、死ぬかと思った……」

ガチでハンドガンを乱射された時は流石にやばかった。

出木杉

「大丈夫ですか?」

零

「ここ二年であの二人の性格がますます分からないンスけど」

ドラえもん

「本気で殺そうとしてましたしね、あの二人」

零

「ああ、あの二人って俺に恨みでもあんのか?」

そう、この二年間で咲夜さんと聖奈ちゃんが俺に対して過激な事を平気やらかすんだよ。その理由が分から無いからますます怖い。

出木杉

「アハハ……何と言うかご愁傷様です」

苦笑い気味の出木杉君、なんだろう視線が生暖かい。
そして咲夜さんと聖奈ちゃんを暴れさせた原因はと言えば。

サーシャ

「鈍いわねえアンタ」

零

「デメエ……切り刻むぞコラ」

ニヤつきながら軽口を叩くこの女がワリと憎たらしかったりする。
一方、残りのメンバーはと言えば。

三人称 Side

のび太

「ねえ皆？ あの手サーシャって人、何か怪しいと思うんだけど」

ジャイアント

「ああ……妙に零さんにくっついてる気がする」

スネオ

「畜生！　　まただ……また零さんにオイシイところ持ってかれたよ！
」

安雄

「顔なのか！？　　男は皆顔なのか！？」

金田

「此処まで来ると清々しいな」

太郎

「爽やかな金田様も素敵！」

黒い何かを放出しながら零への恨み言を言いまくる。
二人程若干違うが。
そして女子サイドはといえば。

しずか

「あつ、あのサーシャって人が零さんの肩に触れてる……」

咲・聖

「「！？」」

しずかの言う事に一々反応する咲夜と聖奈。
ちなみにしずかは、ここ二年もの間に零に対して何も思わなくなっ
たとか。
それは置いといて……サーシャの出現により聖奈と咲夜の思考回路
がヤバイ事になっている。

咲夜

「フフフ……ハンドガンの弾薬はまだタップリあるわね」

聖奈

「ええ、零さんは少々オイタが過ぎてますからね、しばらく行動不
能にしてあげましょう……」

「「フフフ……」」

現在進行形で主人公の命がヤバイという事に肝心の零は気付かずじ
まいだった。

★☆☆★

ちよいとゴタゴタしたが、なんとか二人を落ち着かせてから全員を
集め、これからの事について話し合う事にした。

零

「さて、と。聖奈ちゃんと咲夜さんのお陰で楽しい時間が――」

聖奈・咲夜

「「ンッン!!」」

零

「……。うん、これからの事を話し合おうか、今すぐ」

二人からの咳ばらいが怖く、直ぐに話を進める事にする。
だって目に輝きが無いんだもん。

出木杉

「のび太君の家の出来事は駄目だったけど、何時までも燻ってる時間はない、取り敢えずこの街から一旦離れようと思うんだけど、何か意見は？」

出木杉君の提案に皆は頷くが、のび太の家の現状を思い出したのだろう、皆の表情が暗くなる。

ドラえもん

「……。僕は特に無いよ」

のび太

「うん、僕も……」

特にドラえもんとのび太の二人からは悲壮感漂う空気が出ている。無理も無い話だ、なんせ最後の希望を潰されたんだからな。

零

「のび太、ドラえもん。上手い事は言えないが……うん、あー……」

畜生、言葉が見つからない……肝心な時に役に立たない口だな等
と思っていると、二人は苦笑いしながら「気にしないでください」
と言ってくれた。
スマン……。

出木杉

「よし、それじゃあ行こう！ 来た道に戻れば街から脱出できる」

零

「ああ、行くぞ！」

出木杉君と俺が立ち上がると、皆も立ち上がり、装備の確認をする
するとそこで、忘れていた人物から声が掛かる。

サーシャ

「あの、皆やる気になってるトコ悪いんだけど……」

椅子に縛り付けていたサーシャさんから声を掛けられる。

零

「あゝ？」

出木杉

「なんですか？」

ジャイアン

「こっちは急いでるんだが……」

やる気になってる所に水を刺され、つつい喧嘩腰に返事をしてしまった。

咲夜

「てか貴女、まだいたの？」

聖奈

「早く何処へでも行けば良いのに……」

そして何故か咲夜さんと聖奈ちゃんは、もの凄く敵意のある口調だ。
いや、椅子に縛り付けたんだから身動きとれないだろうに。

安雄

「いや、縛り付けたから無理じゃね？」

スネオ

「何を怒ってるんだか……いや、大体察しはつくけど」

聖奈・咲夜

「あ？」

安雄

「い、いえ。すいませんでした」

スネオ

「調子に乗ってスイマセン！！！」

俺が内心突っ込んでいたら、安雄とスネオが俺の代弁をしてくれたのは良いが、直ぐさま二人に睨まれて小さくなる。さつきから怖いな……つとそんな話じゃ無いっつと。

零

「で、何よ？ 拘束はちゃんと解除するから心配すんなや」

サーシャ

「違うわよ。貴方達、地上から脱出するって話だけど、止めといった方がいいわよ？」

その言葉に、皆の表情が疑問の色になる。

どうやら地上ルートからの脱出は止めろと言うらしい、何故だ？

零

「何故？」

サーシャ

「ええつとねえ、ゴタゴタして忘れてたけど……貴方達、全員の首に懸賞金が掛けられてるのよ」

サーシャさんがそう言うのと、俺を含めた全員が固まった。

サーシャ

「……？ 何固まってるのよ？」

暴露した本人は呑気な声だ。

零

「取り敢えず聞きてえ事は山程あるが、それはまた後にしとく事に
して……………マジ？」

いち早く凍結から解放された俺は、冗談かどうかと聞いてみる。
するとサーシャさんは、「何を言っただコイツは？」みたいな表^カ
情^オを浮かべながら言い放つ。

サーシャ

「嘘言っでどうするのよ、全部本当よ。大体アナタ達がこれまで
やって来た事自覚して無かったの？」

そう言われ、全員が「ウツ！」と声を詰まらせる。

確かに俺達がやって来た事は奴らの邪魔になる事ばかりだ。

身に覚えが無いなんて寝ボケた事を言うつもりは無いし、寧ろ身に
覚えがありすぎて笑えてくる。

零

「……。という事らしいのだが……皆の意見は？」

サーシャさんから後ろにいる皆へと視線移すと、のび太を筆頭に次
々とわめき立て始めた。

やれ「お尋ね者になるなんてやだあ!？」だの「犯罪者はいやだあ
!!!」とか「神に懸賞金だど? おのれえ、人間如きが嘗めた真似

を!!」や「怒りに奮える金田様も素敵!!」とまあ似たり寄った
りなコメントが次々と出てくる訳でありまして……俺としては。

零

「キャオラアア!!!!」

鎮める事にした。

するとさっきまで騒いでいた連中全てが俺を見る。

零

「落ち着け……な？」

子供をあやすような声色で皆を落ち着かせると、正気に戻った皆は
首を何度も縦に振る。

さて、次はどうするか。

★☆☆★

零

「で？ 俺達がお尋ね者になったのと、地上ルートから街の外に行
くのが得策じゃないの？ 何の関係があんのさ？」

真横にいるサーシャさんに目線だけを向けながら問いたです。
この分だと全部喋ってくれるとは思うが……罫の可能性も考えて、
もう一度最初から話を聞いてみる事にする。

最悪完全Ver人心支配モードを使用する事も辞さない。
コンプリート

サーシャ

「ええ、さっきも言った通りよ。アナタ達の姿が二年前ここにあった研究所の監視モニターに映っててね、それで会社の人達は怒り狂ってアナタ達に懸賞金を掛けたの。そしたらBUSSの奴らは大喜びであんた達……特にイケメン君の首を狙ってるってよ……私も含めて、ね？」

零

「成る程な。つかイケメンで……」

言われれば言われる程、七面倒な話だな。

金田さんと咲夜さん以外の連中は顔を真っ青にしてるし、無理もないが。

サーシャ

「それで話しは此処からなんだけど……」

零

「どうぞ？」

手の平をサーシャさんの前に差し出して、続きを話すように促す。

サーシャ

「貴方達に捕まる前に、部隊から連絡があったのよ、『何者かがこのエリアに侵入した形跡がある、直ちに搜索せよ』ってね、だから街の周囲は部隊の連中で埋め尽くされてるんじゃないかしら？」

零

「ジーザス……」

その一言に思わず出てしまった単語、ジーザス。確かにあれだけ街中でドンパチやらかしやあ気付かれるに決まってるってのは分かっ
てはいたが、こうも手が早いというか。

恐らく、大和さん以外の見張りに気付かれて、そいつ等がアンブレ
ラの私兵部隊とやりにチクリやがったんだろう。

参ったな……。

サーシャ

「私が知ってるのはこの位ね。それで？　どうするのよ貴方達は？」

サーシャさんの問いに誰も答えない。

正直これからどうするかが分からない。

この人数でほつつき歩いてりゃあ、直ぐに発見されるだろうし。

むむ、どうしよ……と考えていたら、出木杉君がハッ！　っと何か
を思いついたかの様に顔をあげる。

出木杉

「そうだ……上が駄目なら、下から行けば良いんだよ！」

零

「下？ ……地下か？」

出木杉

「そうです！ この街の下水道を通って行けば、彼等に悟られる事無く脱出出来る筈だよ！！」

出木杉君よ、キミはなんて頭の良い奴なんだ、流石頭脳担当、尊敬するぜ。

零

「よし、それなら決まりだ。サーシャさん？ 奴らは下水道の搜索地上の後だよな？」

椅子に縛られっぱなしのサーシャさんに、質問をする。

サーシャは、一瞬だけ考えた後、口を開く。

サーシャ

「恐らく……地上の方に人員を割いて、地下の方には少人数じゃないかしら？」

出木杉

「成る程……」

サーシャ

「だったら時間はないわよ。地上の搜索を終えたら、連中今度は、地下の方に手が入ると思うから行くならさっさとした方が良いんじゃないかしら？」

サーシャさんの意見は最もだ。
それなら……。

零

「サーシャさんから聞いた通りだ。俺達は今から下水道を辿って街を出るが……良いか？」

一応皆の意見も聞いて置こうと全員の顔を見渡す、するとジャイアンとスネオと安雄が口を開いた。

ジャイアン

「作戦自体は特に意見する事はないけど……その女信用出来るのか？」

スネオ

「確かにね、さっきまで僕達を殺そうとしてた相手だし」

安雄

「それに、罨だって事も十二分にありえると思うんだが」

サーシャ

「……」

そう言われて黙り込むサーシャさん。

確かに三人の言う通りだ、つい数十分前までは殺し合いをしていた相手の話等、信じられる訳が無い。

それが普通の人間の思考だし、それを責めるつもりも全く無い。が、この中には馬鹿が付く程人が良い人間が居るんだよな。

のび太

「僕は————この女性ヒトの言う事を信じるよ！」

ほらな？

ドラえもん

「僕もののび太君と同じだ」

出木杉

「僕も信じます。……なんと無くですけどね？」

タハハ……と頬を軽く指で搔きながら恥ずかしげに言う出木杉君。
これで3…3か……。

零

「まあ、のび太達の言う事もジャイアン達の言う事も最もだからな
……時間も余り無いし、俺が判断するよ」

のび太

「え？」

出木杉

「どうやって？」

零

「皆知ってるだろう？ 何時もの手だよ」

そう、人心支配を使って相手に嘘か本当かを聞いてみるのだ。
これなら即効で解る事だしな。
てな訳で……。

零

「じゃあ始めますか……サーシャさん」

サーシャ

「何？ あ……」

椅子に座る様にして縛られてるサーシャさんに視線を合わせる為、彼女の顎を優しく持ち上げて俺に視線を合わせるようにする。さて、
コンフリート
完全には既になってるから後は……。

のび太

「あ……？」

ドラえもん

「い？」

出木杉

「う？」

安雄・金田・太郎・ジャイアン・スネオ

『えええ！?!?!?』

しずか

「お？」

咲夜・聖奈

「……」

なんだか外野が騒がしい気がするが、無視だ無視。

零

『さて、次の質問に正直に答えてちょうだい？ 貴女が先程言った情報に嘘偽り——』

サーシャ

「ッ!？」

最後の所で、顔を逸らされた。

零

「……。あの、サーシャさん？ すいませんが、俺の目を見てくれませんかね？ 直ぐ終わりますから」

軽く半目で見据えるようにサーシャさんに言う。

サーシャ

「う、わ、わかってるわよ……」

それに対して、何故か吃りながら答えるサーシャさん。
大丈夫か？ 顔が紅いけど、まあ本人が大丈夫みたいな事を言っ
てるし続けるか。

零

『先程言った情報に嘘偽りは？』

サーシャ

「な、無いです……」

……。よし、微妙に電流を頭に流しこんでの質問でも嘘では無いと
証明された。
若干、顔面の筋肉、瞳孔の開く具合、体温に異常があるが……大丈
夫でしような。
てな訳で皆に報告報告っと。

零

「どうやら本当の事を言ってるみたいだし、早いところおいとますん
ぜ？ あら、皆？」

反応が無い。そう思い後ろを振り向くとそこには………半数以上
が鬼の形相で俺を睨んでいた。

出木杉・ドラえもん以外の男共

『ぶっ殺す！！！！』

そして、出木杉君とドラえもん以外の男全員が、いきなり俺に飛び掛かってきた。

余りに唐突だったが、動きが単調なので、勞せず避ける事が出来た。

零

「い、いきなりなにしゃがる！？」

安雄

「閣下、前方2メートルに敵出現！！」

のび太

「閣下、発砲の許可を！！」

金田

「総員構え！！！！」

金田の言葉に反応した、ドラえもんとは出木杉君の男達は、俺に向かって拳銃を向けてきた。

零

「お、オイ！ 何のつもりだ！？」

金田

「撃てい！！！」

金田さんの号令と共に、拳銃を構えていた連中が一斉に引き金を引く。
狙いはもしかしくなくても俺だ。

零

「危なっ！！！」

引き金を引く前に反応し、即座に回避行動に出た為、当たる事は無かった。
幸いサーシャさんが縛られていた場所から離れた為に、流れ弾に当たたる事は無かった。

零

「チッ……『土下座しやがれい！！』」

回避をした瞬間、直ぐさま能力を発動させて連中の無力化を謀る。

男共

『ウボッ!!??』

そしてそれは直ぐに成功した。

全員が額から床にぶつけて、土下座の様なポーズを取る。

零

「な、なんだったんだよ……」

取り敢えずは無力化したのだが、連中から『闇夜の晩に気をつけろよ!』とか『背後には気をつけろよな!』とか言ってる……マジでなんなんだよ。

出木杉君とドラえもんが凄い苦い顔をしながらコッチを見るが、さっぱり分からない。

零

「全く、時間が圧してるって言ってんだろ——ギャッ!」

後頭部に鈍い衝撃が走る。

金田さん達に気を取られているスキに、聖奈ちゃんと咲夜さんが俺の後頭部に向かって花瓶を投げ付けて来たのだ。

まさかの別領域からの刃に、反応が追いつかず、その場に倒れ込んでしまった。

咲夜・聖奈

「……」

零

「な、なにを……」

そう聞いても二人とも何も答えてくれない。

サーシャさんはさっきからブツブツと何か言ってるし。

ああ、やべえ。意識が遠退いて行くんだけど……そう思って目だけで二人に視線を向けると、聖奈ちゃんと咲夜さんが色の無い目で笑みを浮かべながら俺に近付いて来る。

それが意識を失う最後の記憶だった。

続く

EP 4..「ジャイアンのデスボイスの強さナメンだよ!」?

此処ら一帯なんて軽

久しぶりの後書きショー

咲夜

「……何か申し開きは？」

零

「い、いや申し開きもクソも原因がわからな——」

聖奈

「零さん？」

零

「ご、ごめんなさい……（二人の目が恐すぎる、ある意味でウエスカー以上なんだが）」

サーシャ

「……（ポッ）」

く少し離れた場所く

出木杉

「零さんって、ホントに無自覚でやってんのかなあ？」

ドラえもん

「うん、たまに疑いたくなるよね」

金田

「モテ男は!？」

男共

『抹殺対象!!』

金田

「無自覚フラグ立て野郎は!？」

男共

『悪・即・斬!!』

金田

「私(神)達の生きる道は!？」

男共

『世紀末覇者の如く修羅の道!!』

出木杉

「コツチも何とかしないとね……」

ドラえもん

「時間が掛かりそうだよ……時間が無いのにさ」

〽元に戻って〽

咲夜

「零君？ 自分の行動には責任を持ってね？」

零

「は、はあ……（行動って何が？）」

聖奈

「もしこれ以上無自覚を続ける様なら、その女性^{ヒト}を……ジメンニウメチャイマスヨ？」

咲夜

「サイアクコロシチャウカモヨ？」

零

「その前に理由を……」

咲夜・聖奈

「ワカッタ？」

零

「イ、イエスサー」↑全身に冷や汗

終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2831q/>

のび太のバイオハザード飛ばされた「完全者」

2011年12月20日20時50分発行